

伊場遺跡発掘調査報告書 第3冊

# 伊場遺跡遺物編 1

1978

浜松市教育委員会

伊場遺跡発掘調査報告書第3冊

# 伊場遺跡遺物編 1

## 序 文

昨年度、伊場遺跡発掘調査報告書第2冊として『伊場遺跡遺構編』を刊行いたしました。今年度からは出土遺物の報告をすることにいたしました。

伊場遺跡の出土遺物は、材質的にみますと土器・土製品、石製品、金属器、骨角器、木製品、竹製品などに分かれていますが、これを用途の面からみますと、農具・漁具・運搬具・編具・機織具・工具など仕事に使う道具、厨房具や容器のような日常生活用具、建築部材、武器・武具の類、形代や絵馬などの祭祀用具というように、多種類にわたり、その量も膨大であります。

今回は、そうした資料の中から木製品と竹製品について報告することにいたしました。これは現状保存のなかなか困難な資料でありますから、なるべく早く整理報告しておく必要があると思ったからです。しかし、木製品の整理報告と申しましても、その総数はおよそ1,300点を数え、70箱以上の水槽に収まっているわけですから、全部をいっせいに広げて相互に比較してみるとということも簡単にはできません。また水から取り出して長い時間放置しますと、変形してしまい資料をいためることになりますので、これらを紙の上のせて実測したり、照明を当てて写真を撮ることも、容易ではありません。

以上の点を考慮してひととおり資料に目を通し、写真撮影の必要なものを約700点に絞って、約1月半昼夜かけて撮影を行ない、500枚のフィルムに収めました。その中からさらに200枚を選んで本書の図版に使いました。また、第4次調査までの出土品の内350点余りにつきましては、詳細な実測図面を作りまして、別冊図版といたしました。こうした手間のかかる作業は、絵馬の写真数点を除きまして、すべて市立郷土博物館の学芸員の手によって行なわれたものです。こういった作業は、実際に経験したものでなければ判らない大変な作業であります。関係各位のお力添えにより報告書を作成することができました。

特に木製品につきましては、材質が何であるかということ調査する必要があり、東京国立科学博物館の山内文枝官に材質鑑定をお願いいたしました。資料を極力痛めずに標本をとり、顕微鏡下でひとつひとつ材質の同定をするのは、なかなか根気の要る仕事であり、今回は資料全部に及ぶことはできませんでしたが、ご多忙な中を大変なご協力をいただきました。

最後に齋藤忠先生には公私ともにご繁忙の中を調査団長として、いつも変らぬご指導と本書のご校閲を賜りました。関係当局を代表して深くお礼申し上げる次第であります。

昭和53年3月25日

## 凡 例

1. 本書は、伊場遺跡の正式な学術調査報告書第3冊として刊行するものであり、第3次調査から第7次調査までに出土した遺物の内、木製品と竹製品に関する記録である。
2. 本書の写真図版には、704点の資料が収載されており、それについての出土地点・層位・最大法量・簡単な特徴等については、本文末尾の写真図版収載資料記録表に表示されている。
3. 本書は、鉄入別冊図版と一体のものであり、別冊図版には第3次と第4次の調査によって出土した木製品の内、実測に堪える資料353点の実測図が収められている。その資料に関する記録は、本文末尾の別冊図版収載資料記録表を参照されたい。
4. 本文は、発掘調査に従事した次の4名が分担執筆しており、それぞれの文責は担当項目の末尾に括弧で示した。  
大正大学教授・文学博士 齋藤 忠  
浜松市立郷土博物館館長 向坂 銅二  
“ 学芸員 川江 秀孝  
“ 学芸員 辰巳 均
5. 本文については、伊場遺跡発掘調査団長の立場で、齋藤忠先生にご校閲をお願いした。
6. 写真図版に用いた写真の内、出土状態については主として向坂が撮影し、出土遺物については、絵馬第1～5号を除き、辰巳の協力によって、主として川江が撮影した。
7. 絵馬第1～5号の写真は、奈良国立文化財研究所において、佃幹雄氏が撮影したものである。
8. 別冊図版に収載した資料の実測は、ほとんど浜松市立郷土博物館学芸員川江秀孝・辰巳均・漆畑敏・佐野一夫の4名が行ない、川江・辰巳・漆畑が清書したが、一部奈良国立文化財研究所の菅原正明氏と、藤枝市教育委員会の八木勝行氏による実測図を利用したものがある。
9. 別冊図版収載資料記録表に記入した樹種の鑑定は、東京国立科学博物館の山内文氏による。
10. 写真・図面の原画・原図は、浜松市立郷土博物館で保存管理している。

# 伊場遺跡発掘調査報告書第3冊

## 伊場遺跡遺物編 1

### 目 次

第1章 出土遺物の概略	
第1節 既調査の概略	1
第2節 出土遺物の種類	2
第3節 出土遺物の整理と報告	2
第2章 木製品の出土状態	
第1節 出土地点	4
第2節 大溝の屈序と年代観	11
第3章 木製品の概述	
第1節 分類	13
第2節 労働用具	13
A. 農具	13
B. 漁具	16
C. 選搬具	17
D. 編具	18
E. 機織具	19
F. 工具	20
第3節 生活用具	20
A. 厨房具	20
B. 容器	21
C. その他の生活用具	24
第4節 建築部材	25
第5節 武器・武具及び馬具	26
第6節 呪術祭祀用具	28
第7節 その他の木製品	33
引用文献	40

### 挿 図 目 次

第1 大溝・枝溝における地点別	5
第2 大溝発掘区北部遺物出土分布図	6
第3 大溝発掘区南部遺物出土分布図	7
第4 大溝第Ⅳ層曲物出土分布頻度表	8
第5 大溝第Ⅴ層曲物出土分布頻度表	9
第6 祭祀関係木製品出土分布頻度表	10

## 写真図版目次

### 第 1

短甲状木製品第 1 号 (色刷)

### 第 2

短甲状木製品第 2 号 (色刷)

### 第 3

A 鉄刃付鋤先出土状態

B 柄振出土状態

### 第 4

A 鋤 先

B 鋤 先

### 第 5

A 鋤先と股鍬状木製品

B 鋤先と柄振

### 第 6

A 大足の棒

B 大足と田下駄

### 第 7

A 鎌

B 鎌の柄

### 第 8

A 鎌の柄

B 木柄類

### 第 9

A 木柄類

B 代掻

### 第 10

A 代掻出土状態

B 代掻

### 第 11

A 代掻

B 釜第 1 号の部分

### 第 12

A 釜第 1 号出土状態

B 釜第 2 号出土状態

第 13

A 舩 出 土 状 態 (大溝OF1地点)

B 舩に使われた篠竹

第 14

A 襖 網

B 背 負 子

第 15

A 背 負 子

B 背 負 子

第 16

A 背 負 子

B 背 負 子

第 17

A 背 負 子

B 背 負 子

第 18

A 編 台

B 編 台

第 19

A 編 鍾

B 編 鍾

第 20

A 編 鍾

B 編 鍾

第 21

A 砧

B 砧

第 22

A 管大杵と織機部品

B 織 機 部 品

第 23

A 葎 の 糸 目

B 糸 巻

C 刀 子

第 24

A 把手付楕円形曲物

B 把手付楕円形曲物

第 25

- A 楕円形曲物
- B 楕円形曲物

第 26

- A 曲物出土状態 (大溝OF2地点)
- B 楕円形曲物 (同上)

第 27

- A 長方形曲物
- B 楕円形曲物と方形曲物

第 28

- A 円形曲物
- B 円形曲物

第 29

- A 円形曲物
- B 円形曲物

第 30

- A 円形曲物
- B 円形曲物
- C 円形曲物

第 31

- A 円形曲物
- B 円形曲物 (同上表の焼印)

第 32

- A 円形曲物
- B 円形曲物

第 33

- A 円形曲物
- B 円形曲物
- C 円形曲物

第 34

- A 円形曲物
- B 円形曲物
- C 円形曲物

第 35

- A 曲物出土状態 (大溝OE2地点)
- B 曲物出土状態 (井戸NG1)

第 36

- A 楕円形曲物側板
- B 円形曲物側板 (井戸NG 2)

第 37

- A 円形曲物側板
- B 曲物側板破片

第 38

- A 箸・柄杓の柄および杓文字形木製品
- B 挽物盤類

第 39

- A 挽物盤類
- B 挽物盤類 (同上裏面)

第 40

- A 刺物 (楕円形)
- B 刺物 (扇形)

第 41

- A 刺物
- B 刺物

第 42

- A 笊出土状態
- B 笊

第 43

- A 火 燬 臼
- B 火 燬 臼

第 44

- A 杵
- B 小臼の上面観と側面観
- C 俎・突出土状態

第 45

- A 俎 第 1 号
- B 俎第 1 号の短辺側面観

第 46

- A 俎第 1 号の上面観
- B 俎第 1 号の長辺側面観
- C 俎第 1 号の下面観

第 47

- A 案
- B 案の短辺側面観

第 48

- A 案の上面観
- B 案の長辺側面観
- C 案の下面観

第 49

- A 組 第 2 号
- B 組第 2 号の短辺側面観

第 50

- A 組第 2 号の上面観
- B 組第 2 号の長辺側面観
- C 組第 2 号の下面観

第 51

- A 横 櫺
- B 横 櫺

第 52

- A 横 櫺
- B 下 駄

第 53

- A 柱 根
- B 礎 板

第 54

- A 建築部材と刺抜材
- B 建築部材と洗濯板

第 55

- A 梯 子
- B 梯 子 (側面)

第 56

- A 鼠 返
- B 鼠 返

第 57

- A 丸木弓と纏
- B 丸木弓の部分

第 58

A 短甲状木製品第 2 号の側面観

B 壺 鐘

第 59

A 墨画のある人形(表)

B 墨画のある人形(裏)

第 60

A 人 形

B 人 形

第 61

A 人 形

B 鳥形・剣形・物指?・櫛履?

第 62

A 馬 形(表)

B 馬 形(裏)

第 63

A 馬 形(表)

B 馬 形(裏)

第 64

A 舟 形

B 舟 形(同上側面)

第 65

A 舟 形

B 舟 形(同上側面)

第 66

A 舟 形

B 舟 形

第 67

A 舟 形

B 舟 形(同上側面)

第 68

A 舟 形

B 舟 形(同上側面)

第 69

A 舟 形(第68A下面)

B 舟 形

第 70

A 舟 形

B 舟 形

第 71

A 舟 形

B 舟 形

第 72

A 舟 形

B 舟 形 (同上側面)

第 73

A 舟 形

B 舟 形

第 74

A 舟 形

B 舟 形

第 75

A 舟 形

B 舟 形

第 76

A 舟 形

B 舟 形

第 77

A 齋 串

B 齋 串

第 78

A 齋 串

B 齋 串

第 79

齋 串

第 80

A 齋 串

B 齋 串

第 81

A 齋 串

B 齋 串

第 82

- A 齋 串 片
- B 齋 串 ？

第 83

- A 繪 馬 第 1 号
- B 繪 馬 第 1 号 (同上裏面)

第 84

- A 繪 馬 第 2 号
- B 繪 馬 第 2 号 (同上裏面)

第 85

- A 繪 馬 第 3 号
- B 繪 馬 第 3 号 (同上裏面)
- C 繪 馬 第 4 号
- D 繪 馬 第 4 号 (同上裏面)

第 86

- A 繪 馬 第 5 号
- B 繪 馬 第 5 号 (同上裏面)

第 87

- A 繪 馬 第 6 号
- B 繪 馬 第 6 号 (同上裏面)

第 88

- A 權 状 木 製 品
- B 塗 鍍 状 木 製 品

第 89

- A 木 柄 把 手
- B 木 柄 把 手 (同上裏面)

第 90

- A 木 柄 把 手
- B 木 柄

第 91

- A 有 樋 十 字 形 木 製 品
- B 有 樋 十 字 形 木 製 品 (同上裏面)

第 92

- A 有 樋 十 字 形 木 製 品
- B 有 樋 角 形 木 製 品

第 93

A 枘を作り出した小形部品

B 枘を作り出した小形部品

第 94

A 有 孔 板

B 長 方 形 板 (箱板?)

第 95

A 長 方 形 板 (箱板?を含む)

B 有孔長方形板

第 96

A 有孔長方形板

B 有孔長方形板

第 97

A 有 孔 板

B 有 孔 板

第 98

A 厚 板

B 角 材 (台?を含む)

第 99

A 孔や切り込みのある小形加工材

B 孔や切り込みのある小形加工材

第 100

A 刻みを入れた棒 (曲物作りの物指?)

B 剣形・木筒形・琴柱形・撥形等小形木製品

第 101

A 先端加工材 (木筒材?を含む)

B 先端加工材 (代掻の歯を含む)

第 102

A 先端加工材 (楔?)

B 尖 頭 棒

第 103

A 尖 頭 棒

B 尖 頭 細 板 (齧串片か木筒片)

第 104

A 有 頭 棒

B 有 頭 棒

第105

- A 溝や刻みを入れた小形木製品
- B 束出土状態

別 冊 図 版 目 次

鉄 入

- 第 1 遺跡全体図
- 第 2 大溝流路変遷図
- 第 3 鋤先・田下駄・鎌実測図
- 第 4 鎌柄・砧・刀子実測図
- 第 5 大足実測図
- 第 6 背負子実測図
- 第 7 代掻・糸巻・有樋角形木製品・織機部品等実測図
- 第 8 柄のある小形部品・有樋十字形木製品実測図
- 第 9 有樋十字形木製品
- 第10 編合・編簾・刺物等実測図
- 第11 刺物・小臼・楕円形曲物（Ⅰ）実測図
- 第12 楕円形曲物（Ⅱ）実測図
- 第13 楕円形曲物（Ⅲ）実測図
- 第14 円形曲物（Ⅰ）実測図
- 第15 円形曲物（Ⅱ）実測図
- 第16 円形曲物（Ⅲ）実測図
- 第17 曲物（Ⅳ）・柄杓柄・箸・火鑊臼・挽物実測図
- 第18 組実測図
- 第19 案実測図
- 第20 弓・梯子等実測図
- 第21 人形・馬形・絵馬実測図
- 第22 舟形実測図Ⅰ
- 第23 舟形実測図Ⅱ
- 第24 斎串実測図Ⅰ
- 第25 斎串実測図Ⅱ
- 第26 斎串（Ⅲ）・木筒材？・横櫛実測図
- 第27 櫛状木製品・厚板・木柄把手等実測図
- 第28 箱板？・有孔板類実測図
- 第29 尖頭棒・先端加工材等実測図
- 第30 有頭棒・先端加工材等実測図

## 伊場遺跡発掘調査報告書第3冊

### 伊場遺跡遺物編1

#### 第1章 出土遺物の概略

##### 第1節 既調査の概略

**第1次調査** 1949年2月の発見以来、国学院大学考古学研究室を中心とする伊場遺跡調査隊によって、1949年4月より翌年7月まで試掘を含めて計5回の調査が実施された。この国学院大学の調査を総称して第1次調査とし、以後浜松市教育委員会による調査を順次第2次・第3次……とし、1978年3月現在で第11次調査まで実施されている。第1次調査ではA集落とB集落の2地点が調査された。B集落は浜名郡可美村城山遺跡であり、A集落が伊場遺跡東部地区に相当している。調査では骨付土器をはじめとする弥生時代後期前半の土器群やガラス小玉等が検出されたほか、杭列等も認められて住居跡の一部と考えられた。この調査については、国学院大学伊場遺跡調査隊編『伊場遺跡』(1953年)に評述されている。

**第2次調査** 1968年1月23日から3月20日までと、同年6月1日から7月20日までの2期に分けて、遺跡の範囲確認と周辺遺跡の有無について調査が行なわれた。調査対象範囲は東西850m、南北130mの地域で、これに一辺30mの基本グリットを設定し、その交点の四側2m×2mを坪掘りする方法で分布調査が実施された。その結果砂丘が水田上に露出する地域内では古墳時代および鎌倉時代の包含層が確認されたほか、砂丘をとりまくように馬蹄形に弥生時代の包含層が分布していることが判明した。また、後に大溝と呼ばれた幅13mほどの凹地に平安時代陶質土器や小貝塚を包含する泥炭層が堆積する状態が、塚塚の西方で確認された。

**第3次調査** 1969年12月より翌年12月までの1年間にわたって実施されたもので、30mの基本グリットを9等分した10m×10mのグリットを基本単位として発掘調査された。弥生時代包含層の調査では、ガラス小玉、銅剣、土器類を検出したほか、一部木片の出土をみた。またB11C区では完形土器5点を含む溝が検出された。A11区の調査では、蓋釜(砂層)を掘り込んだ古墳時代(6世紀)の住居跡群と、炭化米を含有する貯蔵穴と考えられるものが検出された。塚塚の西方B15区からB16区付近における泥炭層の調査では、小貝塚群が認められ、柄付刀子、柄付鏃、鉄鏃、形代類、手摺土器、瓠、案、曲物などと共に、木簡4点や「布知厨」と書された土器など多くの資料が発見され俄然注目を浴びるようになった。また砂丘上からは縄文時代の遺物が若干検出されたことにより、砂丘の陸化の時期と人類生活の開始の時期を再検討させる好資料を得た。

**第4次調査** 第3次調査の好成果により、調査団を新たに編成して、大規模に調査が行なわれるようになった。団長を大正大学教授斎藤忠氏にお願したほか、地質、動物、植物、古代史等の専門調査員をおき、市教育委員会を中心とする専任調査員の他、遠江考古学研究会の協力を得て調査団を編成した。調査は1971年6月より翌年3月までの間実施された。調査にあたっては、大溝に新たなグリット(イロハ……区)を設定したほか、遺跡の範囲が東西約220m以上にも及ぶため、弥生時代包含層の分布する地域を仮に東部地区と呼び、大溝を中心とする地域を仮に西部地区と呼ぶようにした。東部地区では砂丘の東西に溝が検出されて、いわゆる弥生時代後期の環濠集落の可能性がでてきた。銅製釣針等特異な遺物も検出された。砂丘の頂部付近では古墳時代後期の集落が営まれていたほか、西部地区でも竪穴式住居跡が検出された。大溝内からは23点の木簡をはじめ、多量の木製品等が検出された。また調査終了間近になって大溝の西岸一帯から無数の小穴が検出できるようになり、明らかに竪立柱建物跡と認められるようになってきた。

**第5次調査** 1972年5月より同年11月までの間、第4次調査で検出された西部地区竪立柱建物跡の実測作業と、大溝西北岸地域(西北部)における竪立柱建物跡の検出作業が行なわれた。その結果新に3棟分以上の建物

跡が検出されたほか、大溝が福留運河を横断して北西方向に延びていることが確認できた。

第6・7次調査 1973年9月をもって指定地の取り扱いと遺跡全体に関する方針が決定し、10月から東海道線高架化事業に直接関連する未発掘部分の調査が1975年11月まで継続された。東部地区では東西に露認されていた溝が一連となって、3条の環濠となった。環濠内からは多量の土器と共に、短甲状木製品2点の出土などがあった。環濠の内側からは無数の小穴群が検出された。西部地区では大溝にほぼ直交するような古墳時代の枝溝と奈良時代の枝溝が調査された。出土遺物も、木簡48点をはじめ鞍馬や墨書土器、木製農具、木製産物等貴重なものが検出された。

なお、第2次調査については、浜松市教育委員会・遠江考古学研究会編『伊場遺跡予備調査の概要』（1968年）、第3次調査については、浜松市教育委員会編『伊場遺跡第3次発掘調査概報』（1971年）、第4次調査については、浜松市遺跡調査会『伊場』一第4次調査月報1～6一（1971～1972年）、伊場遺跡発掘調査団編『伊場遺跡第4次発掘調査の成果（要旨）』（1972年）、第5次調査については、浜松市教育委員会編『伊場遺跡第5次発掘調査概報』（1973年）、そして第6次と第7次の調査については、浜松市教育委員会編『伊場遺跡第6・7次発掘調査概報』（1975年）が、それぞれ刊行されている他、木簡と墨書土器については、浜松市遺跡調査会から『伊場遺跡出土文字集成（概報）』（1971年）と『伊場遺跡出土文字集成（概報）』二（1973年）が刊行されている。（川口）

## 第2節 出土遺物の種類

本遺跡はいわゆる複合遺跡であって、縄文時代の遺物から鎌倉時代の遺物まで出土していて、種類も量も非常に多い。出土土器には縄文式土器片、弥生式土器、土師器、須恵器、陶質土器、練土陶器片、青磁片などが含まれている。完形品も破片も含めて総点数はまだ充分に把握していないが、55cm×40cm×15cmのポリコンテナに換算しておよそ1288箱にも及んでいる。これに第7次調査以降の分を加えたとおおよそ1400箱ほどになる。土器量の時代別比率もまだ把握していないが、2～3片の縄文式土器片と、青磁片や蓮弁文土器片等10片ほどの鎌倉時代陶磁器片を除くと、弥生時代後期前半に比定されている土器群と、5世紀後半代に比定される土器群、7世紀後半以降10世紀代までの土器群とに分けることが可能と思われる。つまりこれらの土器群はかならずしも連続するものではなく、4世紀後半代から5世紀前半代の遺物は皆無であり、6世紀中葉から7世紀前半代の遺物は希薄となっている。9世紀代以降徐々に量は減少して、わずかに10世紀前半代の遺物群に若干のまとまりをみることが出来る。

主要遺物については表第1のとおりである。このうち弥生時代短甲状木製品、古墳時代木製産物など類例の少ない出土品が含まれているほか、木製品類のうち、鋸、鎌、刀子には鉄刃が着装されているものが検出されている。したがって主たる出土遺物は、土器、土製品、石製品、木製品、金属器とに分類しそれぞれに固有の番号を付して取り上げたが、金属器、木製品いずれの分類で取り上げるべきか迷う出土品がいくつか認められた。（川口）

## 第3節 出土遺物の整理と報告

遺物の取り上げ 出土品の取り上げ方は材質別とし、土器-P・土製品-E・木製品-W・石製品-S・金属器-M・骨製品-Bに大別し、調査年次毎に通し番号を付けた。つまり第6次調査によって大溝ハ5区第V層より出土した短甲状木製品には、ハ5W-V<sub>3</sub>・6-W388と記帳されるわけである。I区・ロ区のように第4次調査以来数次にわたって調査したため、I4-V<sub>3</sub>・W120という記号が、2度ないし3度記録されることになり得るが、出土層位とWの前の数字とで区別できるわけである。遺構に伴出した遺物については、KD1-S10というように、住居跡番号を付して地点名を省略したものもある。利器・容器とは認めたいものは、遺物としての登録をさけて、出土地点、層位を記録するだけに止めたものもある。これらの遺物は発掘年次毎に一括されて観察遺跡収蔵庫に保管されている。鉄刃の嵌った木製品については、東京国立文化財研究所の協力によって真空凍結乾燥させて、伊場遺跡資料館に陳列してある。

発掘年次	縄文時代	主要発掘区	土器	土製品	木製品	石製品	金属器	
第3次 1969.12 ? 1970.12	弥生時代	A13区	弥生式土器 42箱	須恵2 有孔長方形板	木片	磨片1・盤1・板1	銅頭1	
		B11区 C11区				ガラス小玉1 砥石 白石1	銅頭2 鉄鏃2 刀子1 鎌2 刀子6 鉄鏃2	
	古墳時代	A11区 A12区	土師器 45箱 須恵器 1箱	文器 物類	炭化米 2粒	白玉1		
		B15区 B16区 C16区	須恵器・土師器 16箱 埴輪土器	陶馬1 手掘土器 鑄物口	木簡・人形・舟形・蓋串・皿・茶 皿下駄・鏡写・火燭白・曲物	物類1		
		A12区	桑道文土器	物類3 小形有孔菱形土製品1 冨麗玉形土製品			柱状片刃石斧1 円形打石器1 叩石 砥石1	銅的針1
第4次 1971.6 ? 1972.3	弥生時代	A13区	断面S字口様菱形土器 須恵器 土師器	手掘土器		砥石	鉄斧1	
		A12区 B10区 B11区 B13区	弥生式土器	物類3 小形有孔菱形土製品1 冨麗玉形土製品			柱状片刃石斧1 円形打石器1 叩石 砥石1	銅的針1
	古墳時代	A12区 A13区	須恵器・土師器 埴輪土器 以上一括170箱	陶馬・土師・陶写 丸玉・円面皿 手掘土器	人形・舟形・舟形・蓋串・茶 皿下駄・鏡写・火燭白・盤・臼・杵・田下駄 樽・弓・箸・蓋先・曲物・壺・その他 以上087点	砥石16 物類1 叩石4 叩石3	刀子8 鎌4 斧1 鉄鏃1	
第6・7次 1973.10 ? 1975.11	鎌倉時代	A12区 B12区	青磁片・古瀬戸片 陶質土器				物類1	
		A10区 B11区 C11区 C12区	弥生式土器	物類6 冨麗玉形土製品10	丸甲状木製品2 銅先1・盤1・杵1・段煉1	大形給刃石斧15 物類6 砥石・叩石・白石 ガラス小玉7		
	古墳時代	A15区	須恵器 土師器	手掘土器 物類 鑄物口	銅先・蓋串・えぶり		砥石100以上 石製鏡込品37 物類	銅先1 耳環3
		A16区 A18区	須恵器・土師器 埴輪土器・陶瓦土器 以上一括1015箱	手掘土器200以上 陶馬5 鑄物口 風字礎	人形・舟形・舟形・蓋串・鏡写・曲物 鏡写・皿・茶・柄類・火燭白・丸木弓 網紐・代掻・鏡先・段煉・木櫃	武石・物類		銅押金具1
		大溝全域						

表第1 年次別主要出土品一覽表

**遺物の整理と報告** 第3次調査終了後、遺跡の取り扱いを協議する必要上から、速報的に概報がまとめられた。遺物の実測も完存品として別途に取り上げられた物だけに限定されたうえ、写真だけを公表したのも含まれている。第4次調査では月毎に速報を発行する意味で調査月報が6冊刊行された。毎月の出土品で目止ったものを任意に抽出して実測したため、まとまらない資料紹介になっている。第6・7次調査によって、東海道線高架化関連用地内の調査が終了したので、概報では一応遺跡全体図を公表したが、遺構に伴う遺物の紹介は特に行なわれなかった。これは膨大な出土品を全て整理できなかったため、遺跡を概観するうえで時代の流れを把握するのに最低限度に必要な遺物の紹介だけに止めたためである。木簡については別途紹介の報文が2冊刊行されている。

正式報告書の出版事業は、昭和50年度から行なわれ、第1冊として『伊場木簡』が刊行されたのに続いて、昭和51年度に第2冊『遺構編』が刊行された。この両者とも遺物整理を充分に果たし得ないまま、調査時の所見だけでまとめられたものである。遺構伴出土器の紹介も全てが網羅されているわけではなく、調査団として把握している年代層に即して土器を紹介したにすぎない。今後遺物の整理が進む過程で、年代観等修正を要することも予想される。今回木製品を整理するにあたって、その数は遺物台帳に登録されたものだけで1642点あり、発掘調査の台帳をぬってこれを全て実測することは不可能であった。したがって第4次調査までの計846点について一通り検査したうえで、図示できるものは図化し、他は記録するだけに止めた。第6・7次調査の遺物については、巻末に表示した程度の記録と写真撮影したにすぎない。特に第3次調査の記帳方法と、第4次調査における記帳方法とは異なる点が若干あり、出土層位の認識にも差が認められているうえ若干の誤認もあろうかと思われる。しかも年代観については出土土器が未整理のため、充分に検討されていないので、調査時点で記載されている事柄をそのまま変更しないで列挙し、今回の木製品を紹介することとした。

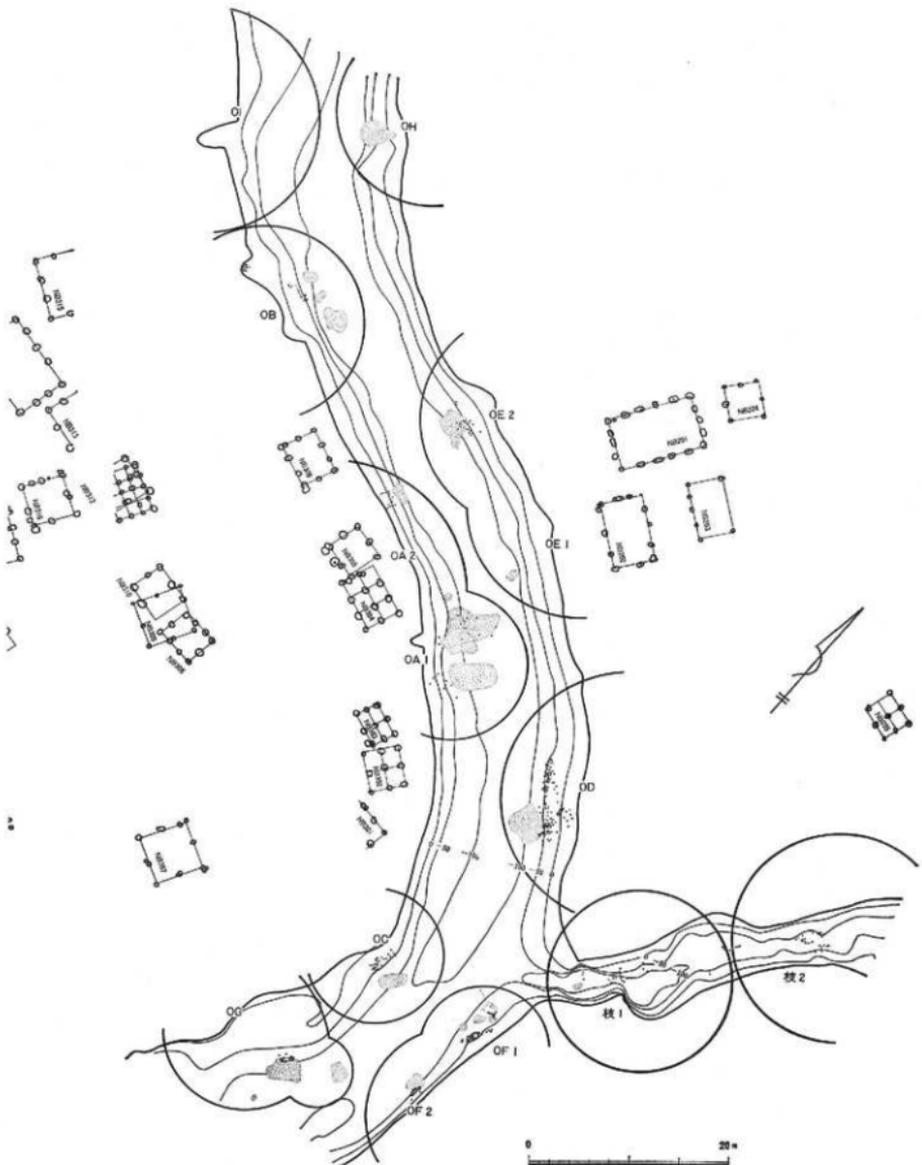
今後の出土遺物の整理は、土器や金属器へと進行し、整理が済みしだい報告する予定である。したがって第6・7次調査出土の木製品については、今回写真を公開しただけで、実測図の紹介は間に合わなかったが、今後刊行される土器、石製品などの報告に加えて少しずつでも紹介していく予定である。

第7次調査の後、昭和52年度までに第11次調査までを終えているが、この報告も木簡編や遺構編と同様、第7次調査までの出土品をまとめたものであることを付記する。(川江)

## 第2章 木製品の出土状態

### 第1節 出土地点

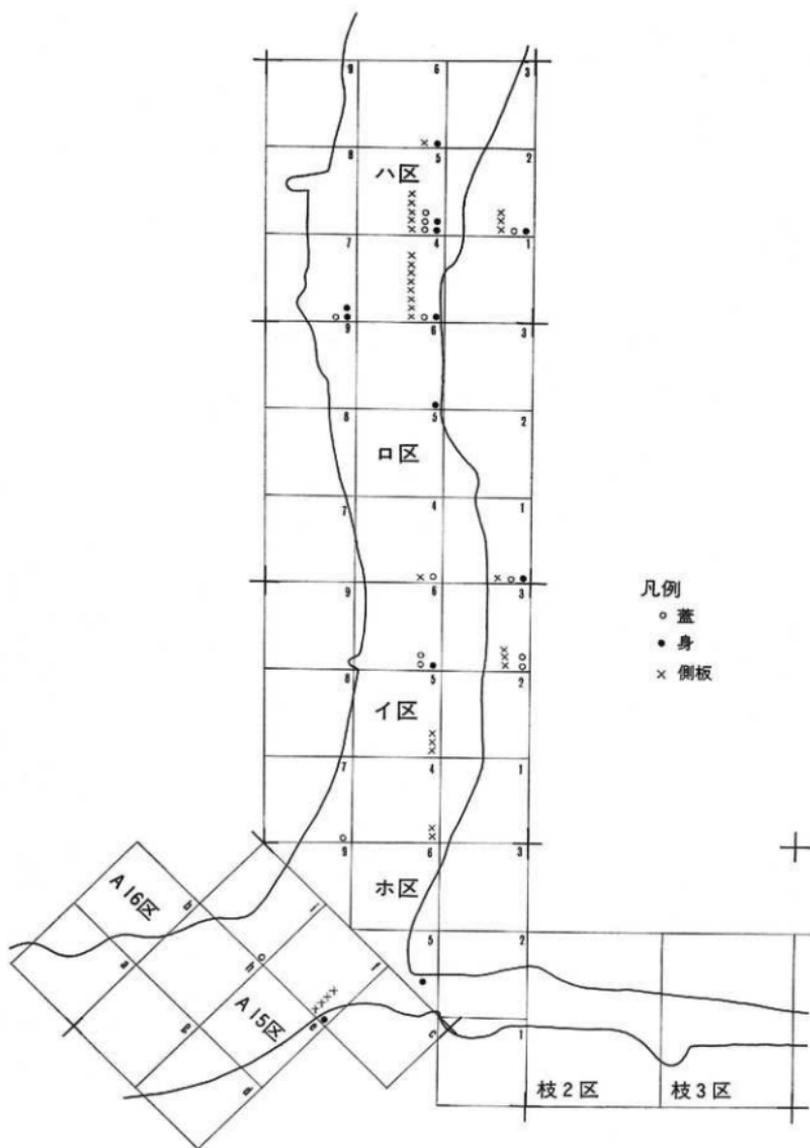
東部地区D12a区NT003の縁より曲物を転用した井戸跡が検出されたほか、西部地区ソ2区NT303内からは楕円形曲物が検出されている。これら2点の他は、環濠内・大溝内・枝溝内からの出土品である。その他西部地区独立柱建物跡にも数例柱根や礎石の遺存が認められている。環濠内では、特にYT9とYT6の中に木製品の遺存するのが目立った。A10f区YT9内ではYG1とした平面方形の小穴があって、周縁部で木炭類が多数検出されたほか、その南側A10b区において第1号短甲状木製品が検出された。同じくB108区YT9内から盤・鋤先が検出された。C12i区YT6内から第2号短甲状木製品が出土している。環濠の年代観は『遺構編』で示したとおりであるが今一度概述する。YT1はYT7と、YT2はYT6と、YT9はYT8と連なって環濠となっている。YT2およびYT6の外側の土堤には、YT9およびYT8から掘り上げられた土が覆っている様子が、断面観察で判明している。溝を覆う土層はA～Dの4層から成り、B層には古式須恵器が、C層には弥生時代後期後半に比定されている欠山式土器が、D層には後期前半に比定されている伊場式土器(寄道式土器)が包含されている。D層はさらに3層に細分化される。とくにYT1・YT2・YT6・YT7ではD層の下位に青色粘土層が認められていて、YT9・YT8ではこの青色粘土層は確認できなかった。この青色粘土層の生



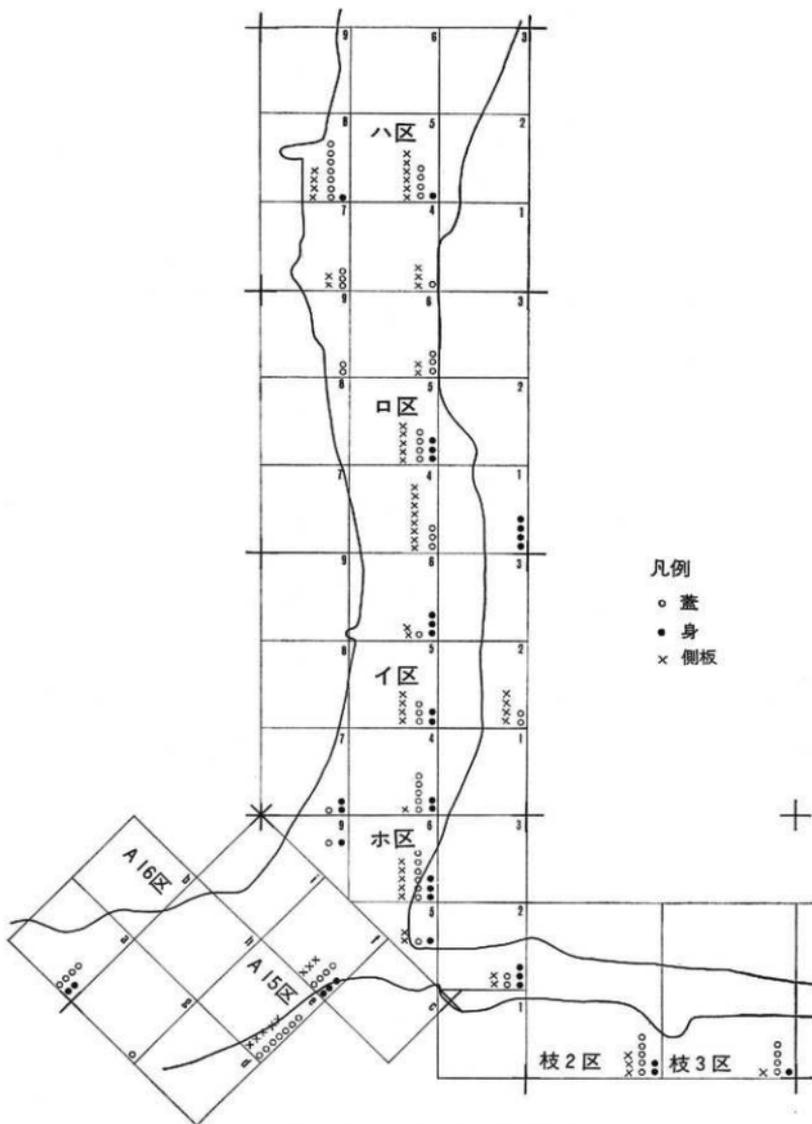
挿図第1 大溝・枝溝における地点別



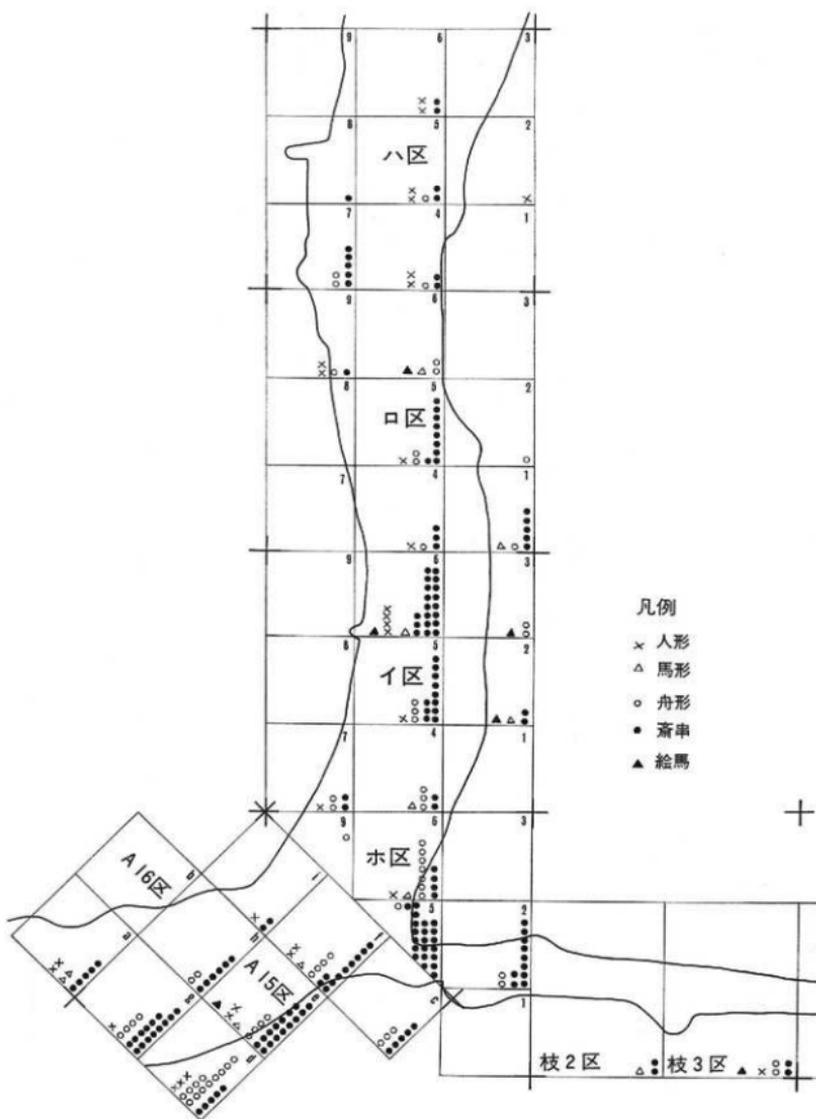




挿図第4 大溝第Ⅳ屈曲物出土分布頻度表



插图第5 大溝V形曲物出土分布頻度表



挿圖第6 祭祀関係木製品出土分布頻度表

	人形	舟形	馬形	竇串	絵馬	計
A 地点	7	6	1	42		56
B 地点	4	6	1	8	3	22
C 地点	2	5		10		17
D 地点	1	10	2	6		19
E 地点		4	2	7	1	14
F 地点	5	16	1	20	1	43
G 地点	3	4	2	19		28
H 地点	5	1		4		10
I 地点				1		1
枝 1 区	2	10	1	46		59
枝 2 区	1	2	1	4		8
枝 3 区					1	1
計	30	64	11	167	6	278

表第3 地点別形制類出土頻度表

成が洪水に起因するものならば、断面観察の結果も加味してY T 9・Y T 8が一番最後に掘削された溝と考えられる。基本的には環溝は伊場式土器の段階の溝であっても、Y T 9の出土品とY T 6の出土品では若干の時間差を認めるべきと考えたい。

大溝には小貝塚が多数存在したが、これは貝や骨など食糧残渣の投棄が無秩序に行われたものではなく、周辺の建物群と密接な関係があることが分かった。逆を言えば、建物群の密集している場所には貝塚が密集しているものと考えられた。そこで貝塚の分布と周辺の櫛列(NF)とのかねあいから、いくつかのグループにまとめたのが地点別分布図(柳田第1)である。次に大溝の流路変遷図(別冊図版第2)をみると、各時期を通じて大溝は蛇行していて、古墳時代の包含層を奈良時代に、奈良時代の包含層を平安時代および鎌倉時代にかんりの部分を押し流していることがわかる。したがって別冊図版第2だけをとってみても、OA地点、OB地点、OD地点、OF地点では古墳時代包含層が希薄であることが理解される。また平安時代の包含層は鎌倉時代の流路と重なって分布することから、OH地点、OB地点、OA2地点、OE1地点、OD地点、枝1区、OF地点に平安時代の遺物が多く出土することも理解されるであろう。ちなみに曲物の地点別出土量を層位との関係から表示すると(表第2)上述の地点別と一致している。また第IV層および第V層の上層に比定されている貝塚も上記地点別や流路の在り方と矛盾していない点も指摘しておきたい(『伊場遺跡遺構編』P.98)。(川江)

## 第2節 大溝の層序と年代観

大溝および枝溝については、『伊場遺跡遺構編』に詳細が説明されているので概略を記しておく。

第I層から第V層までに区分されていて、全体の組成は泥炭層・粘土層・砂層とに分けることが可能である。I層は耕作土でII・III層が泥炭層、IV・V層が有機質粘土層、VI層～VII層が砂層もしくは砂質粘土層である。IV層とV層との中間には泥炭層が挟まれていて、この泥炭層がIV層とV層とを分ける鏡層とされている。またIV層は泥炭質でやや骨味がかった粘土層であり、V層はやや粘性に欠け、砂質を帯びる部分が多くみられた。V層は当初Va、Vb、VcもしくはV上、V中、V下と細分したが、その後の調査でさらに下までV層が及んでいて、それが従来細分とは異なる特徴をもっていたため、V1、V2、V3と呼び変えることにした。V層には貝層が多く挟まれていて、その上面や周辺には有機物の堆積が顕著であった。下層にいくにしたがって砂の薄層や砂の細

かなブロックを含む層、あるいは植物質を挟挿する層などが交互に現われてくる。ハ区の西岸ではこうした互層が顕著であってV<sub>3</sub>層とは異った遺物群を含んでいたため、V<sub>4</sub>層として扱えた。またホ区東岸からA15区東岸にかけての地域にはV層とVI層とに挟まれて青灰色微砂質粘土層が認められ、天武朝の紀年銘ある木簡が合まっていた。これもV<sub>4</sub>層と扱えた。したがってVI層は砂層の無遺物層と規定したが、ホ区ではVII層がやや粘性を帯びていて遺物を含んでいたものと考えられている。VII層は粒子の粗い砂層で、部分的に分解していない有機物を含んでいる。VIII層は比較的細かい粒子の砂層もしくは微砂質粘土層である。VIII層およびIX層には植物遺体や砂ブロックなどが入り混って偽層となる部分が多く一区画離れると、層が連続しないのが一般的であった。したがってVIII層・IX層ともa b cに3区分したが、同一層と認識した層であっても、隣接する層で組成が異っている部分がある。

以上のVIII層までの年代観は、伴出土器が未整理であるため、厳密には決定し兼ねるが、大綱は知ることができる。II層では青磁片が希に検出されるので、大略12世紀後半頃に比定される。III層は無遺物層であり、年代を示す資料がないが、IV層とのかねあいから11世紀代に比定できるものと考えられる。IV a層およびIV b層は9世紀から10世紀の推積物で、木簡第77号を出土させた。IV c層は無遺物層である。V<sub>1</sub>層はいわゆる奈良朝様式最後の土器群を出土させる地層で、8世紀後半から9世紀初頭頃に比定される。V<sub>2</sub>層は天平年間の紀年銘ある木簡を出土させるので、8世紀中葉から後半に比定される。V<sub>3</sub>層は最古の奈良朝様式の土器群を出土させ、一部天武朝の紀年銘ある木簡が出土していて、7世紀末年頃より8世紀前半に比定される。V<sub>4</sub>層は部分的に認められた層であるが、比較的短期間の単純層と考えられ、7世紀後半に比定できる。VII a層は7世紀中葉に比定されるがVII b, VII c層には6世紀中葉から7世紀前半の遺物が混在している。VIII a～VIII c層は5世紀後半より6世紀中葉までに推積したものであるが、各層を細分したほどに年代を限定することはできない。以上が年代観の大綱であるが、IV層の地積がV層堆積後に大溝を改修してから始まっていると判断された断面図がある（『伊場遺跡発掘報告』別冊図版第38A）。事実V<sub>1</sub>層には現在調査団で10世紀前半代と考えられている土器群が混在している地点が数ヶ所確認されていて、改修を裏付けるものと思われるが、1972年の第11次調査を含めて現段階では改修を積極的に断面図の中に認め得ない。したがってV<sub>1</sub>層の年代観は若干の幅を持たせる必要があるものと思われる。

以上年代観については、一応の見解を述べたが、今後土器類の整理を進める過程で、年代観の変更を余儀なくされることも起り得ると思われる。整理の進捗状況に合わせて訂正をすべき点は公表し訂正していきたいと考えている。

第3次調査地点と層序について 第3次調査では主としてOA地点を発掘し木簡4点をはじめ須・案・鎌等を検出し、多くの成果を取ることができた。しかし第4次調査によって新たなグリットを設定しグリット名を変更したほか、層序の呼称も変更することになった。そこで第3次調査区の名称を、第4次調査区の名称に呼び変えたいが、完全に整理しきっていないため、旧名称で今回も表示した。主なものを表示換えすと木簡は全てイ5区で、鎌と刀子がイ6区で出土したことになる。B16 b a区出土の大足はイ7区大溝縁にあたる。貝塚でSAはイ5区、SBの主体はイ5区で一部イ6区に及んでいて、SDはイ6区にある。またC16 a区出土の須と案はイ3区にあたる。出土層位についてはIV層はIV aに、V層はIV cもしくはIV b層に対比される。VII層にはV<sub>1</sub>層およびV<sub>2</sub>が含まれてVIII層がV<sub>3</sub>層もしくはV<sub>4</sub>層に対比されるものと思われる。大溝縁辺部では、層が複雑になっていて対比が完全にはなされていない。（川江）

## 第3章 木製品の概述

### 第1節 分類

木製品は、その中にさまざまな道具・用具が含まれていて、内容が複雑なうえ、用途・機能の不明なものが多い。それは、木製品がいくつかの部品からなる構造体であったものが、発掘時点でばらばらに発見される場合の多いことに起因していると思われる。それに、木製品は保存状態に大きく左右されて、発見例が極度に偏る。したがって類例を調べて用途を推測するという方法にも限度がある。また民具も大いに参考になるが、1000年以上もの実年代のずれは、なかなか埋めることができない。

そこで、可能な限りの推測も加えつつ、次のような機能別分類を行ない、用途不明の資料については形態分類を行なうことにした。

労働用具とした中には、農具・漁具・運搬具・網具・機織具・工具等が含まれ、直接的な生産用具と、補助的な労働用具を含めた。生活用具としたものは、厨房具や容器類、それに檯座とか下駄のような日常的な道具・用具の類である。それに建築部材・武器武具および馬具・呪術祭祀用具等に分かれる。そして以上の分類に収まらないものとして、大溝縁の階段状施設に用いられていた板材とか、木枕、それに用途不明の木製品がある。以下その順序にしたがって、遺物の概説を行なうことにする。(向版)

### 第2節 労働用具

#### A. 農具

鋤(写真図版第4、同第5A-1、2、同第5B-1、別冊図版第3-1) 小破片を含め14点ほどが出土した。これを形態により3類に分けた。

第I類 スコップ形をしたものが1点ある(写真図版第5B-1)。弥生時代の環濠から出土した数少ない木製品の1つで、長さ260mm、幅190mm、厚さ中央部で31mmを計る。丸味のある先端部は、側縁部に比べ、より鋭角に削り出されている。側面上部には一対の小さな抉り込みが見られる。柄部は折損しているが、おそらくは共木から作り出された長い柄が、同一平面上に付いていたと思われる。弥生時代後期。

第II類 平面形がナスビの縦断面に似た形状をもつ扁平な木製品(黒崎1976)をII類とした。II類はこれだけでは1つの製品として完結せず、これに別木の柄を着装することによって、はじめて道具としての機能を果たしと考えられる。これをU字形鉄製刃先の着装部の有無によって、a種とb種に分けた。

a) 鉄刃着装部をもたず、刃先まで木製のものをいう(写真図版第4A-2、同第4B、同第5A-2)。ほぼ完形で全体の形状のわかる3点を見ると、全長約400mm、最大幅約120mm、厚1.2~1.5mmほどの大きさである。形態はII類全体にいえが、着柄部としての基部と耕起部分である刃部に分かれる。そしてこの基部と刃部の境に、ナスビの縦断面に似た突起と抉り込みを作り出す。基部は、上半が細く、下半は幅の広い傘状の平面をとり、長さが全体の約半分の200mm前後を占める。基部上端にはかかりを作り出す。基部断面は、一面を平滑に、他面は中央部が厚く周辺部を薄く削り出した形となる。刃部は丸くおさまったものがほとんどである。なかに刃部中央に長方形の孔をあけたと思われるものも1点ある(写真図版第5A-2)。刃部は両部が最も幅広く、そこから先端部にかけて、徐々に幅狭くなる。刃先は薄く鋭利に作られる。時期は写真図版第4B-4が6世紀末~7世紀前半、他は7世紀後半~8世紀前半のものである。

b) U字形鉄製刃先の着装部をもつものをいう。この種としてはすでに「第6・7次調査概報」で実測図を示したように、U字形鉄製刃先が着装したままの状態出土した例(写真図版第4A-1)が知られる。形態的にはa種と大差はないが、刃部下半に、周縁より一廻り小さく削りくぼめたU字形の着装部が認められ、そこに長さ

151.5 mm, 幅 176 mm の鉄製刃先がつく。木質部は基部上端の一部を失うが、現存長 430 mm, 最大幅約 160 mm, 厚さ 16 mm あり、この 1 例に限って言えば、a 種より一回り大型となる。7 世紀中葉のものである。

第Ⅲ類 基部と刃部の境がⅡ類のように明確でないものをⅢ類とした。別冊図版第 3—1 に示した 1 点がこの類である。当然ながらⅡ類で認められるような突起や挟り込みはなく、基部から刃部にかけては末広がりに移行する。やはりⅡ類と同様、着柄して用いられたと考えられるもので、U 字形鉄製刃先の着装部をもち、刃部中央には長方形の孔があく。8 世紀代のものである。Ⅱ類とは形態上の差異は認められるが、ほぼ同様の用途、機能を有していたと考えられる。

大足(写真図版第 6 A—2—4, 別冊図版第 5, 同第 10—1) 出土状態からほぼ全形を復元できる枠組が 1 組と、別個体の枠木 2 点、大足の踏板 1 点が出土した。

写真図版第 6 A—1 は枠木と横棒が一括出土し、しかも一部の横木は納穴にはまったままの状態で見えられたので、これを出土状態をもとに復元的に並べてみたものである。枠木は現存長で 785 mm, 幅 33 mm (一方は 35 mm) 厚さ 25 mm (一方は 30 mm) の角材に、ほぼ等間隔に 9 個の方形孔をあけたもの(片方は半分欠失)で、これに長さ 465 mm の棒状品で、両端をやや細く加工した横棒を組み合わせて大足枠としている。

写真図版第 6 B—2・3 もこれと同形態で、2 は現存長 709 mm, 8 個の方孔があり、なかに縦で止めた横木が残存するものもある。3 は大足から欄台に転用したもので、端部の方孔は幅より大きく幅広い横木の存在が考えられる。現存長 695 mm で 8 個の方孔があく。

こうした枠木とは別に、大足の踏板と考えられるものが 1 点(写真図版第 6 B—4) ある。長さ 440 mm, 幅 92 mm, 厚さ 13 mm の長方形板の両端をそいだ細長い下駄で、鼻緒孔は足の形にあわせ前緒孔を片よせてあけている。両端部は細く削り出し大足枠への取付を容易にしている。右足用と考えられる。以上 4 点はいずれも奈良時代のものである。

下駄(写真図版第 6 B—5, 別冊図版第 3—2) 下駄形を呈する 1 点がある。長さ 238 mm, 幅 135 mm, 厚 39 mm の長方形板を縦長に使い、これに方形の鼻緒孔 3 個をあけたものである。前緒孔は左に偏している。下面は摩耗痕が著しく断面不整形となるが、歯のつけられていた痕跡はない。右足用と考えられる。平安時代のものである。

代掻(写真図版第 9 B, 同第 10, 同第 11A, 別冊図版第 7—1) 角材あるいは丸太材の台木に、5~10 個の方孔を一直線上にあげ、これに刀状に加工した歯をはめこんだ木製品を代掻とした。民具で「手馬鎌」とか「馬鎌」と呼ばれるものと同形態で、牛(馬)耕の始まりを知るうえで注目される資料である。このことについては第 4 章において述べられる。

代掻と認められるものには大小 2 種類あるので、大きさにより 2 類に分けた。

第Ⅰ類 台木の長さが 300~400 mm の小型のものをⅠ類とした。これは民具で「手馬鎌」と呼ぶものと類似する。2 点ある。写真図版第 9 B—9 は台木の長さ 271 mm と、この形態のものでは最も小型で、歯が 5 本、台木中央には長方形の着柄孔があく。8 世紀後半~9 世紀初頭のものである。写真図版第 9 B—8 は、歯の 1 本が欠損するが良く原形をとどめている。台木は丸太材の上下を面取りしたもので、太さ 51×52 mm, 長さ 390 mm を計る。5 本歯で、歯の長さ 92 mm, 歯と歯の間隔は約 65 mm である。台木にあげられた方孔に、刀状に加工した歯を下から差し込んで、横で固定したものである。台木側面中央に、歯と直角方向に長方形をした着柄孔が 1 個あく。8 世紀中葉から後半の時期のものである。

第Ⅱ類 台木の長さが 1 m をこえる大型のもので 5 点ある。民具で「馬鎌」と呼ばれ、牛馬に引かせて主として碎土作業等に用いたものと同形態である。写真図版第 10 B は台木の一部を失うがほぼ全体の形状をとどめる。台木は一辺が 80 mm の角材で、長さ推定 1200 mm。10 本歯で歯の長さ約 290 mm, 歯と歯は 85 mm 間隔となる。Ⅰ類と同様、台木にあげられた方形孔へ、刀状に加工した歯を下部から差し込んで、上下から横で固定したものである。台木側面には、歯の裏側と鈍角をなす角度であげられた長方形孔が中央付近に一对、歯とほぼ直角に

穿たれた円孔が両端に2個ずつある。民具例では、この長方形孔に柄が、両端の円孔には引手がつく。写真図版第11A-1、2は、ともに9本歯、台木側面には長方形孔がなく、円孔が、中央付近と端部にそれぞれ一対ずつつく。時期は写真図版第11A-1が7世紀中葉で、他は8世紀代のものである。

**柄振** (写真図版第5B-6、同第95B-7、同第97A-2) 柄振には、下面に歯を作り出した形態をとる1点と、長方形板に着柄孔をあけただけの形態のもの2点ある。

写真図版第5B-6は、下面に6本の歯を切り込んだ山形の板の上部に、2個の着柄孔を穿ったものである。6本の歯先はさらに浅く抉り込んで、2つに分岐する。着柄孔は、木の又部を利用した柄がつくのであろうか。33×25mmの方孔が2個、身部に直交してあけられている。下部の長さ296mm、高さ130cm、厚さは歯部で17mm、上部に行くに従い薄くなり、上端部では7.5mmとなる。7世紀代のもと考えられる。

従来、柄振といえば、弥生時代の木器に多くの類例をみるように、ここで取り上げた類のものと呼称であるが、前項で取り上げた代掻との使用法における相違点は、後者がより粗く深く砕く道具に対して、前者は、浅くこまかく均す道具といえよう。さらに柄振とは、通常下辺部に刻みを入れたものと呼んできたようであるが、伊場遺跡出土の木製品のなかにはこうした柄振とは形態が異なるが、やはり、現用の道具では柄振と称される長方形板に着柄孔を穿ただけのものが出土している。写真図版第95B-7は、長さ270mm、幅約115mmの柾目板の一方に偏して、35×30mmの方孔をあけたものである。上部の厚さ21mmに対し、下部は37mmと厚めにとる。側縁部は摩損が著しい。7世紀。写真図版第97A-2は、長さ172mm、幅80mmの長方形板の一面に隆起部を削り出し、この隆起部の中央に、身部に直交して方形の着柄孔をあけたものである。7世紀代のもと考えられる。その他にこの類の柄振と考えられるものに写真図版第97A-3がある。長方形板に着柄孔をあけただけの柄振は、現用のものでは、農具を含む幅広い用途に用いられているようである。

**股織状木製品** (写真図版第5A-3、4) 2点あるが、いずれも欠損部分が多く、全体の形状を知り得ない。写真図版第5A-3は、歯を三角形に作り出したもので、4本歯と考えられる。着柄部の形態はわからない。歯は外側のものが完存しており、長さ13cmほどある。8世紀代のもと考えられる。写真図版5A-4も4本歯と考えられる。この遺物は弥生時代後期の溝内から出土した。残存部からみて、上部に突出する形の着柄部が考えられる。2例とも錫・鉄の区別は難しい。

**鎌柄** (写真図版第7、同第8A-1、同第9A-1、別冊図版第3-1-1、同第4-1-2) 鎌柄には上部に鉄刃着装のための孔を明け、基部部にかかりを作り出した精巧な作りのもと、上端部に鉄刃を挟み込むのに必要なワリだけを入れた粗い作りのものがある。

前者の形態をとるものは、写真図版第7の8点で、別冊図版第3-4.5にも示すように、鉄刃のはまったままのものも2点ある。全面をていねいに削り込み、断面円形もしくは楕円形を呈するものが多い。基部部には三角形をしたかかりを作り出し、先端部にも多くの場合突起部を作り出す。鉄刃を着装するための孔は、この突起部の下端に穿たれる。別冊図版第3-4でもわかるように、着装孔は鉄刃幅以上に大きく穿ち、鉄刃の着装は楔を嵌込んで、固定させる方法がとられている。そのため残存する孔の方向だけでは鉄刃と柄との着装角度を推察するのは難しい。鎌刃には折り返しや木質部の残存状態で、柄に対しほぼ直角に付ける場合と、120°~140°位の鈍角に付ける場合とがあることが確認されている。時期は写真図版第7B-5・8が7世紀中葉で、他は8世紀~9世紀初頭と考えられる。

後者の形態のものに写真図版第8A-1と同第9-1がある。いずれも細い丸太材を用い、先端部に削り込みを入れただけの簡単な作りで、皮付のものもあるように削りも先端部に限られ、基部部にはかかりもない。ともに8世紀後葉から9世紀初頭のもと考えられる。

**竪杵** (写真図版第44A-1) 把部中央に算盤玉状の突起を作り出した竪杵で、弥生時代の溝から1点出土した。端部の片方を失うが、算盤玉状突起を中心に復元すれば、830mm程の長さとなる。杵断面は長径60mm、短径50mmの楕円形を呈する。把部は長さ143mmで、突起を中心に両側70mm程を、径28mm余に削り切ったもの

である。先端部は使用による摩滅で丸味を帯びる。弥生時代後期。

**木柄類**（写真図版第8A2~e, 同第8B, 同第9A2~e, 同第89A~90B, 同第99B-10, 別冊図版第27-1, e） 鐵類の柄と考えられるものから、どのようなもの柄か皆目見当がつかないものまで、柄には種々の形態を呈するものが認められた。

まず、鋤柄と考えられるものが4点ある。写真図版第9A-4~6は柄の把部破片で、これとほぼ同形態をとる鋤の完形品が第11次調査で見発されている。写真図版第99B-10は踏み鋤の柄ではないかと考えている。柄部上端と着装部？先端が欠損する。写真でも明らかなように、木の又部を利用したもので、下面は平滑に削られて、1か所に方孔があく。これを踏み鋤の柄と考えた根拠は、この方孔を用いれば鋤先の装着は容易と思えたからである。鋤先の基部に同形の方孔を穿ち、これを楔で固定し、前部を紐綴する着装法が考えられるが、鋤先には残念ながらこの形態をとるものはない。いずれも奈良時代のものである。

写真図版第8A-3や同第8B-8・9のように、基部部にかかりを作り出した長柄は鐵類の柄のように思える。けれども、鋤の身部の出土例はまだない。第8B-9には、折損部付近に着装部が認められる。奈良時代。写真図版第8B-7・10・11も農耕具類の柄と考えられるが、どのようなものが装着されたか皆目わからない。第8B-7は一端にかかりを作り出し、他端に孔をあけた長さ597mmの柄である。写真でもみられるように、孔と端部の間には溝が認められるが、これは人為的であるかどうかははっきりしない。第8B-12は完存品で、長さ837mmある。一端を断面方形に削り出し、他端は二面を削り、木口に直径9mm、深さ49mmの孔を穿っている。

写真図版第89A~90Aにあげた柄穴のある材は、把手と考えられる。第90Aにあげたもの多くに目釘孔が、また、第89A-3~5の場合には、第89Bに側面を示したように、柄穴に直交して溝が掘られている。写真図版第90B-12は、この類の把手が付く柄であるが、把部に針葉樹、柄部に広葉樹と異なる材質を用いている。農耕具の場合普通こうした材の選び方をしないし、また、形状からも農具とは異なる用途の柄と考えられる。奈良時代のものである。

柄には、その他に斧柄と考えられるものなどがある。（辰巳）

## B. 漁 具

<sup>95</sup> 釜（写真図版第11B, 同第12）すでに『伊場遺跡遺構編』（1977年）で述べたように、大溝内には、釜や駄といった捕魚施設が作られていた。一応これらは遺構と考えて『遺構編』で取り上げたので、ここでは釜の構造を中心に述べる。釜については、すでに『民具マンスリー』6巻5・6号（八木1973B）に詳細を発表してある。以下、その内容を要約する。

釜は隣接して2個体が発見された。周辺には、おびたしい雄木類を中心とする有機物が集積しており、それらが、砂質を帯びた流入土によって押しつぶされたようになっていた。釜自体もそうした有機物の下敷となっており、かなり破損している。第1号（写真図版第11B, 同第12A）は、口縁部及び結束している尻の部分が比較的良く保存されている。口縁部はつぶれて楕円形になっているが、もとは円形であったものとして復元すると、直径550mmを得る。全長は胴部を失っているため定かではないが、出土状態から約1m程あることが知れる。したがって全体の形は三角錐形を想定でき、釜としては、比較的大型の類に含まれるものといえる。釜は素材に、篠竹を主体にもちい、変状の植物をもって、これを結束固定することによって形造られる。とくに口縁部にあたる部分での固定技術は、写真図版第11Bでも明らかなように、非常に複雑、かつ精巧な方法をとっている点が注目される。釜第2号（写真図版第12B）は第1号に比べて、小型のようであるが、さらに破損がひどく、全体の形を推定するのは困難である。しかし、これには胴部が若干残存していた。胴部には、釜の補強のために、螺旋状に巻いた藁が認められる。2点とも非常に精巧に作られており、篠竹製の釜に関しては技術的にはすでに完成された姿であると考えられる。時期は7世紀末頃と推定される。

この釜の近くからは、丸木杭と雑木の小枝を使用したシガラ（櫛）状の遺構が検出されており、その関連が注目される。〔伊場遺跡遺構編〕写真図版第57A参照。

**軀**（写真図版第13） 軀については、『遺構編』に評述しておいたので、そちらを参照されたい。

**櫛**（写真図版第14A） 2又に分かれた小枝の部分で幹の上部を切断し、小枝部分が網杵を、幹の部分で柄を作ったものが2点出土した。いずれも長大な作りで、柄のほぼ完存する写真図版第14A-1では柄の長さが1340mm、基部の太さが径48mm程あり、柄部全面に削りが施してある。2点とも小枝先端が欠損する。ともに奈良時代。

**あかだし**？（写真図版第41A-5、同第41B-5-7、別冊図版第10-14、同第11-2） 羽物のなかに民具で「あかだし」もしくは「あかかき」と呼ばれるものと同形態をとるものが4例ある。同一用途といえないまでもほぼそれと近い用途が考えられる。

把手の付いた現在の庖取りに良く似た形状で、身部先端は下面を削って薄く作り出す。写真図版第41A-2と同第41B-7は、身部を深く、全体をていねいに作り、互に良く似た作りで、ともに柄部が欠損する。写真図版第41B-5の場合は、柄部を断面楕円形に削り出し端部に突起部を作り出す。くびれ部は使用による擦痕で丸味を帯びる。1点が6世紀後半のもので、他は8世紀。

**櫛**（写真図版第57A-1） ほぼ全体の形をとどめるものが1点ある。カシ材の一木造りで、全長115.8mm。柄部の長さが623mmで、柄上端部は幅33mm、厚23mmで、下部に向かってしだいに幅広げ海手となる。水かき部は長さ535mm、幅約87mm、厚さ中央で135mmある。全面をていねいに削り込み、側縁部は両面から薄く削る。奈良時代。櫛と思われる板材はこの他に写真図版第88A-2・4・6等数点あるが、いずれも破片であって断定はできない。

**浮子**（写真図版第99-5） 長さ91mm、長径37mm、短径28mmの筒形を呈し、長軸方向に内径18×13mmの貫通孔がある。浮子と推定する。（辰巳）

## C. 運搬具

**背負子**（写真図版第14B-17、別冊図版第6-1-6） 枝木をそのまま腕木に利用した背負子杵木と考えられるものが20点余ある。杵木には幹下端に認められる挟り部によって、左右の別に分かれることが知られた。枝木はほとんどの場合、幹上端から約3分の1ほどのところにつく。幹の下端部にはほとんどのものに2段の挟り部が認められる。挟り部は上部を幹とほぼ直角に切り、下部から挟り部とった例が多い。挟り部裏面も多くの場合削りを施して平滑にしている。なかには段を設ける場合もある。幹部はほとんどのものが整形しないので丸木のまま用いているが、数点上端部に限って削り込んだものがある。幹部は最も長いもので495mm、短いもので330mm、多くは40-45cmの長さである。ほとんどのものに枝木基部上面から幹部にかけて、刃部裏側の少し下付近に使用による顕著な擦痕が認められる。上部の擦痕は枝木から幹方向にかけての、下部は枝木方向に向けての擦痕である。枝木の完存するものは8例あり、最も長いもので290mm、最短で110mmの長さがあるが、25cmをこえる長さのものが大半を占める。つる状の紐が残存するものが2例、先端部付近の上端に切り込みを入れた例が2例（内1例には紐も残存する）ある。

杵木と杵木の組み合せ方法は、現在暗中横索の状態であるが、杵木に残された挟り部や擦痕の状態、それに枝木の紐や切り込みなどを手掛りに考えた場合、枝木が下にくる状態、つまり挟り部を上とした組み合せを推定するのがもっとも妥当と思われる。

背負子は、大溝第Ⅷc層（6世紀後半）から第V<sub>1</sub>層（8世紀後半～9世紀初頭）にかけてほぼ万遍無く出土したが、その間ほとんど形態差は認められない。

## D. 編 具

**編台**（写真図版第18，別冊図版第10—1—6）細長い板材の側面に切り込みをつけた木製品で13点ある。現用の藁や皮等を編む編台と同形態のものである。出土品のなかには脚にあたる木製品は見出し得なかったが、編台に伴う編錘は数多く出土した。

編台は1mをこえる長大な板材を用いるため、入手が難しいとみえ転用材を用いることが多い。確認できるものでも、木筒転用材が3点、大足枠の転用材が1点、その他1点の計5点が転用材である。

側面の切り込みには間隔が不揃いのものと、ほぼ等間隔ないしは規則性のある切り込みのものがある。切り込みの間隔が不揃いな編台の場合、切り込みは概して小間隔で数が多い。これは1つの編台で、対象とする編み物によりそれぞれに切り込み位置を変えて用いたことによると考えられる。そこで編み物の経糸幅がほぼ等間隔とした場合の切り込みの組み合わせを、各出土例について充分と言えないまでも検討してみたが、残念ながら多くの場合組み合わせを求めるには短かすぎたり、あるいは、切り込み数が多くしかも小間隔であったり、組み合わせを知ることはできなかった。

切り込みが、等間隔ないしは規則的なものは5点ある。写真図版第18B—5は端部に限って25mmの小間隔にし、他を80mm間隔にする。端部を経糸2本とした編み物が考えられる。同第18B—12は30mm間隔と70mm間隔の切り込みが交互に認められるので、2通りの使われ方が可能となる。切り込み全部を用いた場合と約100mm間隔で用いた場合とである。同第18A—2・4はともに木筒の転用材で、4は完存長で長さ1465mm。切り込みは130mm間隔と160mm間隔の2通りのものがつく。2は両側面に切り込みがあり、1方が約170mm間隔、他が約185mmの間隔である。

遺物の年代は古墳時代後期と考えられるものが3例、他は奈良時代であるがとくにその後半期のものが多い。

**編錘**（写真図版第19A—20B，別冊図版第10—1—11）編台とともに数多くの編錘が出土した。これを形態により4類に分けた。

**第Ⅰ類** 丸太材の中央に溝状のくびれ部を作り出したものをいう。写真図版第19—1～5がこの類で、表皮が残る例もあるように、丸木部分はほとんど整形しない。両端は刃物で切断する。くびれ部はていねいに削り込まれて断面円形を呈するものが多い。大きさは長さ130mm～170mm、丸木部の径43mm～65mmである。

**第Ⅱ類** 丸太材の中段が中央にかけてしだいに細くなる形態の写真図版第19—6～13をⅡ類とした。楕体としてくびれ部が幅広く、丸木部は幅狭い。Ⅱ類と同様両端を刃物で切断し、丸木部分はほとんど整形していない。くびれ部はていねいに削り込んでいる。長さ130mm～140mm、直径50mm～55mmのものが多い。

**第Ⅲ類** 丸太材の縦割材もしくは厚板材を用い、その長辺片側中央部分に方孔を穿ったものをⅢ類とする。写真図版第20Aと同第20B—9～14がこの類で、ほぼ蒲鉾形を呈する。全面をていねいに削り込むものと、片面に丸太の素材を生かしたものとがある。両端は刃物で削り取る。写真図版第20B—14は厚板を用いた唯一の例で、全面をていねいに削り断面楕円形とする。長さ120mm～150mm、幅55mm～70mm、厚さ25mm～35mmの大きさである。

**第Ⅳ類** 角材もしくは一部整形の丸太材を用い、Ⅲ類と同様にその長辺片側中央部分に貫通孔を穿ったものをⅣ類とした。写真図版第20B—15・16がこの類で、15は一辺が54mm、長さ164mm程の角材に方形孔をあけたもの、16は、長さ134mmの丸太の約半面を2面に削り出し、そこに径6.5mmの円孔を穿ったものである。

以上のように、編錘を形状から4類に分類してみたが、これを時期的にみると、Ⅰ、Ⅱ類とⅢ、Ⅳ類の間に、かなりはっきりした時期差が認められた。Ⅰ、Ⅱ類のほとんどが大溝第Ⅶ層（7世紀中葉）からの出土に対し、Ⅲ、Ⅳ類は2点を除いて、すべて第Ⅴ層（7世紀後半～9世紀初頭）出土である。（仮じ）

## E. 機織具

**糸巻**（写真図版第23A-4, s, 別冊図版第7-2）形態の異なる2点がある。写真図版第23A-4は組み合わせ式の糸巻の枠木で、同形態のものが坂田寺、西隆寺、平城宮などから出土している。枠木の上下2か所に横木を着着させるための納穴をあけ、糸と接する外面を丸く削り出し、内面は納穴部分を残して両端を細身に、納穴の中間を内彎するように平滑に削りとったいいわいな作りのものである。表面には漆または漆のようなものが塗られている。平城宮の出土例では、この枠木4本を1組とし、十文字形に組んだ横木を上下の納穴にそれぞれ差し込んで糸巻としている。

写真図版第23A-5は両端に5個の突起を作り出した一木造りの糸巻である。別冊図版第7-2に示したように、長さ190mm程の丸太材の中央、木心部に径22mm程の軸穴を穿つ。また長軸にそって5条の溝を掘り、断面が五角形の花弁状になるように仕上げている。糸と接する外面は丸く削り出す。突出部の両端には、それぞれ5本の突起が20mm程ずつ突き出した形となる。この糸巻は他に類例をみない。ともに奈良時代のもの。

**管大杵**（写真図版第22A-1）細長い板を三日月形に整形し、一方の側縁から両端にかけて刀状に薄く削り出した木製品である。断面倒卵形を呈し、中央部側面には袋状に長方形の削り込みがある。

この木製品は中央部に緯糸を取納する管室を設けた大杵と考えられる。写真でも明らかなように、ほぼ完存品で、長さが830mmある。緯糸を切り込む刃部はほぼ一直線となる。中央部付近で、幅62mm、厚335mm。管室の一部は欠損するが、口縁の部分で21mm×124mm、管室下部で43mm×131.5mmの広さとなる。7世紀中頃のものである。管大杵のこれだけ古い時代の実例は他に知らない。注目される資料である。なお機械の考察は第4章においてなされる。

**箄**（写真図版第22A-2, 4, s）箄の一部と断定できるものが1点、他に同形であるが種がみられないため成と断定しきれない例が2点ある。

写真図版第22A-2は、長さ745mm、幅28.5mm、厚さ19mm。両端を斜に切り、その短辺側の側面に、幅3.5mm、深さ15mmの種が700mmにわたって掘ってある。種の両端部には納穴があり、短辺方向から、ほぼ直角に差し込んだ枠木の一部分が、両側ともに残存している。納の固定には目釘を用いている。箄はこの納部を利用して反対側にはほぼ同形のものを組み合わせ、種に竹等で作った薄板を入れた形態のものが考えられる。またこの種が掘られた面には経糸の擦痕が646mmの長さにわたって認められた。写真図版第23A-3は、この部分を拡大して示したもののだが、この写真でも明らかなように、他の2例に比べ、糸度は非常に繊細で、密である。因みに、1cm間の糸度数は24本前後となる。8世紀末～9世紀前葉のものと考えられる。

箄と断定しきれない2点も種が認められない以外はほぼ同様の作りである。2点とも折損しているのが実長は知られないが、写真図版第22A-4の場合、1片が170mm、他片が485mmであるから欠損部を考慮に入れば、ほぼ前者に近い数値となる。納木の残りは2点とも良い。いずれも内側が台木から2mm程上で取り取られている点が注目される。これには目釘を用いていない。糸度はともに粗く、1cm間で1例が6～13本、他が10本前後となる。2例とも箄と考えたいが、種がないため経糸の整形の仕方が皆目わからない。別の部分とすれば綜統などが考えられる。2点とも7世紀中葉のものと考えられる。

**部品各種**（写真図版第22A-2, s, 同第22B-II-11, 別冊図版第7-4, s）今回の報告では形状から見て明らかに機織部品と考えられる5点をあげるにとどめた。他に不明木製品としたものや、写真にあげなかった小破片類の中にも、機織の部品が含まれているかも知れないので、今後、整理検討していかねばならないと考えている。

5点のうち、写真図版第22A-3は綜統率かも知れない。端部の一部を欠くが、両端には長方形をした孔があり目釘が残存している。目釘の残存状態は納木が装着されていたと考えるより、紐のようなものがついていたと考えるほうが理解し易い。この両端の孔と機織の間を、紐のない竹木で結ばれ綜統となる。しかし確証はない。棒状品であるが箄としたものと良く似た形状である。現存長678mm。孔の間は605mmで、箄で認められた

糸幅より若干短くなる。

写真図版第22A-6は、登呂遺跡出土の布巻具と良く似た形態である。別冊図版第7-4に示すように、両端に突出部を、その内側に凹部を作り出している。同形のを重ね合わせて、両端の凹部を紐でしばった布巻具と考えるのが妥当であろう。ただ、幅23mm前後、厚さ12mm前後の細い材であるので、はたして使用に耐えられたかどうか疑問である。中間部を欠損するため、長さはわからない。7世紀代のものである。

写真図版第22B-12は、棒状品で、一端を尖らせて小孔を穿ち、他端に納を作り出している。納には3か所に目釘が残る。機踵と綜統を結ぶ部品と考えたい。現存長615mm、直径17mm。8世紀。

写真図版第22B-13・14は、全面をていねいに削った断面長方形の木製品である。両端には納が作り出している。どの部品にあたるかわからないが、写真図版第22B-14の場合、長さ750mmで、写真図版第22A-2にあげた炭とはほぼ同様の長さとなることが注目される。ともに8世紀代のものである。(既出)

## F. 工 具

手斧(写真図版第9A-7) 木の又部を利用して着装部と柄を作り出した木製品で、手斧の柄と考えられるものが2点ある。第9次調査ではこの形態の木製品に鉄製斧頭が装着されたまま出土している。写真図版第9A-7は、着装部の長さ213mm、幅約28mm、厚さ約18mm。柄部は基部で径14.5mm程の細い枝で、中央部を欠損するが、折損部両端の直径等からみてもさほど長くはならない。2片合せて220mm程の長さがある。着装部が厚く、しかも斧頭が装着された痕跡もないので未製品であるのかも知れない。7世紀中葉のものと考えられる。他の1点は腐蝕が著しい。

刀子(写真図版第23B-6-a, 別冊図版第4-6-a-b) 鉄刃装着のものが4点と木柄が1点の計5点ある。鉄刃は数多く出土しているが、これは金属器の類で取り上げる。鉄刃装着で柄部の完存する3点のうち、写真図版第23B-6は、正倉院伝世のものに類似しており注目される資料である。木柄には黒漆が塗られ、柄端部は若干折れ曲がる。全長213mm、木柄部の長さ135mm、断面は径約12mmでほぼ円形を呈す。他の2点は白木で、断面側卵形ないし小判形を呈する。身部はともに研磨による摩耗が著しい。柄だけの1点は、他と異なる形態である。柄端部を斜に削り、断面も隈丸の長方形となる。いずれも8世紀代のものと考えられる。

このほかに小刀の鞘と考えられるものが1点(写真図版第23B-a)ある。(既出)

## 第3節 生活用具

### A. 厨 厨 具

小臼(写真図版第44B-2, 別冊図版第11-4) 器高174mm、口径160mm程の小形の臼で、口縁には片口が作り出している。丸太材を縦方向に用いたもので、内面は口唇部から削り抜き始めて底にむけてややすばまる形となる。深さ99mm程である。内面には使用による摩耗が顕著にみられる。外面は整形度が顕著に残る荒い作りで、底部から口縁部方向に105mm程を削り込んだくびれ部がみられる。平安時代。

俎(写真図版第45・46・49・50, 別冊図版18) 2点ある。いずれも完形品で、写真図版第45・46は長さ480mm、幅の一端260mm、他端280mm、厚さ60mmの、下面に面取りをした厚板に、角脚をはめて高さ190mmとしたものである。上面には刃物の痕が著しく、若干の凹みを呈する。この俎と後述する案は、第3次調査で大溝の平安時代包含層から互いに接して出土したものである(写真図版第44C)。写真図版第49・50は長さ433mm、幅113mm、厚さ38mmの上面を甲高にした厚板に、脚をはめて高さ150mmとしたものである。脚は台板と同じ幅の板材で、左右2脚となる。上面の刃物の痕がわずかで俎として使用されたかどうか不明であるが、形態から俎とした。奈良時代前期。

案(写真図版第47・48, 別冊図版第19) 長さ510mm、幅190mm、厚30mmの板に、4脚を杓で組み、さら

らに楔で固定した完形品で、高さ190mmとなる。台板上面に焼魚しと若干の刃物の痕が、裏面にも刃物の痕がみられる。平安時代。

火鑽臼（写真図版第43、別冊図版第17-12-14）5点ある。内1点は未使用の完形品である。使用痕の残る4点はいずれも端部を欠くが、上面に火を鑽った孔が並列し、その側面に孔につづいた溝が掘り込まれている。残存状態の最も良好な写真図版第43A-2の場合は、現存長181mm、幅31mm、厚12mmの板材に、約17mm間隔で9個の火鑽孔があいている。また、写真図版第43B-4は幅47mmの幅広い板材を用いており、同第43B-5はもう少し幅広かったものを削りなおして再利用しているように考えられる。使用された火鑽臼では前述した写真図版第43A-2が古墳時代後期のもので、他は奈良時代である。未使用の写真図版第43B-5は、長さ66mm、幅22mm、厚さ12mmの完形品で、1方に備して穿孔がある。片側には6個の切り込みと、杵の移動を防ぐ囲みがつけられている。平安時代。

箸（写真図版第38A-4-7、別冊図版第17-9-11）箸と思われる細棒は多数出土したが、明らかに箸としてあげられるものとなると非常に数少ない。実測図あるいは写真にはその中で明らかに箸と思われる4点をあげた。いずれも削り終わった後、全面に削りを施している。両端ないし一端を尖らした例も多い。写真図版第38A-4は、4点のなかでは最も長く、261mmある。両端を徐々に尖らしていくなりで、断面円形を呈し、中央部で径6.5mm、先端部で径4.5mmを計る。この1点が奈良時代で、他は平安時代のものである。

杓文字？（写真図版第38A-8、9、別冊図版10-12）2点ある。写真図版第38A-8は、長さ215mm、幅51mm、厚さ10mmの板材の一半を削って柄部とし、身部断面を薄いレンズ状に削り出したものである。作りは全体に粗い。古墳時代後期。写真図版第38A-9は全面をていねいに削り込み、身部側縁部に刃を作り出したもので、幅の狭い長い柄がつく。奈良時代。いずれも、杓文字として使用されたかどうか明らかでない。（図8）

## B. 容 器

曲物（写真図版第24-37、別冊図版第11-17）曲物の出土例数はまだ正確に把握しかねている。割板の類が細片として発見される場合が多く、個体識別が困難であることに起因している。表第2は、IV層（平安時代）とV層（奈良時代）の曲物点数を対比したものであるが、この他にVI層（古墳時代）の例が数点、III層（平安時代後期）の例が1点ある。したがって出土総数はおよそ240点としてよいであろう。

曲物には、その平面形からみて、楕円形、長方形、方形？、円形の別があり、大きさの上でそれぞれ大・中・小の差がある他、把手の有無や深淺の差も認められる。また割板の取り付け方に、上板もしくは底板が割板の内側にすっぽり嵌め込まれてしまう「クレゾコ」の作りと、外側にはみ出す「カキイレゾコ」の作りの2通りが知られ、前者では割板の外側から木釘を打ち込んで固定するのに対し、後者では棒皮で綴じて固定する。

以下平面形を基本とし、大小の差と偶板の取り付け方などを加味して分類し、それぞれについて略述しよう。

### 第I類（写真図版第24-26・27B・36A）

平面楕円形のものには、長径60-75cmの大型のもの（A種）と長径40cm前後の中型のもの（B種）との2種があり、A種には把手の付くものとつかないものがある。B種には、把手付のものは見当たらないが、写真図版第27B-2（別冊図版第12-2）は、偶板の下端部が棒皮で固定された状態で遺存し、かつその固定箇所とは別に長軸両端に2個1対の小孔があげられていて、手懸紐でも通してあったかと思える。

### 第II類（写真図版第27-1、4-6）

長方形のものと同方形しいものをII類とする。例数はきわめて少ないが、写真図版第27-1は長さ653mmで大型に属し、4は長さ262mmで中型に属す。6は方形と思われるが、1辺が197mmで小型というべきである。

5は長さ210mm、幅37mmの小型であるが、偶板を固定したはずの棒皮の綴孔がない。これで完結する蓋板の可能性もあるが、ひとまずこの類に含めて置く。

### 第III類（写真図版第28-34・36B・37A）

平面円形のもの内「カキイレゾコ」の作りをしている例を本類とした。外径に注目してみると、写真図版第28-1・2のような径50cm前後の超大型のもの（A種）、3・4のような径30cm余りのもの（B種）、写真図版第29-1・2のような径24cm前後のもの（C種）、3~9と写真図版第30~31のような径20cm未満の小型のもの（D種）の4段階に区別される。例数はA~C種が極端に少ない。以上の内、A種とB種では側板の固定個所が4個所に及ぶが、C種とD種では4個所に限られるようである。

#### 第四類（写真図版第32~34）

平面円形で「クレゾコ」の作りのものを本類とした。この場合も大きさにいくつかの段階がある。A種は径26~30cmの大型のもの、B種は径18~20cmの中型のもの、C種は径10~16cmの小型のものであり、C種はさらに径10cmのもの（C<sub>1</sub>種）、径11.5~13cmのもの（C<sub>2</sub>種）、径14.5~16cmのもの（C<sub>3</sub>種）とに細分できるかも知れない。以上例数ではC種が大半を占める。またこれら「クレゾコ」作りの場合には、固定個所の識別が困難であるが、おおむね4個所に木釘を打ち込んだものようである。

曲物の上板もしくは底板には、往々にして細かな切りきずを踐す例がみられる。切りきずは、外面につき場合が多いが、時に内面にも認められることがある。また、切りきずの量は、「カキイレゾコ」作りのものに多い傾向があり、かつ大きいものに顕著のようである。切りきずは、方向がまちまちであるが、1条ずつ方向を逸るのではなく、何条かずつ集合するのが特徴であり、その原因が、主として鋸として利用された時の庖丁によるものと推測される。

写真図版第30-3は、中8孔上下7孔ずつ3列に、小孔を穿ってある。別冊図版第16-3は、2孔を穿つ。これらは蒸籠として使われたことを思わせるが、果してこの程度の孔で、蒸籠の機能を全うできたか否か、検討が必要であろう。

写真図版第31-4・5と、同第33-9には焼印のような人為的焼焦しが認められ、4は「太」、9は「足」と読めるとして、「伊場木簡」（1976年）に報告済みのものである。4には「太」の他、刀子の先で書いたと思われる「杓」の1字も認められる。5に付された〔 〕は、文字ではないようである。

上板もしくは底板の木取りは、I類、II類の一部、III類A種のように大型の例では、板日に取り、その他の場合は原則的に径目を取っている。また、これら大型の例では、一枚板が取れなかったと見えて、2枚を縫い合わせ榫皮で綴じる例が多くみられる。写真図版第24-2、同第25-3、同第26、同第28-3・4などは、その例である。

#### 側板について

曲物の深淺については、側板の幅を検討しなくてはならないが、この点については不十分といわざるを得ない。写真図版第34、第36、第37Aに示した例は、大小の差はあっても比較的深いものばかりである。これに対して写真図版第37-2・8と同第26は、浅い例であり、特に後者は底板と幅の狭い側板が組み合わさって山出した数少ない例である。

写真図版第34C、同第36B、同第37Aの場合には、側板の外側にさらに回しの側板をめぐらしているが、同第37B-3~6・8も、回しの側板とみられるものである。

側板の上げ方に注意してみると、内面に切りきずを入れた例が、特に大型の場合で、やや厚い側板を利用する時とか、楕円形に作る際の曲率の大きくなる部分などにみられる。

側板の綴じ合わせ部分は両端を相互に薄くして、そこが特に厚くならないように工夫する例が多いが、同じ厚さの板を綴じ合わせるので2倍の厚みをもつ場合もある。写真図版第36Aはその顕著な例であり、これを上板もしくは底板で検討すると、写真図版第24-1・4、同第26B、同第27-2、同第30-3・7、同第33-6などのように、綴じ合わせ目に合わせて、上板もしくは底板の方にも切り込みを入れた例が認められる。これらを見ると側板を上にして、合わせ目を横から見た場合いずれも右側が前になるようになる。しかし写真図版第34Aと同第36Aの場合は左側が前になる。これが蓋身の関係として扱えられるか否か、今にわかに決めかねる。

年代的变化について

伊場遺跡出土曲物中、古いものは写真図版第28—3、第29—1、第30—6・9、第32—4、第33—2などで、Ⅴ層出土（7世紀中葉）と記録されている。上記の分類ではⅢ類B～D種と、Ⅳ類C種に属し、Ⅴ層やⅣ層出土のものと型式的に異なるところはない。強いていえば、写真図版第30—9が厚さ24mmと際立っている。同図版—8も厚さが14mmでⅤ層下位の出土品であるところから、大型曲物はともかく、厚手のものが古いといえるかも知れない。

年代的变化として注目されるのは、Ⅰ類・Ⅱ類の曲物の出方である。この種の曲物はⅤ層最下層（7世紀後葉）以下には含まれず、Ⅴ層中下位からⅣ層にかけて検出された。これは、この種の曲物の利用法にも関係するかと思われる。

伊場遺跡での曲物の出方をみる限り、曲物は、完成された形でこの地域に導入されたものとみられる。

なお、写真図版第100Aに示した、切り込みのある細い割材がある。例数の少ない内は、「カキイレゾコ」作りの上板もしくは底板の破片としていたのであるが、同様の例が増加するに及び、曲物を作る時の物指ではないかと考えるようになった。中村俊亀氏が報ずる木曾のメンバの型板では、何段かの切り込みが入っていて、本例とはかならずしも一致しないが、ここではその可能性もあり得ることを指摘するにとどめる（中村1971）。

**箱物**（写真図版第93—3、4、5、第94B、第95—1—3） まず写真図版第94—12—17は互いに大きさ・形状が類似しており、その内13・16・17は、一括出土したところから、1組となって使われた可能性がある。その場合4隅に小孔があることに注目して、ここで綴じ合せた箱形のもを想定できるのではなからうか。

つぎに写真図版第93—3と第94—18は、両端に納を作り出し、小孔をあけてある。これも箱形に組み易い形状であるが、これと対になるものはみつからない。

写真図版第93—16と第95—1・2は、同じ形状のものを上下にして、并桁に組むことによって、やはり箱形を作ることが可能である。しかしこの場合には、相互に固定するための方策を別に考案しなくてはならない。

なお、写真図版第95A—3は、3孔2列の円孔を穿った長方形板であるが、この円孔を利用して、側板を取りつけたと想定すれば、箱の上板もしくは底板とみることができる。同様に、曲物Ⅱ類としたものも、側板の状態が明確でないため、製作の仕方の類似から、曲物に含めてはいるが、側板4枚で構成されていれば、箱物とすべきものであろう。

**挽物**（写真図版第38B、同第39） 挽物はすべて浅い盤形をなす。写真図版第38B—13が弥生時代後期前半のものである他は、ほとんど奈良時代の例であり、11と同第39—2が平安時代に属する。大小の蓋や高台の有無など変化に富み、類型化し難いが、大ききでは径16～20cmのものが多いようである。なお、写真図版第39—2の底面に、刀の先で穿いたと思われる「川」の字が認められる。

**割物**（写真図版第40—41） ここで割物として扱うものには漆器・短甲木製品・民具の「あかかき」に似た有柄式のもの（写真図版第41—2、3—7）を含まない。それぞれ別項で取り扱う。

写真図版第40Aは、中央部を浅く削り込んで、一方を細く削り、納を作り出している。これを未成品として良ければ、鋤先か鋸先と推定できるが、写真の左側は薄く削ってない。用途不明とせざるを得ない。奈良時代。

写真図版第40Bは、上辺に40×31mmの長方形貫通孔を穿ち、左右380mm、天地315mmの勸簾に似た形状を示す。しかし全体的に厚手に作られており、刃部に当るべき下辺も、勸簾としての機能にふさわしくない。液体か柔らかい液状のものをすくう道具に適している。出土層位からみて、古墳時代のもものと推定される。

写真図版第41—1・3・4・8は、槽と呼ばれている割物容器である。8には把手が付いている。いずれも奈良時代の古い時期に使われたものらしい。

**漆器盤** 破損が著しい上、部分しか残っていないので、全体を推定し得ないが、薄くて浅い挽物の木地に、表裏くまなく厚い黒漆をかけたものがある。平安時代のもと思われる。

**篋** 写真に示し得なかったが、竹の編物を内と外で2本ずつの細い木の割材を当てて挟んだものが出土してい

る。細い割材は弓なりに彎曲して、途中を欠失するが全長707mmを測るので、小型の筥と考えたが、竹の纏物の部分がかくわずかしか透存しないため、断定をさけておく。径23cmほどの円形にめぐっていたものが、腐蝕の過程で開いて、弓なりになったことも否定できない。平安時代。

爪（写真図版第42） 竹の幅物は、7点出土しているが、いずれも完存品ではない。またいずれも爪とみられる例であり、蓋と確認できたものはない。編み方まで検討が進んでいない。奈良時代。（向坂）

### C. その他の生活用具

**横櫛**（写真図版第51、同第52A、別冊図版第26—29—30）13点が出土した。内6点が古墳時代の横櫛（写真図版第51A、第51B—s、e）である。奈良時代のものとは型式も異なり、残存状態も良く、横櫛の系譜を知るうえでも注目される資料である。古墳時代の横櫛にも、棟を山高に作る写真図版第51A—1・2、低くほぼ直に作る同51B—6、その中間形態の同51A—2・4、51B—8といった形態差が認められる。棟はいずれもていねいに削られて平棟となる。厚さは10mm前後のものが多く、歯先端に行くに従って次第に薄く実る。歯基部はほぼ棟の形に合わせて止めてあり、境には浅い切り込みが入る。歯の密度は1cmにつき9本を数えるものから5本のものまである。ほぼ完存する写真図版第51A—1の場合、横櫛最大長92mm、高さ54.5mm、歯長34.5mm、棟の厚さ12.5mm、歯は全部で48本ある。

奈良時代の櫛は、古墳時代の櫛と異なり、棟や側面に明確な線を削り出す場合が多く、ほとんどものが櫛を直に作る。櫛には厚手と薄手のものがあり、歯の密度は1cmにつき18本を数える密のものから、7本のものまである。肩部は丸味を帯びるものと角張ったものがある。

**下駄**（写真図版第52B） 3点ある。写真図版第52B—7は現存長187mm。前後端は欠損する。台板は現存部では幅76mmの長方形を呈し、上部を平滑に下部を丸く削り出す。鼻緒孔は上部から穿った逆円錐形の孔で、後歯前方に後櫛の2個が残存する。前緒孔は現存部から考えて、前歯前方に穿たれていたことに間違いない。歯は削り出して作られる。歯下端部は台幅より幅広く、そのため上部から見ると歯が外側に張り出して見える。歯先は摩擦するが現存高37mmを計る。平安時代。この形態の下駄は平城京などから出土する平安時代の下駄と同様の作りである。歯が台幅より張り出す形態が平安時代の特徴らしい。

写真図版第52B—6は約半分が欠損する。台板は隅丸の長方形ないしは楕円形で、幅が106mmある。方形をした鼻緒孔2個が穿たれている。削り出した歯が鼻緒孔の内側に1本だけ残存する。歯は台板とはほぼ同じ幅に作られる。この下駄破片については、鼻緒孔の間隔が狭く（19mm）、しかもその位置が歯外側にくることから、鼻緒孔が2個残存するけれども、下駄前部破片と考えるほうが良さそうである。古墳時代後期。残る1点は、前者とほぼ同形態のものである。

**砧**（写真図版第21、別冊図版第4—e—f）丸木の一半を細く削って柄を作り出した木製品で、身と柄を段で区別した作りのものと、柄の部分削り出しただけの作りのものがある。いずれも身、柄ともに断面円形に削り込んだていねいな作りで、身部には多くの場合使用による摩擦が認められる。

身と柄を段で区別したものに写真図版第21A—2と同第21B—5がある。写真図版第21A—2の場合、身と柄の境を切り込んで、柄端部から身部方向に徐々に細く削り取ったもので、全長300mm、身部と柄がほぼ同じ長さとなる。身部には使用痕が顕著に残る。平安時代。写真図版第21B—5は出土した砧の中で最もていねいな作りである。柄端部には段をもつ突起部がつき、この突起部と身部の間が把部となる。身部も6点の中で最も太く、径77mmで、身部側面と先端部に使用痕が認められる。この砧は大溝遺跡（5世紀後半～6世紀前半）から出土した数少ない木製品の1つである。

残る4点が柄部を削り出しただけのもので、写真図版第21A—1は、身部は径51mmと細身であるが、長さは、完存する砧の中で最も長く450mmある。また、写真図版第21A—3の場合は、整料の破損部のようにも見えるが身部側面に使用痕が残ることから砧と考えている。写真図版第21B—4は歯触りがひどく、同第21B—6は

柄端部が欠損し、身部も摩損が著しい。4点とも奈良～平安時代のものである。

砧は、葉打ち、脱穀、洗濯等の幅広い用途に用いられていたと考えられる。

物指（写真図版第61B-11） 断面半円形を呈する材の上面に、ほぼ等間隔に刻線をつけた木製品が1点ある。一端を欠くが現存長229mmで、8か所に刻線がある。目盛幅は最長28mm、最短長26mmで、他はこの間に平均してばらついている。奈良時代のものである。

奈良時代の尺度については、榎本杜人氏の古代尺に関する計測表（榎本1959）をみると、石尺というのがあって、これが現行尺値に直した場合最も短かく、1尺の長さ280mmで、他はほとんどが1尺290mmを越えるものとなる。写真図版第61B-11の場合、最長目盛が石尺と同じ1寸が28mmであるが、他は1寸26mmまでの間の長さとなるから石尺を基準にした物指とも考えられない。また、正規の尺度のなかにもこれに近似する数値はみだしえない。したがってこの物指は公的に用いられた物指ではなく、私的に用いられた物指と考えられる。

弩柱（写真図版第100B-12） 奈良時代のもので1点ある。下部の一部が欠損するが、現高23mm、幅52mm、厚さは脚部で6.5mmある。脚部を上部に比べ若干厚めに作り、頭部と脚底部に浅い抉りを入れている。

検刷？（写真図版第61B-12） 長さ290mm。端部の一方は、幅10mm、厚さ2.7mmで小孔があり、他端は、幅16mm、厚さ2mmとなる。検刷の中心部にくる一枚と考えたいが、平城京出土例と比べると余りに幅狭く、断定はできない。平安時代。

撥（写真図版100B-12） 長さ67.5mm、幅上端で12mm、下端で幅32.5mmの小形の木製品である。全面削りのていねいな作りで、上端で厚さ4mm、下部に向けて次第に薄くなる。用途はわからない。奈良時代。

印判（写真図版第100B-12） 2点ある。内1点には底部に曇痕が残っていた。ともに板材の上部両端を削り取っただけ簡単な作りで、底部は平となる。写真で示した1点は、長さ120mm、底部で幅25mm、厚さ4.5mm、底部に曇痕が残る。古墳時代後期。性格はわからない。（辰巳）

#### 第4節 建築部材

建築材（写真図版第54A-1、2、3、同第54B-4、5、同第98B-6） 建築材はさほど多くない。写真図版にあげた以外には若干の断片があるにすぎない。丸柱の写真図版第54A-1は、1対をなす納穴がほぼ直角に穿たれており、建物の隅にくる柱材と考えられる。納穴は3ヶ所にあく。両端とも欠損するが、一端が、地中に埋っていたかのように表面が腐蝕し、木芯部だけが残る部分が185mmにわたってみられる。この境が地連と考えた場合、最初の納穴までが約110mm、中位の納穴が640mm、上位の納穴が1030mmの位置にくる。現存長1620mm、太さ径150mmを計る。写真図版54A-3は建築材と言えるかどうかかわからない。完存品で長さは1190mm。皮付の丸太材で、両端は切断した後何の加工も加えていない。方孔が1個あく。写真図版第54B-4は2か所に納穴のあく角材である。加工の仕方が余りにていねいなので建築材とは異なる用途とも考えられる。写真図版第54B-5もまた、建築材と言えるかどうかかわからない。写真図版第54B-5のような大溝縁に作られた踏板の類かも知れない。

柱根（写真図版第53A） いくつかの獨立柱建物遺構に柱根が残っていた。それらではできるかぎり遺物として取り上げたが、発掘の過程で破損消滅したものが多く、現在39点が残っている。柱根と礎板についてはすでに『遺構編』の獨立柱建物の項で詳しく触れたので、ここでは大要を述べるにとどめる。

まず材質については東京国立科学博物館の山内文氏に鑑定していただいた結果、39例中ヒノキ、クリ、イヌマキが各11例で最も多く、他にシイ、シオジ、サワラ、クスギなどが使われていた。太さは径6.5cmから径21.5cmの間にはほぼ平均にばらついており、径20cmをこえる太さの柱根は極めて少ない。丸柱と角柱があり、角柱の方に作りの良さが目立ち、丸柱のなかには枝を残したまま用いる例もみられた。また、横木を組み合わせたと思えるような、帯状の窪みがみられるものもあるが、数は少ない。柱下端の切断にも、四方から斧を入れたもの

と、一方から斜めに斧を入れ切りとったものがある。

**礎板**（写真図版第53B） やはり掘立柱建物の掘方の中から検出されたもので17点ある。これも山内先生に鑑定していただいた。ヒノキが11点、サワラが3点、他にヒメユズリハ、ヒメコマシ、シイなどが使われる。ヒノキを多用していることが注目される。写真にあげた3例は、礎板のなかでも比較的手厚で大型のものである。礎板には一枚板で使われる場合と、幅3~5cmの小板を重ね合わせて用いる場合がある。

**梯子**（写真図版55、別冊図版第20-3） 丸太材の表面を挟んで足かけを作り出した梯子が3点ある。いずれも破損品であって全長は知り得ない。写真図版55A-1は太さ径105mm、現存長1060mmで上部が欠損している。足かけは丸太材と直角方向に径の半分ほど切り込んで上部から斜めに削り取った作りで、約28cm間隔に作り出されている。剥離した1か所を含む3か所で認められる。7世紀。写真図版55A-2は現存長670mmで、両端が欠損する。太さ径125mmの丸太材をつかい、足かけは平均355mm間隔に作り出す。8世紀代。

**鼠返**（写真図版第56） 破損しているが残存部の形態からみて鼠返しと考えられるものが3点ある。いずれも短辺方向に若干の彎曲つけた板材である。写真図版56A-1の場合、側縁部を薄く、他を厚さ3cmほどに全面にわたって削り込んでいる。欠損している側面の中央には径5cmほどの円孔があり、その両側に、楔で止めた棒が残存する長方形の孔があく。鼠返とするには中央の孔の大きさに若干の問題はあるが、棒の存在により、これを用いた装着方法が考えられる。7世紀代。写真図版56B-1には一辺55mmほどの方孔があり、全面に手斧の痕跡が認められる。8世紀後半から9世紀初頭のものと考えられる。（図6）

## 第5節 武器武具および馬具

**丸木弓**（写真図版第57） 丸木弓と断定できる木製品が3点ある。内2点を写真に示した。いずれも直弓の部類に入ると思われるが、作りの上で二大別される。写真図版第57Aの2と、写真にのせなかった別の1例は、内側を平らに削り、さらに浅く幅を通している。写真図版第57Bの5は、その弓弦に近い部分を拡大したものであるが、それによると、幅は、弦の先端から47mmにまで及んでいることが判る。最大幅は25mm、厚みは24mm、現存部分が1049mmである。折損部の内と外を粗く削って筒状に薄く整えており、ここに繁縷した痕跡を残しているが、これは折れた弓を何かに転用したことを示すようである。幅を通した側の反対側、つまり外側だけに黒漆を塗布してある。7世紀中頃のものとして推定される。別冊図版第20-2に示す別の1例は、現存長378mm、幅29mm、厚さ26mm、両端に焦痕を残している。黒漆を全面にかけてあるが、内側の幅の部分から、両側面の中ほどまで、つまり内側半分が、長さ数cmにわたり、やや赤味を帯びている。拵（擬）の部分であろうか。これは奈良時代のものである。この2例は、前者の作がやや劣るけれども、精巧な作品であり、太さからみても長弓の類と思われる。これをI類としておこう。

これに対してII類は、写真図版第57Aの3に示したように、仕上げが粗雑で、不規則に彎曲している。丸木をそのまま利用しているので、断面は径24mmの円形を呈する。写真図版第57Bの4は、その細部である。現存長は1183mmで下部を欠損するが、その後の第9次調査で出土した完形の類品からみて、全長は150cmを大きく上回るものとは思えない。奈良時代末頃と推定される。

以上の他、写真図版第102-16に示したような、先端加工の有縁棒状品が出土している。上記のI類に似ているが、仕上げはそれほどいいわけではない。丸木弓の断片かも知れない。

**鐏矢?**（写真図版第99A-3） 那の一端を鋭り落したような形の小型木製品で、横断面に径7.5mmの円孔を穿っている。円頭の直径は20.5mmであるから、ある種の鐏に類似する。別に小孔を穿っていないので、鳴鏑とはいえないようである。あるいは鐏と決めるのは尚早といふべきか。奈良時代。

**短甲状木製品**（写真図版第1、第2、第58A） カラー写真図版第1を第1号、同図版第2を第2号とする。材質は東京国立科学博物館の山内文氏の鑑定により、いずれも「ヤナギ」であることが判明している。

第1号は、細かに割れているが、写真のように繋ぐことができる。その結果上端部が、腐蝕のため欠失してい

ること、左端が埋没時点ですでに折れていたことが判る。上端部は薄くなっており、同心円文の上端で8mmであるが、他の部分ではほぼ同じ厚さで18mm前後を計る。ただ右端は、片刃のようにそぎ落しており、下端部は、段をつけて削ってある。縦位の断面は、中央やや下部寄りを頂点としてゆるやかな甲高とし、横位の断面は、左側に向うほど曲率を大きくしてある。表面に彫刻文が刻まれている。上端近くに5重の同心円文、その下に4条の第1平行文帯、その下に三角形を4つ合わせた単位文を横に連ねた三角繫文帯、そして第2平行文帯、第2三角繫文帯、第3平行文帯と続き、無文帯を置いてさらに第4平行文帯、第3三角繫文帯、2条の第5平行文帯、第4三角繫文帯を経て、1条の横線で終る。また各所に大小の円孔があり、その大半は虫喰孔と推定されるが、その内第1三角繫文帯の右端と、第5平行文帯の右端の2孔は、人工の貫通孔であり、孔の周辺に磨耗痕がみられる。表面全面にわたり赤色顔料を塗布してあるが、これは東京国立文化財研究所の江本義理氏の分析によって、酸化鉄を主成分とするいわゆる丹であることが判明している。さらに同心円文、第2平行文帯、無文帯、左上の縁部には黒漆がかけられており、右端にもそれらしい痕跡がある。

これを、防具の胸当てと推定するのは、左上の切り込みの形と横断面の曲率の具合、さらに縦断面にみる甲高の状態や上下2つの貫通孔などが、前綴しの短甲とみた場合に、もっとも合理的に理解し得るものであるからである。これを体につけるとすれば、右前胸に該当するであろう。天地34cm、最大現存幅21cmという大きさである。

第2号は、向って右側が欠損しているが、他はほとんど無痕である。第1号と同様、各所に円孔がみられるが、それらはほとんど虫喰もしくは葉の根のいたずらであって、人工と断定できるものはない。ただ上位渦巻文の右側に見える1孔は人工らしく思える。第2号の彫刻文は一層複雑である。

まず余体の形は、横断面に曲率をもつ、天地39cm、幅15.5cmの蒲鉾形をした板に、その上端より上へ突出し、さらに下方へ斜く反り返った羽根状の板を取り付けたような外見を呈しているが、すべて一木から彫り出したものである。文様は、本体の表面全体から羽根状部分の上端突出部の裏面に及ぶ。その突出部には縦位に2条の隆帯が垂下し、その左右に羽状文が施されている。その下の羽根状部分には上下に連続する渦巻文（あるいは蕨手文）を配し、これを重四角文帯で囲んでいる。本体部分には、3条の平行文帯、同心円文、3条の平行文帯、羽状文、平行文帯を経て、三角文を上下に連ねた鋸歯状文帯と三角繫文帯を2帯配して終る。突出部の裏面には、表から続く縦位の隆帯とこれにそわせて4～5条の弧線文を配し、3条の横位平行文帯で終る。丹は表のほぼ全面と、裏面の突出部分だけに塗布されている。丹の施されていないのは、渦巻文の上位渦巻部分を除く部分と、左端から下端にかけての部分である。また、羽根状部分の縁と下辺、上位の渦巻部、それに本体部分上位の同心円文には、黒漆がかけられている。

これを背当てとしたこと理由は、本体部分が、上端ではほぼ平らに、下端に行くに従い曲率を大きくしていること、写真図版第58Aに示すごとく、左端上辺に近く切り込みがあること他に、左端斜り込みから右端にかけては、薄くそぎ落されて、小孔が連続しており、ここで胸当てとの緩い合せをしていたらしいことなどをあげることができる。以上は、弥生時代後期前半の顕著な遺品である。

**連鐙**（写真図版第58B） 径13cm前後、長さ30cm余の丸木材の一方を細く削り、上端近くに25×15mmの方孔を穿って鎧の通し孔としている。他は柄杓状に削って、幅119mm、奥行95mmの踏込を彫り込んでいる。こうして、天地315mm、左右幅134mm、前後幅121mmの巻鐙に仕上げたものである。金具が全く使われていないこと、鎧の通し孔が左右方向に貫通すること、それにこの通し孔の上縁付近がかなり磨耗していることなどに注目しておく。大溝内の6世紀代の堆積層から検出されている。

**釧**（写真図版第99-11.15、別冊図版第27-6） 方形の双孔を穿ち、孔に近く幅2～3cmの切り込みを入れた角形の木製品が2例ある。14は古墳時代、15は奈良時代のものであるが、両者は互いによく似ている。これは鞍轡と考えられないだろうか。二つ並ぶ切り込みに居木をはめ込み、双孔に紐を通して居木を固定するとすれば、全体の形が、まさに鞍にふさわしいように思われる。これを鞍轡とすると確に当るが、それでは全体の形が磯らし

くない。それに海との固定の方法も疑問である。そこで、海と磯の区別のない荷鞍と呼ばれる鞍を想定することができるし、あるいは、牛の鞍とみることも可能ではなからうか。(向坂)

#### 第6節 呪術祭祀用具

祭祀遺物と考えられるものには、材質別に石製・土製・木製がある。石製品はいわゆる滑石製模造品で、勾玉・剣形・白玉・双孔円板が検出されていて、全て5世紀後半代に位置づけられている。土製品には埴形を主体とする5世紀代の手捏土器群と、壺・埴・盤・玉などを表現した律令制時代の遺物群がある。その他9世紀前半頃に比定されている人面墨画土器が1点検出されている。木製品では、水鳥を表現したと考えられる木片と剣形を表現したと思われる丹彩の木片や、人形・馬形・舟形・蕭串を主体とする形代群が検出されている。このほか、「急々如律令」と記された第39号木簡、「若狭マ小刀自女所有」と記された第61号木簡や、鞍馬なども広義での祭祀遺物として扱うことができるであろう。このうち今回報告する人形等木製形代類は、手捏土器群とともに律令制時代の地方祭祀の在り方を示すものとして注目される遺物である。

人形 短冊形の薄板を切りぬいて、人の正面の全身像を表現したものである。首部は両側辺を斜に切り欠いて表現し、手部は下方からの切り込みを入れている。脚部は下辺の2方向から斜に切り込みを入れて三角形に切り欠いている。顔面を墨画で表現したものと、何ら表現のないものがある。頭頂部は円形に表現したものと圭頭状に表現したものがある。また平頭といえるものも含まれている。首の表現には、顔の側辺上方から大きくL字形に切り欠いて怒り肩をなすものと、顎を表現したかのようにく字形に切り欠いて撫肩をなすものがある。顔を描いたものは5点あるがこのうち別冊図版21-5は、歯をむき出した憤怒相を呈し、衣をまとい合掌しているように表現されている。背面には墨書があり「敷可」と読めそうだが意味はとれない。21-6は後頭部に頭髮の表現のある珍しい例である。

人形には3種類あって(奈天明1975)大略年代変化が認められているようである。伊場例は全てA類に属し、B類、C類は検出されていない。A類は3種に細分されているので、これに基づいて伊場例を若干検討してみたい。脚部の切り込み方と、首部のつくり方を分類の基準として3種に分けられているので、ここでは、頭部の首部・脚部の形を数字で表わして表第4にしてみた。まず頭部欠損品を0・円頭を1・平頭を2・圭頭を3とす

写真図版番号	頭・首・脚	出土層位	写真図版番号	頭・首・脚	出土層位
51A-2	1・2・0	V <sub>2</sub>	61A-1	0・1'・0	V <sub>4</sub>
3	1・2・0	V <sub>2</sub>	2	1・2・0	IV
4	3・0・0	IV	3	1・2・0	V <sub>2</sub>
5	3・1・0	IV	4	3・1・0	IV
60A-1	1・2・2	V	5	3・2・0	V
2	1・2・2	V	6	0・0・2	IV
3	1・2・2	V	7	0・0・2	IV
4	3・1・1	IV	その他1	1・2・0	V <sub>2</sub>
5	3・2・2	V	2	1・2・0	V <sub>2</sub>
6	2・2・1	IV	3	2・2・2	IV
7	2・2・1	IV	計 23点		
8	0・2・2	V			
9	3・2・1	V			

頭部欠損0・円頭1・平頭2・圭頭3・怒り肩1・撫で肩2

脚部欠損0・折り取り1・切り取り2

表第4 人形型式分類表

る。首部を斜めL字形に欠き廻り肩をなすものを1・く字形に切り欠いて臺で肩をなすものを2とする。肩部が欠損するものを0、下辺の2方向から切り込んで中央部で折り取るものを1、切り取るものを2とそれぞれに分けることにする。つまり円頭臺で肩で股の中央部で折ったものは1・2・1と表現するわけである。完存例もしくは全形がうかがえるものは9点ある。その内1・2・2形3点がV層にみられるほか、2・2・1形2点がIV層に属している。また1・2・0形4点がV<sub>2</sub>層およびV<sub>3</sub>層にある点もみのがせない。次に各部位毎に出土層位を検討してみると、肩部・脚部では時代別の特徴は認められず、各時代に分布している。ところが頭部にはやや偏りが認められた。円頭はほぼ全時代に認められているが奈良時代的とも言えようである。平頭は平安時代のみ認められている。主頭は平安時代及び奈良時代後半に集中している。23点のしかも全形が不明なものを含めての分類であるので断断は許されないだろうから、今後の資料増加をまって再検討してみたいと思う。また、大型化するの新しい傾向という指摘があるが、写真図版第61A-1は現存長183.5mmで最も大型となる例である。しかしこの場合V<sub>4</sub>もしくはV<sub>5</sub>層と記録されていて、V層の廻り残し部分から検出されたとしても、V<sub>3</sub>層まで下らないであろうから、7世紀後半か、8世紀初頭頃に位置づけられるものである。また写真図版第59A-5は、現存長46.5mmと出土例中最小であるが平安時代に比定される例である。以上のように、伊場遺跡例では大小の差に年代差は認められないようである。

その他畜半に属するものに顔を墨で表現した例がある(別冊図版第21-14)。類例は第11次調査でも1例検出されている。また舟形にも目を表現した1例(写真図版第69A-1)が認められていて、共に擬人化された例として注意しておきたい。

**馬形** 短冊形の薄板を台形もしくは菱形に切り落したものを基本形にして、上辺に1ヶ所下辺に2ヶ所切り込みを入れたものである。当初、雲形板などと称していたが、墨で目を描いたものが出土して馬形と判明した。計11点検出されていて、尾が上を向く例と、尾が下を向く例とが認められている。平安時代とされる例はなく、2例ほど7世紀代に遡るほかは全て奈良時代に比定される。尾の上下も年代差と結びつかない。腹部に切り込みを入れた例があるほか、切り込みの中に細棒片が残存のものがあるので、細棒等に差して立てられたものであろう。別冊図版第21-16は現在伊場遺跡出土例中最古の資料で、目を墨書した痕跡が認められる。別冊図版第21-15および17にも墨痕を認めることができる。とくに21-15には胴部に丹による波文が描かれていたほか、手綱と思われる線が表現されている。確認した11点は、いずれも鞍や三鬘などの表現を欠いた裸馬ばかりである。

**絵馬** 薄板に牛か馬を墨書したもので、計6点検出されている。板に人面を描いたものまで人形と呼ぶならば、これらは牛形あるいは馬形と呼ぶべきかもしれない。

絵馬第1号(別冊図版第21-18)は、第3次調査の出土品で、曲物側板に墨痕の存することは分っていたが、確認は遅れた。頭頂部から角まで墨痕が認められ、他は墨が欠落していて痕跡がややもろあがって認められる。角と耳の形状から牛を描いたものと認めた。また尾が馬と異なっていて、垂下している様子が一本線で描かれている。大溝OA地点の出土で、剱、契などと近接して出土していて、9世紀後半頃の遺例と考えられる。曲物側板を転用したもので裏面に刻線が多数認められる。上部の円孔には、懸垂させる為の紐があったと思われる痕跡がわずかに認められる。

絵馬第2号(別冊図版第21-20)は、曲物側板断片の中から見つけたもので、発掘時の傷がめだつ。墨は全て欠落していて痕跡だけが認められるが、下半身しかたどれなかった。後足には蹄が表現されているので、馬を描いたことがわかる。頭部には縦線が一本認められるが、何を表現したものか理解できない。イ3区IV層の出土であるから、絵馬第1号と非常に近くから出土したことになり、かつ技法がかなり似ているので、同時に牛と馬とが描かれたものと考えられる。

絵馬第3号(別冊図版第21-21)は、絵馬第5号が発見されてから、それまで雑片として処理されていた中から確認したものである。上半分が欠損している。墨痕が欠落し痕跡をたどることができた。蹄および尾の表現から馬であることがわかる。板目板を用いている。ロ6区IV層の出土で、9世紀後半代に比定できる。

絵馬第4号(別冊図版第21-a)は、毛並を雄大に描いたもので、垂下する尾と、角らしい鼻痕から牛を表現したものである。I2区V層出土で8世紀後半ないし9世紀前半代に比定される。

絵馬第5号(別冊図版第21-a)は、馬の姿を写実的かつ軽妙に描いたもので、手練れた筆づかいとみえる。背から臀部へかけてと、眉間から喉にかけては一筆で一気にはきき出している。体部には赤色顔料を用いて、波形が描かれたようであるが、薄くて詳細がわからない。A15区V層出土で、8世紀後半代から9世紀初頭頃に比定される。

絵馬第6号(別冊図版第21-a)は、墨が全く消えているが墨の痕が隆起していて馬の形状をたどることができる。飾り馬を表現したもので、頭絡・手綱・鞍橋・鞍巻・障泥が描かれている。また胸繫・尻繫へつづく革紐の表現も認められるが、鍔は描かれていない。鞍はいわゆる後輪傾斜鞍を表現しているらしいが、鞍坪の部分は丁度割れ目にあたっていて、痕跡をたどれない。第5号同様測歩している線子がかかなり軽妙に描かれている。枝溝3区V層出土で一応8世紀中葉に比定されるが、この部分は検討を要する層位である。

舟形 角材もしくは半截の丸木の両端を尖らせて舟を形づくったもので、船首・船尾の区別は認められないが、船楯を示すように、両端に刻みを入れ、刻みと刻みの間を削っているのが特徴である。形態にきわだった特徴は認めがたく、底部で分類すると丸底を呈するもの(別冊図版第22-1-a), 平底を呈するもの(別冊図版第22-11~23-1-a), 底部の両側辺を削り込んで、丸底と平底の中間形態を呈するもの(別冊図版第22-1-a)の大略3種に分けることが可能のようである。船楯の形にもいくつか認められていて、両端に刻みを入れただけでほとんど彫らないもの(別冊図版第22-2, 12, 13, 15), 刻みもなく平らなもの(別冊図版第22-1・23-a), 両舷方向から斜めに削り込んで三角形の船楯を呈するもの(別冊図版第22-4-a, 9, 11・22-2, 4, 6-a), 平底に削り箱形を呈するもの(別冊図版第22-1・23-1, 3, 5, 9)などに分けられる。このほか船首・船尾を平らにするものや、側舷や船底に円孔を有するものなどが認められている。このうち写真図版第74B-6では円孔に薄片が残存していて、馬形同様に細棒に差し立てられたものであったことが推定される。側舷に円孔が各2つつある別冊図版第22-6などは、あるいはカヌーのようなものを表現したものであろうか。このほか写真図版第64A-1のように一見丸木舟かと思われる形態を示すものや、同じく第64A-2のように明らかに構造船を表現したと思われるものが認められている。写真図版第68B-4のように船首に目を、両舷に波形を墨書した珍しい例も含まれている。

舟形は計64点検出されている。このうち58点について出土層位を検討してみると、IV層14点、V層32点、V<sub>2</sub>層7点、V<sub>3</sub>層3点、VII層2点となり、奈良時代後半から平安時代にかけての期間に46点が含まれることが分る。

齋串 遺物台帳に齋串と記録されたものは、総数で167点を数えることができる。しかしの中には木簡材と考えられるものも含まれていて、その実数が正確に掌握できかねるのが実情である。齋串は薄板を剥ぎ取って圭頭にし、下端を尖らせるのが通例である。しかし木簡第61号のように平頭を呈するものがあるほか、圭頭で下端を尖らせて、齋串状を呈する木簡第10号や77号なども認められている。平頭で下端を尖らせた木簡は77点中8点含まれているほか、下端を尖らせた木簡は上記の他7点あって、かなりの頻度で齋串状の薄板が木簡材と同巧であることが理解されるわけである。一般に齋串は板を剥ぎとった後、そのままの面を利用していると言われている。つまり表面を削り込んで整形してないと言われているが、明白に表面を削り込んだ齋串も多く確認されているため、ワリ面かケズリ面かということでも木簡との区別は困難と思われる。ただ一般的傾向として、ワリ面のままの齋串が多いほか、ケズリ面であっても、表面の何パーセントかはワリ面を残すものが多いようである。

齋串と認められるものは、圭頭で下端を尖らせたもののほか、平頭で下端を尖らせたもの2種があり、側面に1回〜数回切り込みを入れたのと、切り込みの無いものが検出されているほか、縦二つ削りになるよう切り込みを入れた例がある。これらについては、黒崎氏による分類がある(奈文研1975・黒崎1977)、黒崎分類ではA〜Fの6種に分けられている。簡単に紹介してみたい。

齋串A: 上端部を圭頭につくり、切り掛けを施さない。

齋串B: 齋串Aの側面上部または肩部に1対の切り掛けを施す。

齋串C：側辺上方に2対の切り掛けを施す。

齋串D：側辺に4対以上の切り掛けを施す。

齋串E：両側辺の対称位置にV字形の切り欠きを施す。

齋串F：丸棒・角棒の接に2～3箇所切り掛けを施す。

これらA～Fのうち、齋串A<sub>2</sub>とした肩部を斜めに切り落した例や、齋串Eで切り欠きを数回施す例及び齋串Fの3種数は確認されていない。上述のように伊場遺跡例では平頭を呈する齋串が認められているので、黒崎分類に準じて伊場遺跡例を分類してみると、A～Eの5種類に分けられた。これに切り掛けの回数 considering して細分してみたい。

齋串A：黒崎分類Aと同じで、走頭を呈し側辺に切り掛けを施さないもの。

齋串B：齋串Aの側辺に、上方向からのみ切り掛けを施すものをいう。黒崎分類Bに相応するが、切り掛け1対・2対・3対・3対以上をそれぞれ齋串B<sub>1</sub>～齋串B<sub>4</sub>とする。

齋串C：齋串Aの側辺に、上方向からと下方向からの切り掛けを交互に施すものをいう。齋串C<sub>1</sub>は上下各1対、齋串C<sub>2</sub>は上下上と3対、齋串C<sub>3</sub>は上下上下と4対、齋串C<sub>4</sub>は齋串C<sub>3</sub>の下部になお数回上方向からの切り掛けをほどこすものなどに細分する。黒崎分類のDに相応する。

分類別	出土層位	IV	V <sub>1</sub>	V <sub>2</sub>	V <sub>3</sub>	Ⅵ	不明	合計
齋串A			3	19	1			23
齋串B	(細分不可)	3	5					8
	B <sub>1</sub>		1	1		1		3
	B <sub>2</sub>	8	11	1	2			22
	B <sub>3</sub>		1	1			1	3
	B <sub>4</sub>		1					1
	小計	11	19	3	2	1	1	37
齋串C	(細分不可)	1						1
	C <sub>1</sub>		1					1
	C <sub>2</sub>		5					5
	C <sub>3</sub>		4					4
	C <sub>4</sub>		1					1
	小計	1	11					12
齋串D	D <sub>1</sub>							
	D <sub>2</sub>		1					1
	D <sub>3</sub>		1					1
	小計		2					2
齋串E	E <sub>1</sub>	1	2			1		4
	E <sub>2</sub>		1					1
	E <sub>3</sub>			1	1			1
	小計	1	3	1	1			6
合計		13	38	23	3	2	1	80

表第5 齋串分類別頻度表

斎串 D: 主頭を呈し側辺の上部を切り欠くものをいう。そのうち斎串 D<sub>1</sub> は切り掛けを施さないもの、斎串 D<sub>2</sub> は 1 対の切り欠きの下部に上方向から切り掛けを数回施すもので、斎串 D<sub>2</sub> は切り欠きの下部に上方向からと下方向から切り掛けを施すもの。黒崎分類の E に対応する。

斎串 E: 平頭を呈するものをいう。黒崎分類では類別に加えられていない。斎串 E<sub>1</sub> は切り掛けないもの、斎串 E<sub>2</sub> は上方向から切り掛けを施すもの、斎串 E<sub>3</sub> は下方向から切り掛けを施すものをいう。

以上の観点にたつて 167 点のうち、上端部の欠損がなく分類可能な 80 点について分類を試みた(表第 5)。その結果斎串 A 23 点、斎串 B 37 点、斎串 C 12 点、斎串 D 2 点、斎串 E 6 点とに分けられた。斎串 A は小型で、表面をていねいに削り込んだものが多い。特に OA 地点 NT 301 内およびその周辺で集中して検出された。一括して V<sub>2</sub> 層もしくは V<sub>3</sub> 層に比定される。斎串 B のみが各層位を通じて検出されたことが分る。斎串 C<sub>1</sub> は(別冊図版第 24-1-a) 下端部に切り掛けを施した唯一例である。また他の斎串 C には最も長大化するグループ(別冊図版第 24-1-a) と、表裏に八字を連続して墨書したグループ(別冊図版第 24-1-a) とが認められていて、ともに V<sub>1</sub> 層から出土している。また両グループとも縦に割り込みを入れるという共通点が認められる。前者は OF 地点で一括して検出されたほか、後者墨痕のあるグループは OE 地点で一括されていた。斎串 D<sub>1</sub> で切り欠きを数回施す例は検出されていない。一対だけ切り欠いたものは、写真図版第 82 B の中にいくつか含まれていると思われるが、木簡材あるいは曲物の側板と区別がつかないので注意しておくだけに止めていた。また写真図版第 100 B-8~14、別冊図版第 26-22~25 に示したものは、形態上は木簡状を呈しているが、長さは 80mm 前後と小型で、墨書できるだけの表面積がないように思える点や、OF 地点に集中していた点などから平頭であるが、斎串 D<sub>1</sub> の範疇に含めるか、あるいは他の形代としたいかかがであろうか。斎串 E<sub>1</sub> は木簡材と区別が特につきにくい、別冊図版第 25-21 は斎串 C<sub>2</sub>・C<sub>3</sub> と同様な割り込みが頭部に施されているので、斎串 E<sub>1</sub> としたわけである。

これら斎串について、神宮仕出佐野主水氏より、「豊受皇太神宮年中行事今式巻五」所載の「鉢」であるとの教示をいただいた。このことについて充分に検討を加えられなかったが、参考にして謝意を表したい。

出土層位の比定であるが、第 3 次調査出土品について、第 1 章では V 層を IV 層に呼びかえたと記した。しかし大溝縁の場合は単純ではない。斎串 A で B16 c 区からの出土品は大半が NT 301 内および NT 301 の周辺から出土したものであって、IV 層および V<sub>1</sub> 層の及ばない地域である。「遺構編」P99 表第 6 では NT 301 を V 層の中心でもその下層(V<sub>3</sub> 層?)として表示してあるが、「遺構編」P94 別冊図版 40 に合わせて、B16 c-V と記したものは V<sub>2</sub> 層として分類してみた。その結果斎串 A は大半が V 層内に含まれていて、いわゆる「ケズリカケの風串」というものになると V<sub>1</sub> 層か IV 層に集中していることがわかった。そして先の斎串 A を V<sub>2</sub> 層に比定したことが間違いでなければ、長大化するものが新しい傾向であるとともに、切り掛けが複雑化するのも新しい傾向といえそうである。

**鳥形** 写真図版第 61 B-8 は吻と胴上部を欠損するため、鳥形と断定しがたいが、頭部の形状が水鳥を表現したと思われる。ハ 6 区 VII b c 層からの出土で古墳時代後期に位置づけられる。律令時代の形代類とは異なり弥生時代以来の伝統を継ぐ広義の祭祀遺物と考えられる。

**剣形** 別冊図版第 29-28 は、長さ 147mm で先端部を尖らせ、断面を両丸造りにした細帯である。類例が 1 例あって(写真図版第 61 B-a) はほぼ同形同巧を呈している。別冊図版第 29-28 には丹が施してあったと思われる痕跡があって、祭祀具の一つかと考えた。両者とも 8 世紀後半代か 9 世紀初頭に位置づけられるものである。

**刀形** 写真図版第 100 B-7 は先端部を欠損しているため断定はできないが、刀身と思われる横断面が長三角形を呈する部分と、茎と思われる部分とが作り出されている。一応刀形とした。もしそうならば頭椎大刀の形代とみたいところだが、考えすぎだろうか。出土層位も VII 層であり、頭椎大刀が古墳に副葬される年代と矛盾はしない。

以上形代と称される木製品を概観した。舟形・鳥形類は弥生時代に既にその遺例が認められているが、多くは 6 世紀代以降に現われるようである。伊場遺跡における祭祀のあり方を木製品だけで見ると、人形・馬形・

舟形・高身の4点がセットをなしていたようである。これらがセットをなす祭祀の形態はV<sub>4</sub>層にすでに認められていて、A16a区で一括資料が検出されている。しかし中心をなす時期はV<sub>1</sub>層とした8世紀後半代で9世紀前半まで盛んに行なわれていたことが窺える。このことについては単に伊場遺跡だけの事ではなく、岡山県下市瀬遺跡(新東第一他1974)でも同様なセットをなす祭祀が行なわれていたようである。今後類似の出土をもって再検討してみたいものである。(川江)

## 第7節 その他の木製品

以上の分類に含め得ない遺物若干と用途不明の遺物を一括してここで取り上げる。ほぼ写真図版の番号の順に従い記述を進めよう。

**割抜材**(写真図版第54A-<sub>1</sub>) 長さ103cmの丸木を二ツ割にし、割抜いたものである。それだけならば槽として割物に含めるのであるが、2つの円孔を穿っており、容器の役目を果たさない。あるいは、槽であったものを産物利用し、裏返して次項の洗濯板と同様、杭で固定したのもだったかも知れない。

**洗濯板**(写真図版第54B-<sub>1</sub>) 長さ154cm、幅7cm、厚さ7cmの板に、心々で70cmの間隔に方孔をあけ、ここに断面方形の杭を打ち込み、杭で固定したものである。大溝OG地点杭列NF9の階段状施設の一部である。この施設については、『伊場遺跡遺構編』(1977年)を参照されたい。この板はていねいに固定されていた点と、板の表面がかなり磨耗していた点から、洗濯板と推定しているものである。

**塗漆状木製品**(写真図版第88B-<sub>1a, 11</sub>) 長さが、10で250mm、11で262mmとはほぼ同大で、三日月形のくり込みを平行して入れることによって、片手で把み得るほどの把手を作出している。写真の裏面(こちらがむしろ表面か)は、甲丸状に仕上げられてあり、磨耗痕が顕著である。塗漆に迷いないであろうが、どういふ場面で使われたか不明のため、ここに含められたものである。

**有種十字形木製品**(写真図版第91・92A) 丸木材を縦に半割して、平らな面には中央部を残して長軸方向に樋を通し、反対の甲丸の面には両端に滑り止めのような切り込みを入れている。写真図版第91の完形品と、第92A-1・2の場合には、中央に一孔を穿っており、2本を合せて十字形に組み、木製の目釘で固定したものである。この点からみて、第92A-3・4は、未成品としてよいであろう。長さはいずれも30cm未満である。V層出土であるから奈良時代のものといえる。用途不明。

**有種角形木製品**(写真図版第92B) 有種十字形木製品と一端の作りが似ているが、他端は片方へ反って先端を薄くしているのは、基本的な相違点である。V層下位出土。奈良時代。用途不明。

**枘材**(写真図版第93-1-<sub>11</sub>) 細目のていねいな作りの枘材を集めた。1は断面方形に近く、4のようなものの部品らしい。3は枘材かも知れないので、第3節の容器の項で取り上げた。2・5~7は、断面が細長い楕円形を呈する例である。8~11は、枘の部分に円孔が貫通している。また8と9には長軸に沿って小孔があげられている。これは長さを調節するための配慮であろうか。10にも左端に小孔が残っている。以上の3を除く10例は、織機の部品らしく思えるのであるが、確信がない。

**有孔板**(写真図版第93B・第94・第95B-<sub>7</sub>) 広狭、厚薄、長短、さまざまな板材で孔をあけたものをまとめた。写真図版第93B-12~18と第94A-1~11は、細長いていねいな作りのものであるが、形や大きさ、それに孔の形や数まで、ひとつひとつ皆違うので、用途もまたそれぞれ異ったものに違いない。この内写真図版第93B-16は、箱板として第3節で取り上げた。

写真図版第95B-6・8・9と第96は、長方形のやや厚い板に1~2ヶ所の方孔を穿ったものである。この内第95B-7は、柄板として奥具の類で取り上げた。第96は、長方形板の両端近くに長方孔をあけている点で、共通性がある。これはあるいは、枘板と組み合わせて箱形を作ったものかも知れない。

写真図版第97は、長方形・円形・三日月形・車塔形などから成り、孔のあけ方も一様でない。この内12は、山物の転用である。

以上の他写真図版第98A-4は、大きな円孔を穿った厚板で、この円孔の上下に直交する方孔もあけられている。建築材の一部であろうか。写真図版第99A-4・8も、小型の有孔板である。この内4の円孔は、挿入材が回転したものでらしく、円孔がかなり磨減している。

**把手付板**（写真図版第95A-4、8）長方形の板に把手のつくもので、把手の形が不整形である。用途不明。

**加工厚板**（写真図版第98A-1、3、別冊図版第20-4・第27-1、2）写真図版第98-1（別冊図版第20-4）は、一方にくびれを作ったもので確板らしく思える。2・3（別冊図版第27-1、2）は、それぞれ切り込みを入れた厚板で、用途不明である。

**小型加工品**（写真図版第99）1は一端を尖がらし、切り込みを入れた断面円形の棒状、2は鐮突？で武器として第5節で取り上げたもの、3は2と似た作りだが、先端を尖がらしたもの、4と8は有孔板として取り上げたもの、5は方孔部で折れており、先端に叩いた痕があるもの、6は浮子として漁具の項で取り上げたもの、7は棒皮の日釘や縄紐の残る小型の部品である。9・10・14・15は別項でそれぞれ取り上げた。11は、長さ246mmで、長軸に轆を通したもの。12は断面円形で長軸に直交する磨耗痕が顕著である。何かの回転軸らしい。13は円孔をあげた棒状のものである。

**木簡状板材**（写真図版第101A）一端または両端にくびれを作ったもの（1~4）と、一端を尖がらしたもの（5~7）とがある。両面をきれいに削った木簡材のようなものもある。文字の消えた木簡が含まれているかも知れない。同様の例は、写真図版第103Bにも含まれている。

**先端加工材**（写真図版第101B・102A）先端に加工を施したものをまとめた。写真図版第101B-8~11は、農具の内代扱としたものの歯であり、別項で取り上げたが、12・13はそれとは違うようである。写真図版第102Aの例は、先端を両面から削って薄くしたものが主体で、その多くは楔ではなからうか。

**尖頭棒**（写真図版第102B・103A）先端を尖らした棒状品を一括する。写真図版第102Bにはやや太いもの、第103Aには細身のものをまとめた。この内第102Bの16は、第5節で取り上げたように丸木弓の転用と思われる。

**尖頭細板**（写真図版第103B）これらはいずれも上部（写真の左側）を欠損している。両面をていねいに削ったものもあり、割面をそのまま残しているものもある。前者は木簡であった可能性があり、後者は畜車の下端部分とも思われる。

**有頭棒**（写真図版第104）丸木の棒の先に、くびれを入れて頭部を作り出したものを一括した。この内写真図版第104B-14は、弥生時代のもので、登呂遺跡等から出土例の多い凸字形品と呼ばれるものと同様の遺品であろう。

以上の他、写真図版第105Aには、轆を入れたもの（1）、棒状のもの（2）、棒状のもの（3）、五角形の尖頭板（4）、有刺棒（5）、有刺棒（6・7）などを収めた。

**束・紐**（写真図版第105B）写真図版第105Bは、木を薄く削って束ねたものの出土状態である。長さ約40cm。他にマツを削って束ねそれを縄状に撻り合せたものがある。（内訳）

## 第4章 出土木製品調査結果のまとめ

第1章において記述されているとおり、当初の計画では、出土資料全部について詳細な記録カードもしくは実測図を作り、その中から報告書に登載すべき資料を選び出す手順であったが、整理実測の期間と人手が充分とれなかったため、実測図は別冊図版収載の約350点分しか公表できなかった。改善の策として写真提示に堪える資料を別に350点ほど選び、それらの出土地点・層位・最大法量・簡単な特徴等を本文末尾に表示することにしたので、写真図版には、実測図収載分を含めて、約700点の写真を含んでいる。

しかし、木製品・竹製品の総点数は約1300点あるので、今後引き続き実測作業を継続し、まとまった時点で公表するという方針である。それにしても、今回の報告書によって伊場遺跡出土木製品・竹製品の内容は、大略明らかにできたと考える。以下調査の結果注目すべき点について若干のまとめをしておこう。

		200 A D		500	600	700		800	
		赤	生	古 墳 時 代		奈 良 時 代		平 安 時 代	
		D	層	Ⅶ 層	Ⅶ b・c	Ⅶ a	Ⅵ・Ⅴ <sub>a</sub>	Ⅴ <sub>a</sub> ・Ⅴ <sub>b</sub>	Ⅴ <sub>1</sub>
勞 働 用 具	農 具	鋤 大 田 代 柄 下 鎌 件	先 足 駄 鎌 振						
	漁 具	釜 煮 煎 あ か	・ (帆) 網 か か き						(帆)
	運 搬 具	背 負 子							
	編 織 具	碇 編 織 編 織 編 織	合 I II III IV						
	機 織 具	部 品 各 種							
生 活 用 具	工 具	刀	子						
	厨 房 具	小 須 案 火 箸 鐵	臼						
	客 器	曲 物 曲 物 割 換	I・II III・IV 物 物						
武 器・武 具 お よ び 局 具	其 他	横 下	櫛 狀						
		丸 短 弓 甲 狀 木 製 品 垂 袋	櫛 狀						
呪 術 祭 祀 用 具	(形 代 類)	人 馬 絵 舟 斎 齋 齋 齋 齋 鳥 劍	形 形 馬 形 A B C D E 形 形						
				刀 形					劍 形

(注) 資料取り上げ台帳に単にⅦ層とあるのはⅦaに、Ⅴ層とあるのはⅤ<sub>1</sub>に含めた。

表第6 主要遺物年代別編成

## A. 遺物の年代別編成

伊場遺跡の弥生時代木製品は、短甲状木製品2点、杵1点、鋤先(鋤先)2点、挽物盤1点、木杭類若干と、その数はきわめて少ない。いずれも東部地区の弥生時代環濠の下底面から出土したものである。

総点数約1300点に及ぶ木製品・竹製品のほとんどは、西部地区の大溝・枝溝の中に埋没していたものであり、年代的には、古墳時代後期(6世紀)から平安時代後期(11世紀)までのものを含んでいるが、奈良時代のものを中心にして、8～9世紀代の資料がもっとも多く、7世紀代のものがこれに次ぐ。

第1章で述べられているように、遺物整理、特に土器の整理ができていないので、層位と土器による層年との対比、さらには実年代の比定などについては、今後修正の必要性が出てくるかも知れないが、遺物に記された出土層位をそのまま生かしてみると、遺物の年代別編成は次のようになる。

古墳時代後期に編年される資料は、砦が1例層出土となっていて、6世紀前葉までさかのぼる可能性があるが、大部分は6世紀中葉以降のものである。その内Ⅳ層下半部に包含されていた遺物は、6世紀中葉から7世紀前葉までの年代と推定されるが、次のような種類がある。鋤先・柄振・背負子・編合・編錘・引物・火鑽臼・横櫛・下駄・壺・馬形・舟形等が存するが、量的にはまだ多くない。その上層Ⅴ層上半部は、7世紀中頃の堆積と推定しているが、ここからはがぜん出土例数が多くなる。U字形鉄刀をはめた鋤先・柄振・鍬・代掻・背負子・編合・編錘・織機部品・小刀の鞘・円形曲物・引物・横櫛・丸木舟・舟形・畜車等が出土している。

7世紀の後葉を含めて奈良時代とすると、Ⅴ層の最下層→Ⅴ層中下位→Ⅴ層上位というように3段階に分けられる。Ⅴ層最下層は、7世紀後葉の堆積層で、鋤先・股鋤?・大足・鎌・代掻・茶・籠網・背負子・編合・編錘・織機具・曲物・引物・横櫛・梯子・人形・馬形等遺物の種類は網羅されているが、曲物・引物・呪術祭祀用具のようなものはまだその数がごく少ない。これに対して、8世紀前半に比定されるⅤ層中下位からは、曲物の種類や数、人形・馬形・舟形・畜車などが急に増大し、新たに、刀子・挽物盤・鞍馬等が登場する。そして、Ⅴ層上位まではほぼこの状態が続いている。Ⅴ層上位は8世紀後半から9世紀前葉までの堆積と考えられる。

平安時代の9世紀から10世紀までの間、Ⅳ層の堆積が進んだとみられるが、この層に包含される資料は、生活用具としての曲物・箸・挽盤・引物・火鑽臼・臼・漉・釜・下駄と若干の呪術祭祀用具に限られ、他には田下駄や砦がわずかに存するにすぎない。さらに降って11世紀の堆積と推定されるⅢ層からは、わずかな曲物の他は出土例がない。以上の関係を表示すれば表6となる。

## B. 農具・漁具および運搬具について

伊場遺跡出土の鋤先は、弥生時代の1例を除き、いわゆる「ナスビ形着柄鋤」(黒崎1976)もしくはその変形である。中に1点、U字形鉄製刃部を着装したままの出土例がある。本書ではこれを鋤先として報告したが、最近藤枝市潮追跡から、この種の木製品に、設木を利用した別作りの木柄を、つるようなもので固定した例が発見された(鈴木1978)。しかし、弥生時代の鋤と後世の風呂鋤との形態的類似性からして、中間にこの種の「ナスビ形」のものを置いては、系譜的なつながりがむずかしいように思える。潮追跡例のように鋤として使われたことはあっても、なお鋤先としても使われたことを想定しておきたい。写真図版第89・90・9AのようなT字形や、V字形の木柄の存在も、鋤の柄とすることで理解し易いように思う。

大足と柄振は、牛馬によるしろかきが未発達な段階における、しろかきの道具と考えられている(木下1978)。いずれも、弥生時代後期から実例が知られている。ところが、伊場遺跡からは、写真図版第9B～11Aのような木製品が6個体分出土している。民具例では「馬鋤」と呼ばれるものによく似ている。短いものでは中央部に1孔、長いものでは両端と中間部分に合せて4～6孔。歯の挿入方向と直交する貫通孔があげられている。短いものは熊手のようにして人力でも使えるが、長いものはとても人力ではかかない。牛馬に曳かせた代型とするのが、もっとも妥当な解釈である。われわれの同定が正しいとすると、牛馬耕の普及が、平安時代中頃以降とする

通説に反することになる。『令義解』ならびに『令集解』の田令置官田条に「毎二町配牛一頭。其牛令一戸養一頭」とあって、畿内におかれた官田では牛耕の行なわれたことが判る。これは官田であったが故の特殊事情であろうか。伊場遺跡では、平安時代前期の層位から牛を墨で描いた板（絵馬）が2点出土している。牛を板に書くというには、牛がこの地域の人々の間にかなり普及していたことを前提にしなければならないのではなからうか。また写真図版第99-14・15が、牛の鞍だといえるならば、より牛耕の存在を傍証し得るであろう。それはともかく、この種の出土遺物を牛耕用の代馬と推定したことの当否は、当代の生産力の評価にも影響を与えるだけに、今後充分な検討が必要である。

鎌の柄の出土例は、総数で8点を数える。内2点は鉄刃が付いたまま発見された。単に棒状の柄の一端を二つ割にして、刃を挟んだと思われるものも、ここでは鎌の柄と推定したが、多くは刃幅以上の長さの狭い孔をあけて、刃を通したものである。この種の形態がⅦ層の中にも含まれていて、6世紀代にさかのぼり得ることが確実となったことは、注意すべき事実である。

漁具については、釜と瓢の検出が、特記すべき事例であるが、これらについては、すでに別の機会に報ぜられているので、それを参照されたい（八木1973A・1973B）。ここでは、「あかかき」と推定した資料について言及しておく。これをそう推定したのは、やはり民具との比較からであるが、別に糧とするべき資料もある。それらを漁具の一種に含めたのは、この遺跡を水上交通の拠点とは考えないとする立場に基づくためである。

股木を利用し、根元に近い方の端に2段の切り込みを入れたものを、運搬具としての背負子と考えた。その根拠は、分枝点の磨耗痕の存在と、左右の別のあること、朝鮮民具の「テゲ」に類似点が認められることなどであるが、逆に不都合な点もある。それは、磨耗痕の状態からY形でなく入形となって、荷物を乗せるのに不都合なこと、切り込みが枝の方向と平行することから、2本をどう組み合わせるかに問題が残ることなどである。しかし、わが国の民具例にも、荷物かけとして股木を取りつけた例があり（香月1973）、背負子とする考えは捨て難い。この考えが認められるならば、その数の多量からみて、調査団が駅家および郡家に関連するとみている伊場遺跡の性格と大いに結びつく資料であって、物資の運搬に用いられたと想定することができよう。

### C. 編具と機織具について

蓆を編む時に、糸や紐を巻きつけて徐々に延ばし、かつ締めつけの重みをつけるための木製筥が、30個余り出土している。別に細長い板に刻みつけた編台も、同層位から発見されている。中には廃棄された木簡を転用したものさえある。たとえ廃棄されたものとはいえ、木簡を入手できる人は限られた場所の限られた人であったと想像できる。してみると、これらの編具類もまた、遺跡の性格と係りがあるといえるであろう。なお、この種の資料については、民具例を含めて、渡辺誠氏の研究（渡辺1976）がある。伊場遺跡の出土例は、Ⅶ層とⅤ層とで、かなり顕著な型式差があることが判明していることを付記する。

伊場遺跡からは、機織具の部品と考えられるものはいくつか出土している。その中で確実とみられるものは、写真図版第22-1の管大杼、同図版の2の箴、同図版の4・5に示す箴らしきもの、同図版の6に示す布巻具、写真図版第23-4・5の糸巻などである。また、写真図版第22・23に載せるその他の細長い部材も、例えば綜絊を構成する部品のように思える。この内、層位的にみて、ほぼ同年代のものをそろえると、写真図版第22-1・4・6の3点がⅦ層出土で7世紀中頃、同一2・12・14と第23-4・5がⅤ層上位の出土で8世紀末ないし9世紀前葉ということになる。前者の場合には、管大杼が注目すべき資料で、おそらくこの種の最古の実例である。一見して結絊織の地機などに用いられるものに似ているが、長さ830mmと超大型である。1人で操作するのはかなり骨の折れることであろう。写真図版第22の4は、箴と推定してはいるが、竹の節を差し入れるべき極が施してない。糸痕の目も粗い（写真図版第23-1）。あるいは綜絊棒かも知れない。同図版の6は、布巻具らしい。これら3点の長さを比べると、管大杼830mm、箴？現存部655mm、布巻具現存部386mmで、箴？と布巻具に欠損部があるので、とにかく管大杼の830mmを基準にして、織られた布幅を推定できるであろう。そこで管大杼の両

端を両手で持って緯糸を打つとすれば、この長さから 20 cm 前後を差し引く必要があり、布の幅は 60 cm 余りと推定される。

V層上位の出土例では、写真図版第22-2の図が注目される。これも篋の実例としては最古のものではなからうか。糸張のついている範囲は、長さ 646mm であり、その密度は 1 cm に 24 本前後となっている。VII層出土例が産でないとする、VIII層（7世紀中葉）とV層上位（8世紀後葉～9世紀前葉）との間で、織機の構造が違っていた可能性が大きい。

太田英蔵氏（太田1960）によると、古式布機には、管大杵が使われ、篋はまだ使われないが、篋と使われる絹織を経て、布機の段階になると、篋と管大杵が併用されるという。太田氏の記述の中では、古式布機への移行が、古墳時代中期までに終わっているような表現が見られるが、これを引用した小林行雄氏（小林1962）は、5世紀前半での古式布機の使用はまだ推測の範囲を出ないとしている。

浜松市都田町坂上遺跡出土の土製品（向坂1964）の中にも織機部品を模造したと推定できる資料があり、これを取り上げた角山幸洋氏（角山1965）と、岡村吉右衛門氏（岡村1977）は、解釈に若干の相違はみられるものの、刀杼機であるとする点では共通している。この出土品は、6世紀前半と推定されるが、祭祀用具は古式をとどめることが一般的だとし、これをもっと新しく位置づけようとする向もあるようである。伊場遺跡第IV層出土例は、粗い糸張のつく篋？とした部品の解釈によって、古式布機か有筈管大杵機のいずれかということになり、第V層出土例は、絹織もしくは布機と推定される。前者は強いていえば、古式布機ということになるうか。いずれにしても、この地域では7世紀中頃に、管大杵機の使用を確認し得たわけである。これまで布機最古の遺品としては、平安時代と推定される福岡宗象神社例（金銅製雛形）しか知られていなかったのであるから、今後植物発達史を考える上で、きわめて貴重な資料を提供したといえる。

織機具については、もう1点布幅のことを取り上げておこう。管大杵からは 60 cm 余り、篋に残る糸張からは 646mm と推定できるが、いずれにしてもかなり広幅である。令制では「賦役令」に調絹幅は「広二尺二寸」、調布と麻布は「広二尺四寸」と定められている。これが『続日本紀』によると、養老三年五月に調絹幅は「潤一尺九寸」に改められ、調麻の布も天平八年五月に「潤一尺九寸」と改められている。「延喜式」では調絹幅は「広一尺九寸」と変らないが、調布は「広二尺四寸」となっているから、天平八年以後のある時点で、変更があったようである。以上の規定と比較すると、第V層上位（8世紀後葉～9世紀前葉）出土の篋は、同時期の調布の幅と布によく対応するといえよう。

他方管大杵が長さ 830mm で、有効布幅が 60 cm 余りとれる大型のものであることは、これが令制前の出土例だけに特に注目される点である。これは、古墳時代大陸から伝えられた織機が、広幅の布を織る構造であったことに由来し、遠江地方ではその技術が7世紀中葉まで保存されていたと考えると良いのであろうか。あるいは、それをさらに一般化していえば、こうした幅の広い布を織る織機が当時支配的だった故に、調・麻の織布の幅が広く定められていたと解し得るのであろうか。

#### D. 生活用具について

甌と案については、すでに紹介（向坂1971）もあり、『伊場遺跡第3次発掘調査概報』（1971年）にも報告されているので、ここでは特に取り上げないが、写真図版第49・50に示した甌第2号は今回始めて報告する資料である。

曲物の上出点数が多いことは特に注目される。これは、伊場遺跡の性格と関連があると思われる。特に8世紀以降に曲物I類とII類が出現することは見逃がせない。結論的にいえば、その大半は折敷とすべきものと思われるが、これは官衙的な施設にこそ、ふさわしい調度品であろう。写真図版第36Aのように大型楕円形で深い例は、他に1例写真図版第35Bのように井戸（NG1）に転用されていた例があるが、全体の中ではきわめて少ない。一方、I類の曲物には把手をつけた例、1対ずつ小孔を穿てて紐かけとしたらしい例、写真図版第26Aのように明らかに幅の狭い側板をめぐらした例等があり、多くの場合折敷として使われたと推考される。

一方、Ⅲ類とⅣ類の曲物は、ともに早くⅤ層中に現われることから、確実に7世紀中葉の出土例が知られ、それが、円形のものであることが判明した。従来、曲物としては藤原宮跡から出土した例が最古と考えられてきたが、最近岡山県上東遺跡から、円形の板に樟皮が付いたままの例が発見され、曲物として報告された(藤原1977)これは上東式土器と伴出しているから、確実な最古例といえる。作りは本稿のⅢ類に近いが、側板があった部分だけ、部分的に漆を通したもので、「カキイレゾコ」には作ってない。弥生時代の曲物については、小林行雄氏の否定論(小林1967)があるが、上東遺跡出土例は曲物の起源とも関連して注目される。

生活用具の中ではこの他に横櫓の存在が目立つ。Ⅴb・c層に含まれていた例もあるので、6世紀後半までさかのぼり得ることになる。網具・機織具・曲物などと共に、注目すべき資料といえよう。

なお、建築部材と武器武具および壺錘については、すでに報告もあるので、ここでは特に取り上げないが、丸木利用の梯子と、鞍轡と思しき資料は、今回はじめて報告した。

### E. 呪術祭祀用具について

伊場遺跡出土木製品を特徴づけるものの第1は、人形・馬形・舟形・斎串など呪術祭祀用具の存在かも知れない。そしてそれらは、いずれも何かの形を板にうつしとったものであり、鞍馬の場合も、牛馬の姿を板にうつしとったものという意味では、すべてが、形代といえるものである。

土製の馬形については、従来いくつかの論考があって、かなり詳細な研究が行なわれているが、この種の木製品については、類例の乏しさからか、研究はまだ進んでいないようである。

いま、斎串も形代に含めたのは、次の理由による。一時伊勢神宮で神宮をつとめた佐野主水氏が、斎串に類似したものを神宮では、「鉦」と呼んでいることを指摘された。さっそく佐野氏から『神祇全書』第三輯(1907年)を借用し、佐野氏の協力を得て調べてみると、『豊受皇太神宮年中行事今式』に、七月三日の行事として「造御矢風宮物忌参集于鉦炊殿、釀酒造備大鉦三本小鉦九十本……」とあり、その注に大鉦は「長一尺六寸、幅二寸三分許」小鉦は「長七寸許、幅八分許」と記され、いずれも檜板を削って作るとしている。また、『同今式』巻五にのせる明器図には、「風日祈大鉦」と「同小鉦」が図示されており、上下両端を円頭とし、下から上へ向う切り掛けを左側4ヶ所右側3ヶ所に施してある。この大鉦三本は外宮別宮の風宮の扉に、矢二本と櫓の枝二本と共にたてかけ、小鉦九十本は瑞巖門前に、幣や櫓の小枝と共に並べて、竹籬のように地上に押したと書き記されている。これは、羽四日の風日祈神事と関連する行事であったと思われる、風日が豊作物にほどよい影響を与えてくれることを祈る神事であったらしい。

また同上明器図には、伊場遺跡出土斎串Cの型式に酷似し、頭部をへ形に焚った例が、「鉦」として図示されており、細く削った櫓棒を5本許裏で包んで固定し、これに櫓の枝を刺して8本ずつの鉦と幣を立て並べたものも図示し、これを「八頭幣鉦」と呼んでいる。これは、前掲今式によれば、二月の初午の日に多賀宮において各種の献物とともに使われたようである。しかし、この「豊受皇太神宮年中行事今式」は奥書に明和五年十月十二日とあって、この「鉦」を使う儀式が、近世をさかのぼるかどうかわかではないとしても、ひとつの手がかりとはなるであろう。

以上、伊勢神宮での斎串類似品の使用例を参考にして、斎串は、鉦の形代であるとするのが、われわれの考えである。

斎串については、黒崎貞氏の研究(黒崎1977)があり、本書ではその分類方法も参考しているが、その性格は明確にされたとはいえないようである。ここでは、斎串が鉦の形代であったが故に、「神聖な木」として、多方面に利用され、黒崎氏がいうように「律令体制の成立と発展に深く関わっていた」とする考えであることを表明し、大方のご検討をお願いしたいと思う。

ところで、伊場遺跡では、人・馬・舟・鉦の形代がセットとして成立し始めるのは、7世紀の後半からであり、8世紀から9世紀にかけて盛行している。これは伊場遺跡の地方官衙的性格のあり方と表裏の関係にあると

いえるかも知れない。そしてその出土地点は、大溝の縁に集中し、小型の土器類とともに、大規模な水辺祭祀が、継続的に行なわれたことを示している。その祭祀の内容については、まだ全く見当がっていないが、水との係わりは無視できないので、その辺に手がかりがありそうである。

なお、絵馬については、岩井宏実氏が早く見解を表明されており（岩井1972）、調査団では、『伊場遺跡出土文字集成（概報）』二（1973年）の巻頭に紹介もした。その後、地元の文化財関係機関紙にも絵馬に関する記事が出ている（津畑1976）。絵馬は神社仏閣に祈願をこめて奉納するものであると規定すれば、伊場遺跡の絵馬は、いうところの絵馬とは違うことになる。そこで、牛馬を描いた形代とする見方も成立するわけで、伊場遺跡の場合には、木製馬形が消失した後も、絵馬が使われていて、見方によっては、補充関係ともみられる。しかし、やがてこうしたものが、絵馬の原型として中世以後の絵馬の盛行につながることは、もはや否定できないところである。

以上、出土遺跡に関し、注目すべき点を絞って若干の見解を述べた。この他取り上げなかった資料については、各項目の記述を参照していただきたい。（斎藤・向坂）

## 引用文献

- 榎本杜人 1959：「奈良時代の尺度について」『MUSEUM』99・100  
太田英蔵 1960：「絹帛」『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会  
小林行雄 1962：『古代の技術』塙書房  
小林行雄 1964：『続古代の技術』塙書房  
向坂綱二 1964：「浜松市都田町中津坂上出土の祭祀遺物」『考古学雑誌』50-1 日本考古学会  
角山幸洋 1965：『日本築織発達史』三一書房  
向坂綱二 1971：「静岡県伊場遺跡出土の奈良時代遺物」『考古学雑誌』56-3 日本考古学会  
岩井宏実 1972：「伊場遺跡出土絵馬をめぐって」『日本民俗史学会』11-2  
八木勝行 1973A：「平安時代の舳」『民具マンスリー』6-1 日本常民文化研究所  
八木勝行 1973B：「7世紀後半の笠」『民具マンスリー』6-5・6 日本常民文化研究所  
香月洋一郎 1973：「大豊町のオイコ」『民具マンスリー』6-5・6 日本常民文化研究所  
新東具一他 1974：「下市瀬遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 岡山県教育委員会  
奈良国立文化財研究所 1975：「平城宮発掘調査報告」VI 奈良国立文化財研究所  
津畑 敏 1976：「伊場遺跡出土の小絵馬について」『はぎ原』9 文化財調査会  
渡辺 誠 1976：「スダレ状圧痕の研究」『物質文化』26  
黒崎 直 1976：「古墳時代の農耕具」『研究論集』Ⅲ 奈良国立文化財研究所  
黒崎 直 1977：「斎中考」『古代研究』10  
岡村吉右衛門 1977：『日本原始織物の研究』文化出版局  
柳瀬昭彦他 1977：「上東遺跡」『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 16  
鈴木隆夫 1978：「着衾の出土」『静岡県考古学研究会』1 静岡県考古学研究会  
木下 忠 1978：「農耕技術の展開」『歴史公論』3月号 雄山閣

写真図版収載資料記録表

凡 例

- ・最大長の単位はmmである。
- ・備考欄中、「写」と付したものは写真図版を、「別図」は別冊図版を指すものである。
- ・木表の作成は辰巳が担当した。

図版番号	品 名	山土地点・層位	最大長	備 考
1	短甲状木製品第1号	A10b-YT9-D	340	右胸部分、丹形、部分的に黒塗塗
2・58A	短甲状木製品第2号	C12i-YT6-D	490	左背部分、丹形、部分的に黒塗塗
4A-1	鋸	先 A15f-V <sub>2</sub>	(477)	鉄刃付, 6, 『第7次調査報告』に実測図
-2	鋸	先 6-V <sub>2</sub>	(386)	自然乾燥, 重・収縮あり, 上端部欠損
4B-3	鋸	先 A15e-V <sub>2</sub>	(367)	上端部欠損
-4	鋸	先 A15f-V <sub>2</sub> b	405	刃部の両側縁部欠損
5A-1	鋸	先 B16b-V	(313)	別図3-1
-2	鋸	先 6E-V <sub>2</sub>	(270)	刃部に長方孔?, 半割, 先端部欠損
-3	脱銀状木製品	A15f-V <sub>2</sub>	(200)	破損部分が多く全容不明
-4	脱銀状木製品	D12d-YT1a-D	(245)	破損部分が多く全容不明
5B-5	鋸	先 B10g-YT9-D <sub>2</sub>	(260)	側縁部に一対の抉り, 柄部欠損
-6	柄	鋸 A15f-V <sub>2</sub>	296	『第6, 7次調査報告』に実測図
6A-1	大	足 B16b-a-V	(785)	別図5-1
6B-2	大	足 B16c-d-VI	(709)	別図5-2
-3	大	足 B16b-V	(694)	別図10-1
-4	大	足 67W-V	440	大足系田下駄の楕板
-5	田	駄 A15i-IV	238	別図3-2
7A-1	下 鎌 鋸	鋸 B16c-S-D下	364	別図3-5
-2		鋸 6-VN	358	別図3-4
7B-3	鎌	柄 6-V	(103)	別図3-6
-4	鎌	柄 44W-V <sub>2</sub>	(77)	別図3-7
-5	鎌	柄 A15f-V <sub>2</sub>	(119)	頭部破片
-6	鎌	柄 4-V <sub>2</sub> N	(123)(145)	別図3-3
-7	鎌	柄 A16d-V	(330)	頭部欠損
-8	鎌	柄 5-V <sub>2</sub> VI	348	完存品
-9	木	柄 B16c-S-C緑	347	別図4-1
8A-1	木	柄 B16b-V <sub>2</sub> 下	351	別図4-2
-2	木	柄 64W-IV	375	頭部に切り込みなし, 鎌柄末製品か
-3	木	柄 大溝内	(282)	頭部欠損
-4	木	柄 A15e-V	148	把部のみ
-5	木	柄 43-V	(187)	別図4-5
-6	木	柄 46-V	369	別図4-3
8B-7	木	柄 68E-V <sub>2</sub>	547	完存品, 頭部に方孔あり
-8	木	柄 67W-V	116	把部のようながこれで完存品, 表皮残存
-9	木	柄 大溝内	(240)	先端部欠損
-10	木	柄 68E-V	(710)	折損部に留装のための削りあり
-11	木	柄 A16fN-VII	(812)	端部欠損, 10.5×29mmの長方孔あり
-12	木	柄? A15g・A16a-VII	837	両端を面取, 一端の口口に径9mm深49mmの穿孔
9A-1	木	柄 B15he-VI	465	丸木の二面を面取りし頭部を二つ割り, 鎌柄か
-2	木	柄 B16cd-VI	506	別図4-4

図版番号	品名	出土地点・層位	最大長	備考
9A-3	木柄?	枝2-V <sub>4</sub>	(131)	把部の破片か
-4	木柄	A15 f s-IV	85.5	表示値は把部横幅、把部破片
-5	木柄	A15 g N-V d	(132)	把部破片
-6	木柄	イ2-5-V <sub>4</sub> VI	(129)	把部破片
-7	木柄	A15 f s-VII	213	表示値は把部の長さ、手斧の柄
9B-8	代掻	枝3-V <sub>2</sub>	390	歯1本欠、歯を横で固定、台木側面中央部に穴
-9	代掻	A15 f-V <sub>2</sub>	(272)	別図7-1
10B	代掻	C16 a a-V	(1080)	台木一部欠損、10本歯か、台木側面に長方孔と円孔
11A-1	代掻	イ4-VII	1255	9本歯の2本残存、台木側面に二対の円孔
-2	代掻	D4-V下	(1315)	台木一部欠損、9本歯か、台木側面に二対の円孔
11B-3	筵	ハ5E-V	(460)	表示値は上段の長さ、口縁の一部
13B	筵	A15 f-IV	(161)	表示値は右端反、袂に用いられた217本の簾竹の一部
14A-1	網	枝2-V <sub>4</sub>	1340	表示値は柄の長さ、神部欠損
-2	網	Y16 f-V <sub>4</sub>	(300)	表示値は柄の長さ、柄、神部欠損
14B-3	背負	ロ5E-V <sub>2</sub>	478	別図6-6
-4	背負	ハ4E-VII a	415	枝の一部欠損、裏面下端に段有り
-5	背負	A15 d-N-V <sub>4</sub>	435	枝欠損
-6	背負	A15 f-V <sub>2</sub> N	490	別図6-5
15A-1	背負	イ5-V <sub>4</sub>	435	別図6-1
-2	背負	ハ8E-V	423	完存、枝長270mm、枝先端部上端に切り込み
15B-3	背負	---	---	写15A-2(裏面)
-4	背負	---	---	写15A-1(裏面)
16A-1	背負	イ4W-V <sub>2</sub>	402	別図6-3
-2	背負	ハ8W-V <sub>2</sub>	400	完存、枝長265mm、使用による摩耗痕顯著
16B-3	背負	イ2-V <sub>4</sub>	413	完存、枝長110mm、使用による摩耗痕顯著
-4	背負	ハ5W-VII c	340	完存、枝長240mm
17A-1	背負	ハ5W-VII c	465	完存、枝長195mm、裏面下端に段有り
-2	背負	A15 e S-VII a	330	完存、枝長290mm
17B-3	背負	ロ6W-V	390	枝欠損
-4	背負	B16 c-VII	420	枝欠損、3段折り
-5	背負	イ5-V <sub>2</sub>	399	別図6-8
-6	背負	イ2-5-V <sub>4</sub> VI	440	枝の一部欠損、下端は段をつけ断面長方形にする
18A-1	編	A15 e-V <sub>4</sub>	(509)	第12号木簡の転用品、左端部欠損、片側面に刻み
-2	編	A15 g-V	(1165)	第21号木簡の転用品、左端部欠損、右端に円孔
-3	編	大溝内	(755)(730)	中央部欠損、片側面にのみ刻み
-4	編	ロ5-V	1465	第14号木簡の転用品、ほぼ完存、片側面にのみ刻み
18B-5	編	B16 b-V	(694)	別図10-1
-6	編	ロ1-V	(479)	別図10-2
-7	編	ロ6-V s	(361)	別図10-3
-8	編	ハ5E-V	(220)	両端部欠損
-9	編	A15 g-V	(368)	両端部欠損、片側にのみ刻み
-10	編	ロ4W-VII	(382)	別図10-4
-11	編	イ6-VI	(317)	別図10-5
-12	編	イ6-V	(278)	別図10-6
-13	編	ハ4W-VII b	(725)	左端部欠損、両側面に刻み、穴内に納残存、転用品か
19A-1	編	A15 f s-VII	172	I類
-2	編	A15 f	155	I類
-3	編	A15 i N-VII	151	I類

図版番号	品名	出土地点・層位	最大長	備考
19A-4	編 鋸	A15 f S-VII	152	I 類
-5	編 鋸	□ 5-V <sub>4</sub> VII	130	I 類
-6	編 鋸	□ 6-VII	137	II 類
-7	編 鋸	A15 f N-VII	142	II 類
-8	編 鋸	大溝内	130	II 類
19B-9	編 鋸	15 f a-VII	197	II 類
-10	編 鋸	△ 6 E-V <sub>4</sub>	176	II 類
-11	編 鋸	A15 f S-VII	148	II 類
-12	編 鋸	△ 6 E-V <sub>4</sub>	129.5	II 類
-13	編 鋸	□ 3-VII	122	II 類
20A-1	編 鋸	イ2・4 S-V <sub>4</sub> VII	123.5	II 類
-2	編 鋸	A16 f-V <sub>4</sub>	141.3	II 類
-3	編 鋸	A15 i N-V <sub>4</sub>	152	II 類
-4	編 鋸	A16 a-V <sub>4</sub>	144	II 類
-5	編 鋸	△ 8 E-V	141	II 類
-6	編 鋸	△ 7 W-V <sub>3</sub>	123	II 類
-7	編 鋸	□ 4 W b-V	126	II 類, 別図10-7
-8	編 鋸	大溝内	150	II 類
20B-9	編 鋸	△ 5 E-VII b	147.5	II 類
-10	編 鋸	△ 4 W-V	137	II 類
-11	編 鋸	△ 5 E-V <sub>3</sub>	128	II 類
-12	編 鋸	イ 6-V	146.5	II 類, 別図10-8
-13	編 鋸	△ 4 W-VII c	148	II 類
-14	編 鋸	△ 6 W-V <sub>3</sub>	143	II 類
-15	編 鋸	□ 2 E a-V	163	IV 類, 別図10-11
-16	編 鋸	△ 5 E-V <sub>2</sub>	134	IV 類
21A-1	碇	△ 7 W-V	452	完存品, 身部径 51mm, 細身で長い
-2	碇	A15 e-IV上	301	別図 4-7
-3	碇	□ 1-V	(391)	別図 4-6
21B-4	碇	大溝内	312	腐蝕がひどい, 身部にコゲ
-5	碇	□ 3-VII	330	ほぼ完存, 把部はていねいな作り
-6	碇	△ 5 E-IV	362	把部先端欠損, 荒い作り, 側面にキズ
22A-1	臂 大 杼	A15 i-VII	830	全体を断面刀状に削り, 中央に棒糸収納部を作る
-2	箆	A15 e-V	745	有縁, 両端に納穴と目釘孔, 646mmの間に糸痕
-3	箆 統 棒?	大溝内	(678)	自然乾燥, 歪, 収納あり, 端部に納穴, 目釘残存
-4	箆?	△ 6 E-VII a	(170)(485)	糸痕あり, 端部の柄は目釘で固定
-5	箆?	△ 6 E-V <sub>4</sub>	(164.5)	写22A-4と同形物
-6	布 巻 具?	B16 b-VII	(176)(210)	別図 7-4
22B-7	箆	—	—	写22A-2 側面
-8	箆 統 棒?	—	—	写22A-3 側面
-9	箆?	—	—	写22A-4 側面
-10	箆?	—	—	写22A-5 側面
-11	箆 機 部 品	—	—	写22A-6 側面
-12	箆 機 部 品?	A15 e-V	(615)	左端は柄, 目釘 3 本残存, 右端は断面円形で小孔有
-13	箆 機 部 品?	A15 f-V <sub>3</sub>	(672)	別図 8-1
-14	箆 機 部 品?	B16 c-V	750	別図 7-5
23A-1	箆? 部 分	—	—	写22A-4の糸痕拡大, 1cmで10~16本の糸目
-2	箆? 部 分	—	—	写22A-5の糸痕拡大, 1cmで6~13本の糸目

図版番号	品名	出土地点・属位	最大長	備考
23A-3	篋部	—	—	写22A-2の糸股疵大, 1cmで約24本の糸目
-4	糸巻	A15e-V	253	糸巻の部品, 側面に釘穴2, 渋または漆塗か
-5	糸巻	イ4W-V <sub>1</sub> S	(186)	別図7-2
23B-6	刀子	B16c-S D	135	別図4-9
-7	刀子	イ5-V(SA)	197	別図4-10
-8	刀子	ホ9-V <sub>2</sub>	225	別図4-11
-9	刀子の柄	大溝内	135	全面を丁寧に削り込む, 断面15×8mm
-10	小刀の鞘?	A15fs-V	171	幅19mm, 深5mmの縫を作り出す
24A-1	把手付楕円形曲物	A15e-N	820	内法長708mm, 榫眼孔2, 側板合わせあり左綴
-2	把手付楕円形曲物	ロ5Ea-V <sub>2</sub> N	714	別図11-5
24B-3	把手付楕円形曲物	ハ4E-V	720	内法長641mm, 榫眼孔4, 裏面に刃痕
-4	把手付楕円形曲物	ハ5E-V	725	内法長630mm, 榫眼孔4, 側板合わせあり, 左綴
25A-1	楕円形曲物	枝3-V <sub>1</sub>	657	榫眼孔5, 内2か所に榫残存, 1か所に目釘?
-2	楕円形曲物	ハ8W-V <sub>2</sub>	620	榫眼孔2, 表裏面に刃痕顯著, 割れ口に挟り
-3	楕円形曲物	イ3-IV	(650)	別図13-3
25B-4	楕円形曲物	枝3-V中	640	側板一部残存, 下辺に別板との綴じ合せ孔あり折敷か
-5	楕円形曲物	ロ9-V	665	別図13-2
26B	楕円形曲物	A15e-SQ上	636	2枚を結合, 側板合わせあり, 左綴, 裏面に刃痕顯著
27A-1	長方形曲物	ロ7-IVb	653	別図13-1
27B-2	楕円形曲物	ロ4-IVb	403	別図12-2
-3	楕円形曲物	ハ5E-IV	396	2枚を結合させて使用か, 榫眼孔2, 榫残存
-4	方形曲物	ロ5E-V <sub>2</sub>	261	別図12-3
-5	方形曲物?	枝3-V <sub>2</sub>	210	側板の綴じ孔なし, 蓋か
-6	方形曲物	枝2-V <sub>1</sub>	197	一部欠損, 榫眼孔4, 榫残存
28A-1	円形曲物	枝2-V <sub>4</sub>	径497	榫残存
-2	円形曲物	B16-SB	径510	表示値は復元径, 別図14-5
28B-3	円形曲物	A15f-VII	径330	2枚を結合, 榫眼孔6, 表面にコゲ裏面に刃痕
-4	円形曲物	枝2-V <sub>4</sub>	径330	表示値は復元径, 右辺に別板との綴じ合せ孔あり
29A-1	円形曲物	B16c-VI	径235	榫眼孔4, 表面に刃痕, 別図14-4
-2	円形曲物	ホ2-OFV	径242	別図15-3
29B-3	円形曲物	枝2-V <sub>4</sub>	径155	榫眼孔4
-4	円形曲物	ハ2W-IV	径155	切り込みで榫を通して側板を接合
-5	円形曲物	枝2-V <sub>2</sub>	径175	自然乾燥による歪, 収縮あり
-6	円形曲物	ホ6-SE2	径156	別図15-4
-7	円形曲物	ホ6-V <sub>1</sub> N	径137	別図15-2
-8	円形曲物	枝2-V <sub>2</sub>	径180	表示値は復元径, 榫眼孔2, 裏面に刃痕
-9	円形曲物	ロ5Ea-V <sub>2</sub> S	径190	表示値は復元径, 別図14-2
30A-1	円形曲物	イ6-V	径189	別図15-1
-2	円形曲物	ロ6-V	径178	別図14-3
30B-3	円形曲物	ハ7E-IVb-V	径185	7・8個の円孔を3列にわたって穿つ, 裏面に刃痕
-4	円形曲物	枝3-V上	径190	榫眼孔2, 榫残存, 裏面に刃痕
-5	円形曲物	イ7-V <sub>2</sub> N	径210	表示値は復元径, 別図14-7
30C-6	円形曲物	ハ8W-V <sub>2</sub>	径185	榫眼孔2, 内1か所は目釘で榫固定, 裏面に刃痕
-7	円形曲物	A15fN-VII	径195	榫眼孔2, 側板合わせあり, 左綴
-8	円形曲物	イ4-V <sub>4</sub>	(136)	再利用されたか
-9	円形曲物	A15gN-VII	(253.5)	側板目釘止め, 2個の円孔は紐穴か, 他に比べ厚い
31A-1	円形曲物	A15i-IV	径179	別図14-1
-2	円形曲物	A15g-V	径165	裏面に焼印?と刃痕, 榫眼4

図版番号	品名	出土地点・層位	最大長	備考
31A-3	円形曲物	ロ5-Vs	径170	表示値は復元径、別図14-6
31B-4	円形曲物	—	—	写31A-1の裏面
-5	円形曲物	—	—	写31A-2の裏面
-6	円形曲物	—	—	写31A-3の裏面
32A-1	円形曲物	ハ7E-IVb	径260	焼コゲあり、両面に刃痕顕著、
-2	円形曲物	ホ5-IV	径280	数値は復元径、焼コゲあり
-3	円形曲物	A15f-IVV	径190	数値は復元径
32B-4	円形曲物	ロ5-V <sub>1</sub> VI	径155	数値は復元径、両面に刃痕
-5	円形曲物	A16a-V	径155	数値は復元径
-6	円形曲物	A15f-V <sub>1</sub>	径155	数値は復元径、別図15-9
-7	円形曲物	イ7-V <sub>1</sub> S	径150	数値は復元径、別図15-8
-8	円形曲物	枝3-V <sub>1</sub>	径130	数値は復元径
-9	円形曲物	イ5-IV	径130	数値は復元径、刃痕あり
-10	円形曲物	枝3-V上	径115	自然乾燥、莖、収縮あり
-11	円形曲物	イ6-V	径120	別図16-2
33A-1	円形曲物	ホ2-OFV <sub>1</sub>	径158	別図15-7
-2	円形曲物	ハ4W-Ⅷ	径158	刃痕あり
-3	円形曲物	ロ1-V	径189	別図16-1
33B-4	円形曲物	ホ6-V <sub>1</sub>	径193	別図16-3
-5	円形曲物	ロ1W-V <sub>1</sub>	径183	別図15-13
-6	円形曲物	ロ1-V	径190	数値は復元径、側板合わせあり、左側、別図15-6
-7	円形曲物	ホ6-V <sub>1</sub>	径190	数値は復元径、別図16-4
33C-8	円形曲物	ロ6-IVa	径117	別図15-11
-9	円形曲物	ロ5E-V <sub>1</sub>	径121	別図15-10
-10	円形曲物	枝1-VI	径125	側縁部腐蝕
34A-1	円形曲物	ハ5E-IV	高さ52	ほぼ完存、側板右側、目釘4か所、径100mm
34B-2	円形曲物	ハ6E-IV	高さ33	ほぼ完存、側板左側、底板裏に焼コゲ、径120mm
34C-3	円形曲物	A15f-IV	高さ73	別図16-7、径130mm
36A	楕円形曲物側板	イ3-IV	長さ670	別図12-1、短径370mm
36B	円形曲物側板	D12a	径約300	NG2、高111mm、廻しの側板付、内面に刻線
37A-1	円形曲物側板	A15f-IV	径285	別図16-5
37B-2	曲物側板破片	イ2-V <sub>1</sub>	(420)	幅43mm、廻しの側板か
-3	曲物側板破片	ハ5E-IV	(157)	側板合わせ部の破片、幅31mm
-4	曲物側板破片	ロ6-Vs	(95)	幅22mm、廻しの側板か
-5	曲物側板破片	ハ5E-V	(174)	幅49mm、右側、捺印あり、短径(77)
-6	曲物側板破片	A15f-V <sub>1</sub>	(154)	別図17-2
-7	曲物側板破片	ロ5Ea-V <sub>1</sub> S	(304)	別図17-5
-8	曲物側板破片	ロ6-V	(357)	別図16-8
38A-1	柄杓の柄	イ6-V	(358)	別図17-6
-2	柄杓の柄	イ6-V	(330)	別図17-7
-3	柄杓の柄	A15f-V	(238)	別図17-8
-4	箸	A15e-V	261	中央部太さ6mm、両端を尖らす
-5	箸	イ6-IVb	229	別図17-10
-6	箸	イ5-IVb	(178)	別図17-11
-7	箸	イ5-IVb	255	別図17-9
-8	杓文字形木製品	A15eS-VIIa	215	ほぼ完存、身部断面薄いレンズ状
-9	杓文字形木製品	ロ6-V	(290)	別図10-15
38B-10	盥物盤	ホ6-V	口径165	別図17-18

図版番号	品名	出土地点・層位	最大長	備考
38B-11	換物盤	ホ6-IV	口径167	別図17-20
-12	換物盤	枝3-V上	(173)	縁辺欠損、腐蝕顯著
-13	換物盤	B10g-YT9-D <sub>3</sub>	(297)	底部中央付近突出、高環か
-14	換物盤	ハ7E-V <sub>1</sub>	口径186	表示値は復元径、高さ17mm
-15	換物盤	ホ6-V <sub>1</sub>	口径167	別図17-21
39A-1	換物盤	ロ6-V	(298)	別図17-19
-2	換物盤	イ3-IV	(208)	別図17-15
-3	換物盤	ロ4-IV	(200)	別図17-16
-4	換物盤	ロ5W-V <sub>2</sub>	高35	別図17-17
39B-5	換物盤	—	—	写39A-1の底部
-6	換物盤	—	—	写39A-2の底部
-7	換物盤	—	—	写39A-3の底部
-8	換物盤	—	—	写39A-4の底部
40A	柄物	ロ1W-V <sub>2</sub>	(540)	別図11-1
40B	柄物	A15fN-VIIa	横幅380	完存品、高66.5mm、31×40mmの方孔
41A-1	柄物	A15-V	297	半割、高さ32mm
-2	柄物	ロ4-V上	(253)	別図10-14
-3	柄物	A15i-V <sub>2</sub>	(195)	別図10-12
-4	柄物	ロ5E-V <sub>2</sub>	(192)	別図10-13
41B-5	柄物	A15h-V	373	把手付
-6	柄物	ロ6-V	(263)	別図11-3
-7	柄物	A15fs-VIIc	(235)	把手付であったと思われる、「あかだし」か
-8	柄物	A15iN-V <sub>2</sub>	336	身部長方形、把手付
43A-1	火鉢	A15g-V	(110)	貫通孔4、孔の内面コゲ
-2	火鉢	ハ5E-VIIb	(181)	左端部欠損、孔9、孔の内面焦げ
43B-3	火鉢	ロ1-V	(46)	別図17-13
-4	火鉢	ロ4Wb-Vs	(87)	別図17-14
-5	火鉢	C16aa-V	167	別図17-12
44A-1	杵	B13b-YT7-D <sub>2</sub>	(665)	把部に算盤玉状突起、先端は使用による摩耗痕顯著
44B-2+3	小	イ3-IVa	高さ174	別図11-4、口径160mm
45A	甌	C16aa-V	487	第1号、別図18
45B	甌	—	—	写45Aの短辺側面
46A	甌	—	—	写45Aの上面
46B	甌	—	—	写45Aの長辺側面
46C	甌	—	—	写45Aの下面
47A	案	C16aa-V	518	別図19
47B	案	—	—	写47Aの短辺側面
48A	案	—	—	写47Aの上面
48B	案	—	—	写47Aの長辺側面
48C	案	—	—	写47Aの下面
49A	甌	ハ5W-V <sub>2</sub>	433	第2号、高さ150、身部幅113、厚さ38、上面甲高
49B	甌	—	—	写49Aの短辺側面
50A	甌	—	—	写49Aの上面
50B	甌	—	—	写49Aの長辺側面
50C	甌	—	—	写49Aの下面
51A-1	横櫛	A16aN-VIIb	92	ほぼ完存、歯は全部で48本、1cmで7本、平櫛
-2	横櫛	ハ4E-VIIc	(36.5)	1cmで7本の歯、平櫛
-3	横櫛	A15gN-VII d	(49.5)	1cmで9本の歯、平櫛

図版番号	品名	出土地点・層位	最大長	備考
51A-4	楨	櫛 A15 b s-VII	(46.5)	1cmで5本の歯, 平楨
51B-5	楨	ハ5 E-V <sub>2</sub>	69	歯は全部で47本, 1cmで9本, 平楨
-6	楨	ホ9-VIII a	56	表示値は縦の長, 歯1cmで7本, ほぼ平楨
-7	楨	ハ5 E-V	(70.5)	1cmで8本の歯, 横に丸味をつけ, 側面に明確な稜
-8	楨	ハ4 E-VII a	(58)	1cmで7本の歯, 平楨
52A-1	楨	櫛 ロ5 a W-V <sub>2</sub>	(74)	別図26-29
-2	楨	櫛 イ5-V <sub>2</sub>	(39.5)	表示値は縦の長, 別図26-33
-3	楨	櫛 ロ9-V	47	表示値は縦の長, 別図26-30
52A-4	楨	櫛 ホ6-V <sub>2</sub>	(37)	表示値は縦の長, 別図26-31
-5	楨	櫛 A15 i-V <sub>2</sub>	(33)	表示値は横の幅, 別図26-32
52B-6	下	駄 ハ4 W-VII c	(150)	鼻緒孔方形, 台板とはほぼ同幅の歯, 竇縁顕著
-7	下	駄 ハ4 W-IV	(186)	両端部欠損, 台板より幅広い歯, 器高37mm
53A-1	柱	包 NB-329	径約195	材質イヌマキ, 「遺構編」参照
-2	柱	板 NB-329	径約183	材質イヌマキ, 「遺構編」参照
-3	柱	根 NB-317-10	径約190	材質ヒノキ, 「遺構編」参照
53B-4	礎	板 西部地区建築遺構	350	「遺構編」参照
-5	礎	板 西部地区建築遺構	168	「遺構編」参照
-6	礎	板 西部地区建築遺構	205	「遺構編」参照
54A-1	建	築部材 大溝内	(1620)	建物の隅にあたる柱材か
-2	刹	抜材 大溝内	1030	刹り抜いた内面の底に榫を掘り, その両端に孔を穿つ
-3	建	築部材 ロ5-SM	1190	完存, 表皮残存, 方孔1
54B-4	建	築部材 ハ5 E-V	(1725)	角材, 全面をいねいに削り込め, 方孔2
-5	建	築部材 大溝内	1250	断面不整形の板材
-6	洗	濯板 A15 i-S S	1540	N F 9の足場板, 孔に杭を打ち込み固定したものと
55A-1	梯	子 ロ5-V <sub>2</sub> VII	(1060)	両端部欠損, 丸太材
-2	梯	子 B16 c-VI	(731)	別図20-3
55B-3	梯	子	—	写55A-1の側面
-4	梯	子	—	写55A-2の側面
56A-1	鼠	返 イ4-VII	615	一部欠損, 円孔の左右に榫継の方孔あり
56B-2	鼠	返 ハ8 E-V	440	一部欠損, 方孔あり
-3	鼠	返 A15 f N-V <sub>2</sub>	370	欠損部分多く, 全容不明
57A-1	丸	木 弓 ハ4 E-V	115.8	一木造り, 水かき部の一部欠損
-2	丸	木 弓 A15 f s-VII	1049	一部に黒漆残存, 幅12m, 深さ2mm前後の樋
-3	丸	木 弓 ホ6-S E上	1205	別図20-1
57B-4	丸	木 弓部	—	写57A-3部分
-5	丸	木 弓部	—	写57A-2部分
58B 左	杓	鏝 A15 g N-VII c	315	杓子形, 一木造り, 「第6, 7次調査概報」に実測図
右	鏝	鏝	—	側面
59A-1	斎	串 ロ5 E-V <sub>2</sub>	137	別図21-11, A種
-2	人	形 A15 f-V <sub>2</sub>	(86)	別図21-6
-3	人	形 ロ5 E a-V <sub>2</sub> N	(87)	別図21-10
-4	人	形 ハ4 W-IV	(60.5)	櫛で頭, 頸髪, ヒゲ?を表現, 頭部のみ
-5	人	形 ハ2 W-IV	(46.5)	脚部欠損, 髭で顔を表現
59B-6	人	形	—	写59A-1の裏面
-7	人	形	—	写59A-2の裏面
-8	人	形	—	写59A-3の裏面
-9	人	形	—	写59A-4の裏面
-10	人	形	—	写59A-5の裏面

図版番号	品名	出土地点・層位	最大長	備考
60A-1	人形	ロ9-V	142	別図21-4
-2	人形	ロ9-V	152.3	別図21-5
-3	人形	A15e-V	97.5	脚部欠損、胴部と下肢部境に切り込み
-4	人形	ハ4E-IVb	141.1	圭頭、足腕欠損
-5	人形	A15d-V	162.5	屯頭、胴部と下肢部の境に切り込み
60B-6	人形	B16c-V	(231.5)	別図21-1
-7	人形	B16c-V	(194)	別図21-2
-8	人形	イ7-V <sub>1</sub>	(193.5)	縦半割、頭部欠損、別図21-7
60B-9	人形	A15d-V	213.5	両腕と片足欠損、頭部に墨痕?
61A-1	人形	A16a-V <sub>4,5</sub>	(183.5)	下半部欠損、長頭
-2	人形	ハ6E-IV	(142)	下半部欠損、圭頭
-3	人形	A15i-V <sub>2</sub>	(126)	縦半割、下半部欠損
-4	人形	イ6-IV	(86)	別図21-8
-5	人形	A15e-V	(95)	頭部破片
-6	人形	B16c-V	(71.5)	上半部欠損
-7	人形	ロ4-V	(69)	上半部欠損
61B-8	鳥形?	ハ6E-VIb c	235	嘴部と胴上部欠損、板材
-9	剣形?	A15e-V S Q	150	完存、断面薄い凸レンズ状
-10	剣形?	ホ6-V <sub>1</sub> N	147	別図29-28
-11	物指	ハ4E-V	229	断面半円形、26~28mm単位の刻線あり
-12	櫓扇?	ハ2W-IV	290	厚さ2mm、右端部に小孔あり
62A-1	馬形	A15f-V <sub>2</sub>	141	別図21-16
-2	馬形	A15d-V	127	完存、下部挽りは一か所だけ、腹部に切込み
-3	馬形	イ2-V <sub>III</sub>	159	別図21-16
-4	馬形	ロ6E-V	(147)	別図21-17
-5	馬形	A15e-V	115	上半部欠損
62B-6	馬形	—	—	写62A-1の裏面
-7	馬形	—	—	写62A-2の裏面
-8	馬形	—	—	写62A-3の裏面
-9	馬形	—	—	写62A-4の裏面
-10	馬形	—	—	写62A-5の裏面
63A-1	馬形	イ6-V	284	別図21-13
-2	馬形	イ4E-V <sub>1</sub> S	202	別図21-15
-3	馬形	ホ6-V <sub>2,3</sub>	137	別図21-14
-4	馬形	A16a-V <sub>4,5</sub>	93	完存、台形板の上部を1ヶ所、下部を2ヶ所挟る
63B-5	馬形	—	—	写63A-1の裏面
-6	馬形	—	—	写63A-2の裏面
-7	馬形	—	—	写63A-3の裏面
-8	馬形	—	—	写63A-4の裏面
64A-1	舟形	A15K N-VII	365	舟形の中で最も大型
-2	舟形	枝3-V <sub>2</sub>	338	—
64B-3	舟形	—	—	写64A-1の側面
-4	舟形	—	—	写64A-2の側面
65A-1	舟形	ロ6-V	206	別図22-3
-2	舟形	ロ4Wa-VN	196	別図23-5
-3	舟形	A15d-V	148	—
65A-4	舟形	—	—	写65A-1の側面
-5	舟形	—	—	写65A-2の側面

図版番号	品名	出土地点・層位	最大長	備考
65B-6	舟形	—	—	写65A-3の側面
66A-1	舟形	A15h-V	185.5	船底に切り込み
—2	舟形	イ4-V <sub>2</sub> S	190	別図22-7
—3	舟形	ホ5-O F V	(181)	別図22-17
66B-4	舟形	A15d-V	176	
—5	舟形	A15e-V	169	船底に切り込み
—6	舟形	A15c-IV V	(177)	別図23-2
67A-1	舟形	C16a-a-V	(218)	別図23-4
—2	舟形	ハ5E-S U	218	
—3	舟形	B16c-VII(S C下)	218	別図22-6
67B-4	舟形	—	—	写67A-1の側面
—5	舟形	—	—	写67A-2の側面
—6	舟形	—	—	写67A-3の側面
68A-1	舟形	A15f-IV V	218	船首に目, 舷に波文を彫る
—2	舟形	イ7-IV	239.5	舷両端に貫通孔, 船底に未貫通孔1
—3	舟形	ホ6-IV V	(225)	舷両端に貫通孔, 船底に未貫通孔1
68B-4	舟形	—	—	写68A-1の側面
—5	舟形	—	—	写68A-2の側面
—6	舟形	—	—	写68A-3の側面
69A-1	舟形	—	—	写68A-1の底部
—2	舟形	—	—	写68A-2の底部
—3	舟形	—	—	写68A-3の底部
69B-4	舟形	ロ9-V	228	別図22-11
—5	舟形	ハ7W-IV	235	船底に切り込み
—6	舟形	A15g-V	225.5	両舷に2対の抉り
70A-1	舟形	A15d-V	205.5	船底に切り込み
—2	舟形	A15f-V <sub>2</sub>	176	別図22-14
—3	舟形	ハ15c-V	179	船底に切り込み
70B-4	舟形	A15d-V	192	船底に切り込み
—5	舟形	ハ7E-V <sub>1</sub>	189	船底に切り込み
—6	舟形	A15d-V	160	
71A-1	舟形	A15g-V	176	船底に切り込み
—2	舟形	A15f-S N	147	別図22-8
—3	舟形	A15c-IV V	160	別図22-12
71B-4	舟形	A15d-V	161	船底に切り込み
—5	舟形	A15c-IV V	177	別図23-6
—6	舟形	ホ2ミゾ-IV	157	
72A-1	舟形	A15f-V <sub>1</sub>	184	別図22-15
—2	舟形	イ4W-V <sub>2</sub>	225	別図22-13
72B-3	舟形	—	—	写72A-1の側面
—4	舟形	—	—	写72A-2の側面
73A-1	舟形	ホ6SE-IV V	(215)	別図23-1
—2	舟形	B16b-V	194	別図23-3
—3	舟形	ロ6E	166	船底に切り込み
73B-4	舟形	ロ5Eb-V <sub>2</sub>	144	別図22-4
—5	舟形	ハ4E-V	(147)	
—6	舟形	A15d-V	(160)	
74A-1	舟形	A15g-a-VII	153	

図版番号	品名	山土地点・層位	最大長	備考
74A-2	舟形	A15e-V	(154)	
-3	舟形	A15c-IVV	(166.5)	
74B-4	舟形	ホ6SE付近-V <sub>2</sub>	(288)	別図23-7
-5	舟形	ホ9-V <sub>1</sub> S	(163)	別図23-8
-6	舟形	枝3-V <sub>2</sub>	(190)	船底に切り込み
75A-1	舟形	A15d-V	241	
-2	舟形	イ4WS-V <sub>1</sub>	(244)	別図22-1
-3	舟形	B16c-V	239	別図22-2
75B-4	舟形	A15e-V(SQ)	164	船底に切り込み
-5	舟形	A15d-V	(179)	船底に切り込み
-6	舟形	ホ6-V <sub>1</sub> N	210	別図22-16
76A-1	舟形	A15d-V	(130)(84)	船首、船尾に未貫通孔
-2	舟形	枝1-V <sub>2</sub>	156	舟形か
-3	舟形	ロ5Ea-SM	110	別図22-10
-4	舟形	A15hS-Vd	125	
76B-5	舟形	ロ1W-V <sub>2</sub>	193.5	別図23-9
-6	舟形	B16b-V	266	別図23-10
-7	舟形	イ3-V	76.5	別図23-11
77A-1	竇串	ホ2-OFV	279	別図24-14, B <sub>2</sub> 種
-2	竇串	ホ5-OFVN	272	別図24-17, B <sub>2</sub> 種
-3	竇串	A15e-V	241	B <sub>2</sub> 種
-4	竇串	A15h-V	222	B <sub>2</sub> 種
-5	竇串	A15e-V	(213)	別図25-2, B <sub>2</sub> 種
-6	竇串	A15f-IV	238	別図25-1, B <sub>2</sub> 種
-7	竇串	B16b-V	289	別図25-3, B <sub>2</sub> 種
77B-8	竇串	A15c-IVV	(260)	別図24-15, B <sub>2</sub> 種
-9	竇串	A15d-V	161	B <sub>2</sub> 種
-10	竇串	A15f-IVV	197	B <sub>2</sub> 種か
-11	竇串	B16b-d-V	(203)	別図25-11, B <sub>2</sub> 種
-12	竇串	枝3-V <sub>2</sub>	(242)	B <sub>2</sub> 種
-13	竇串	ロ1-IVb	(229.5)	別図24-16, B <sub>2</sub> 種
-14	竇串	ハ5E-N	(270.5)	B <sub>2</sub> 種
78A-1	竇串	ホ5-OFV <sub>1</sub>	(290)	別図25-4, B <sub>2</sub> 種
-2	竇串	A15g-V	(160.5)	D <sub>2</sub> 種
-3	竇串	大溝内	(155.5)	C <sub>2</sub> 種
-4	竇串	A16a-V <sub>2</sub> s	(168.5)	B <sub>2</sub> 種
-5	竇串	A15f-IV	(219)	C <sub>2</sub> 種
-6	竇串	ホ6-SE2	(144.5)	B <sub>2</sub> 種か
-7	竇串	ロ1-IVb	(131.5)	別図25-14, B <sub>2</sub> 種
78B-8	竇串	ロ1-IVb	(107)	B <sub>2</sub> 種
-9	竇串	イ4W-V <sub>1</sub> S	(123)	別図25-6, B <sub>2</sub> 種
-10	竇串	ホ5-OFVN	(100)	別図25-9, B <sub>2</sub> 種
-11	竇串	A15f-V <sub>2</sub> N	(178)	別図25-5, B <sub>2</sub> 種
-12	竇串	A15c-IVVN	(88)	別図25-15, B <sub>2</sub> 種
-13	竇串	イ4E-V <sub>1</sub> S	(113)	別図25-7, B <sub>2</sub> 種か
-14	竇串	イ2-IV	(96)	別図25-16, B <sub>2</sub> 種
-15	竇串	A15e-V	(84)	B <sub>2</sub> 種
-16	竇串	Y15f-IV	(81.5)	B <sub>2</sub> 種

図版番号	品名	出土地点・部位	最大長	備考
78B-17	斎	串 A15f-V <sub>2</sub>	(72)	別図25-17, B <sub>2</sub> 種か
-18	斎	串 A15e-V	(60)	B種
-19	斎	串 #5-O F V N	(71)	別図25-13, B種
-20	斎	串 #5-O F V	(71)	別図25-19, B <sub>2</sub> 種
-21	斎	串 枝3-V中	(79.5)	B <sub>2</sub> 種か
79 -1	斎	串 #5-O F V <sub>2</sub>	1173	別図24-1, C <sub>2</sub> 種
-2	斎	串 #2-O F V	(401)	別図24-6, B <sub>2</sub> 種
-3	斎	串 #5-O F V N	(505)	別図24-4, C <sub>2</sub> 種
-4	斎	串 #5-O F V N	657	別図24-3, C <sub>2</sub> 種
-5	斎	串 #5-O F V N	(663)	別図24-2, C <sub>2</sub> 種
80A-1	斎	串 □5W-V <sub>1</sub>	362	別図24-10, C <sub>2</sub> 種
-2	斎	串 □5W-V <sub>2</sub>	370	別図24-8, C <sub>2</sub> 種
-3	斎	串 □5W-V <sub>1</sub>	357	別図24-9, C <sub>2</sub> 種
-4	斎	串 #5-O F V	(146)	別図24-7, B種
-5	斎	串 #5-O F V <sub>2</sub>	(140)	別図24-5, D種か
-6	斎	串 #5-O F V N	267	別図24-13, B種
80B-7	斎	串 B16c-V	(124.5)	別図26-8, A種
-8	斎	串 B16c-V	119.5	別図26-9, A種
-9	斎	串 B16c-V	(122)	別図26-6, A種
-10	斎	串 B16c-V	126	別図26-7, A種
-11	斎	串 B16c-V	123	別図26-5, A種
-12	斎	串 B16c-V	126.5	別図26-4, A種
-13	斎	串 B16c-V	(114)	別図25-8, B <sub>3</sub> 種か
-14	斎	串 A15i-IV	(133)	別図26-2, A種か
81A-1	斎	串 B16b-V	(211)	別図26-1, A種
-2	斎	串 A15h-V	179.5	A種
-3	斎	串 A15f-V <sub>2</sub>	125	別図26-3, A種
-4	斎	串 B16c-V	(117)	別図26-21, A種
-5	斎	串 B16c-V	(95)	別図26-19, A種
-6	斎	串 B16c-V	(91.5)	別図26-20, A種
-7	斎	串 B16c-V	71.5	別図26-13, A種
-8	斎	串 B16c-V	73.5	別図26-14, A種
-9	斎	串 B16c-V	79.5	別図26-10, A種
-10	斎	串 B16c-V	(48.5)	別図26-12, A種
-11	斎	串 B16c-V	68	別図26-16, A種
-12	斎	串 B16c-V	(64)	別図26-11, A種
-13	斎	串 大溝内	(70.5)	A種
-14	斎	串 □4-V上	84.5	別図26-18, B種か
-15	斎	串 B16c-V	(90.5)	別図26-17, A種
81B-16	斎	串 イ3-V	279	別図25-21, E <sub>1</sub> 種
-17	斎	串 枝2-V	(170)	木簡第61号, 別図25-22, E <sub>1</sub> 種
-18	斎	串 B16	97.5	別図25-20, E <sub>1</sub> 種
-19	斎	串 B16bd-V	185	木簡か?, E <sub>1</sub> 種
-20	斎	串 イ4W-V <sub>1</sub> S	(226)	別図25-29, E <sub>1</sub> 種
-21	斎	串 ハ6E-Va	268	E <sub>1</sub> 種
82A-1	斎	串 B16c-V	(107)	半損
-2	斎	串 #5-O F V	(113)	半損
-3	斎	串 A15f-SK上	(120)	別図25-48, 半損

図版番号	品名	出土地点・層位	最大長	備考
82A-4	斎	串	ホ5-O P V	(105.5) 半損
-5	斎	串	大溝内	(79) 半損
-6	斎	串	大溝内	(101) 半損
-7	斎	串	大溝内	(71) 半損
-8	斎	串	ロ4-V	(143.5) 半損
-9	斎	串	ロ7・9, ハ5	(124.5) 半損
-10	斎	串	ホ5-O P V N	(138) 別図25-39, 半損
-11	斎	串	枝3-V <sub>3</sub>	(148) 半損
-12	斎	串	A15c-IV V	(190) 別図25-28, 半損
-13	斎	串	A15c-IV V	(190) 別図25-27, 半損
-14	斎	串	枝2-V <sub>3</sub>	(192.5) 半損
82B-15	斎	串類	A16a-V <sub>4,s</sub>	(177) 頸部欠損
-16	斎	串類	A15d-V	(138.5) D種か
-17	斎	串類	A16a-V <sub>4,s</sub>	(106) D種か
-18	斎	串類	ロ5-V <sub>4</sub> Ⅱ	(106.5) D種か
-19	斎	串類	ハ8W-V <sub>3</sub>	(100) D種
-20	斎	串類	A15e-V	(112) D種
83A	絵	馬	C16a-a-V	119.5 第1号, 別図21-19
83B	絵	馬	---	--- 写83Aの裏面
84A	絵	馬	イ3-IV b	118 第2号, 別図21-20
84B	絵	馬	---	--- 写84Aの裏面
85A	絵	馬	ロ6-IV-95	145 第3号, 別図21-21
85B	絵	馬	---	--- 写85Aの裏面
85C	絵	馬	イ2-V F	134.5 第4号, 別図21-22
85D	絵	馬	---	--- 写85Cの裏面
86A	絵	馬	A15e-V c	89 第5号, 別図21-23
86B	絵	馬	---	--- 写86Aの裏面
87A	絵	馬	枝3-V <sub>3</sub>	114 第6号, 別図21-24
87B	絵	馬	---	--- 写87Aの裏面
88A-1	權状木製品	品	ハ4E-IV b	(650) 先端を尖らす, 一部欠損
-2	權状木製品	品	大溝内	(115) 片面に錆を削り出す
-3	權状木製品	品	ハ8E-V <sub>3</sub>	(196) 片面に錆を削り出す
-4	權状木製品	品	ハ7E-VII a	(170) 両端欠損
-5	權状木製品	品	A151* -V <sub>4</sub>	(167) 先端に使用痕? 片面にのみ錆
-6	權状木製品	品	ハ4W-VII	(365) 両端欠損
-7	權状木製品	品	ハ5E-VII a	(365) 片面に錆を削り出す
-8	權状木製品	品	A15d-V	(210) 片面に錆を削り出す
-9	權状木製品	品	イ2-V	(707) 別図27-1
88B-10	鞍轡状木製品	品	ホ5-V <sub>4</sub>	250 完存, 下面に使用による摩耗痕顯著
-11	鞍轡状木製品	品	A15d-V	262 一部腐蝕, 摩耗痕顯著
89A-1	木柄把手	品	ロ1-V	343 別図27-10
-2	木柄把手	品	ハ5W-V <sub>3</sub>	285 写90B-12の把手となる
-3	木柄把手	品	大溝内	289 目釘孔なし, 柵穴に直交する溝
-4	木柄把手	品	ハ5W-V <sub>3</sub>	326 目釘孔なし, 柵穴に直交する溝
-5	木柄把手	品	ホ2-ミ/V	352 別図27-11
89B-6	木柄把手	品	---	--- 写89A-1の側面
-7	木柄把手	品	---	--- 写89A-2の側面
-8	木柄把手	品	---	--- 写89A-3の側面

図版番号	品名	山土地点・層位	最大長	備考
89B-9	木柄把手	—	—	写89A-4の側面
—10	木柄把手	—	—	写89A-5の側面
90A-1	木柄把手	□5E-V <sub>1</sub>	(142.5)	別図27-13
—2	木柄把手	イ6-V	(149)	半割、目釘孔なし
—3	木柄把手	□5E-V <sub>1</sub> Ⅶ	111	完存品、目釘孔なし
—4	木柄把手	ホ5-Ⅳ	(153)	別図27-12
—5	木柄把手	□6-VⅦ	(130)	半折、片側面にのみ方形の目釘孔あり
—6	木柄把手	A15e-V	158.5	完存品、側面に目釘孔あり
—7	木柄把手	ハ7E-V	152.5	ほぼ完存、片側面の目釘孔あり
—8	木柄把手	ホ6-V <sub>1</sub> N	176	半割、目釘孔あり
—9	木柄把手	□6-VⅦ	120	半割、目釘孔あり
—10	木柄把手	A15d-V	100	一部欠損、目釘残存
—11	木柄把手	枝2-V <sub>1</sub>	136	半割、目釘孔あり
90B-12	木柄	ハ5W-V <sub>1</sub>	(480)	写89A-2が把手、下端を細く削る
—13	木柄	A15eN-VⅦc	420	中央部を削り込み、杵状を呈す
—14	木柄	A10f-D	527	YT9山土、完存品、一端を方形に削り出す
—15	木柄	A15e s-VⅦa	(350)	断面円形、端部を杵状に作り出す、軸轆か
—16	木柄	A15e-V	(160)	破損部に挟り込みあり
91A	有樋十字形木製品	イ4W-V <sub>1</sub> s	280	表示値は横径、別図9
91B	有樋十字形木製品	—	—	写91Aの裏面
92A-1	有樋十字形木製品	イ2-VⅡ	295	別図8-8
—2	有樋十字形木製品	ホ6-V <sub>1</sub> N	(265)	別図8-4
—3	有樋十字形木製品	A15d-V	216	中央部に切り込みと孔がみられない
—4	有樋十字形木製品	ハ6E-V <sub>1</sub>	275	孔がみられない、丸木皮付、未整形である
92B-5	有樋角形木製品	イ4-V <sub>1</sub>	393	別図7-3
—6	有樋角形木製品	—	—	写92B-5の下面
93A-1	柄材	A15d-V	187	両端2cm程を斜めに削って柄としている、断面方形
—2	柄材	□1W-V <sub>1</sub>	(218)	別図8-7
—3	柄板?	ハ4W-V <sub>1</sub>	195	両端に突出部を作り出し小孔を穿つ、突出部に擦痕
—4	柄材	□6-V	(314.5)	別図8-2
—5	柄材	ハ5W-V <sub>1</sub>	(240)	端部に突出部(柄)を作り出したもの
—6	柄材	ハ5W-V <sub>1</sub>	(413)	写93A-5と同形品、一端に施コゲ
—7	柄材	ハ15f s-VⅦc	(476)	写93A-5と同形品、ほぼ完存
93B-8	柄材	ハ5W-V <sub>1</sub>	(405)	端をL字形に挟り、有孔の柄を作る、基部に円形斜孔
—9	柄材	イ2.4.5-V <sub>1</sub> Ⅶ	(397)	写93B-8と同形品、基部は長方形
—10	柄材	□5-V <sub>1</sub> Ⅶ	(275)	写93B-8と同形品、孔なし
—11	柄材	枝2-V <sub>1</sub>	(255)	写93B-8と同形品、基部長方形、孔なし
—12	有孔板	□6E-VⅦ	(97)	先端部を尖らして小孔を穿つ、端部欠損
—13	有孔板	ハ4W-Ⅳ	142	厚さ2mm級の薄板で両端に小孔があく
—14	有孔板	ハ4W-Ⅳ	132.5	写92B-13と同形品
—15	有孔板	大溝内	(137)	両端部欠損、一端に方形の孔がみられる
—16	柄板?	ハ6E-V <sub>1</sub>	182	両端に段をつけ小孔を穿つ、箱の側板か
—17	柄材	ハ8W-V <sub>1</sub>	(195.5)	写93B-8と同形品か、端部欠損、孔なし
—18	有孔板	ハ7W-V <sub>1</sub> 下	280	両端欠損、長方形の孔2個残存
94A-1	有孔板	A15c-Ⅳ	(550)	別図27-7
—2	有孔板	□3-VⅦ	(195)	円孔3個が斜めに貫通
—3	有孔板	ハ8W-V <sub>1</sub>	(253)	径約4mmの円孔5個が斜めに貫通
—4	有孔板	ハ5E-V <sub>1</sub> 下	(261)	円孔斜めに貫通

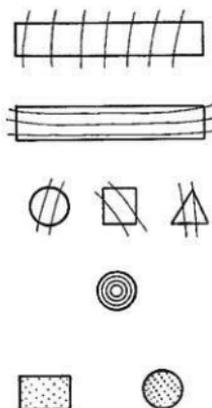
図版番号	品名	山土地点・層位	最大長	備考
94A-5	有孔板	□6-VII	(102)	別図28-11
-6	有孔板	大溝内	(257)	円孔斜めに貫通
-7	有孔板	□3-VIII	(115)	端部に一辺8.5mmの方孔を穿つ
-8	有孔板	枝2-V <sub>1</sub>	(184)	円孔3個が斜めに貫通
-9	有孔板	ハ7W-V <sub>2</sub>	(147.5)	円孔2
-10	有孔板	ハ8E-V <sub>2</sub>	(112)	円孔1
-11	有孔板	大溝内	432	径約4mmの円孔3個が斜めに貫通、先端を高くする
94B-12	有孔長方形板	□5E-V <sub>2</sub>	173	別図28-5
-13	有孔長方形板	イ1-V	153.5	別図28-3
-14	有孔長方形板	□5E-V <sub>2</sub>	173	半割、中央部に円孔、隅に小孔を穿つ
-15	長方形板	イ2-V <sub>1</sub>	140	小孔なし
-16	有孔長方形板	イ1-V	158	別図28-2
-17	有孔長方形板	イ1-V	159	別図28-1
-18	長方形板	□5E-V <sub>2</sub>	172	別図28-7
95A-1	箱板?	ハ5E-V	118	上部2か所に挟り、箱板か
-2	箱板?	ハ5E-V <sub>2</sub>	330	箱板か
-3	有孔板	A15f-V <sub>1</sub>	281	小孔が5か所にあく
-4	把手付板材	イ2.4.5-IVV	211	写95A-5と同形
-5	把手付板材	イ2.4.5-V <sub>1</sub> VII	242	変形の把手?がつく、先端部に挟り?あり
95B-6	有孔長方形板	A15i-IVV <sub>1</sub>	410	手斧痕が残る、片よせして方孔2個を穿つ
-7	柄板	□5-V <sub>1</sub> VII	270	方形の着柄孔、側縁部は厚紙痕顯著
-8	有孔長方形板	□3-VIII	(354)	欠損品、楕円形の孔が2個あく
-9	有孔長方形板	ハ7W-V	335	全面に手斧痕、方孔1
96A-1	有孔長方形板	イ2-V <sub>1</sub>	203	別図28-4
-2	有孔長方形板	ハ6E-IV	260	両端に長方形の孔を穿つ
-3	有孔長方形板	A16a-V	290	写96-2と同形
-4	有孔長方形板	ハ5W-V <sub>2</sub>	295	写96-2と同形
96B-5	有孔長方形板	—	—	写96A-1の裏面
-6	有孔長方形板	枝3-V <sub>1</sub> 中	(247)	写96-2と同形、端部欠損
-7	有孔長方形板	枝3-V <sub>2</sub>	(137.5)	写96-2と同形、端部欠損
-8	有孔長方形板	枝3-V <sub>3</sub>	(207)	写96-2と同形
97A-1	有孔板	□5E-V <sub>2</sub>	171.5	別図28-14
-2	柄板	A15f s-VII b	172	一面に突起部を削り出し、中央に着柄孔を穿つ
-3	有孔板	□4Wb-V s	157.5	別図28-6
-4	有孔板	A15e h-VIII	170	径8mm程の円孔4個を穿つ
-5	有孔板	□6-V	197	別図28-13
-6	有孔板	A15e-V <sub>1</sub> F	(159.5)	別図28-12
-7	有孔板	イ4-V <sub>1</sub>	173	別図29-1
97B-8	有孔板	A15f-V <sub>2</sub>	(515)	別図27-8
-9	長方形板	枝5-V <sub>1</sub>	430	半円形を呈する挟りがある、一部欠損
-10	板	ハ5E-V <sub>2</sub>	438	両端を斜めに削り取った板材
-11	有孔板	イ2.5-V <sub>1</sub> VII	306	両端に方孔を穿ち、中央部に挟りを入れる
-12	有孔板	A15f s-VIII	535	前物の板用品か、方孔が1個あく
98A-1	厚板	A15e-V <sub>1</sub> F	410	別図20-4
-2	厚板	イ5-V <sub>1</sub>	(340)	別図27-2
-3	厚板	□6-V	257	別図27-3
-4	有孔厚板	ホ6-V <sub>1</sub> N	365	半割、縦向に2か所方孔?があく
98B-5	有刮角材	A15h-V	312	半割、側面中央の挟りは方孔か、手斧痕が残る

図版番号	品名	出土地点・層位	最大長	備考
98B-6	建築部材	A15e-V	(195)	納残存、朽穴上部に用途不明の孔がある
-7	角 合	ホ2-OFPV <sub>3</sub>	153	面中央に使用による凹みあり、叩き台か
-8	丸 合	ロ5E-V <sub>2</sub>	(289)	中央部腐蝕、周辺には刃痕跡等、叩き台か
99A-1	有 刻 梯	イ4-V <sub>1</sub>	193	別図29-29
-2	鑄 欠?	大溝内	34	径7.5mm、深15.5mmの未貫通孔があく
-3	有 孔 尖 頭 棒	ホ2-ミノV	47	別図29-18、錆欠か
-4	有 孔 板	イ6-V	80	別図28-9
-5	先 端 加 工 材	B16-SB	(70)	別図27-14
-6	浮 子	ハ5W-V <sub>3</sub>	91	断面楕円形を呈し、中空となる
-7	小 型 木 製 品	ハ5W-V <sub>1c</sub>	60.5	部品材か、2か所に棒残存
-8	有 孔 板	ホ6-V <sub>4</sub> N	76	別図28-8
99B-9	代 掻 の 歯	A16a-V <sub>II</sub>	320	刀状に作り出したもの、端部に方形孔あり
-10	鑄 柄?	ハ5W-V <sub>3</sub>	(137)	表示値は下部の長さ
-11	有 種 木 製 品	ハ6E-V <sub>1a</sub>	(246)	16.5m×22mmの楕円形材の側面に幅7mmの溝を切る
-12	有孔スタンプ形木製品	A15d-V	106	回転軸か、鼓状を呈し一半に鏽蝕が顕著、円孔あり
-13	有 孔 材	A16a-V <sub>1,2</sub>	(270)	欠損品、円孔あり、把手状を呈する
-14	被 掘?	ハ6E-V <sub>1a</sub>	(207)	端部欠損。写99B-15と同形品
-15	被 掘?	A15i-V <sub>3</sub>	(243.5)	別図27-6
100A-1	有 刻 細 棒	ハ7E-V <sub>2</sub>	(206)	先端部に缺り、曲物作りの物指か
-2	有 刻 細 棒	ロ4-V	(148)	曲物作りの物指か
-3	有 刻 細 棒	ハ15W-IV	(124.5)	曲物作りの物指か
-4	有 刻 細 棒	A15f-IVV	(105)	曲物作りの物指か
-5	有 刻 細 棒	B16b-V	(118)	別図29-23
-6	有 刻 細 棒	B16b-V	(112)	別図29-25
100B-7	剣 形 木 製 品	ロ3-V <sub>II</sub>	(150)	形代か
-8	木筒形木製品	A15f-V <sub>2</sub>	90.5	別図26-25
-9	木筒形木製品	A15f-IVV	86	切り込みのある番串か
-10	木筒形木製品	A15f-V <sub>2</sub>	78.8	別図26-22
-11	木筒形木製品	A15f-IVV	78.5	切り込みのある番串か
-12	木筒形木製品	A15f-V <sub>2</sub>	78	別図26-23
-13	木筒形木製品	A15f-V <sub>2</sub>	74.5	別図26-24
-14	木筒形木製品	ハ6E-V <sub>1a</sub>	90	下端部を尖らす、切り込みのある番串か
-15	等 柱	A15g-V	52	下部欠損
-16	塊 状 木 製 品	A15g-V	67.5	完形品、全面を丁寧に削り込む
-17	小 型 木 製 品	A15g-V	63	下部に突出部を作り出す、全面にケズリ
-18	有 孔 薄 板	A15d-V	91	一部欠損、一端部に小孔2個を穿つ
-19	印 判	ハ5E-V <sub>IIb</sub>	120	下部に墨痕、完形品
101A-1	有 刻 尖 頭 細 板	ハ7E-V <sub>1</sub>	422	先端部を尖らせ、頭部に刻みをつける、板材
-2	有 刻 細 板	イ5-V <sub>1</sub>	340	両端に刻み、板材
-3	有 刻 尖 頭 細 板	枝6-V <sub>1c</sub>	(283)	先端部を尖らせ頭部に刻みをつける、板材
-4	有 刻 尖 頭 細 板	A15f-V <sub>2</sub>	(278)	別図26-27
-5	先 端 加 工 材	ロ9-V	226	別図29-19
-6	先 端 加 工 材	ロ4-V	286	別図30-12
-7	先 端 加 工 板	枝1-V <sub>II</sub>	360	全面削り、頭部を2つ割りにする
101B-8	代 掻 の 歯	大溝内	(304)	別図30-13
-9	代 掻 の 歯	A16a-V	(355)	一端は断面方形の着装部、他端は刀状に削る
-10	代 掻 の 歯	ハ6E-V <sub>4</sub>	460	"
-11	代 掻 の 歯	ハ4E-V <sub>1a</sub>	(445)	"

図版番号	品名	出土地点・層位	最大長	備考
IB-12	先端加工材	イ5-V	(474)	別図30-7
-13	先端加工材	ロ3-V	598	両端を鷲鼻状に削り込んだもの
IB-A-1	先端加工材	ハ4E-VIIa	193	完形品, 上端部に捺打痕, 板材, 横か
-2	先端加工材	イ4E-V <sub>2</sub>	185	完形品, 丸木
-3	先端加工材	ロ5E-V <sub>2</sub>	(298)	上部欠損, 丸木
-4	先端加工材	イ5E-V <sub>2</sub> s	198	別図30-15
-5	先端加工材	A15fN-VIIc	(300)	上部欠損, 丸木
-6	先端加工材	ホ2-V <sub>4</sub>	310	完形品, 丸木, 横か
-7	先端加工材	ハ8W-V <sub>3</sub>	197	完形品, 割材, 横か
-8	先端加工材	イ3-V	213	別図30-14
-9	先端加工材	A15iN-VII	175	完形品, 丸木, 表皮残存, 横か
-10	先端加工材	ロ4-IV	(225)	完形品, 先端部にコゲ, 横か
-11	先端加工材	A15gN-VII	(200)	上部欠損, 割材, 横か
-12	先端加工材	A15gN-V	164	先端部に使用痕, 丸木, 横か
IB-B-13	尖頭棒	A15fs-VII	523	完形品, 丸木の半割材
-14	尖頭棒	イ6-V	442	完形品, 丸木の半割材
-15	尖頭棒	イ4-V <sub>1</sub>	447	別図29-8
-16	先端加工材	A15gN-VII	415	完形品, 弓の転用品か
-17	尖頭棒	A15fs-VIIc	440	完形品
-18	尖頭棒	A15es-VIIa	511	完形品, 丸木, 上部を鉤状に加工
IB-A-1	尖頭棒	ロ5Ea-V <sub>3</sub> s	517	別図30-8
-2	尖頭棒	A15c-V	(392)	全面をていねいに削る, 下部に挟り
-3	尖頭棒	イ2・4・5-V <sub>4</sub> VII	315	完形品, 全面をていねいに削る
-4	尖頭棒	A15gN-VII	(226)	上部欠損
-5	先端加工材	A16aA15g-VII	352	鷲状の木製品, 全面に削り
-6	尖頭棒	A15c-IV	222	別図29-12
-7	尖頭棒	A15fN-VII	201	完形品, 板材
-8	尖頭棒	人溝内	(136)	板材
-9	尖頭棒	イ5-V <sub>1</sub>	(153)	全面にケズリ
-10	尖頭棒	ハ4W-V	(190)	板材
-11	尖頭棒	ロ4-V	150	完形品, 丸材, 別図29-15
-12	先端加工材	A15f-V <sub>3</sub>	258	別図29-11
-13	先端加工材	A15f-V <sub>2</sub>	203	別図29-20
IB-B-14	尖頭細板	枝4-V上	(351)	板材の先端を尖らしたものの, 上部欠損, 斎草か
-15	尖頭細板	B16b-V	(97)	"
-16	尖頭細板	イ2-V	(142)	"
-17	尖頭細板	A12f-IV	(153)	"
-18	尖頭細板	A16a-V <sub>2</sub> s	(67)	"
-19	尖頭細板	ハ6E-VIIa	(170)	"
-20	尖頭細板	イ7-IV	(315)	"
-21	尖頭細板	イ5-V <sub>2</sub>	(251)	"
-22	尖頭細板	ハ5W-V <sub>3</sub>	(220)	"
-23	尖頭細板	枝2-V <sub>4</sub>	(195)	"
-24	尖頭細板	ホ5-OF	(96)	"
IB-A-1	有頭棒	イ4-V <sub>3</sub>	(714)	別図30-1
-2	有頭棒	イ3-V	(530)	表皮残存, 丸木
-3	有頭棒	ロ6W-VIIb	420	完形品, 表面腐蝕, 丸木
-4	有頭棒	C11c-YT9-D <sub>2</sub>	(460)	頭部はていねいな作り, 丸木

図版番号	品名	出土地点・層位	最大長	備考
11A-5	有頭棒	A15h s-V <sub>4</sub>	(170)	頭部及び頭部周辺に摩耗痕、丸木
-6	有頭棒	ハ2 E-IV	225	完形品、全面をていねいに削る
-7	有頭棒	A16c N-D	710	弥生時代の遺物、刺材、大溝の外側
11B-8	有頭棒	A15f-V <sub>2</sub>	463	別図30-5
-9	有頭棒	イ6-VI	(420)	丸木
-10	有頭棒	ロ5-V <sub>4</sub> VII	(320)	丸木、一部に削り
-11	有頭棒	ホ5 OF-V	(361)	別図30-2
-12	有頭棒	イ3-V	(450)	別図30-3
-13	有頭棒	A15f	121	完形品
-14	有頭棒	B10g-YT9-D <sub>2</sub>	(104)	頭部破片
-15	有頭棒	イ4-V <sub>2</sub>	157	別図30-6
-16	有頭棒	C12c-YT9	(235)	丸木
-17	有頭棒	B13c-YT7-D <sub>2</sub>	(150)	有頭部を丸く削り出す、摩耗痕あり
115A-1	有頭木製品	B15-140-VI	272	一端を尖らす、幅31mm
-2	先端加工材	イ5-V <sub>2</sub>	215	別図29-4
-3	櫛状木製品	大溝内	531	歯7本の内1本欠損、厚さ9mm
-4	尖頭板	ロ4W-V <sub>2</sub>	117	別図29-9
-5	有刻棒	ロ6-V	195	別図29-17
-6	有刻薄板	枝2-V <sub>4</sub>	(177)	両端欠損、側面に刻み
-7	有刻薄板	イ3-IVb	(174)	別図29-2
115B	束	ロ5-V <sub>2</sub>	(400)	材質不明

## 別冊図版収載資料記録表



- 凡 例
- A**
- 第1行目上段に別冊図版番号, 下段に写真図版番号を記した。
  - 第2行目上段の記号は発掘年次と遺物番号で, 下段は出土地点, 出土層位を示す。
- B**
- 出土層位のとりえ方は第3次調査時と第4次調査時とで異なる。
- C**
- 法量は, 全長・幅・長さを示した。計測箇所は原則的には断面作成箇所である。折損品には( )を付して現存長を示した。単位はmmである。
- D**
- 木取りは左図のように木目の方向によって分類した。面取りがあって角材状を呈しても年輪が一道するものは丸木として扱った。全て実測者の主観に基づく判定である。
  - 表の末尾に実測と清查の責任者名を略号で示した。  
ム: 向坂彌二, カ: 川江秀季, タ: 辰巳均, ウ: 津畑敏, サ: 佐野一夫, ス: 菅原正明(素文研) ヤ: 八木勝行(藤枝市教委)
- E**
- 本表の作成は川江が担当した。
  - 権限の固定は山内文氏による。

## 不明・その他

**F**

図版番号 写真図版番号	記号	名称	法量	樹種	木取	特徴	実測	清查
3-1 5A-1	3-686-1 B16b-V	鋤先	(313)・86・15		E	半割, 先端欠損, 中央部に長さ177mmにわたって抉りがある。	カ	カ
3-2 6B-5	4-338 A151-IV	川下駄	238・135・39		B	下駄状を呈するが, 断面は不整形	サ	カ
3-3 7B-6	4-528-2 イ4-V <sub>3</sub> N	鎌柄	(123・33・22) (145)・26・21		E	二ツ折れ, 中間部欠損 M18の木柄	カ	カ
3-4 7A-2	M-14 ホ6-VN	鎌	358・27.8・28		E	鉄刃付, 穂で固定 東京国立文化財研究所により真空凍結乾燥	カ	カ
3-5 7A-1	3-850 B16c-SDF	鎌	364・21・20.5	アベツキ	E	鉄刃付, 長さ131.7 刃幅18.5 東京国立文化財研究所により真空凍結乾燥	カ	カ
3-6 7B-3	4-335 ロ6-VII	鎌柄	(103)・31・12		E	頭部のみ	カ	カ
3-7 7B-4	4-546 イ4W-V <sub>3</sub>	鎌柄	(77)・21・21		E	頭部のみ, M16の柄	カ	カ
4-1 7B-9	3-846 B16c-S C 榎	木柄	347・24・25		E	頭部に切り込みなし, 榎木製品	タ	カ
4-2 8A-1	3-845 B16b-VII下	木柄	351・22・28		D E	丸木の二面を面取りし, 頭部を二ツ割り, 写9A-1と同巧品, 鎌柄か	タ	カ

図版番号 写真図版番号	記号	名称	法 量	樹種	木取	特 徴	実測/清書
4-3 8A-6	4-45 イ6-V	柄	369・53・40		アラ カシ	E 一部欠損・方孔2 側面に刀痕	カカ
4-4 9A-2	3-743 B16c-d VI	柄	506・53・33			B 針葉樹製、他の柄頭に比べつくりが異なる。粗作り、側面は撫打されたように見える	カカ
4-5 8A-5	4-51 イ3-V	柄	(187)・29・26		アラ カシ	E 把部のみ、斧柄か	カカ
4-6 21A-3	4-41 ロ1-V	砧	(391)・66・(59)		クスギ	E 柄部欠損、形状は砧に似ているが側面に打ちきづ	カカ
4-7 21A-2	4-142 A15e-IV上	砧	301・60・(49)		クスギ	E 側面に打ちきづ	カカ
4-8	3-816 B16-S A	刀子	全長 145.7 (65.5)・16.5・12			E 尖鋭後、自然乾燥、収縮	カカ
4-9 23B-6	3-851 B16c・S D	刀子	全長 213 135・12.5・13			E 黒塗塗 東京国立文化財研究所により真空凍結乾燥	カカ
4-10 23B-7	4-M12 イ5-V S A	刀子	全長 197 148.7・19・13.4			F 白木一本造り、幅 3.8mm の挟り 東京国立文化財研究所により真空凍結乾燥	カカ
4-11 23B-8	4-M13 ホ9-V <sub>2</sub>	刀子	全長 225 109.2・18・11			E 白木一本造 東京国立文化財研究所により真空凍結乾燥	カカ
5-1 6A-1	3-540 B16b a-V	大足	(785)・(465)・(32)			C 組み合わせ品。出土状況から復元したもの	サカ
5-2 6B-2	3-740 B16c d-VI	大足	(709)・39・28			C 方孔内に横木残存。横で止まるものあり別図、10-1と同形	カカ
6-1 15A-1	4-492 イ5-V <sub>4</sub>	背負子	435・43・42 枝長 291		ヒノキ	D 枝にひもをまきつけてある。 ひもはマツを削いたもの	カタ
6-2	4-488 イ5-V <sub>3</sub>	背負子	(271)・30・32 枝長 (100)			D 折損部分が多く、全容不明。 小作りで細い。	カカ
6-3 16A-1	4-547 イ4W-V <sub>2</sub>	背負子	402・50・46 枝長 260			D 枝中央部上端に切り込み、枝にひもの一部残存	カタ
6-4	3-825 B16-S B下	背負子	(342)・50・47			D 幹のみ	タカ
6-5 14B-6	4-544 A15f-V <sub>3</sub> N	背負子	490・52・45			D 枝欠損	カカ
6-6 14B-3	4-247 ロ5E-V <sub>3</sub>	背負子	478・48・41 枝長 (90)		マツ	D 枝折損。幹下端部折損と思われるが、切り込みが逆であるので、あるいは一段挟りの充存品か	ウカ
6-7	3-786 B16c-VI	背負子	(405)・48・47			D 幹断面欠損・枝折損	タカ
6-8 17B-5	4-489 イ5-V <sub>2</sub>	背負子	399・47・45			D 枝折損	ウカ

図版番号 写真図版番号	記号	名称	法 尺	樹種	木取	特 徴	実測	消番
7-1 9B-9	4-370 A15 f-V <sub>1</sub>	代掻	(272)・(84)・(39)	クスギ	E	中央部で二ツ折れ、歯3本欠 手為鎌か	ウ	カ
7-2 23A-5	4-459 イ4W-V <sub>1</sub> S	糸巻	(186)・(102)・(52)	ハン ノキ	E	5角形、腐蝕が多い	サ	カ
7-3 92B-5	4-525 イ4-V <sub>3</sub>	有樋角形木 製品	393・58・36.5	エノキ	E	数ヶ所傷があるがほぼ完存品	タ	タ
7-4 22A-6	3-835 B16 b-VII	布巻具?	(484)・23・12		C ・ E	二ツ折れ、接合せず 布巻具か	サ	カ
7-5 22B-14	4-487 B16 c-V	柄材	750・24・12		C	柄端の一部を欠くが略完存品。中央部 でやや細くなり、断面もやや丸くなる	カ	カ
8-1 22B-13	4-487 A15 f-V <sub>3</sub>	柄材	(672)・22・15		C	自然乾燥、歪、収縮あり、中央部で二 ツ折れ	ウ	カ
8-2 93A-4	4-124 ロ6-V	柄材	(314.5)・(170)	ヒノキ		整棒1欠、目釘で止めるものあり	カ	カ
8-3	4-384 イ4W-V <sub>1</sub> S	柄材	187・16・16		C	貫通孔に目釘残存、側面に未貫通孔	カ	カ
8-4 92A-2	4-478 ホ6-V <sub>3</sub> N	十字形有樋 木製品	(265)・41.5・38		D	中央部に貫孔あり、目釘残存、両端部 腐蝕、横紋あり	タ	タ
8-5	4-513 ホ6-V <sub>2,3</sub>	柄材	(314)・27・11.5		B	頭部・下部欠損、下部にいくにしたがい 尚くなる。表裏に未貫通孔各1	カ	カ
8-6	4-217 ロ1W-V <sub>2</sub>	柄材	256・(19)・11	ヒノキ	A	縦半割、主頭をなすか。頭部に2孔	カ	カ
8-7 93A-2	4-209 ロ1W-V <sub>1</sub>	柄材	(218)・12.5・10	ヒノキ	A	下部欠損・下部にいくにしたがい薄く なる。	ウ	カ
8-8 92A-1	4-611 イ2-V <sub>7</sub>	有樋十字形 木製品	295・47・14.5		B	広葉樹の板材をていねいに削り込む	タ	タ
9 91A B	4-382 イ4W-V <sub>1</sub> S	有樋十字形 木製品	280・273・51		D	丸木の半截。中央部の方孔に断面方形 の目釘で2ヶ所を固定している。上側に 接痕	タ	タ
10-1 18B-5	3-710-1 B16 b-V	編合	(694)・41・23		B	大足の転用品、端部を抉り、小孔を穿 つ痕摩耗顯著	カ	カ
10-2 18B-6	4-193 ロ1-V	編合	(479)・45・26	シイ	E	両端部欠損	サ	カ
10-3 18B-7	4-344 ロ6-V S	編合	(361)・44・23		E	両端部欠損	サ	カ
10-4 18B-10	4-331 ロ4W-VII	編合	(382)・33・16	サウラ	C	両端部欠損	サ	カ
10-5 18B-11	4-70 イ6-VI	編合	(317)・18・13	ヒノキ	C	両端部欠損	サ	カ

図版番号 写真図版番号	記号	名称	法 展	樹種	木取	特 徴	実測寸法
10-6 18B-12	4-30 イ6-V	編介	(278)・21・16	ヒノキ	C	両端部欠損 別図10-5と同一個体か	サカ
10-7 20A-7	4-314 □4Wb-V S	編繩	126・53.5・26.5		E・ D	経緯では、有孔筒形木製品と称していた。丸木の縦二ツ割り	タカ
10-8 20B-12	4-27 イ6-V	編繩	146.5・61・30.5	クリ	E・ D		タカ
10-9	4-32 □4Wb-V S	編繩	133・74・37.5	クリ	E・ D		タカ
10-10	4-79 □4-V	編繩	149・69・31.5	クスギ	E・ D		タカ
10-11 20B-15	4-337 □2Ea-V	編繩	163・57.5・52		D	針葉樹の角材。孔が折損している為図のように貫通していたのか疑ではない	タカ
10-12 41A-3	4-456 A15i-V <sub>2</sub>	刳物	(195)・(78.5)・56		A	外面に黒色塗料(漆)らしきものが認められる。	タカ
10-13 41A-4	4-267 □5E-V <sub>2</sub>	刳物	(192)・(107)・90		E	内面に刀痕顯著	カカ
10-14 41A-2	4-177 □4-V <sub>上</sub>	刳物	(253)・(106)・39	モミ	B	把手付であったと思われる。 「あかだし」か	タカ
10-15 38A-9	4-105 □6-V	杓文字形木製品	(290)・61・6.5	ヒノキ	B	柄上端欠損、全面でいいに削り込む	タカ
11-1 40A	4-216 □1W-V <sub>2</sub>	刳物	(540)・(149)・24	アカカシ	E	柄上端欠損、底部欠損、表裏全体に刀痕顯著	ウカ
11-2	4-307 ホ5-IV	刳物	(145)・(37)・(32)		B	把手	ウカ
11-3 41B-6	4-104 □6-V	刳物	(263)・(95)・(21)	スギ	B	「あしだし」か	タカ
11-4 44B-2,3	4-218 イ3-IVa	小円	高さ 174 口径 160	アカマツ	D	OE1 地点出土。組築倒板と体出刳物、内面は使用により摩耗顯著	カカ
11-5 24A-2	4-326 □5Ea-V <sub>2</sub> N	把手付楕円形白物	714・223・14		B	内法長 594 同形の板を2枚組み合わせて使用 結合孔5 把手に孔あり	カカ
11-6	4-194 □1-IVb	把手付楕円形白物	(530)・(110)・7.5	ヒノキ	A	把手欠損 孔に残残存、刀痕顯著	カカ
12-1 36A	4-43 イ3-IV	楕円形曲物倒板	長径 535、短径 422 高さ 220	ヒノキ	B	OE1 地点出土。遺棄に捨す内面凹面に刺眼、木釘孔と思われるものは1つしか確認できない	スカ
12-2 27B-2	4-81 □4-IVb	楕円形曲物	403・27.9・9	ヒノキ	A	倒板高20mmまで残存 2枚の別材に合わせる。刀痕顯著 小口にそれぞれ2孔を斜に穿つ	カカ
12-3 27B-4	4-259 □5E-V <sub>2</sub>	方形白物	261・(211)・10	ヒノキ	A	表裏に刻線多、裏面黒色	タカ

図版番号 写真図版番号	記号	名称	法量	樹種	木取	特 徴	実測 清番
13-1 27A-1	4-93 □7-IVb	方形曲物	653・(286)・11.5		B	榫残存 側板形状不明 箱か 側面腐蝕	カカ
13-2 25B-5	4-683 □9-V	楕円形曲物	665・(298)・16		B	セクション帯より検出・榫残存	カカ
13-3 25A-3	4-44 イ3-IV	楕円形曲物	(650)・199・12		B	側板(別図12-1)に隣接 2枚を結合させて使用 結合用榫残存 4.0×3.75mmの木釘が打ち込まれた 孔あり	ウカ
13-4	4-517 イ4-V <sub>3</sub>	楕円形曲物	(570)・(87)・10		B		ウカ
14-1 31-1,4	4-270 A15 i-IV	円形曲物	179・ 6.5	ヒノキ	A	焼印「太」 總刻「杓」 一部側板残存	ヤウ
14-2 29B-9	4-316 □5 E a - V <sub>2</sub> S	円形曲物	(156)・ (11)		A	漆状の黒色物付着	ウタ
14-3 30A-2	4-117 □6-V	円形曲物	178・ 10	ヒノキ	A		スウ
14-4 29A-1	3-784 B16 c-VII	円形曲物	234・ 11		A	円周を測した刀子先による切りきず	スタ
14-5 28A-2	3-794 B16-S B	円形曲物	(442)・ 8		B	復元径 516mm側板アタリが認められ る	スウ
14-6 31A-3	4-687 □5-V a	円形曲物	160・ 6		A		カウ
14-7 30B-5	4-532 イ7-V <sub>1</sub> N	円形曲物	(187)・ 8		A	刀痕多し、とじ穴に榫と木片(挿?)	ウウ
15-1 30A-1	4-33 イ6-V	円形曲物	189・ 7	ヒノキ		刀痕、削り痕、側板アタリ 繞刃丸味をおびる。	スタ
15-2 29B-7	4-500 ホ6-V <sub>1</sub> N	円形曲物	137・ 8.5		A	表面が黒くよごれている	カウ
15-3 29A-2	4-632 ホ2-OFV	円形曲物	242・ 8		A	側板アタリ幅3mm 刀痕顯著	カウ
15-4 29B-6	4-559 ホ6-S E <sub>2</sub>	円形曲物	156・ 11		A	裏面に刀痕顯著 表面滑りか	カウ
15-5	4-297 イ7-V	円形曲物	209・ 9.5		A		ウタ
15-6 33B-6	4-205 □1-V	円形曲物	(180)・ 11	ヒノキ	A	側面に3mm×2mmの目釘穴	カウ
15-7 33A-1	4-668 ホ2-OFV <sub>1</sub>	円形曲物	158・ 10		A		カウ
15-8 32B-7	4-533 イ7-V <sub>1</sub> S	円形曲物	149・ 4.9		A		ウウ

図版番号 写真版番号	記号	名称	法 量	樹種	木取	特 徴	実測寸書
15-9 32B-6	4-431 A15f-V <sub>1</sub>	円形曲物	140.5・7.5		A	意味不明な切りキズ	タタ
15-10 33C-9	4-221 □5E-V <sub>1</sub>	円形曲物	121・8	ヒノキ	A	焼印「足」か	ヤウ
15-11 33C-8	4-92 □6-IVa	円形曲物	117・5	ヒノキ	B		カウ
15-12	4-350 イ5-IV	円形曲物	(11.5)・6		A		ウタ
15-13 33B-5	4-206 □1W-V <sub>1</sub>	円形曲物	183・7	ヒノキ	A		カウ
16-1 33A-3	4-192 □1-V	円形曲物	189・6	ヒノキ	A	円周を圍いた刀子先による切りきず	カウ
16-2 32B-11	4-29 イ6-V	円形曲物	61・8.5	サクラ	A	正門ではない	ウウ
16-3 33B-4	4-485 ホ6-V <sub>2</sub>	円形曲物	193・7		A	木釘残存 中央部に2孔	ウタ
16-4 33B-7	4-537 ホ6-V <sub>2</sub>	円形曲物	(162)・7		A		ウウ
16-5 37A	4-304 A15f-IV	円形曲物側板	外径 285 内径 270 高さ (70)		A	木釘穴合計14 一部に木釘残存 廻しの側板幅33mm 内面全周に軽い縦刻線、内面鉄線りか	スウ
16-6	4-39 イ6-V	円形曲物	12.4・8		B	側板・廻しの側板一部残存	スウ
16-7 34C-3	4-303 A15f-IV	円形曲物	外径 130 内径 120 高さ 73		底板 B	廻し側板付、不正円、側板の中央部5 周を補強、紐内に太い刻線	スウ
16-8 37B-8	4-106 □6-V	曲物側板	(357)・23・5.5	ヒノキ	B	他に破片多数あり、大型曲物の廻しか 内面に刻線	カカ
17-1	4-280 □4Wa-VN	円形曲物側板	径 161 高さ (59)	ヒノキ		下辺に幅6mmの切り込みあり、 「カキイレソコ」か	ウウ
17-2 37B-6	4-429-2 A15f-V <sub>1</sub>	曲物側板	長さ (154) 高さ 28.5		A	廻しの側板か	タウ
17-3	4-530 イ4-V <sub>1</sub>	曲物側板	長さ 142 高さ 32		A	廻しの側板か	カカ
17-4	3-728 B15he-V	円形曲物側板	高さ 69			円周復元不可 両端部破損	カカ
17-5 37B-7	4-319 □5ea-V <sub>2</sub> S	曲物側板	長さ (304) 高さ 75		B	木釘孔、上縁に焦痕	ウカ
17-6 38A-1	4-37 イ6-V	柄杓の柄	(358)・12・10	スギ	C	先端部の長さ10mmほど摩耗	カカ

図版番号 写真図版番号	記号	名称	法量	樹種	木取	特徴	実測	備考
17-7 38A-2	4-49 イ6-V	柄杓の柄	(330)・12・12		ヒノキ	C	先端部摩耗, 先端より 98mm から 106mmの間が摩耗	カカ
17-8 38A-3	4-466 A15 f-V	柄杓の柄	(238)・10・8.5			C	先端部摩耗, 先端より 67mm から 73mmの間が摩耗	カカ
17-9 38A-7	4-363 イ5-IV b	箸	255・6.5・			C	中央部太さ 6.5mm, 先端部太さ 4.5 mm	タカ
17-10 38A-5	4-394 イ6-IV b	箸	229・6.5			C	先端部に焦げ	カカ
17-11 38A-6	4-364 イ5-IV b	箸	(178)・8			C	先端部太さ 4×2 cm	タカ
17-12 43B-5	3-665 C16 a-a-V	火鋸口	167・22・11			C	未使用, 焦げ	カカ
17-13 43B-3	4-40 ロ1-V	火鋸口	(46)・26・10.5	スギ	A	A	もう少し幅が広がったものを削りなおして(幅を細くして)再利用したものか, 欠のわきに不自然な焦げが認められる	タカ
17-14 43B-4	4-312 ロ4W b-V s	火鋸口	(87)・47・12			B	貫通孔 3 孔の内面焦げ	カカ
17-15 39-2.6	4-116 イ3-IV	換物盤	径(208)・高24 底径88		ヒノキ	A	底部に刀子先による陰刻「川」 外面全面に焦げ, 平安前期の削り出し 高台に陰痕	カカ
17-16 39A-3	4-167 ロ4-IV	換物盤	径(200)・高25.5		ヒノキ	A	内面接合りか 外面焦げ, 外面に切りキズ	ウカ
17-17 39-4.8	4-260 ロ5W-V s	換物盤	高35		ケヤキ	E	小片の為, 直径約 54cm 奈良時代初期の高台に陰痕	ウカ
17-18 38B-10	4-295 ホ6-V	換物盤	径 165・高 11.5			A	内面円形に焦げ 底部に切りキズ多数	カカ
17-19 39-1.5	4-593 ロ6-V	換物盤	高(20)		ケヤキ	E	乾燥による歪, 亀裂, 径の復元不可 口縁欠損	ウカ
17-20 38B-11	4-309 ホ6-IV	換物盤	口径 167・高 12			A	底部に烙印	カカ
17-21 38B-15	4-514 ホ6-V s, s	換物盤	径 142・高 16		ヒノキ	A	中央部に長径 11.5mm 短径 10mm の貫通孔, 底部に切りキズ, 焦げ	ウタ
18 45・46	3-679 C16 a-a-V	俎	487・276・216				四脚付, 刀痕無敵	カカ
19 47・48	3-678 C16 a-a-V	俎	518・196.5・189.5	スギ			四脚付, 脚を榫で固定	カカ
20-1 57A-3	4-486 ホ6-SE t	円	(1205)・185	イヌ ガヤ	D	D	丸木一木, 白木 自然乾燥	ウカ
20-2	4-122 ロ9-V	円	(375)・29・26	ケヤキ	E	E	丸木, 全面鼠漆塗り, 両端使層 幅 15mm, 深さ 1mm 前後の種	カカ

図原番号 写真図版番号	記号	名称	法量	樹種	木取	特徴	実測	備考
20-3 55-2.4	3-740 B16c-IV	梯子	(731)・123・57	マツ	D	前後4段まで確認される。 丸木脚子	カ	カ
20-4 98A-1	4-154 A15e-V <sub>7</sub>	厚板	410・113・27	ヒノキ	B	隠板か、表面ケズリ裏面ワレ	サ	カ
20-5	4-600 ※2ミゾ-V	角材	310・157・63		B	側面に円孔、半割品	ウ	カ
21-1 60B-6	3-700-1 B16c-V	人形	(231.5)・34・6		A	両腕欠、足先欠	タ	カ
21-2 60B-7	3-700-2 B16c-V	人形	(194)・28・3			両腕欠、足先欠	タ	カ
21-3	3-681-3 B16b-d-V	人形	225・(11)・4		B	腕半割、腕欠	サ	カ
21-4 60A-1	4-115 ロ9-V	人形	142・29・5	ヒノキ	A	表裏ともワリ面	カ	カ
21-5 60A-2	4-116 ロ9-V	人形	152.3・27.6・4.8	ヒノキ	A	髷で目・鼻・口・ヒゲを表現している	カ	カ
21-6 59-2.7	4-361 A15f-V <sub>2</sub>	人形	(86)・23・1.5		A	髷で目鼻・腕・衣を表現	ヤ	カ
21-7 60B-8	4-362 イ7-V <sub>1</sub>	人形	(193.5)・(25)・(3)			頭欠、腕半割、膝部を刀子先による切り込みで表現	ウ	カ
21-8 61A-4	4-8 イ6-IV	人形	(86)・16.3・4.0	ヒノキ	A	胴部破片	タ	カ
21-9	4-416 A15i-V <sub>2</sub>	人形	(103)・(17)・5		B	半割 脚欠損	カ	カ
21-10 59-3.8	4-328 ロ5e a-V <sub>1</sub> N	人形	(87)・(18)・2		A	顔、頭髪を表現	ヤ	カ
21-11 59-1.6	4-253 ロ5E-V <sub>2</sub>	斎串	137.6・13・4		A	顔を横書、A種	ヤ	カ
21-12	4-42 ロ1-V	馬形	(119)・(19)・5.8	ヒノキ	B	頸部欠損 台形板の上部を1ヶ所、下部を2ヶ所 缺って形づく。尾はドる。	タ	タ
21-13 63-1.5	4-34 イ6-V	馬形	284・29.5・3.5	ヒノキ	A	完存	タ	タ
21-14 63-3.7	4-511-1 ※6-V <sub>2</sub>	馬形	137・41・6		B	頭部折損、略完形 腹部に長さ7.5mm の切り込み	カ	タ
21-15 63-2.6	4-403 イ4E-V <sub>1</sub> S	馬形	202・41・6	ヒノキ	A	目を横書、手綱を表現したものの、片 面だけに横筋、胴部表裏に丹もしくは 朱による波文。腹部に長さ7mmの切 込み	カ	タ
21-16 62-3.8	4-588 イ2-VII	馬形	159・7.0		A	目を横書、頭部に貫通孔あり、腹部に 長さ5mmの切り込み	タ	タ

図版番号 写真図版番号	記号	名称	法量	樹種	木取	特徴	実測	備考
21-17 62-4.9	4-94 □6E-V	馬形	(147)・(28)・6	ヒノキ	B	腹部、尾部折損 目を喫害		スタ
21-18 62-1.6	4-415 A15f-V	馬形	141・33・6		A	尾上る。腹部にアタリか曇痕と思われ き変色した部分が表裏に認められる		カタ
21-19 83	3-664 C16a-a-V	鞍馬	119.5・96・4.5		A	牛を描く。孔の上部に着色 血物側板、二つ割れ		ヤカ
21-20 84	4-55 イ3-IVb	絵馬	118・76・3	ヒノキ	A	上半部の鬣が脱落、蹄の表裏があり、 馬を扱いたものと思われる。血物側板		ヤカ
21-21 85A, B	4-95 □6-IV	絵馬	145・(33)・8.5	ヒノキ	A	尾・蹄の表現から馬を描いたものであ る。上半欠損		ヤカ
21-22 85C, D	4-564 イ2-Vr	絵馬	134.5・58.5・6.5		F	尾・角の表現から牛であることがわか る。毛並を誇張		ムカカ
21-23 86	6-30 A15e-V <sub>1</sub>	絵馬	89・73・5		A	完存、薄い丹形、二つ割れ		ムカカ
21-24 87	7- 枝3-V <sub>2</sub>	絵馬	114・70.5・5		A	鼻脱落、隆起した白線が残る。 血物側板か、2孔あり 後輪縁斜紋・駝敷・障泥・手綱を表現		ヤカ
22-1 75A-2	4-387 イ4WS-V <sub>1</sub>	舟形	(244)・30・12			略形、両船縁に凹孔 丸底全面ケズリ		ウタ
22-2 75A-3	3-782 B16c-V	舟形	239・29・19		D	丸木の半底、両縁を尖らし横に切れ目 を入れて、船首・船尾をつくり出す 丸底		カカ
22-3 65-4.1	4-594 □6-V(sec)	舟形	206・30・20.5		A	乾燥による歪み、船首・船尾を誇張し て削り出す。やや丸底、長さ142、幅 21mm、深さ5mm削り込む		タタ
22-4 73B-4	4-330 □5Eb-V <sub>2</sub>	舟形	144・27・14		A	丸底		ウタ
22-5	4-298 イ7-IV	舟形	(123)・22・12		D	丸底、半截した丸木より削る		サタ
22-6 67-3.6	3-783 B16c-VII	舟形	218・21・19.5		D	丸木の四面をケズル、刃子で浅く船縁 を削り出す。両側縁および底に凹孔 SC下部出土		カカ
22-7 66A-2	4-471 イ4-V <sub>2</sub> S	舟形	190・16.5・12		C	底部に凹孔		タカ
22-8 71A-2	4-587 A15f-SN	舟形	147・(22)・14.5		B	乾燥による歪み・亀裂 船底に径22mm の凹孔		タタ
22-9	3-686-2 B16b-V	舟形	(105)・18・16		C	平底、船首を誇張して表現したものか		カカ
22-10 76A-3	4-329 □5Ea-SM	舟形	110・16・9		B	平底 長さ67mm、幅15mm、深さ6 mm、船縁を削る		サタ
22-11 69B-4	4-96 □9-V	舟形	228・28.5・10	ヒノキ	B	中央部に凹孔貫通し、木釘残存		ウタ

図版番号 写真図版番号	記号	名称	法量	樹種	木取	特徴	実測	清查
22-12 71A-3	4-548 A15c-IV・V	舟形	160・21.5・14.5		A	断面方形，底部に凹孔		タタ
22-13 72-2,4	4-445 44W-V <sub>2</sub>	舟形	225・22・13		B	平底，船艚の表現なし 全面ケズリ，摩耗		カタ
22-14 70A-2	4-409 A15f-V <sub>2</sub>	舟形	176・27・16		B	平底		ウタ
22-15 72-1,3	4-366 A15f-V <sub>1</sub>	舟形	184・31・11		A	平底，船艚の表現なし		サタ
22-16 75B-6	4-499 ホ6-V <sub>2</sub> N	舟形	210・29・14		B	平底・平頭・中央部に貫通孔		サタ
22-17 66A-3	4-650 ホ5-O F V	舟形	(181)・23・16		C	平底		サタ
23-1 73A-1	4-629 ホ6-S E IV V	舟形	(215)・23・14		F	平底，乾燥による歪み		ウタ
23-2 66B-6	4-550 A15c-IV V	舟形	(177)・26・12		F	平底，乾燥による歪み		ウタ
23-3 73A-2	3-686-1 B16b-V	舟形	194・23・21		C	平頭，平底，長さ149mm 深さ6mmの船艚を削る		サタ
23-4 67A-1	3-542 C16a-a V	舟形	(218)・31.5・22		B	先端部欠損，平底		ウカ
23-5 65-3,5	4-277 □4Wa-V N	舟形	196・(36)・(19)	ヒノキ	C	平底，平頭 焼きながら船艚を削った ものか，内面焼け，船艚の深さ約17 mm		サタ
23-6 71B-5	4-549 A15c-IV・V	舟形	177・20・11		B	部分的な乾燥による歪み 平底		ウタ
23-7 74B-4	4-628 ホ6-S E V <sub>2</sub>	舟形	(288)・32・33		C	平底，船艚を斜めに削り出す		ウタ
23-8 74B-5	4-483 ホ9-V <sub>1</sub> S	舟形	(163)・27・34		C	平底，船艚を斜めに削り出す		ウタ
23-9 76B-5	4-213 □1W-V <sub>2</sub>	舟形	193.5・61.5・44	ヒノキ	C	長さ142mm，幅37mm，深さ平均 20mmにわたって割ってある。船形で はなく製物とすべきか		タタ
23-10 76B-6	3-710-2 B16b-V	舟形	266・38.5・8		B	有孔板もしくは先端加工板か 側面から削り，船首船尾を表現した ように見られる		カカ
23-11 76B-7	4-66 イ3-V	舟形	76.5・92・62	ヒノキ	C	中央部に2孔，目釘？残存		タタ
24-1 79-1	4-612 ホ5-O F V <sub>1</sub>	齧串	1173・19・9	ヒノキ	B	C4種，齧串で最大，最上部1箇所 で2回切り掛け，計7対，頭部割込み表 ケズリ		ウカ
24-2 79-5	4-647 ホ5-O F V N	齧串	663・18・7	ヒノキ	B	C3種切り掛け4対 頭部割込み，表ケズリ，側面ワリおよ びケズリ		ウカ

図版番号 写真図版番号	記号	名称	法量	樹種	木取	特徴	実測	清書
24-3 79-4	4-646 ホ5-O F V N	斎串	657・18・6	ヒノキ	B	C 3種 上下からの切り掛け4対 表裏ともワリ面 頭部削り込み 647と同巧	ウ	カ
24-4 79-3	4-648 ホ5-O F V N	斎串	(505)・18・6		B	C 3種 下端欠損	ウ	カ
24-5 80A-5	4-976 ホ5-O F V <sub>2</sub>	斎串	(140)・28・6		B	D種 D 3種の一部分	ウ	カ
24-6 79-2	4-615 ホ2-O F V	斎串	(401)・19・5		B	B 2種、側面欠損が多い 表裏ワリ面 C種に近似 頭部に未貫通孔	ウ	カ
24-7 80A-4	4-660 ホ5-O F V	斎串	(146)・31.5・7		B	D 3種 下部欠損 写真図版78A-2 と同巧 上トに切り掛け1箇所2回	ウ	カ
24-8 80A-2	4-232-3 ロ5W-V <sub>1</sub>	斎串	370・22・3		A	C 2種 表裏ワリ面 頭部より削り込み	ウ	カ
24-9 80A-3	4-232-2 ロ5W-V <sub>1</sub>	斎串	357・23.5・2.5		A	C 2種 表裏に腐蝕、表裏ワリ面全体の 8割ほど削り込む 232-1と直なって出土	ウ	カ
24-10 80A-1	4-232-1 ロ5W-V <sub>1</sub>	斎串	362・22・3		A	C 2種 表裏に腐蝕、表裏ワリ面 ワリ面、1箇所3回3対	ウ	カ
24-11	4-233-1 ロ5W-V	斎串	(298)・23・3		A	C 2種 下端欠損 中央部で屈曲 頭部削り込み 腐蝕あり	カ	カ
24-12	4-233-2 ロ5W-V <sub>1</sub>	斎串	(296)・21.5・2.5		A	C 2種 下端欠損中央部で屈曲 頭部削り込み 腐蝕あり	カ	カ
24-13 80A-6	4-639 ホ5-O F V N	斎串	267・24・3.8		B	C 1種 側面の下部に下からの切り掛 け 唯1例	ウ	カ
24-14 77A-1	4-616 ホ2-O F V	斎串	279・(11)・3			B 2種 中央部両側を扶る	ウ	カ
24-15 77B-8	4-553 A15c-IV V	斎串	(260)・17・5		A	B 2種 ワリ面 頭部欠損するがほぼ 完形	カ	カ
24-16 77B-13	4-187 ロ1-IV b	斎串	(229.5)・16・3.4	ヒノキ	A	B 2種 頭部欠損ほぼ完形	タ	カ
24-17 77A-2	4-638 ホ5-O F V N	斎串	272・14・1.5		A	B 2種 側面上部2箇所を削り掛け	ウ	カ
25-1 77A-6	4-273 A15f-IV	斎串	238・18.5・4.6	ヒノキ	A		タ	カ
25-2 77A-5	4-149 A15e-V	斎串	(213)・21.5・2.8	ヒノキ	B	B 2種	タ	カ
25-3 77A-7	3-687-1 B16b-V	斎串	289・30・5		A	B 3種	ウ	カ
25-4 78A-1	4-613 ホ5-O F-V <sub>1</sub>	斎串	(290)・26・5.5		A	下端欠損 削り掛け 5対以上 C 3種	ウ	カ

図版番号 写真図版番号	記号	名称	法量	樹種	木取	特 徴	実測	清查
25-5 78B-11	4-542 A15f-V <sub>1</sub> N	斎串	(178)・28・3		A	B2種	ウ	カ
25-6 78B-9	4-385 イ4W-V <sub>1</sub> S	斎串	(123)・20・1		A	B3種か ワリ面 下部欠損	カ	カ
25-7 78B-13	4-402 イ4E-V <sub>1</sub> S	斎串	(113)・16・3		A	B2種か1箇所2回削る	カ	カ
25-8 80B-13	3- B16c-V	斎串	(114)・(10.5)		A	乾燥のため歪めだつ 片側欠損 B3種か	タ	カ
25-9 78B-10	4-649 ホ5-O F V N	斎串	(100)・17.5・4		B	下端欠損 B種 1箇所3回の切り掛け	タ	カ
25-10	3-681-1 B16b-d-V	斎串?	(182)・12・4		B	千鳥に切り込みを入れたもの、異型式の斎串か。	サ	カ
25-11 77B-11	3-681-2 B16b-d-V	斎串	(203)・14・5		B	B種 頭部欠損	サ	カ
25-12	4-645 ホ5-O F V N	斎串	(158)・26・3		A	B種か	ウ	カ
25-13 78B-19	4-640 ホ5-O F V N	斎串	(71)・(20)・10			B種 下端欠損	ウ	カ
25-14 78A-7	4-188 ロ1-IVb	斎串	(131.5)・18.5・3.2	ヒノキ	A	B2種	タ	カ
25-15 78B-12	4-556 A15c-IV V N	斎串	(88)・17・2		B	下端欠損 B種	カ	カ
25-16 78B-14	4-610 イ2-IV	斎串	(96)・20・2.5		B	B種	ウ	カ
25-17 78B-17	4-510 A15f-V <sub>1</sub>	斎串	(72)・14・2		B	B2種か	カ	カ
25-18	4-657 ホ5-O F V	斎串	(67)・14・6		B	B種 下部欠損	ウ	カ
25-19 78B-20	4-658 ホ5-O F V	斎串	(71)・13・3		B	B2種か 下端部欠損	ウ	カ
25-20 81B-18	3- B16c	斎串	97.5・12・21		A	E3種 自然乾燥 黒変 下からの切掛け4回	タ	カ
25-21 81B-16	4-53 イ3-V	斎串	279・(11)・3	ヒノキ	A	E1種 頭部に割り込み ケズリ面中央部をかるく抉る	ウ	カ
25-22 81B-17	木筒第61号 枝2-V	斎串	(170)・3.7・3		A	平頭・下部欠損 左右に一对の切り込み	ム	カ
25-23	4-641 ホ5-O F V N	斎串	(178)・22・5.5			上端部欠損 切り込みなし	ウ	カ

図版番号 写真図版番号	記号	名称	法量	樹種	木取	特徴	実測	清書
25-24	4-189 ロ1-IVb	斎串	(181)・25・30	ヒノキ	A	上部欠損		タウ
25-25	3-687-4 B16b-V	斎串	(165)・25.5・5.5		B	頭部欠損		カカ
25-26	3-681 B16bd-V	斎串	186・23.5・65		B	頭部厚削の為、発存か欠損か不明 木部材か、全面ケズリ		カカ
25-27	4-554	斎串	(190)・17・4		A	頭部欠損、裏裏ワリ面		カカ
82A-13	A15c-IVV							
25-28	4-555	斎串	(190)・21・4			頭部欠損 裏裏ともケズリ		カカ
82A-12	A15c-IVV							
25-29	4-383	斎串	(226)・25.5・6		B	頭部欠損、表裏ともケズリ面		カカ
81B-20	イ4W-V <sub>1</sub> S							
25-30	4-451 イ5-V <sub>2</sub>	斎串	(251)・20・4		B	中央部に墨痕か、尖端部のケズリが横 と変る、全面ケズリ面 木部材か		カカ
25-31	4-663 ホ5-O F V	斎串	(323)・20.5・6		A	端部欠損		ウカ
25-32	4-299 イ7-IV	斎串	(315.5)・14.5・5.5		B	上端部欠損、C3かC4種の下半部か		タカ
25-33	4-362 ホ6-S E <sub>2</sub>	斎串	(79)・27・3.5		A	頭部、下端部欠損 裏裏ワリ面		カカ
25-34	4-407 A15f-V <sub>2</sub>	斎串	(29)・30・2		A	頭部欠損、下端部欠損 表裏ワリ面		カカ
25-35	3-687-8 B16b-V	斎串	(160)・18・4.5		B	頭部欠損、表ケズリ面、裏ワリ面		カカ
25-36	4-573 イ2-573	斎串	(142.5)・20・4			ワリ面、頭部欠損		カカ
25-37	3-687-3 B16b-V	斎串	(134)・13・5			頭部欠損、表ケズリ、裏ワリ面 下からの湧り込みか		カカ
25-38	4-675 ホ5-O F V	斎串	143・15・2.5					ウカ
25-39	4-642	斎串	(138)・15.5・2		A	端部欠損、型式不明		ウカ
82A-10	ホ5-O F V N							
25-40	4-620 ホ2-O F V	斎串	(67)・12・2		B	側面欠損、切り掛けがあったものか		ウカ
25-41	4-433 A15i-V <sub>2</sub>	斎串	(129)・18・5		A	頭部欠損、キズ多し		カカ
25-42	4-369 A15f-V <sub>1</sub>	斎串	156・28・6					ウカ

図版番号 写真図版番号	記号	名称	法 量	樹種	木取	特 徴	実測	清書
25-43	4- ホ2-O F V	斎串	156・22.5・3		B	先端部の切り力が切り掛け風	ウ	カ
25-44	4-571 ホ6-S E <sub>1</sub>	斎串	(87)・(21)・5		B	頭部欠損, 側面ワリ, 表裏ケズリ面	ヤ	カ
25-45	4-618 ホ2-O F-V	斎串	(61)・10・2		A	A種か	ウ	カ
25-46	3-699 B16c-V	斎串	(80)・18・1.8		C		タ	カ
25-47	3-783 B16c-V	斎串	(107)・20.5・5		B	頭部欠損, 表裏ケズリ面	カ	カ
25-48 82A-3	4-468 A15f-S K <sub>1</sub>	斎串	(120)・22・4		A	頭部欠損, 表裏ワリ面	カ	カ
25-49	4-659 ホ5-V	斎串	(106)・20・3		A		ウ	カ
25-50	4-651 ホ5-O F V	斎串	(112)・16・3		B	切り込みなし, 頭部欠損	ウ	カ
26-1 81A-1	3-687-6 B16b-V	斎串	(211)・12・7		C	全面ケズリ, 頭部欠損 A種	カ	カ
26-2 80B-14	4-325 A15i-IV	斎串	(133)・12・3		B	A種, 表裏ケズリ	ウ	カ
26-3 81A-3	4-358 A15f-V <sub>2</sub>	斎串	125・11・5		A	A種, 全面ケズリ	ウ	カ
26-4	3- B16c-V	斎串	126・10・2.3		A	A種	タ	カ
26-5 80B-11	3-699-2 B16c-V	斎串	123・9.5・1.8		B?	A種	タ	カ
26-6 80B-9	3-699-3 B16c-V	斎串	(122)・10.2・2.7		A	A種	タ	カ
26-7 80B-10	3-699-4 B16c-V	斎串	126・10.3・2.6		A	A種	タ	カ
26-8 80B-7	3-699-5 B16c-V	斎串	(124.5)・11・2.3		B?	A種	タ	カ
26-9 80B-8	3-699-6 B16c-V	斎串	119.5・9・3		A	A種, 全面ケズリ	タ	カ
26-10 81A-9	3-699-11 B16c-V	斎串	79.5・7・2.5		A	A種	タ	カ
26-11 81A-12	3-699-14 B16c-V	斎串	(64)・10.2・1.4		A	A種	タ	カ

図版番号 写真図版番号	記号	名称	法量	樹種	木取	特 徴	実測	消毒
26-12 81A-10	3-699-16 B16c-V	斎串	(48.5)・5.4・3.5		A	A種	タ	カ
26-13 81A-7	3-699-13 B16c-V	斎串	71.5・3.8・1.8		C	A種	タ	カ
26-14 81A-8	3-699-12 B16c-V	斎串	73.5・5・27		C	A種	タ	カ
26-15	3- B16c-V	斎串	(70)・7.5・2.6		A	A種	タ	カ
26-16 81A-11	3-699-15 B16c-V	斎串	68・5.4・2.6		B	A種	タ	カ
26-17 81A-15	3-699-9 B16c-V	斎串	(90.5)・11・3.5		B	A種	タ	カ
26-18 81A-14	4-173 □4-V <sub>上</sub>	斎串	84.5・8.5・2.0	ヒノキ	B	A種	タ	カ
26-19 81A-5	3-699-10 B16c-V	斎串	(95)・8.5・2.5		B	A種	タ	カ
26-20 81A-6	3-699-8 B16c-V	斎串	(91.5)・10・4.0		B	A種	タ	カ
26-21 81A-4	3-699-7 B16c-V	斎串	(117)・12.4・4.5		B	A種	タ	カ
26-22 100B-10	4-461 A15f-V <sub>2</sub>	先端加工材	78.8・14・6		A	木節状を呈す、切り欠きある斎串か 表裏ケズリ面	カ	カ
26-23 100B-12	4-410 A15f-V <sub>2</sub>	先端加工材	78・15・7	ヒノキ	A	木節状を呈す、切り欠きある斎串か 表裏ケズリ面	カ	カ
26-24 100B-13	4-412 A15f-V <sub>2</sub>	先端加工材	74.5・14.5・3.5		A	木節状を呈す、切り欠きある斎串か 表裏ケズリ面	カ	カ
26-25 100B-8	4-411 A15f-V <sub>2</sub>	先端加工材	90.5・15・3		A	下端部を尖らす、全面ケズリ面 切り欠きある斎串か	カ	カ
26-26	4-238 □5W-V <sub>1</sub>	先端加工材	(81)・40・4	ヒノキ	A	端部に切り欠き、表裏ケズリ面 木節材か	カ	カ
26-27 101A-4	4-462 A15f-V <sub>2</sub>	先端加工材	276・15・7		A	両端に両側面より切り込みを入れる 木節材?	カ	カ
26-28	4-339 A15f-IV	先端加工材	(153)・20・3.0		A	木節か	タ	カ
26-29 52A-1	4-332 □5Wa-V <sub>2</sub>	横 櫓	(74)・(38)・12	ネジキ	E	歯10本で14mm、横に明確な稜	カ	タ
26-30 52A-3	4-120 □9-V	横 櫓	(35)・47・6.3	カナメ モチ	E	歯10本で5.6mm、横に明確な稜 自然乾燥による歪	タ	タ

図版番号 写真図版番号	記号	名称	法量	樹種	木取	特徴	備考	実測	備考
26-31 52A-4	4-540 ホ6-V <sub>2</sub>	横櫓	(32)・(37)・6	モッコク	E	歯10本で8.5mm, 棟に明確な棟		タ	タ
26-32 52A-5	4-417 A15I-V <sub>2</sub>	横櫓	(33)・(34)・6	ネジキ	E	歯10本で14mm, 乾燥による歪み棟に明確な棟		タ	タ
26-33 52A-2	4-426 イ5-V <sub>2</sub>	横櫓	(28)・(39.5)・10	カナメモチ	E	歯10本で13.8mm 棟に明確な棟		カ	タ
27-1 88A-9	4-577 イ2-V	襷状木製品	707・64・18 30・19		E	全面ケズリ, 断面三角		カ	カ
27-2 98A-2	4-377 イ5-V <sub>1</sub>	厚板	(340)・(180)・19		A	四隅に2mmの方孔が普通 全面ケズリ		ウ	カ
27-3 98A-3	4-108 ロ6-V	厚板	257・112.5・31	ヒノキ	B	エブリ未製品か		タ	カ
27-4	3-698 B16b-V	納材	236・88・22		B	長さ3mmの納を造り出す 新使用痕らしい切断面		サ	カ
27-5	3-814 B16b-V	板	349・62・21		A	表面, 両側面は丁寧なケズリ 裏面はワリ		サ	カ
27-6 99B-15	4-432 A15I-V <sub>2</sub>	有孔材	(243.5)・55・27.5		E	割に居木, 方孔が深もしくは居木を止める為の細穴と考えられれば誤, 写99B-14と同形, 端部折痕		カ	カ
27-7 94A-1	4-327 A15c-IV	有孔板	550・44・6		A	長径14mm, 短径12mmの方孔 全面ケズリ, 先端を薄くする やや屈曲		カ	カ
27-8 97B-8	4-495 A15f-V <sub>2</sub>	有孔板	(515)・(63)・19		B	長径15mm, 短径13mmの方孔 全面劣化している為完存品か否か不明		ウ	カ
27-9	4-284 ロ4Wa-V S	木柄	(216)・径37	クロマツ	D	写真図版90B-12例によって, 木柄と考える。針葉樹製であるので, 利器となりうるか疑問		タ	タ
27-10 89A-1	4-200 ロJ-V	木柄	343・径42	ヒノキ	D	目釘穴なし, 長さ5.5mm, 径13mmの方孔		タ	タ
27-11 89A-5	4-601 ホ2-ミゾ-V	木柄	352・61・50		D	目釘穴なし, 納穴縁を幅22mm, 深さ3mm, 長さ12mmに削る やや屈曲するのは意図的に削り込んだ為		ウ	タ
27-12 90A-4	4-306 ホ5-IV	木柄	(153)・径40		D	先端磨耗, 側面に目釘孔 孔内焦げ		タ	タ
27-13 90A-1	4-222 ロ4E-V <sub>1</sub>	納材	(142.5)・46・21	スギ				タ	タ
27-14 99A-5	3-797 B16-S B	納材	(70)・34・9		B	先端が削打されている		サ	カ
27-15	4-54 イ6-V	木柄	(147)・(18)・31	アラカシ		木端とも考えられるが削打痕なし		タ	タ
27-16	4-341 ロ6-VII	木柄	122・(24)・33			木端状, 削打痕なし, 側面に径4.5mmの方孔, 木釘残存		タ	タ

図版番号 写真図版番号	記号	名称	法量	樹種	水取	特 徴	実測	備考
28-1 94B-17	4-581-2 イ1-V	有孔長方形板	159・99・3.8		A	四隅に径約2mmの円孔 3枚が重なって出土 表面とも切痕	タ	タ
28-2 94B-16	4-581-3 イ1-V	有孔長方形板	158・103.5・6.5		A	四隅に円孔。側面に円孔	タ	タ
28-3 94B-13	4-581-1 イ1-V	有孔長方形板	153.5・104.5・7.2		A	四隅に円孔。中央部に長径10mm、短径8mmの円孔	タ	タ
28-4 96A-1	4-591 イ2-V <sub>2</sub>	有孔長方形板	203・77・11.4		B	両端に方孔。両側に切り込み 長径4.5mm、短径4mmの方孔に緯	タ	タ
28-5 94B-12	4-225 ロ5E-V <sub>2</sub>	有孔長方形板	173・(62)・6	ヒノキ	A	半割れ	カ	カ
28-6 97A-3	4-290 ロ4Wb-VS	有孔板	157.5・54・6.5	ヒノキ	B	両端を深く削り出す。中央部に径10mmの円孔。柄杓の柄(83A-1)を孔に差し込めば、小型のエブリとなる	タ	タ
28-7 94B-18	4-262 ロ5E-V <sub>2</sub>	長方形板	172・109・12.5	ヒノキ	A	有孔双耳付。側面に木釘 犯手付楕円形曲物の小型品もしくは、 箱底板か	タ	タ
28-8 99A-8	4-477 ホ6-V <sub>2</sub> N	有孔板	76・43・7		A	中央部に円孔。長径16mm、短径14mm 欠損部分無げ	カ	カ
28-9 99A-4	4-48 イ6-V	有孔板	80・15・7	ヒノキ	C	両端に径約2mmの円孔。中央部に内面が摩耗した長径14mmの円孔	カ	カ
28-10	4-75 イ6-V	有孔板	82・49・13	ヒノキ	B	完形品。貫通孔3、未貫通孔1	カ	カ
28-11 94A-5	4-336 ロ6-V <sub>1</sub>	有孔板	(102)・19・12		B	径約4mmの円孔2個が斜に貫通	カ	カ
28-12 97A-6	4-159 Δ15e-V <sub>2</sub>	有孔板	(159.5)・52・7	ヒノキ	A	5孔のうち1孔にはカバ残存	タ	カ
28-13 97A-5	4-111 ロ6-V	有孔板	197・91・8	サワラ	A	空疎形を呈す。張蓋器?	カ	タ
28-14 97A-1	4-264 ロ5E-V <sub>2</sub>	有孔板	171.5・121・10	ヒノキ	A	縁辺を削り込んで甲蓋につくる 中央部に径22mmの円孔	タ	タ
29-1 97A-7	4-491 イ4-V <sub>2</sub>	有孔板	長径173・厚5.5		B	曲物底板に磨擬。正印をなさず	カ	タ
29-2 105A-7	4-55 イ3-IVb	有刻木製品	(174)・26・4.5	サワラ	B	双耳を削り出している	カ	カ
29-3 105A-2	4-256 ロ5E-V <sub>1</sub>	板	(192)・24・6	ヒノキ	B	念面ケズリ。木蘭材か	カ	カ
29-4 105A-2	4-595 イ5-V <sub>2</sub>	有刻物状木製品	215・47・8			両側面に2か所削み	カ	カ
29-5	4-9 イ6-IV	丸棒	(321)・13.5・11	ヒノキ	C	全面でいいいに削り込む。柄杓の柄か	カ	カ

図面番号 写真図版番号	記号	名称	法量	樹種	木取	特 徴	実測	清書
29-6	3-711-1 B16c-V	丸棒	(385)・径15		C	全面摩耗	ウ	カ
29-7	3-710-3 B16b-V	丸棒	(440)・径14		C	端部欠損、節内の筋が 全面でいねいなケズリ	カ	カ
29-8 102B-15	4-527 イ4-V <sub>2</sub>	尖頭棒	447・径18		D	先端部摩耗	ウ	カ
29-9 105A-4	4-241 ロ4W-V <sub>2</sub>	尖頭板	117・(49)・10.5	ヒノキ	B		カ	カ
29-10	3-753-1 B15-140-V	尖頭板	105・21・6		A	全面をていねいに削る、断面三角形	サ	カ
29-11 103A-12	4-418 A15f-V <sub>1</sub>	尖頭棒	258・14・10		C	先端に割を有す、綱針状を呈す	カ	カ
29-12 103A-6	4-552 A15c-IV・V	尖頭棒	222・径14		C	先端部削り込む、基部摩耗のため丸くなる	カ	カ
29-13	4-634 ホ5-O・F・V	尖頭棒	(142)・10・8		C	全面を細く削り込む 先端部欠損	カ	カ
29-14	4-376 イ5-V <sub>1</sub>	尖頭棒	(156)・14・10.5		C	先端部欠損	カ	カ
29-15 103A-11	4-174 ロ4-V <sub>2</sub>	尖頭棒	150・15・14	ヒノキ	C	充存品、全面をていねいに削り出す	サ	タ
29-16	3-753-2 B15-140-V	尖頭棒	(166)・16・14		C	全面をていねいに削る	サ	カ
29-17 105A-5	4-112 ロ6-V	有刺棒	(196)・20・9	モッコク	B	枝材を縦割りにし、側面に5か所以上 刺んだもの、先端部を削る	ウ	カ
29-18 99A-3	4-603 ホ2ミゾ-V	有孔尖頭棒	47・径21.5		E	径21.5、深さ13mmの末節通孔	カ	カ
29-19 101A-5	4-102 ロ9-V	尖頭細棒	226・12・12	ヒノキ	C	全面をていねいなケズリ	カ	カ
29-20 103A-13	4-465 A15f-V <sub>1</sub>	尖頭細棒	203・(14)・10		A	先端部を尖らし、頭部を抉る	カ	カ
29-21	4-472 イ4E-V <sub>2</sub>	尖頭細棒	186・16・12		C	楔状、ワリ面を残しながら全面を削り 込む	カ	カ
29-22	4-239 ロ5W-V <sub>1</sub>	有刺細棒	139・12・10	ヒノキ	C	曲物断片か	ウ	カ
29-23 100A-5	3-687-11 B16b-V	有刺細棒	118・16・9		C		ウ	カ
29-24	3-687-7 B16b-V	尖頭棒	162・5・5		C	端部を笠状に削る	ウ	カ

図面番号 写真図版番号	記号	名称	法量	樹種	木取	特徴	実測	清算
29-25 100A-6	3-687-10 B16b-V	尖頭細棒	(112)・7・8		C	頭部欠損、先端部に抉り	カ	カ
29-26	3-700-3	尖頭細棒	(137)・10・5		C	先端を削り出すほか、全面ワリ面	カ	カ
29-27	3-687-12 B16b-V	尖頭細棒	(152)・10・6		C	頭部欠損、全面ケズリ	カ	カ
29-28 61B-10	4-502 ホ6-V,N	尖頭細棒	(147)・14・4		B	舟形、剣形を呈す、奇串か	カ	カ
29-29 99A-1	4-395 イ4-V <sub>1</sub>	有刺棒	193・25・23		D	先端に切り込み、側面に刺み	カ	カ
30-1 104A-1	4-519 イ4-V <sub>3</sub>	有頭棒	(714)・29・28		D	表皮残存、頭部に擦痕	ウ	カ
30-2 104B-11	4-665 ホ5-O F-V	有頭棒	(361)・28・25		C		ウ	タ
30-3 104B-12	4-64 イ3-V	有頭棒	(450)・径35	サカキ	D	表皮残存、頭部に擦痕	ウ	カ
30-4	4-77 イ6-VII	有頭棒	(424)・38・33	サカキ	D		ウ	カ
30-5 104B-8	4-464 A15 f-V <sub>2</sub>	有頭棒	463・25・20		C	尖頭、ていねいに削り出す、下部に抉り	ウ	カ
30-6 104B-15	4-520 イ4-V <sub>3</sub>	有頭棒	157・径27		D	頭部溝周辺摩耗	ウ	カ
30-7 101B-12	4-596 イ5-V	先端加工材	(474)・径32×29.5		E	両端を鶴嘴状に削り込んだもの、端部欠損	カ	カ
30-8 103A-1	4-318 ロ5 E a-V <sub>1</sub> s	先端加工棒	517・22・22		D	全面をていねいに削る 先端部摩耗	カ	タ
30-9	4-345 ロ6-V s	丸棒	(410)・29・27		D	全面をていねいにケズリ、両端欠損	サ	タ
30-10	4-323 A15 c-IV	先端加工材	(386)・26・26		C	全て先端部にむけて削り込む	サ	タ
30-11	3-746 B15-140-VI	先端加工材	274・32・24		B	荒削りの棒を有す	カ	カ
30-12 101A-6	4-88 ロ4-V	先端加工材	286・22・11.5	スギ	C	全面ケズリ、先端部に摩耗痕	カ	タ
30-13 101B-8	3-700-4 大露内	先端加工材	(304)・30・13	ヒノキ	E	馬鹿の歯か	カ	カ
30-14 102A-8	4-56 イ3-V	先端加工材	213・27・8	スギ	B	模か	カ	カ

図版番号 写真図版番号	記号	名称	法 益	樹種	木取	特 徴	実測	清書
30-15	4-449	先端加工材	198・28・6		E	狭か		カカ
102A-4	イ5E-V <sub>3</sub> S							
30-16	4-686	先端加工材	(695)・36・23.5		D	両端部欠損、中央部を長さ265mm、深さ18mmほど抉る		ウカ
	ロ4-5							

## 付載 伊場遺跡出土木製品の材質鑑定

山 内 文

浜松市教育委員会から依頼されて、伊場遺跡出土木製品の材質鑑定を行なった結果次のとうりであったことを報告する。

※ 別開図版収載資料記録表樹種の欄参照

樹 種	木 製 品 名	点数
イヌマキ Podocarpus macrophyllus	杭1	1
イスガヤ Cephalotaxus harringtonia	弓1	1
モミ Abies firma	割物1・板、その他2	3
アカマツ Pinus densiflora	小白1・杭1	2
クロマツ P. thunbergii	木柄1・棒、その他2	3
アカマツ <small>ヒト</small> Pinus sp.	背負子1・縄1・杭2・先端加工材2・その他1・椰子1	8
ヒメコマツ P. himekomatsu	有樋十字形木製品1・先端加工材1	2
ツガ Tsuga sieboldii	有樋十字形木製品1	1
スギ Cryptomeria japonica	大鏡臼1・柄杓の柄1・柄材1・有孔板1・割物1・板、角材、その他6	11
ヒノキ Chamaecyparis obtusa	曲物蓋板16・曲物底板7・曲物側板18・人形4・馬形4・舟形6 斎年25・機物盤4・組合2・柄杓の柄1・線尾1・朽文字形木製品1 柄板1・柄材3・有孔板9・木柄1・笊1・背負子1・木筒1 曲物づくりの物指1・杭、棒、その他65	173
サワラ C. pisifera	編台1・曲物底板1・斎年1・有孔板1・先端加工棒4 有刻木製品1・その他1	10
ヤナギ類 Salix sp.	短甲状木製品2・杭、立木類その他7	9
ハンノキ Alnus japonica	杭1・糸巻1	2
シイ Castanopsis sp.	編台1・先端加工材3	4
クイ Castanea crenata	編籠2・割物2・柄1・杭・その他6	11
カシ類 Quercus spp.	鋳先1・割物1・木柄4・柄材1・杭、その他3	10
クスギ Q. acutissima	竈2・代板1・杭1・編籠1・その他2	7
アベマキ Q. variabilis	鎌柄2・木柄2	4
クスギ <small>ヒト</small> Q. sp.	先端加工材1	1
アベマキ Q. serrata	杭1・両端加工棒1	2
ムクノキ Aphananthe aspera	その他加工材1	1
エノキ Celtis sinensis	有樋角形木製品1・先端加工棒、その他2	3
ケヤキ Zelkova serrata	機物盤2・漆塗弓1・その他2	5
イスビワ Ficus erecta	杭1	1
ヤマゴウ Morus bombycis	曲物側板1	1
クスノキ Cinnamomum camphora	割物1	1
ヤブニツケイ C. japonica	先端加工棒2	2
ウツギ Deutzia crenata	先端加工棒4	4
モモ Prunus persica	杭1	1
カナメモチ Photinia glabra	機盤2	2
サカキ Cleyera japonica	有頭棒2・棒1	3
マッコク Ternstroemia japonica	機盤1・有刻棒1	2
ネジキ Lyonia nexiki	機盤2	2
シャシャンボ Vaccinium bracteatum	先端加工棒1	1
シロダモ Neolipsea sericea	表鏡1	1
	合 計	295点

伊場遺跡発掘調査報告書 第3冊

伊場遺跡遺物編 1

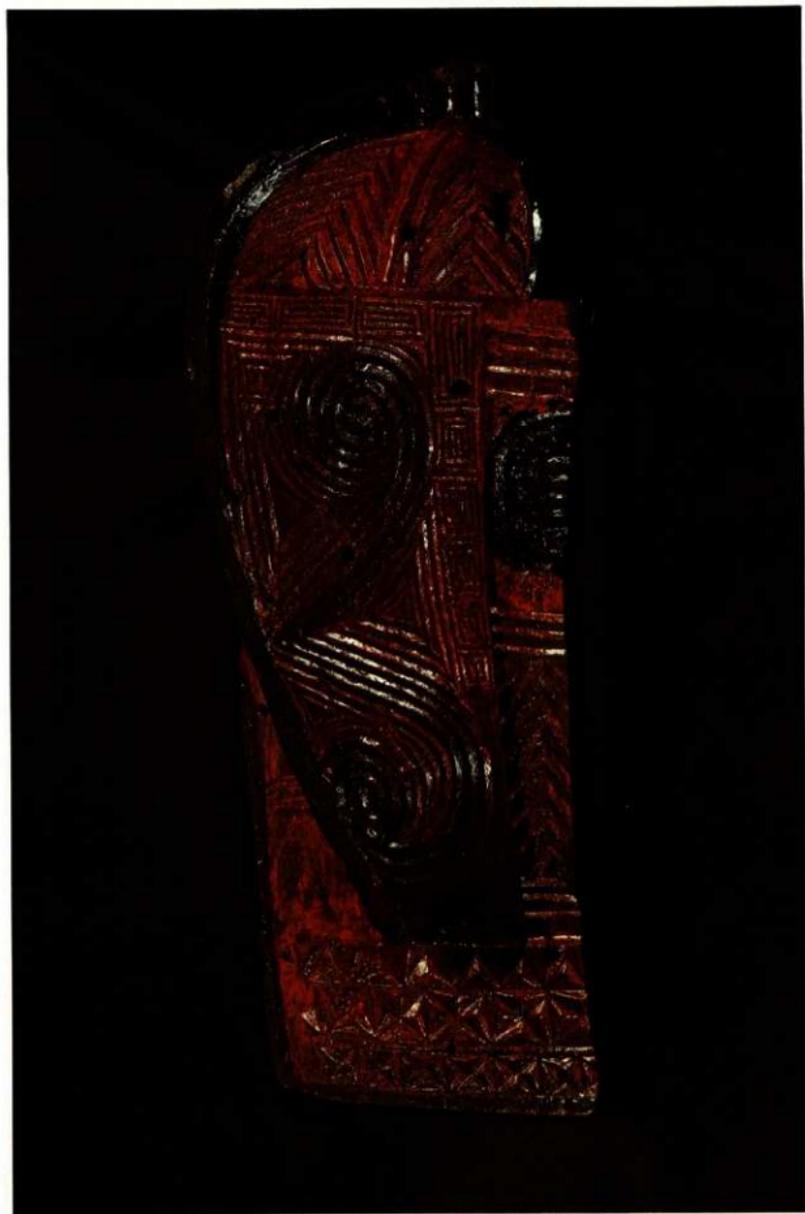
1978年3月31日 発行◎

編集 浜松市立郷土博物館

発行 浜松市教育委員会  
浜松市元城町38番地の2

印刷 株式会社 開明堂

# 写 真 图 版



短甲状木製品 第1号



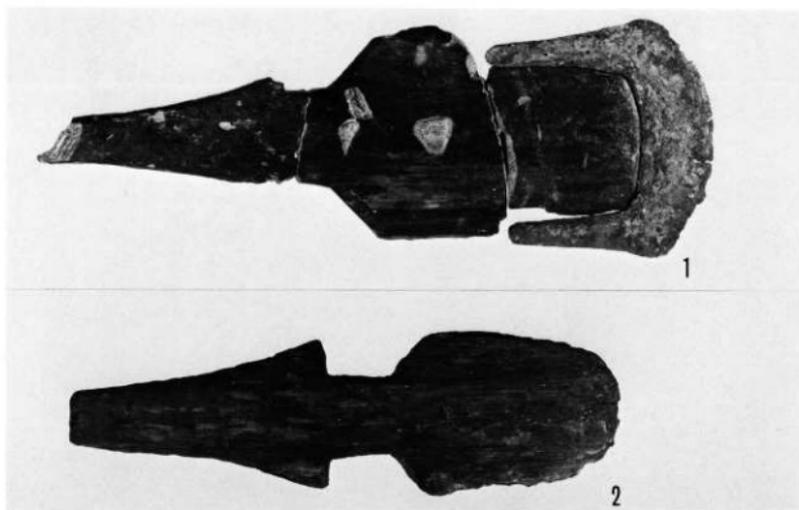
短甲状木製品 第2号



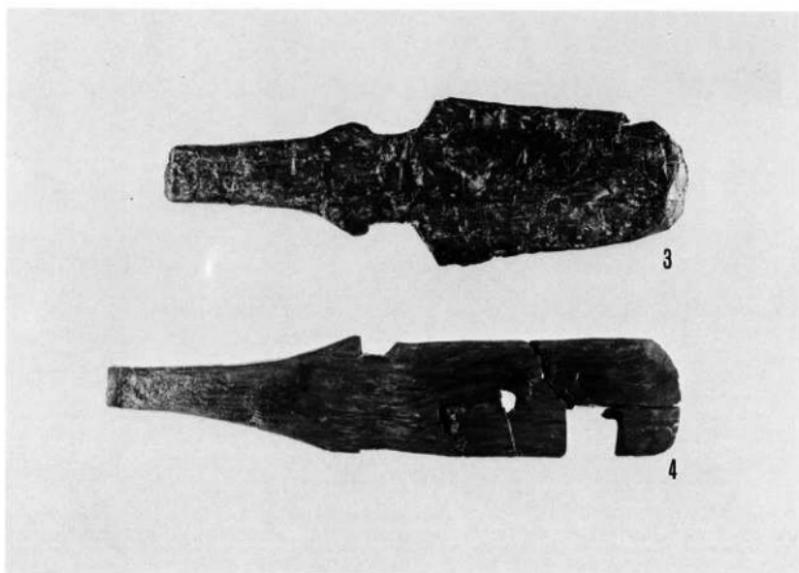
A 鉄刃付鋤先出土状態



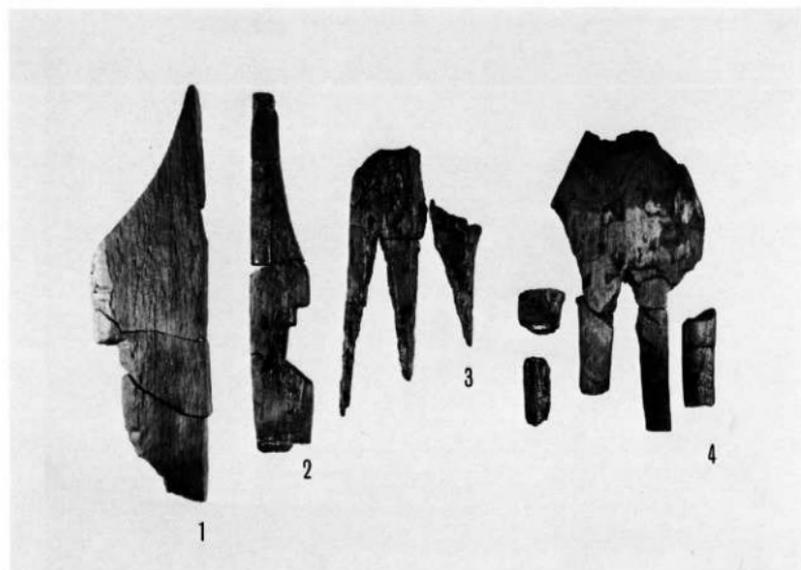
B 柄掘出土状態



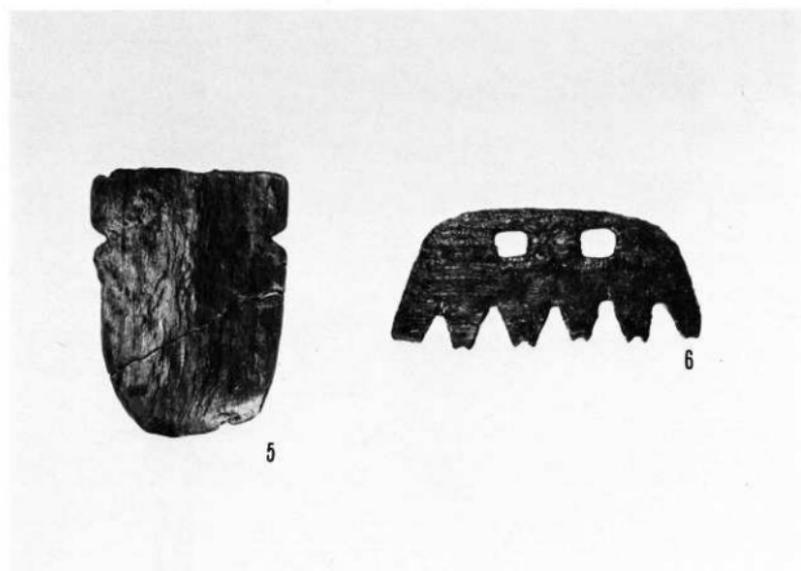
A 鋤先



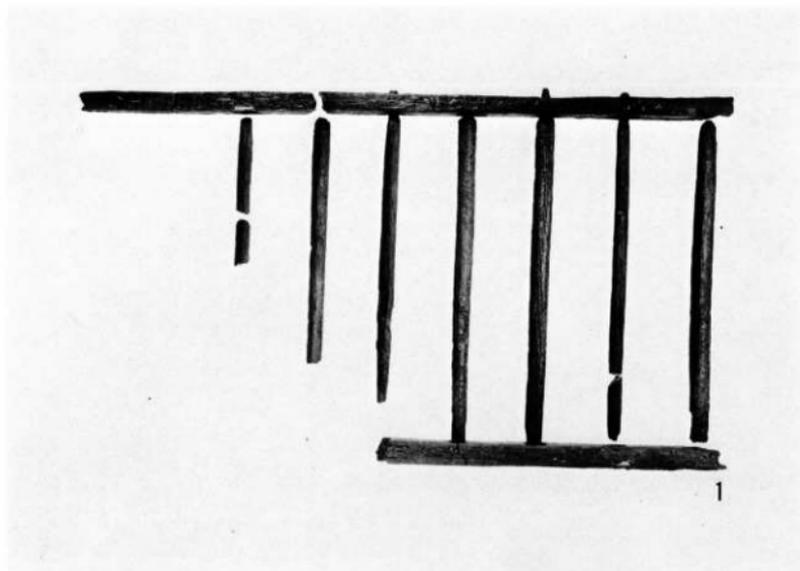
B 鋤先



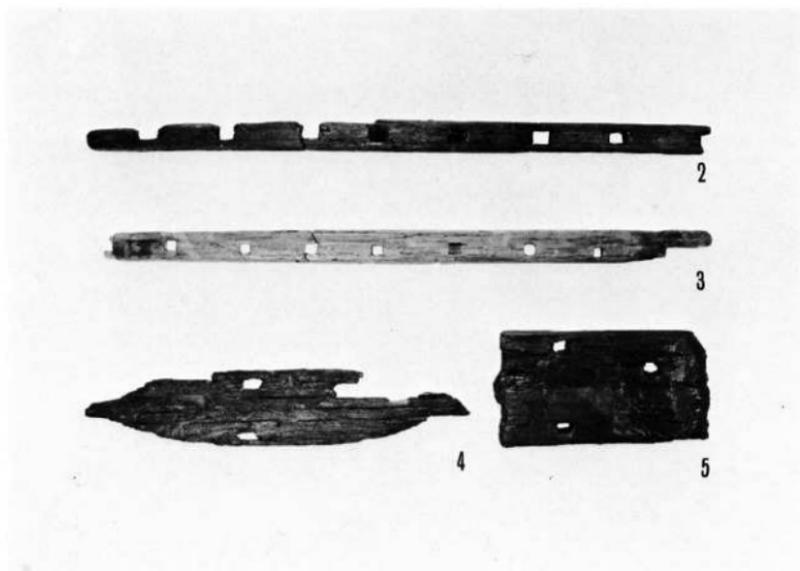
A 鎌先と股楸状木製品



B 鎌先と柄振



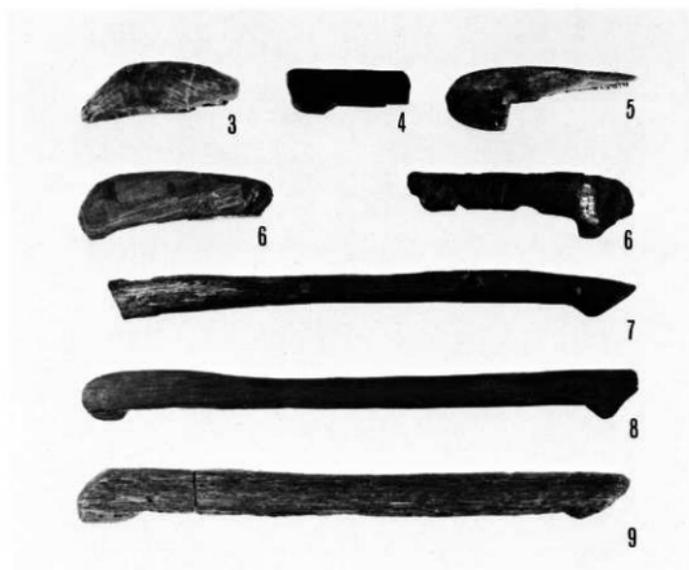
A 大足の枠



B 大足と田下駄



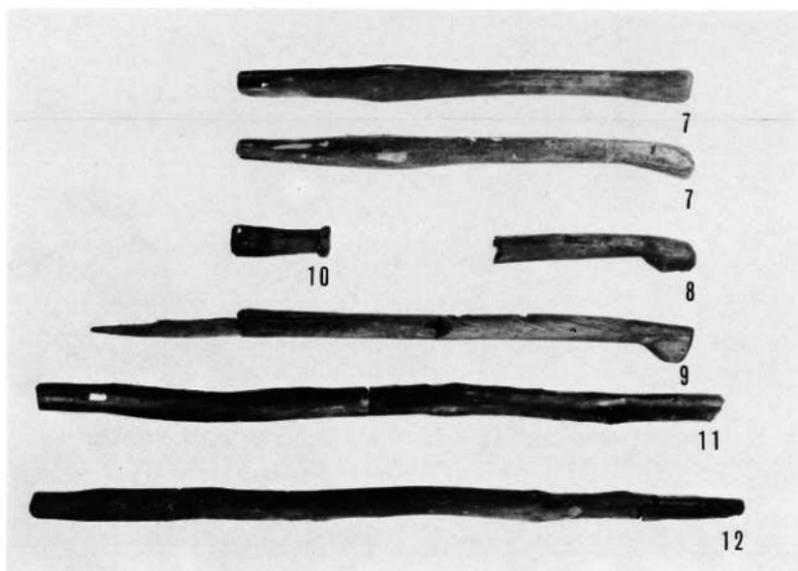
A 鎌



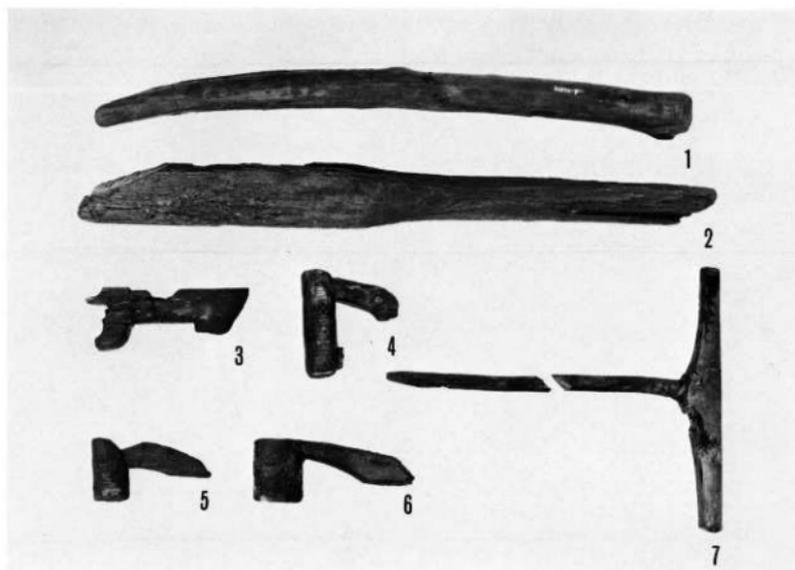
B 鎌の柄



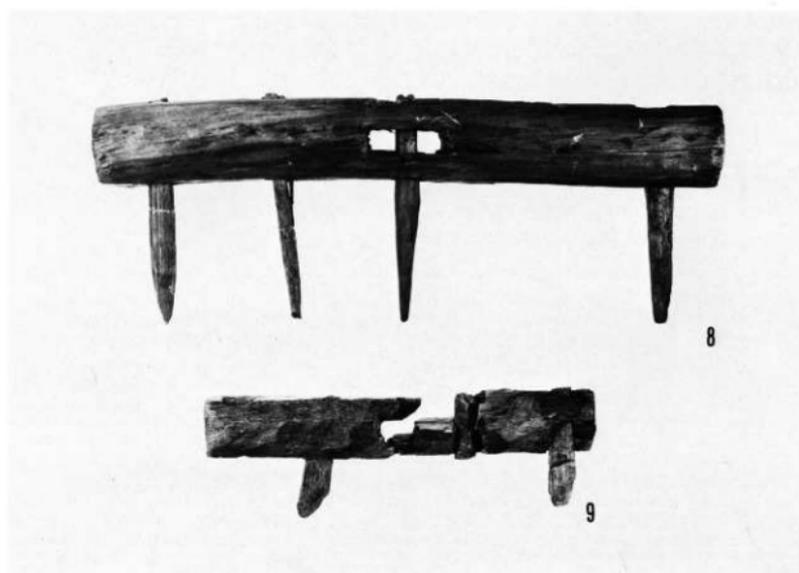
A 鎌の柄



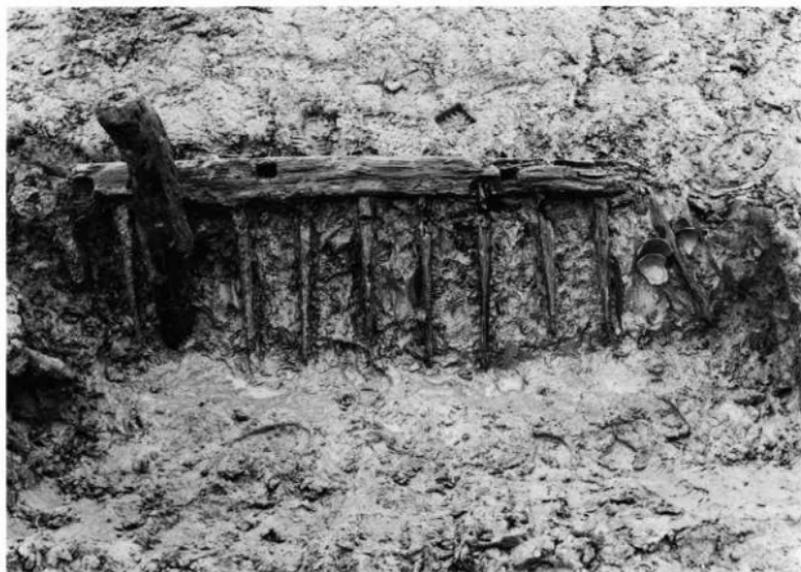
B 木柄類



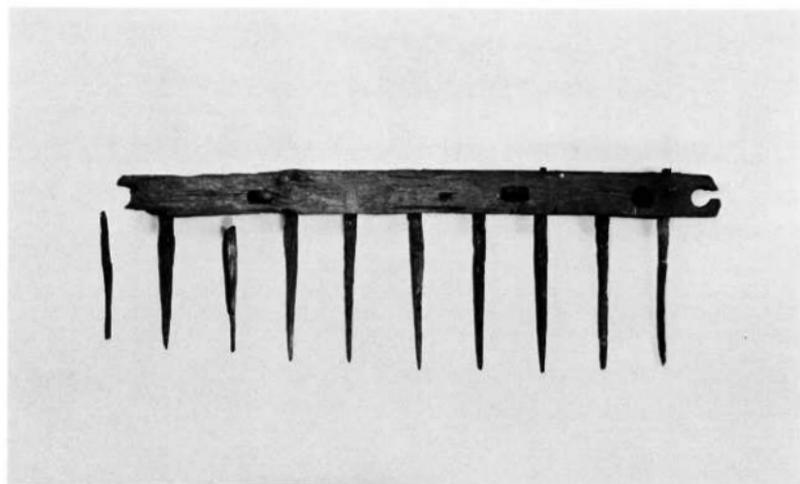
A 木柄類



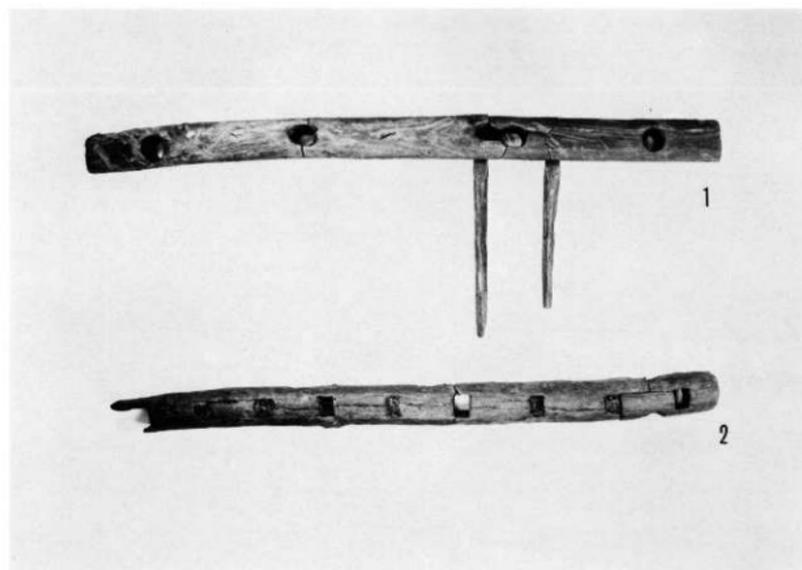
B 代掻



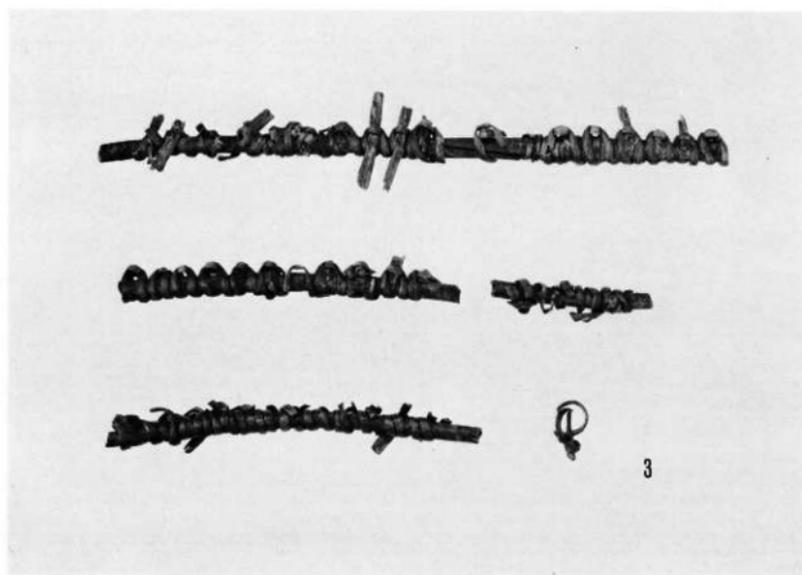
A 代掻出土状態



B 代掻



A 代掻



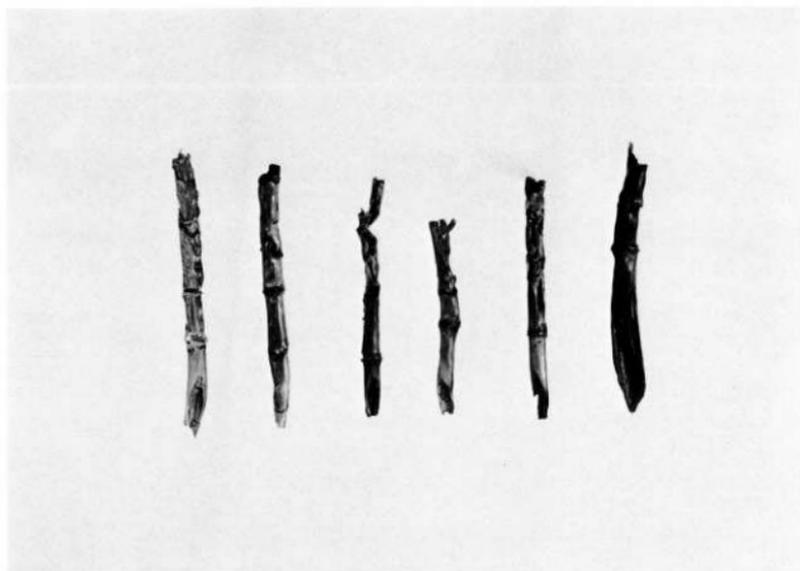
B 釜第1号の部分



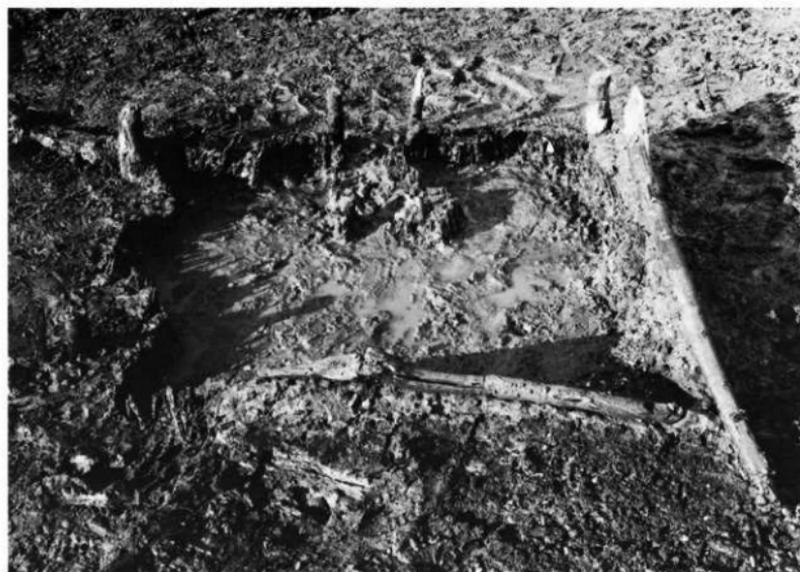
A 釜第1号出土状态



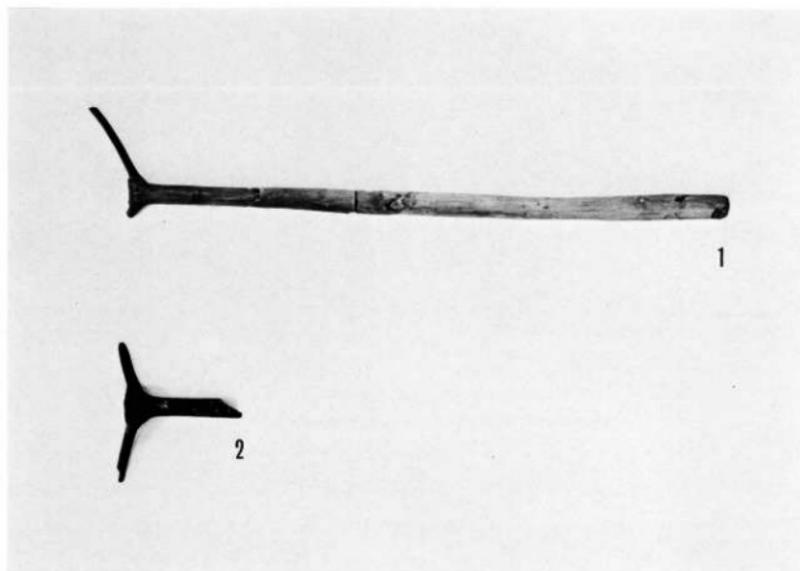
B 釜第2号出土状态



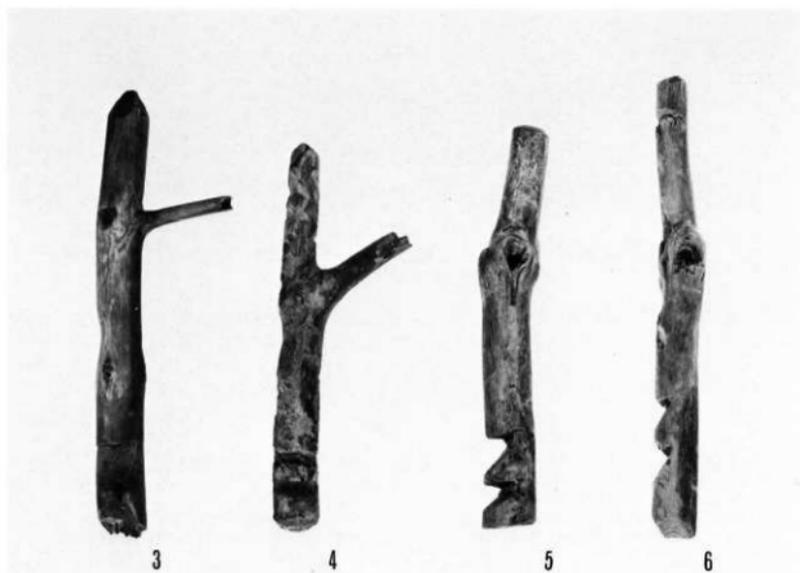
A 舳出土状態 (大溝O F I地点)



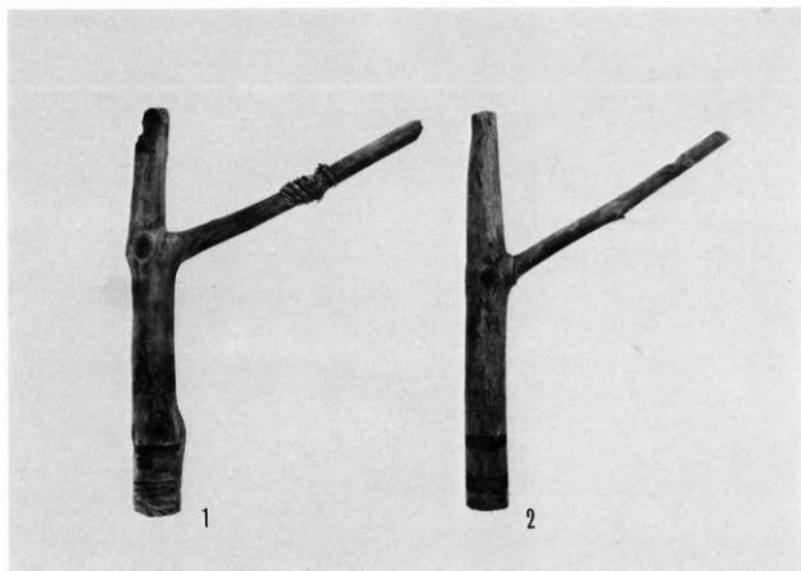
B 舳に使われた笹竹



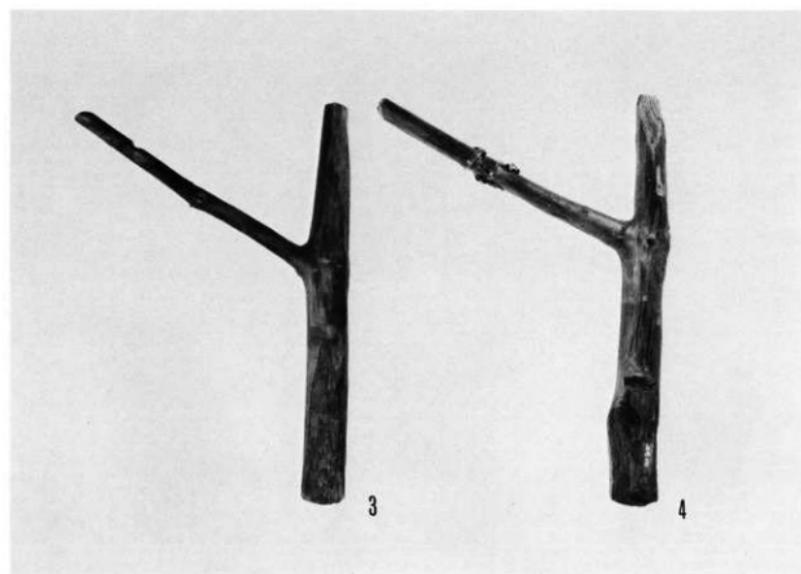
A 攔網



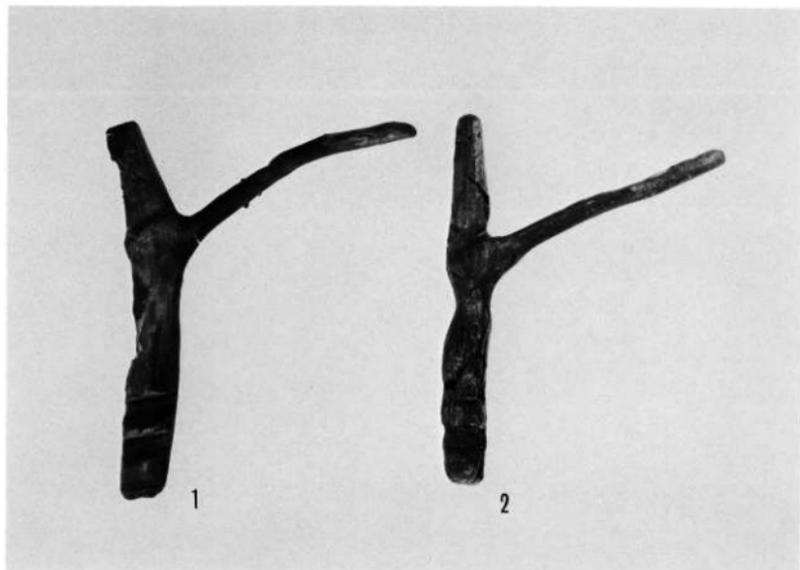
B 背負子



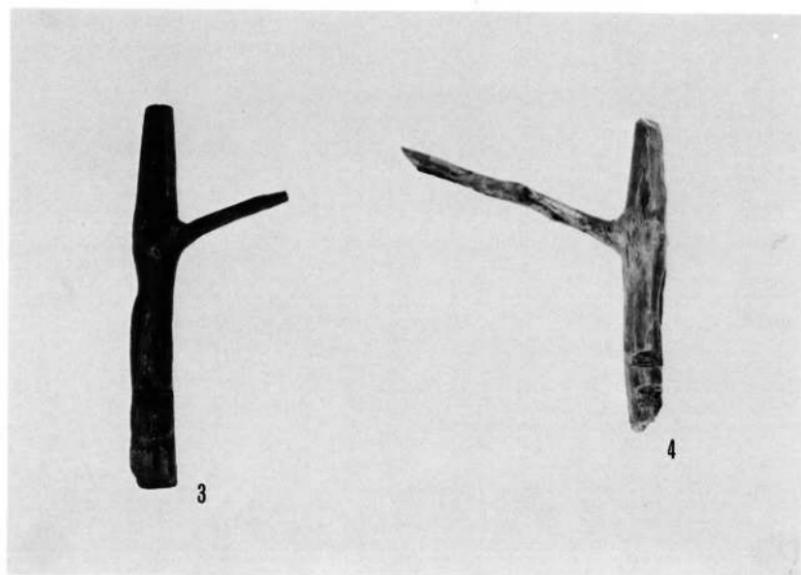
A 背負子



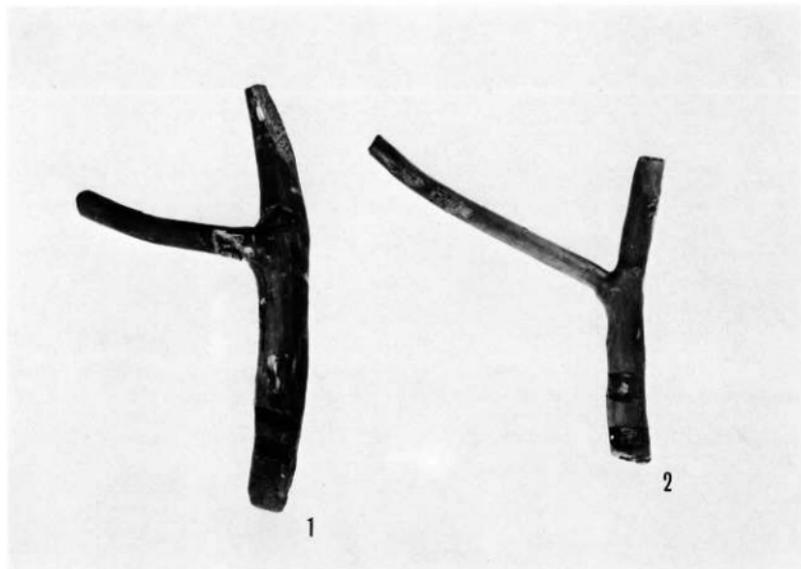
B 背負子



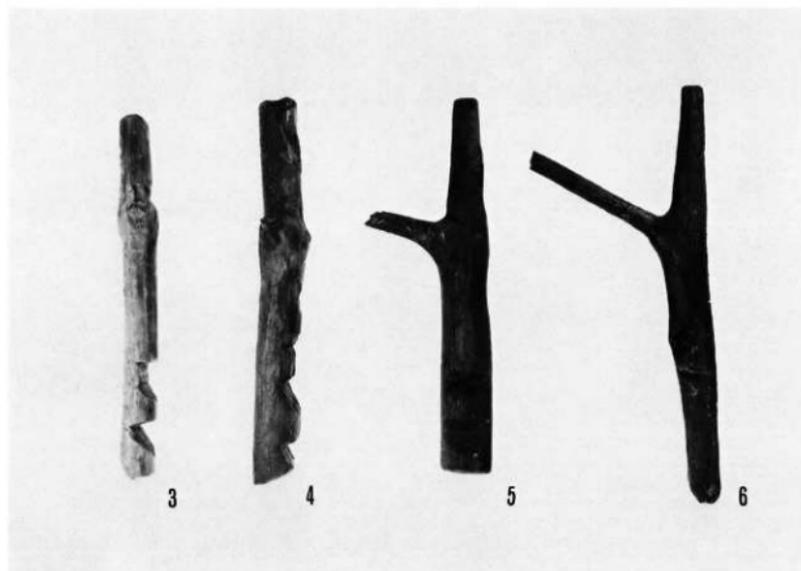
A 背負子



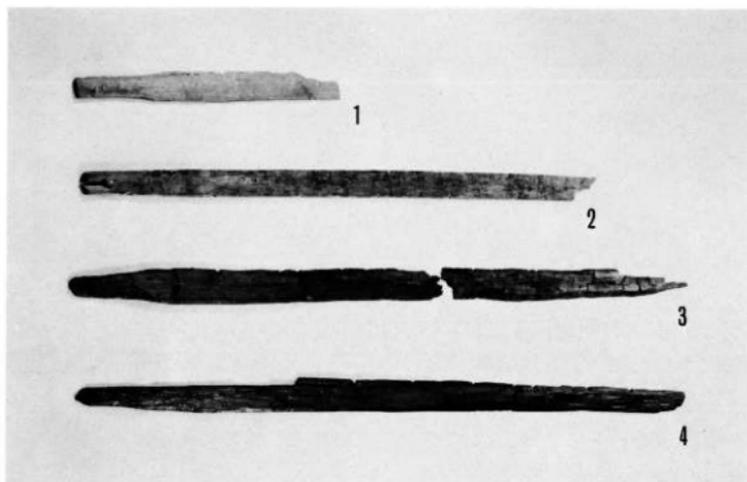
B 背負子



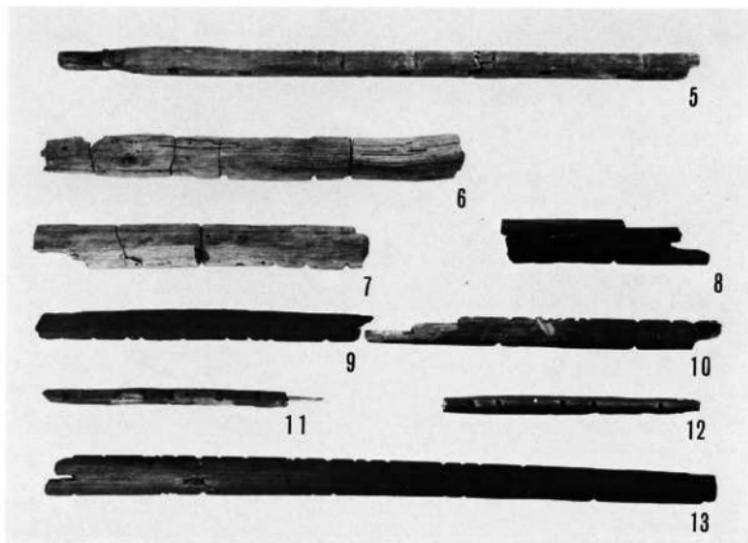
A 背負子



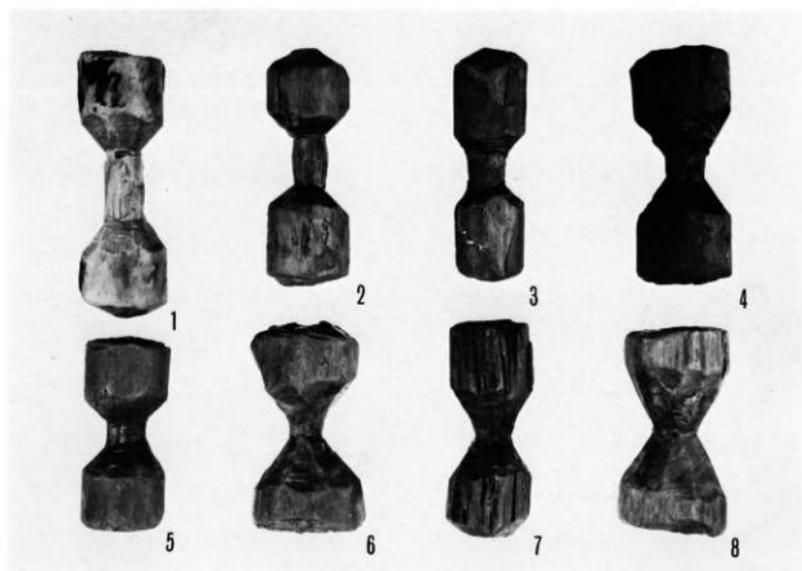
B 背負子



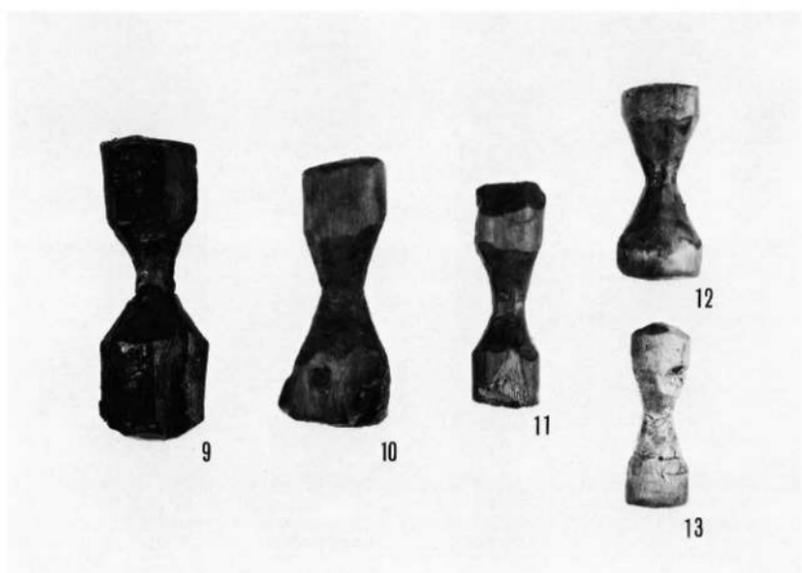
A 編台



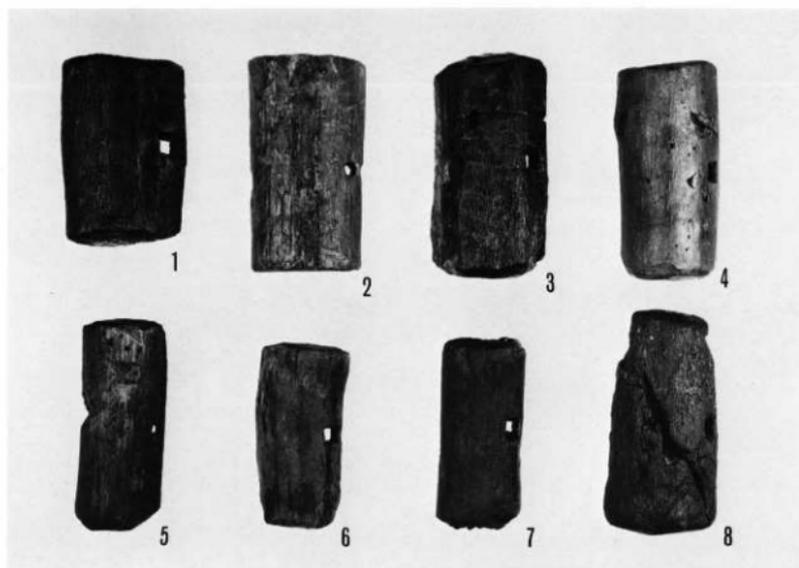
B 編台



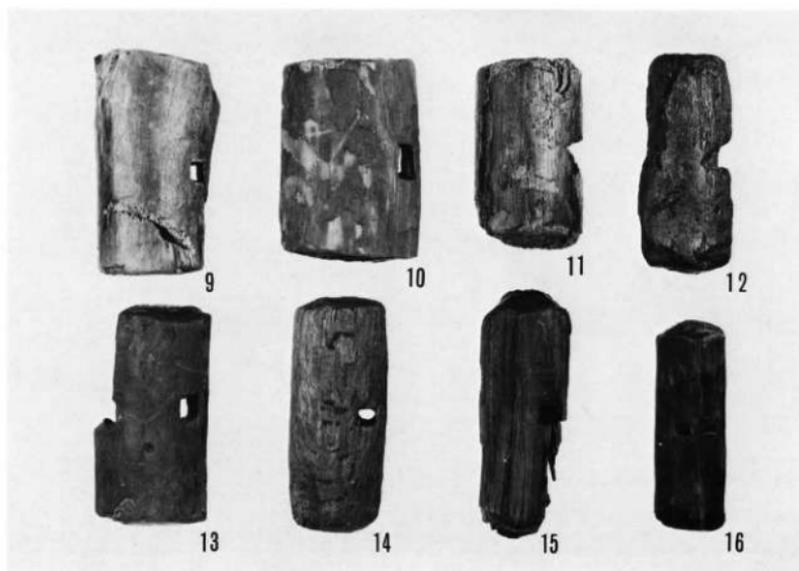
A 編鐘



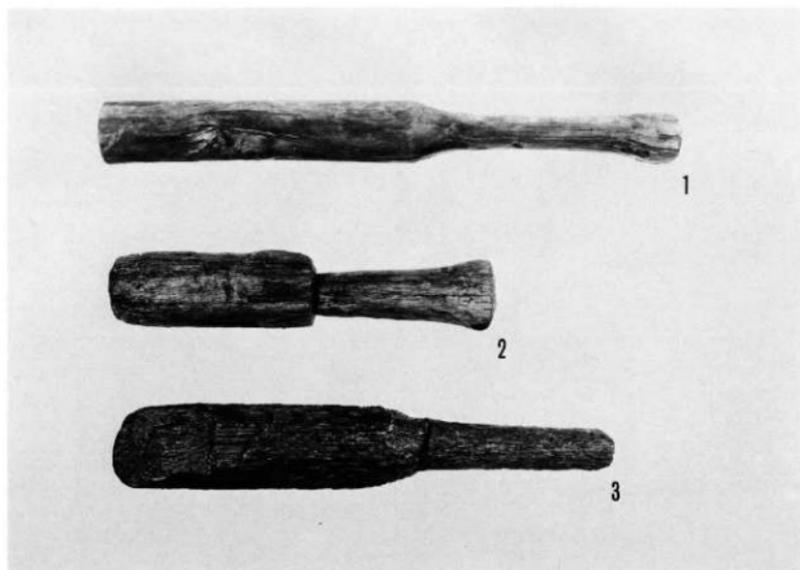
B 編鐘



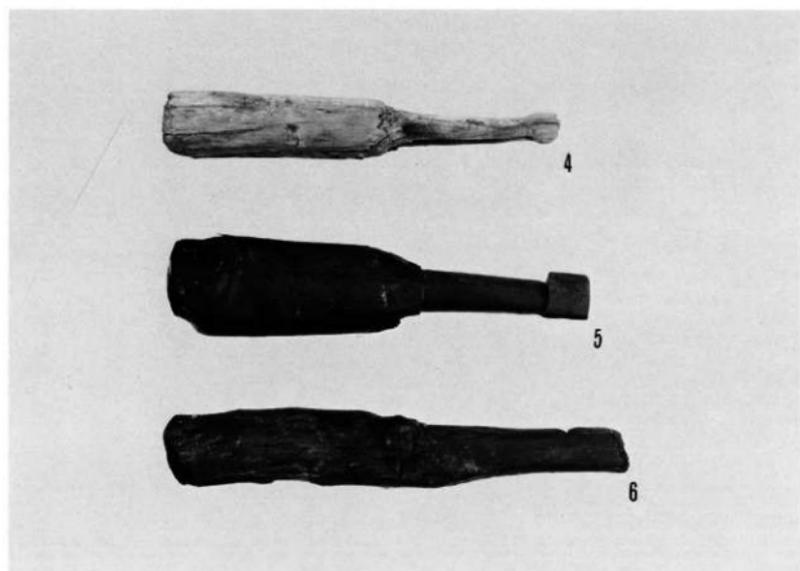
A 福鏝



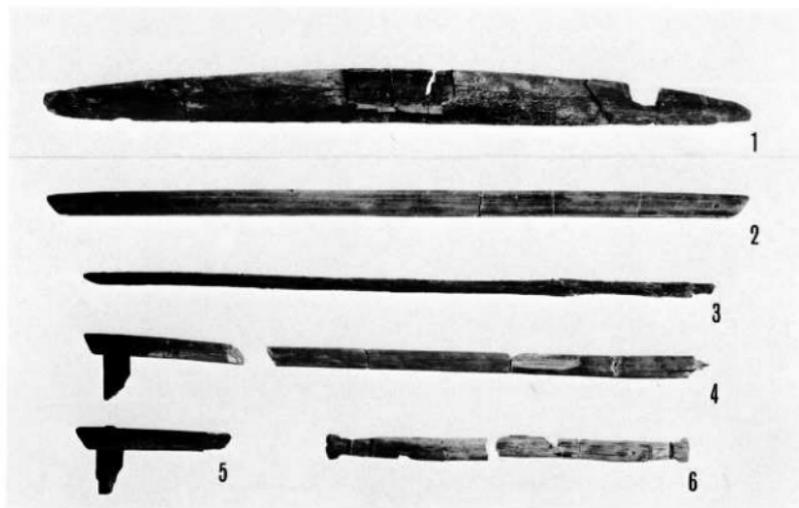
B 福鏝



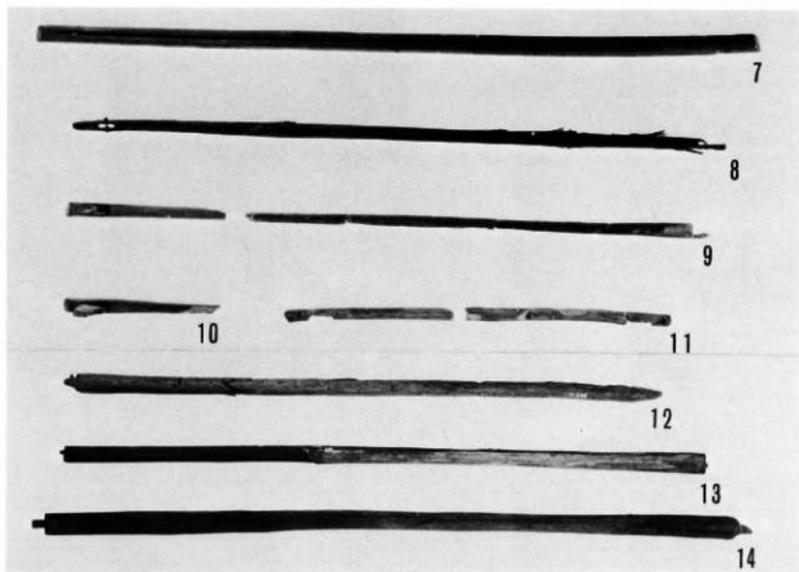
A 砧



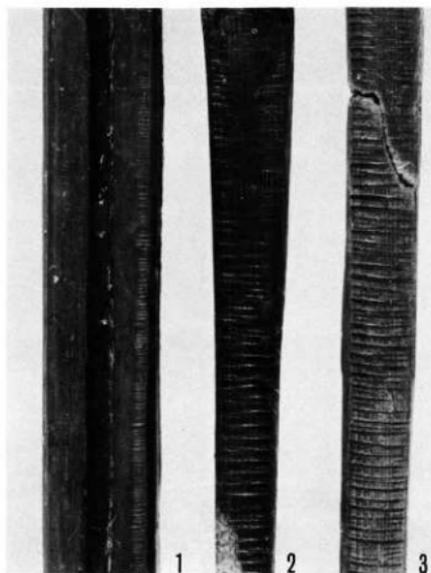
B 砧



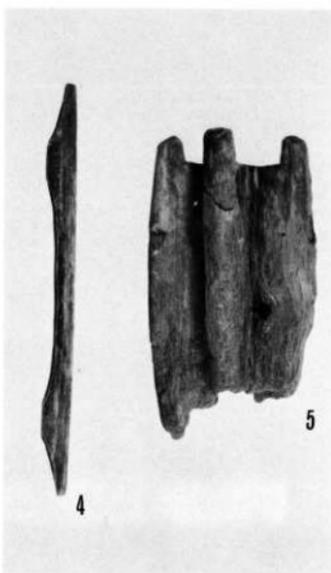
A 大杆と織機部品



B 織機部品



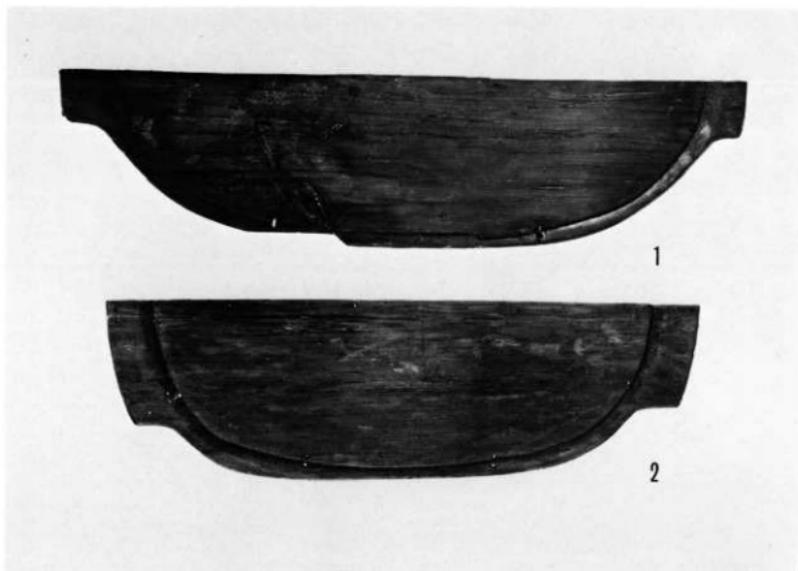
A 箴の糸目



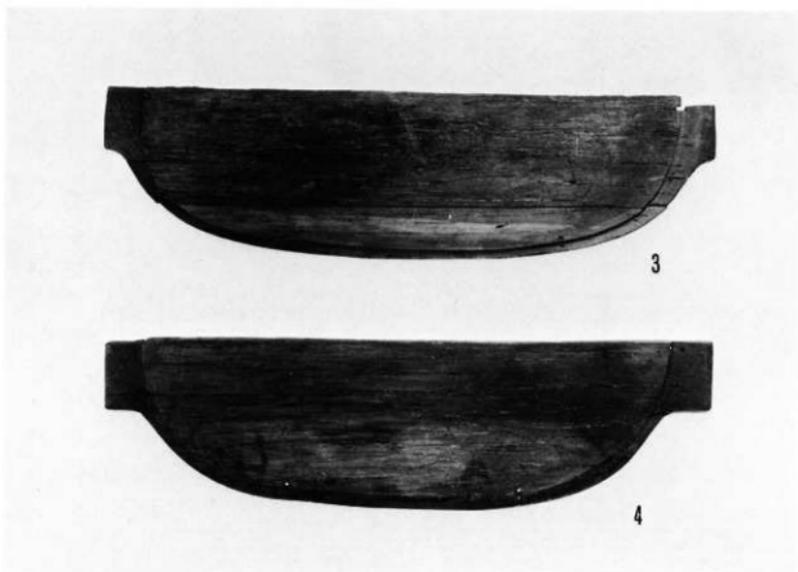
B 糸巻



C 刀子



A 把手付楕円形曲物



B 把手付楕円形曲物



1



2



3

A 精円形曲物



4

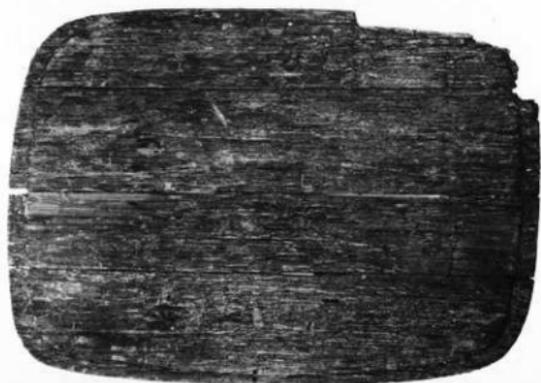


5

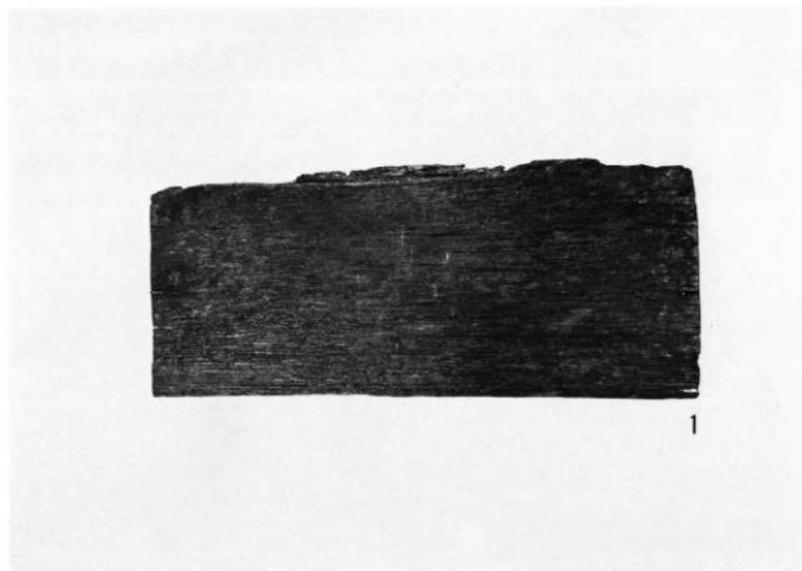
B 精円形曲物



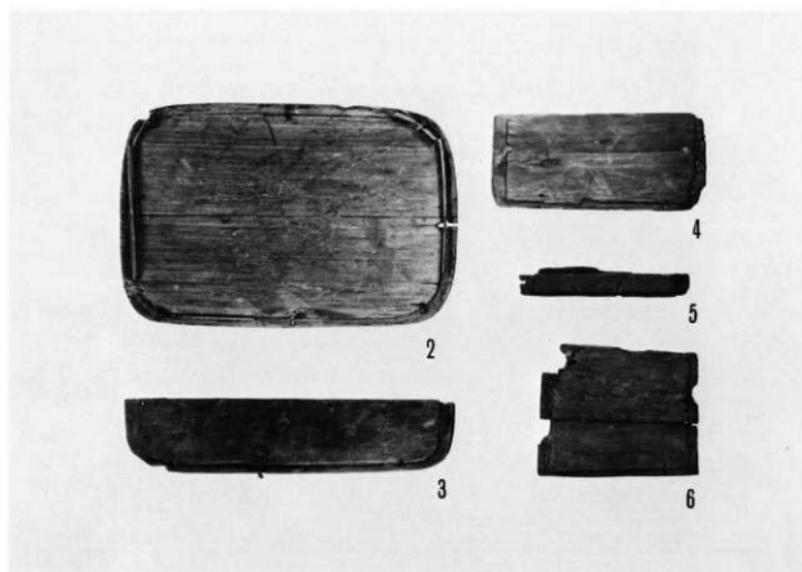
A 曲物出土状態 (大溝OF2地点)



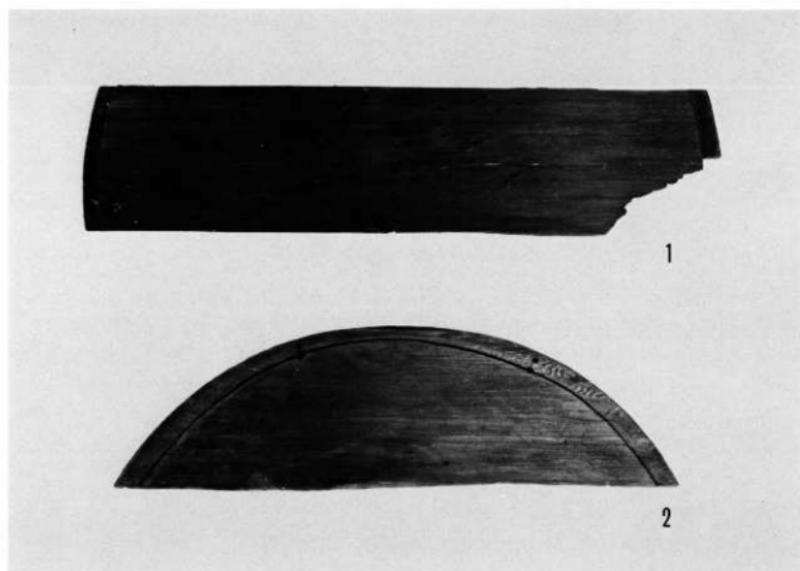
B 精円形曲物 (大溝OF2地点)



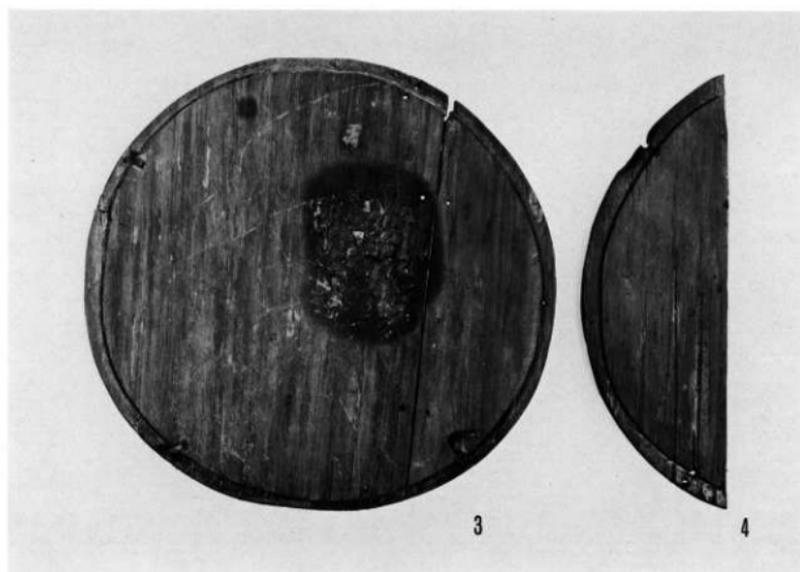
A 長方形曲物



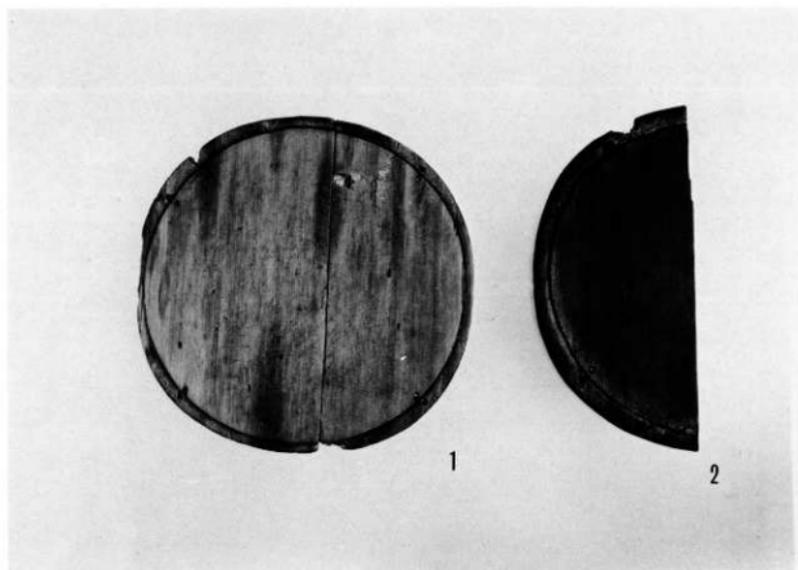
B 楕円形曲物と方形曲物



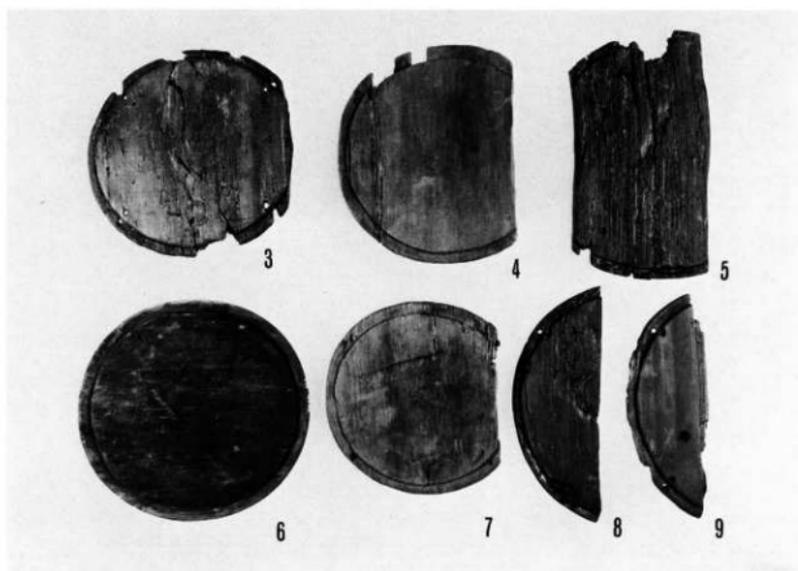
A 円形曲物



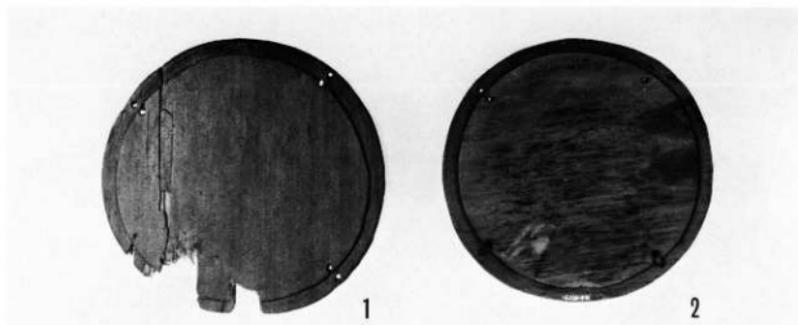
B 円形曲物



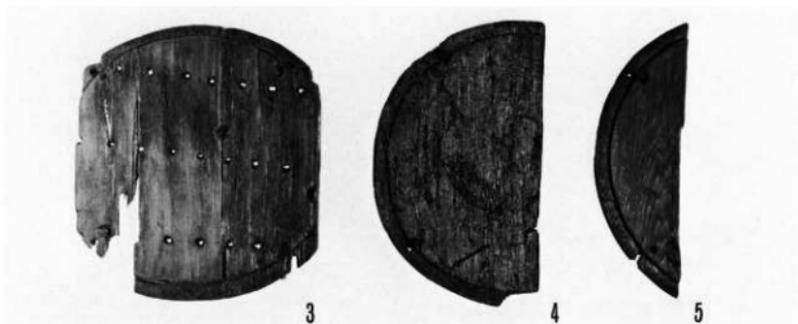
A 円形曲物



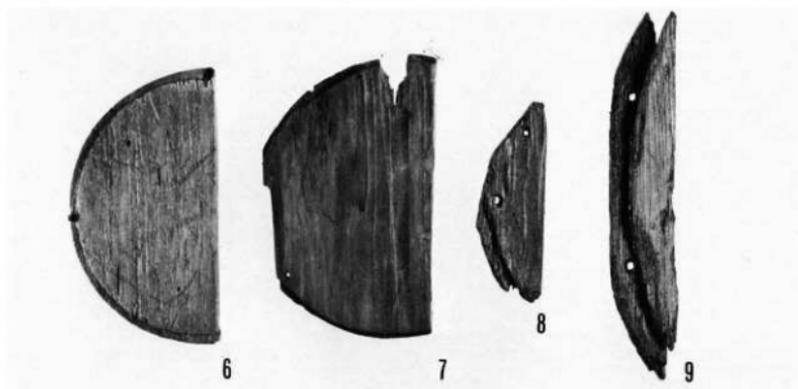
B 円形曲物



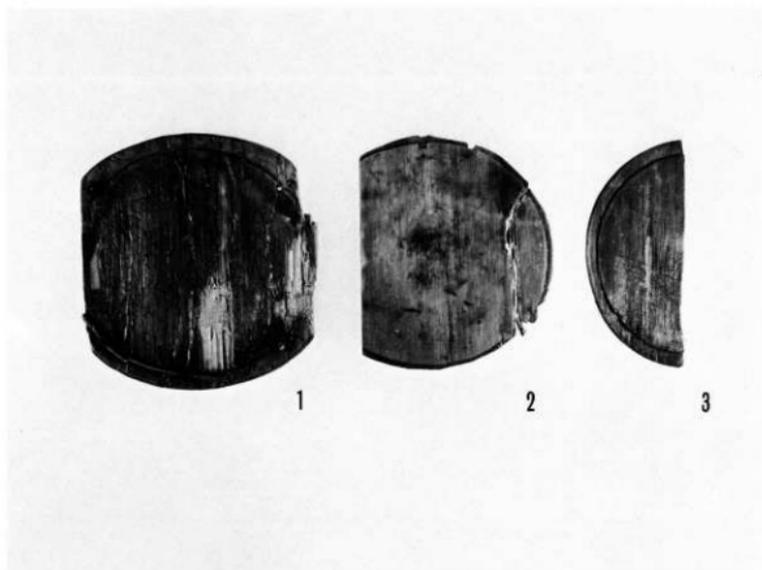
A 円形曲物



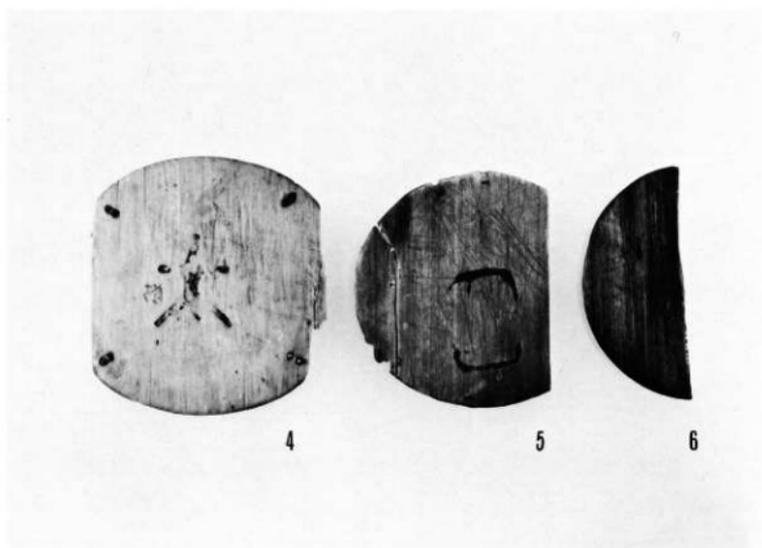
B 円形曲物



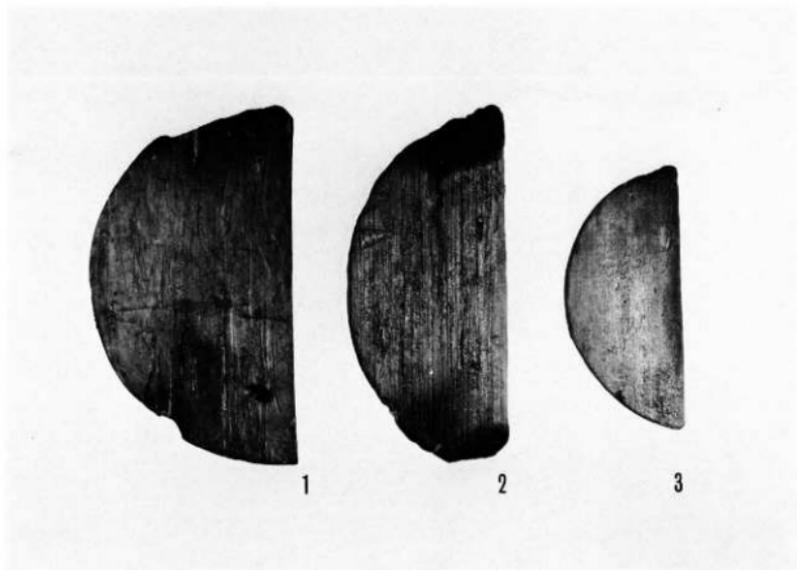
C 円形曲物



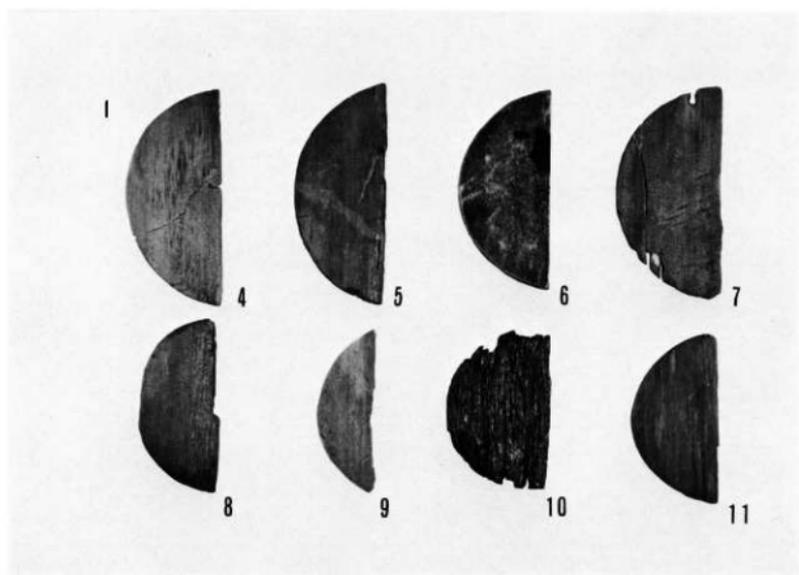
A 円形曲物



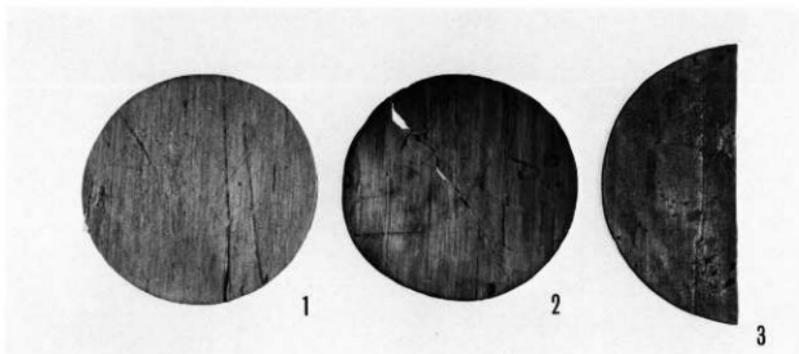
B 円形曲物 (同上表の焼印)



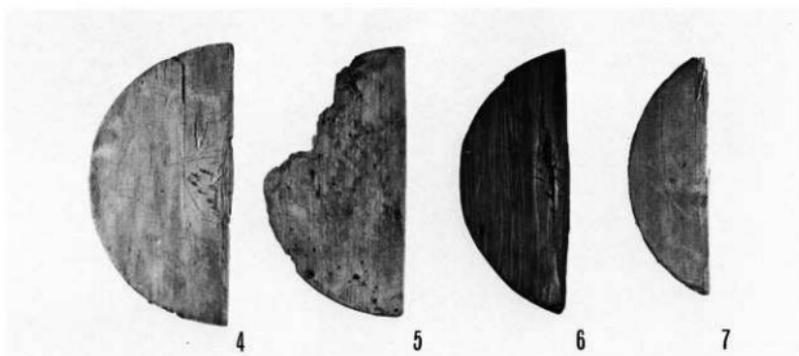
A 円形曲物



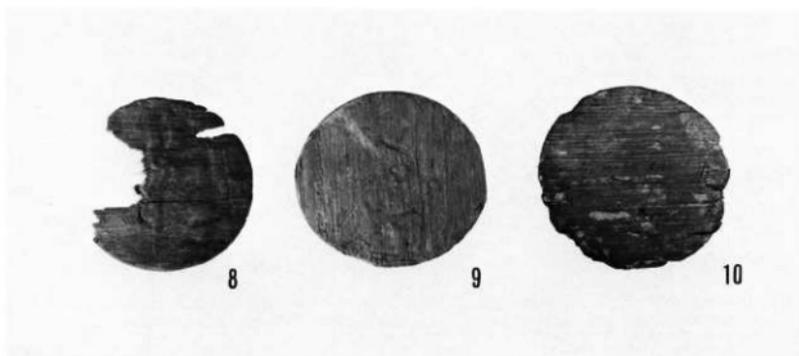
B 円形曲物



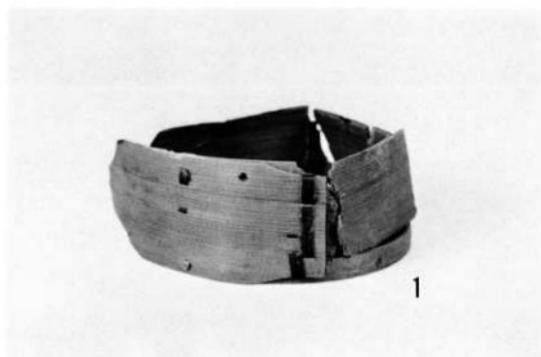
A 円形曲物



B 円形曲物



C 円形曲物



A 円形曲物



B 円形曲物



C 円形曲物



A 曲物出土状態 (大溝O E 2地点)



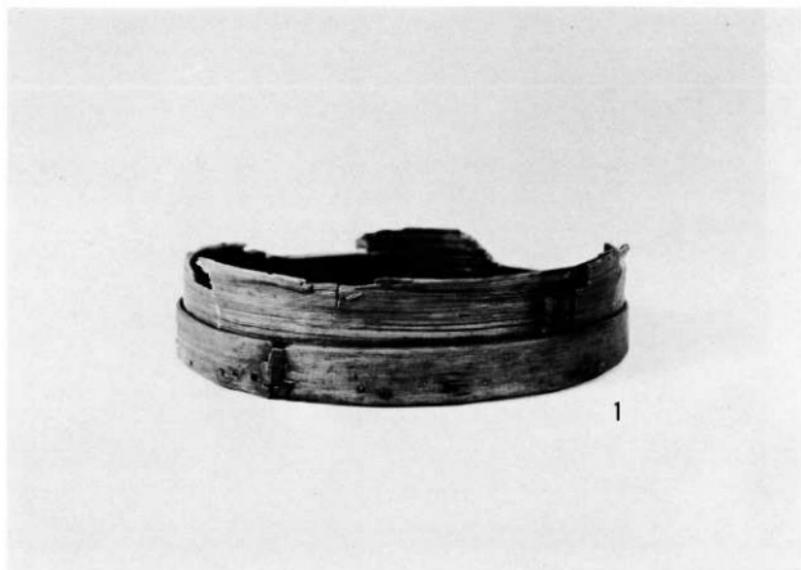
B 曲物出土状態 (井戸NG1)



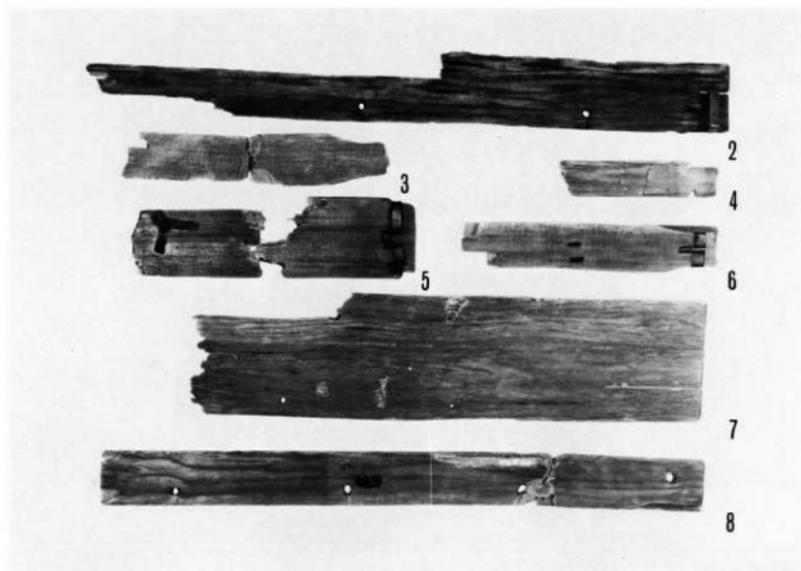
A 精円形曲物側板



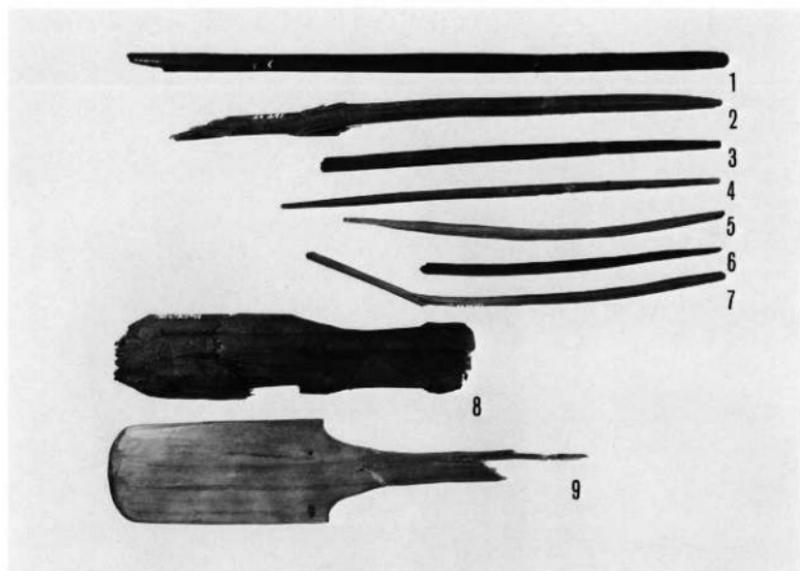
B 円形曲物側板 (井戸NG2)



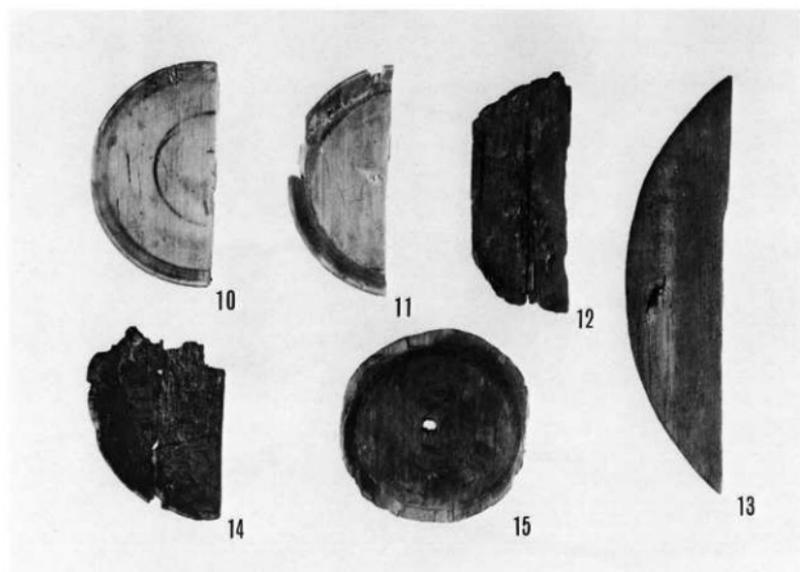
A 円形曲物側板



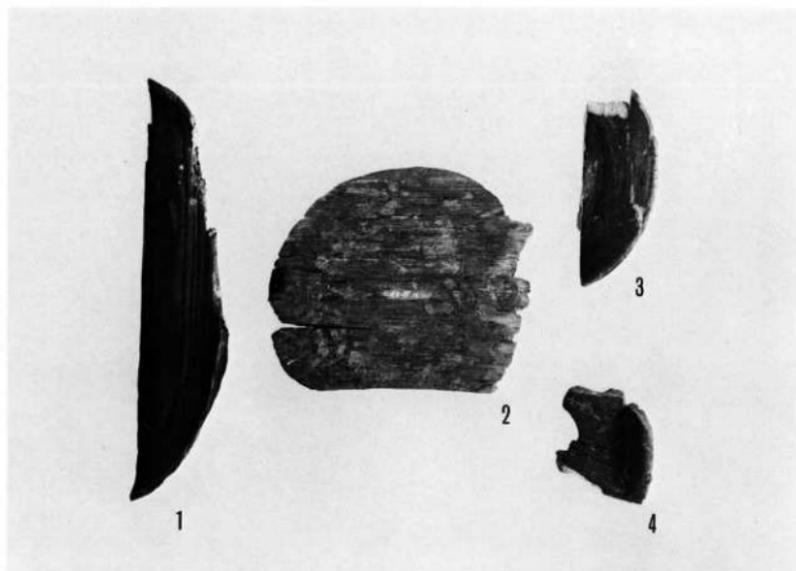
B 曲物側板破片



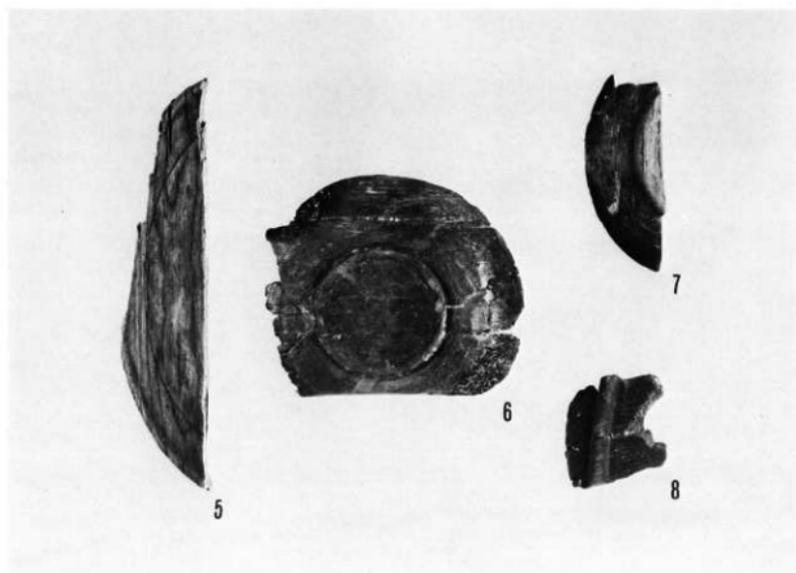
A 箸・柄杓の柄および杓文字形木製品



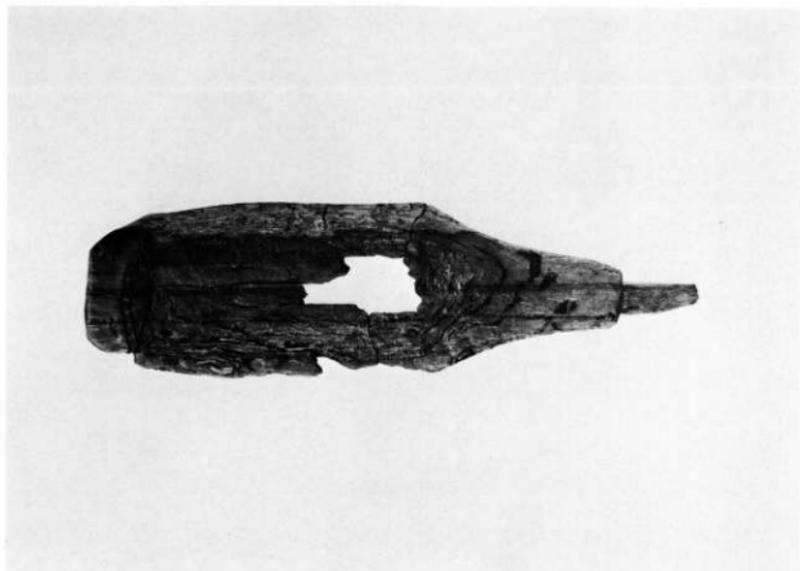
B 挽物盤類



A 挽物盤類



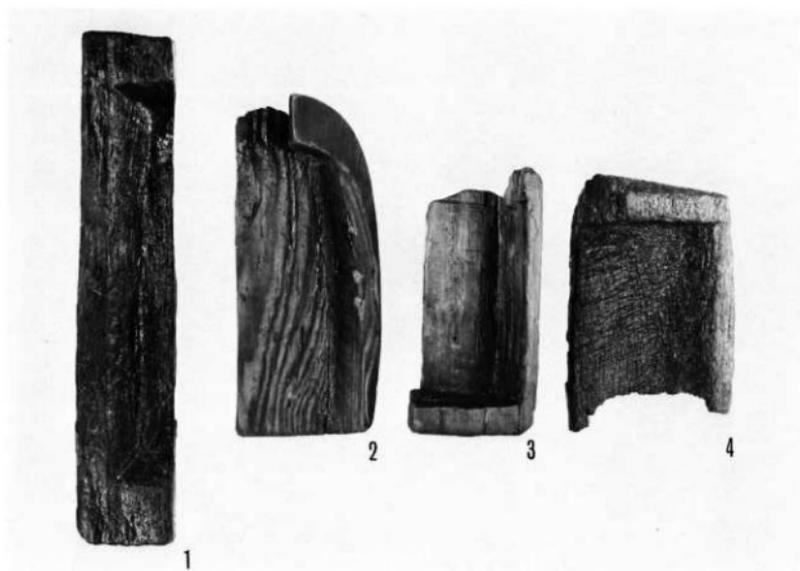
B 挽物盤類 (同上裏面)



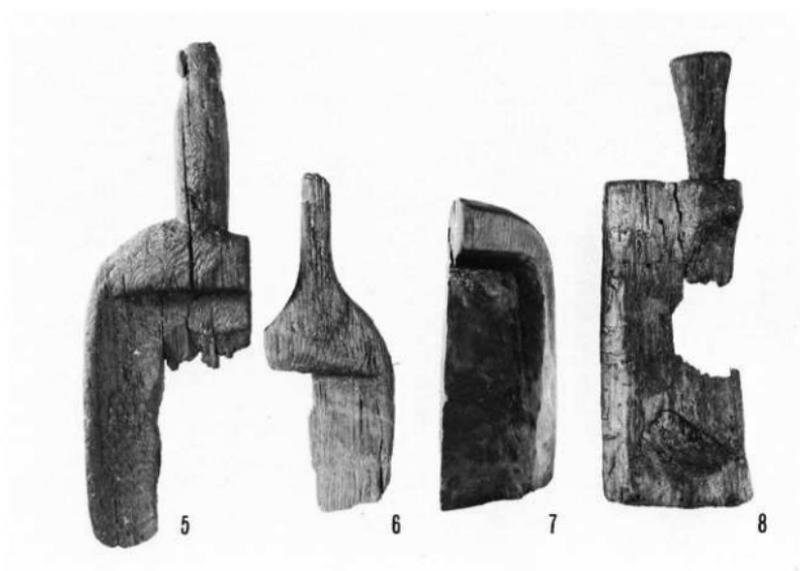
A 剝物 (楕円形)



B 剝物 (鋤鎌形)



A 刺物



B 刺物



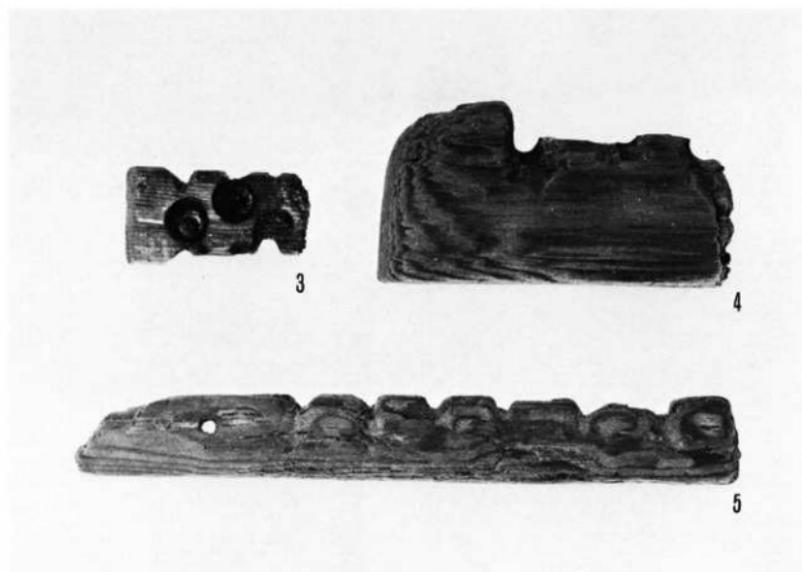
A 笊出土状態



B 笊



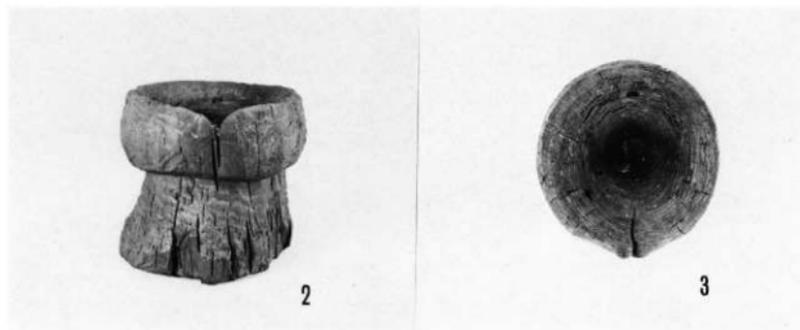
A 火鎖白



B 火鎖白



A 杵



B 小白の上面観と側面観



C 俎・案出土状態



A 俎第1号



B 俎第1号の短辺側面観



A 俎第1号の上面観



B 俎第1号の長辺側面観



C 俎第1号の下面観



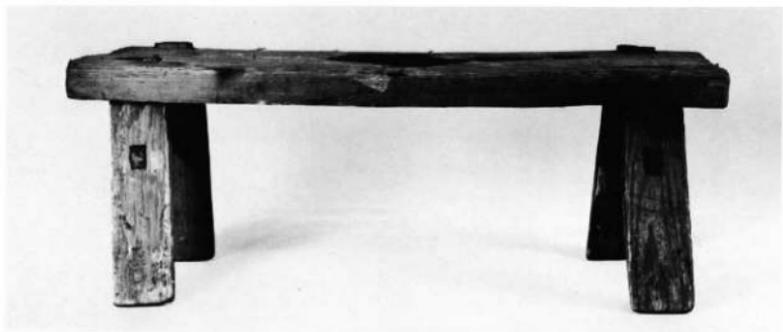
A 案



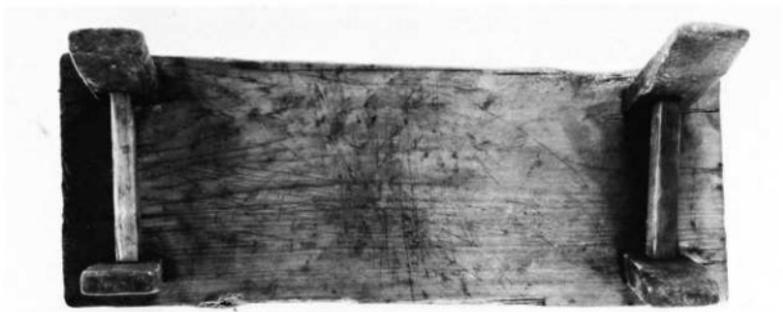
B 案の短辺側面観



A 案の上面観



B 案の長辺側面観



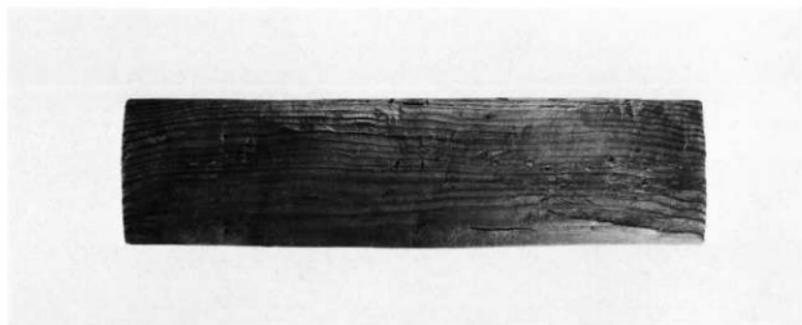
C 案の下面観



A 俎第2号



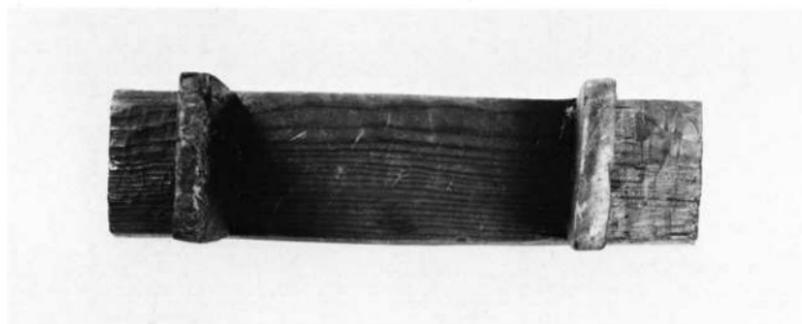
B 俎第2号の短辺側面観



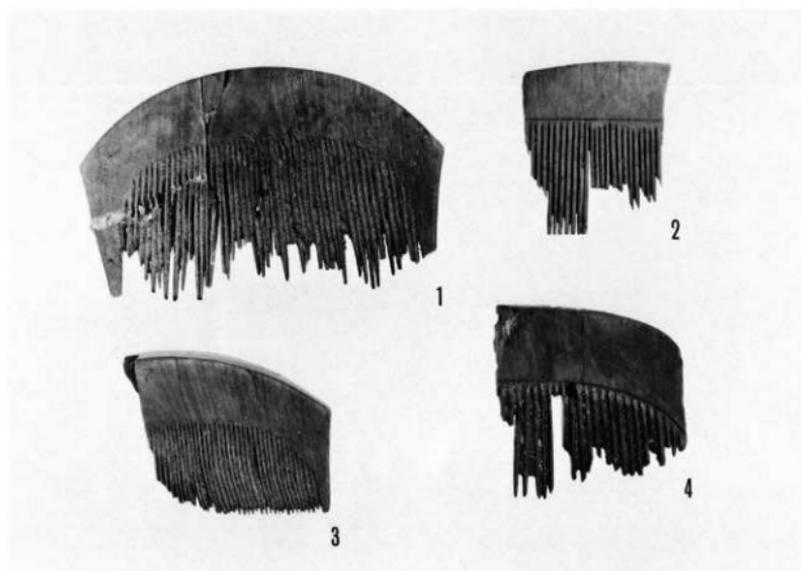
A 俎第2号の上面観



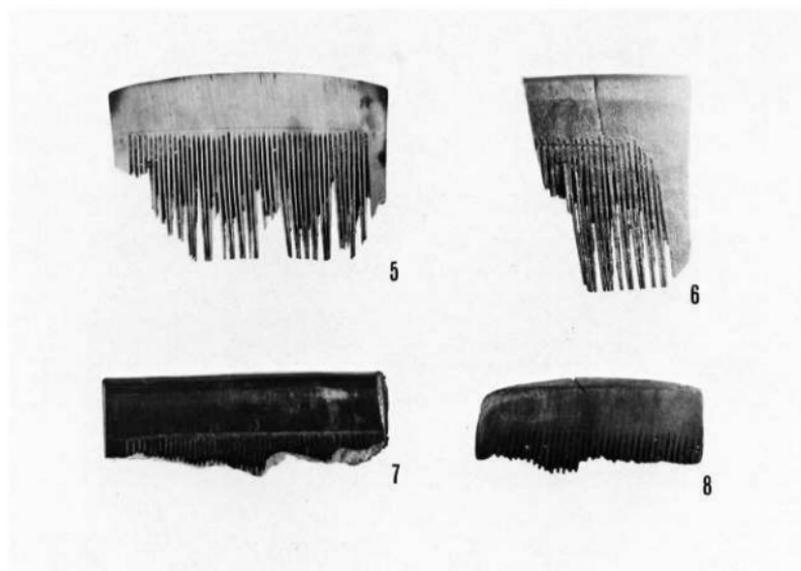
B 俎第2号の長辺側面観



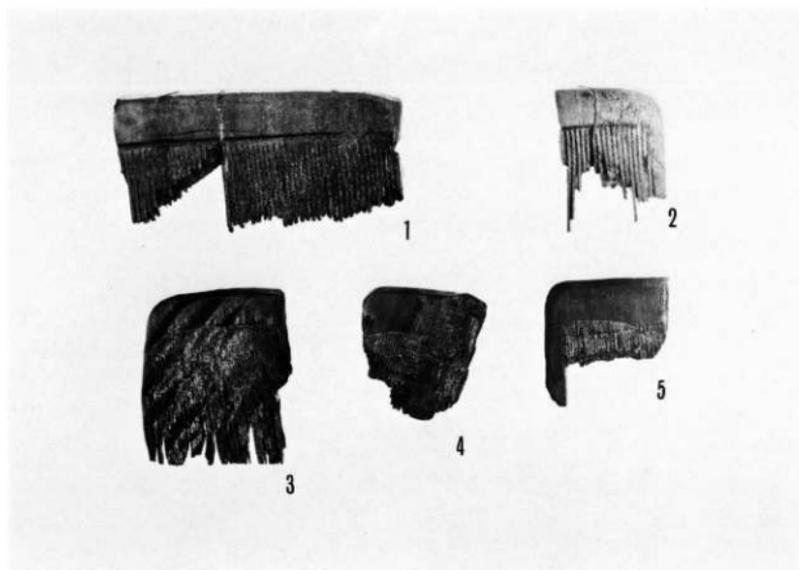
C 俎第2号の下面観



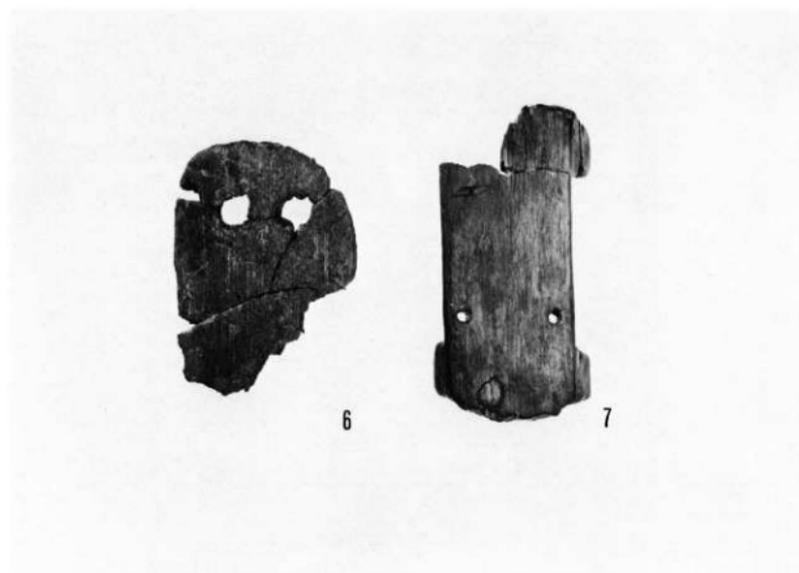
A 横櫛



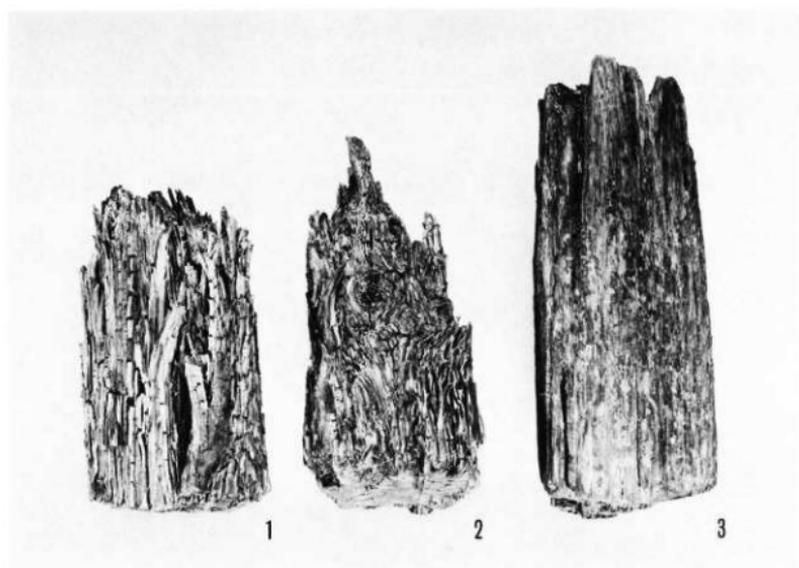
B 横櫛



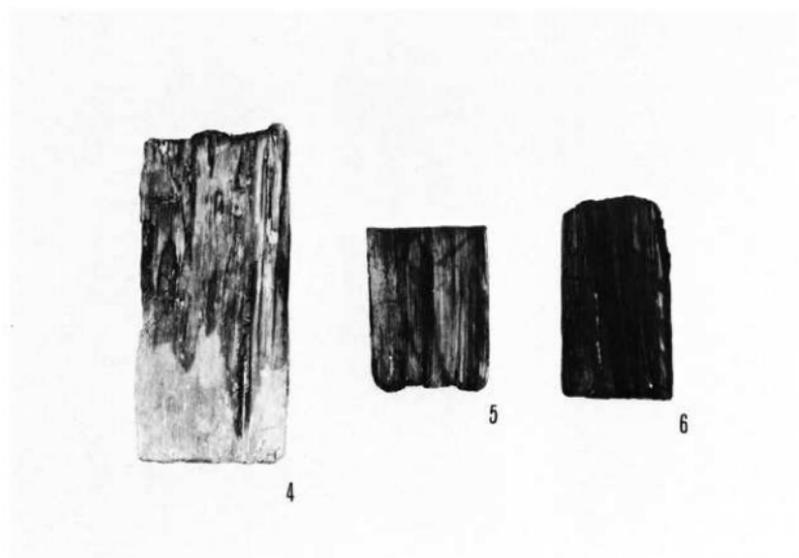
A 横櫛



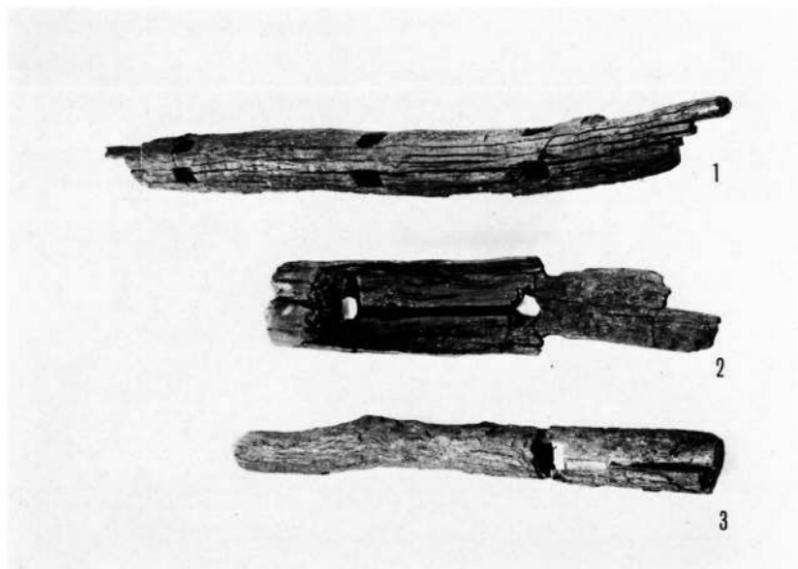
B 下駄



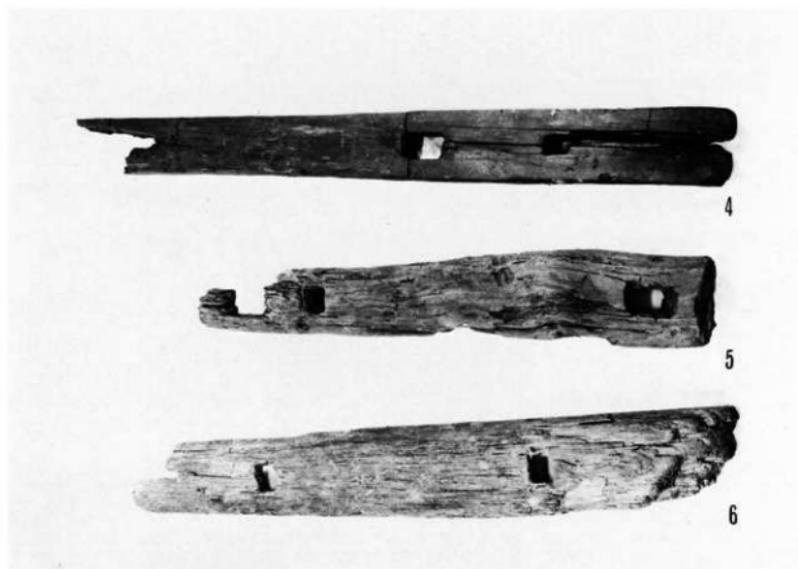
A 柱根



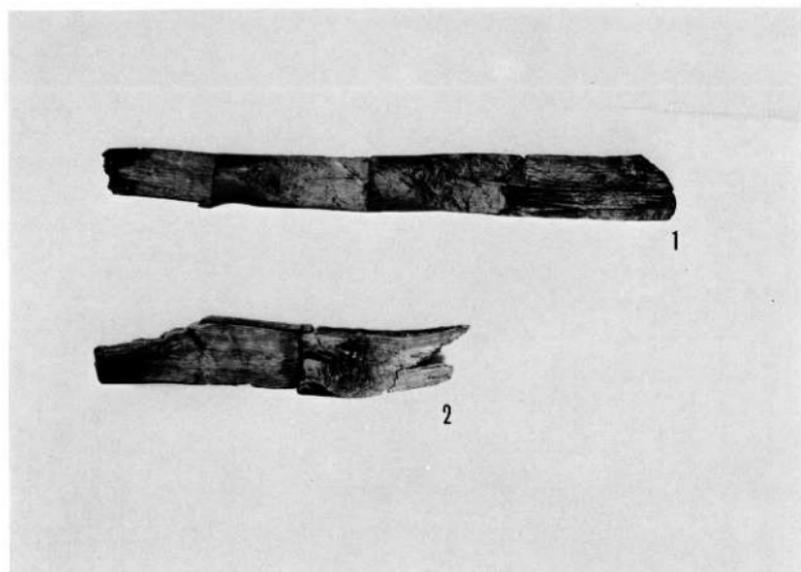
B 礎板



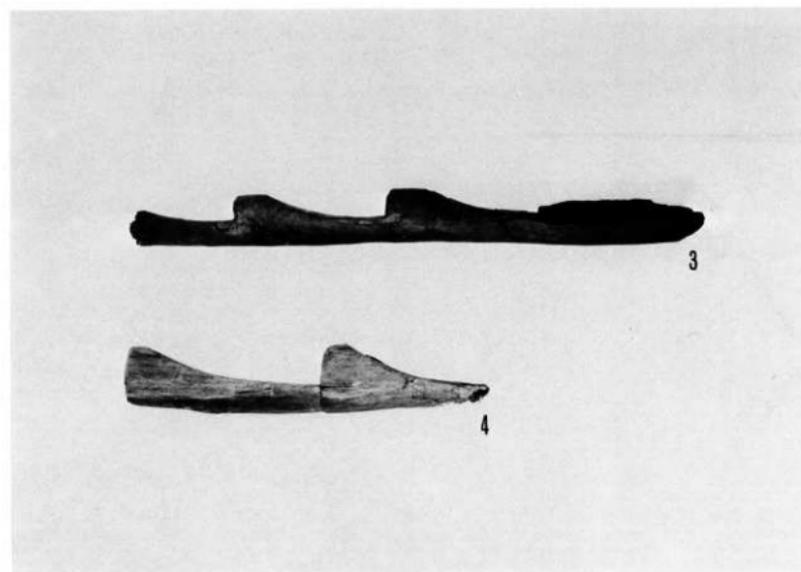
A 建築部材と刺技材



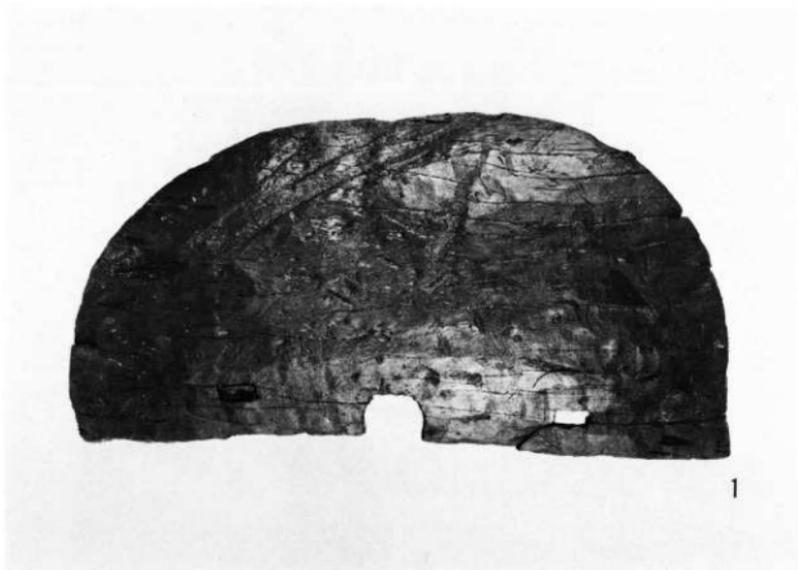
B 建築部材と洗濯板



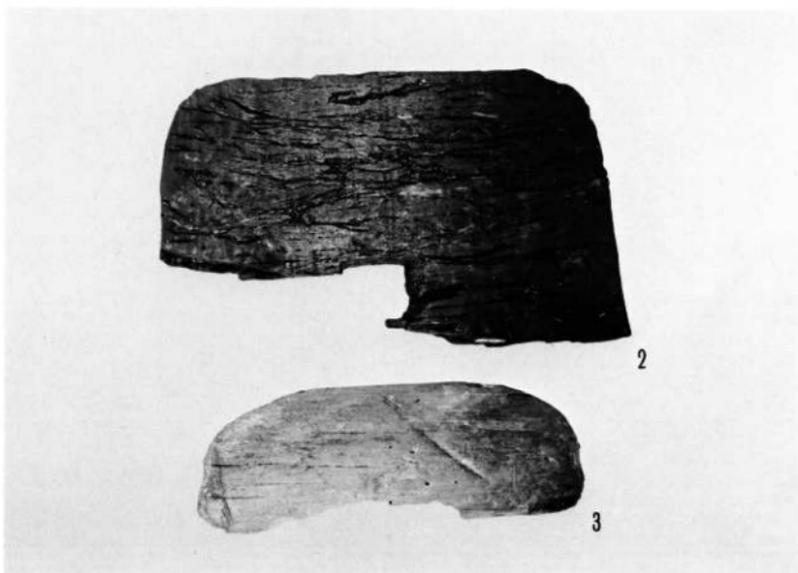
A 梯子



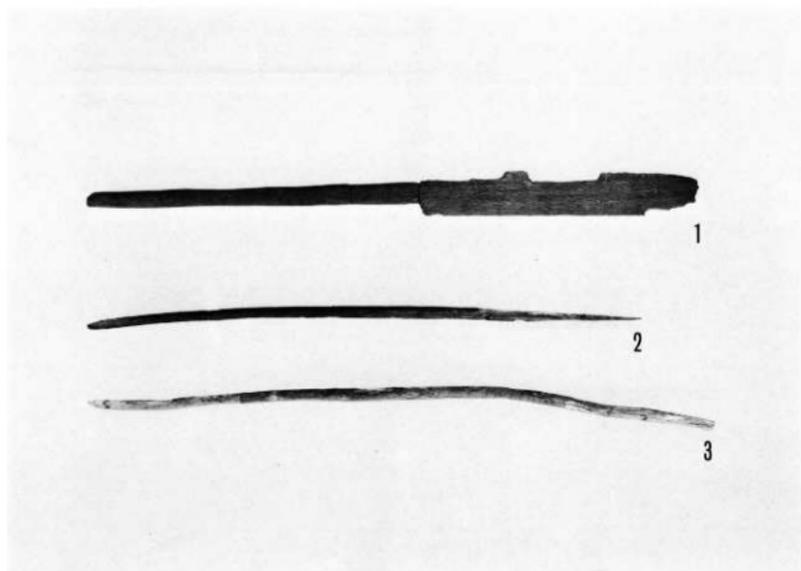
B 梯子(側面)



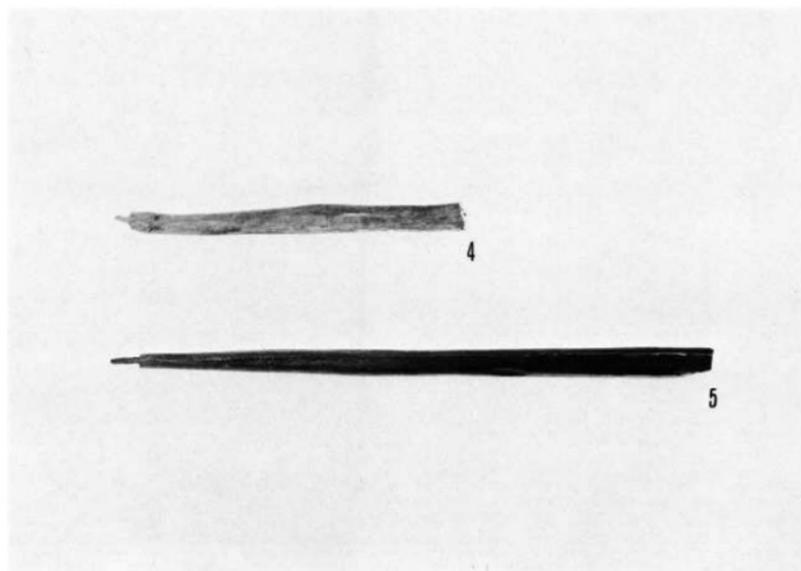
A 鼠返



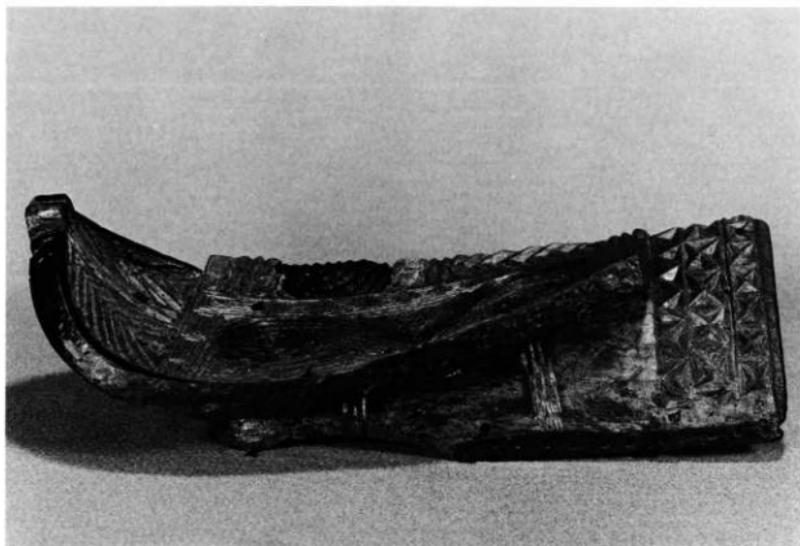
B 鼠返



A 丸木弓と櫂



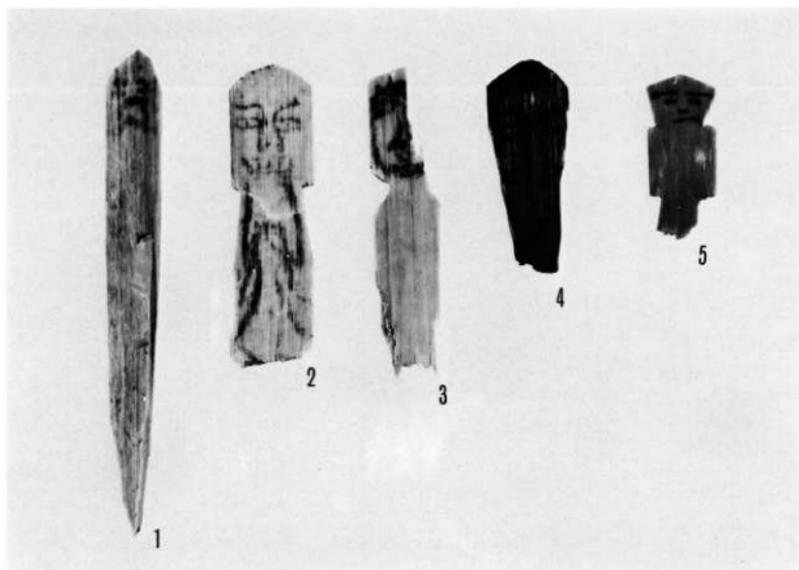
B 丸木弓の部分



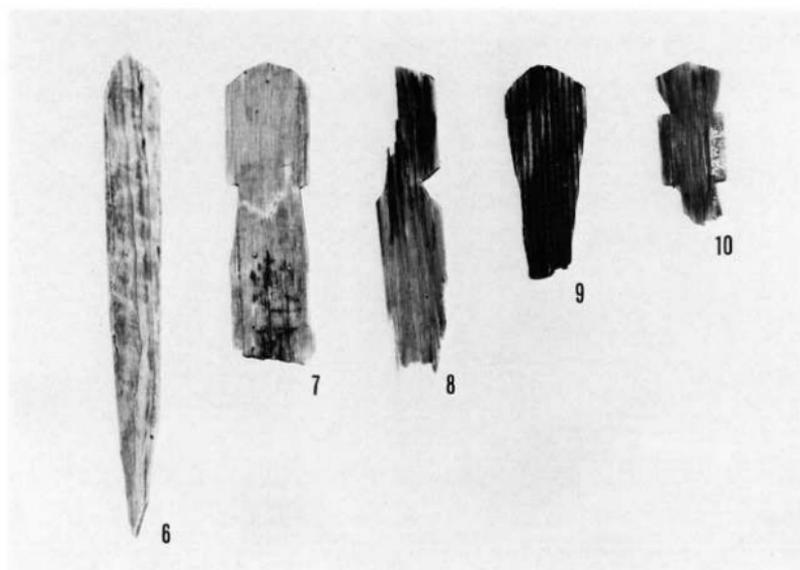
A 短甲状木製品第2号の側面観



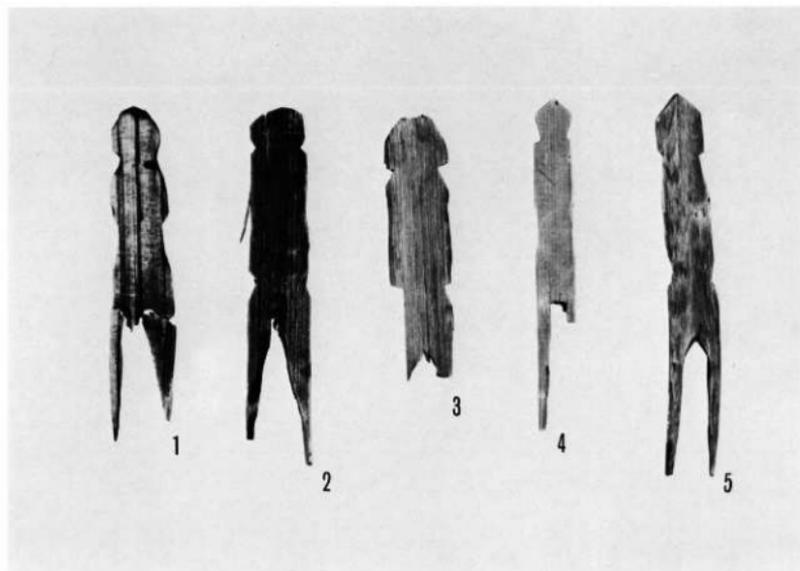
B 壺鉈



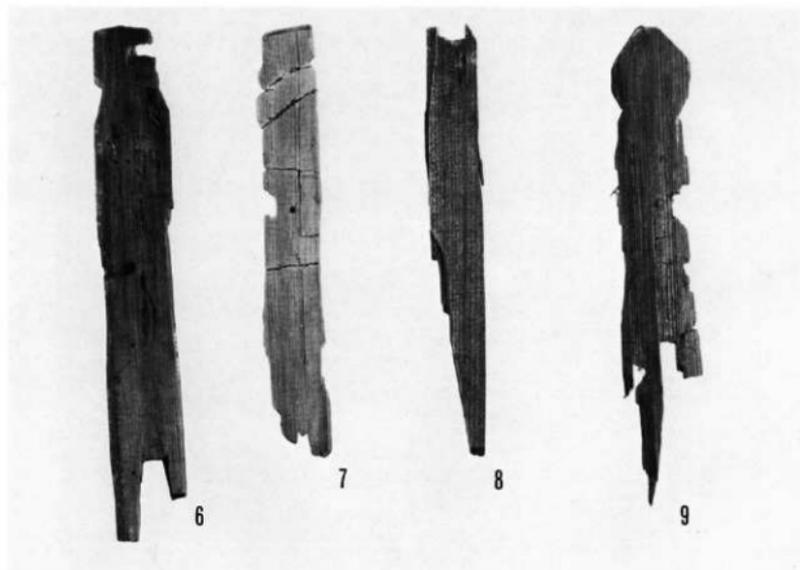
A 墨画のある人形（表）



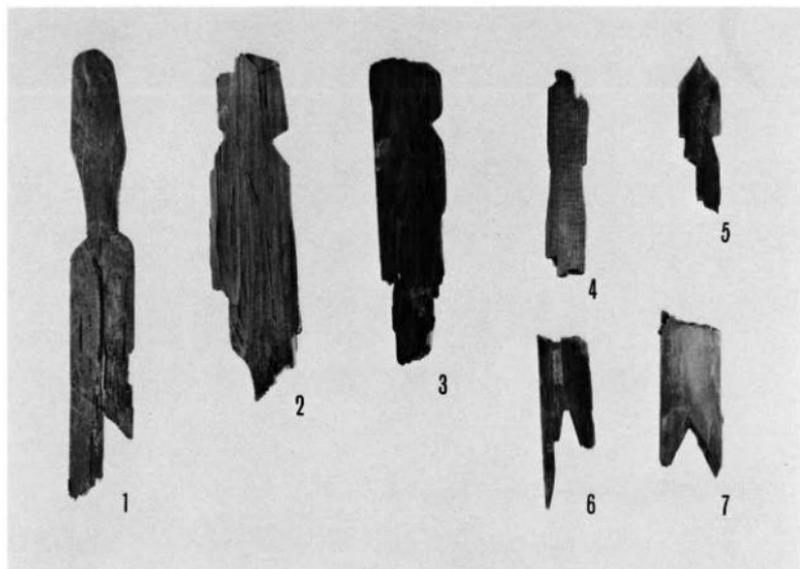
B 墨画のある人形（裏）



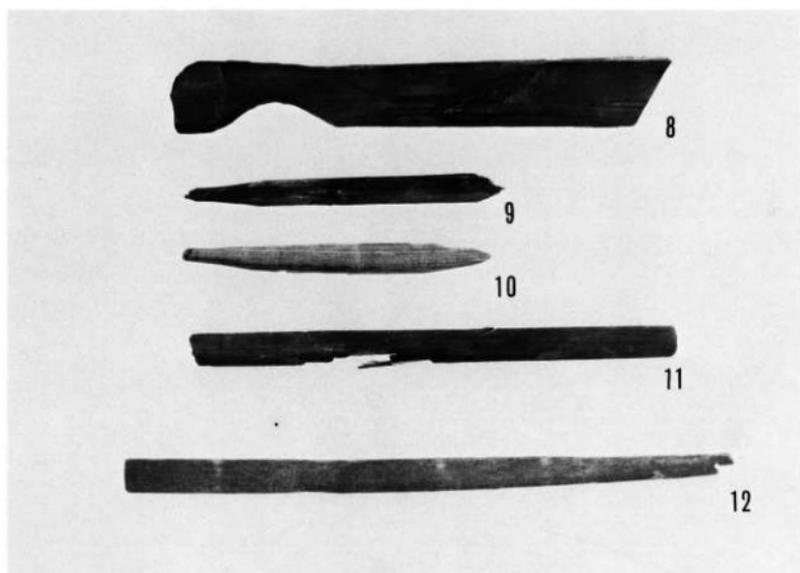
A 人形



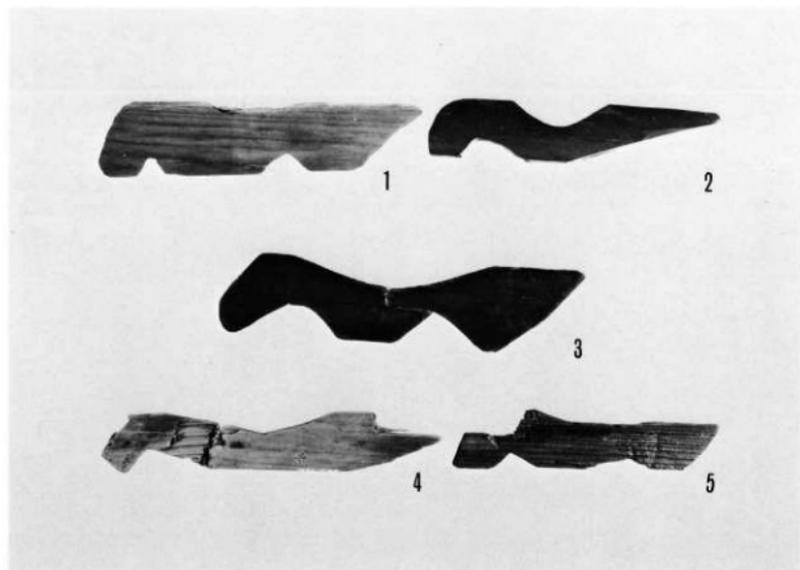
B 人形



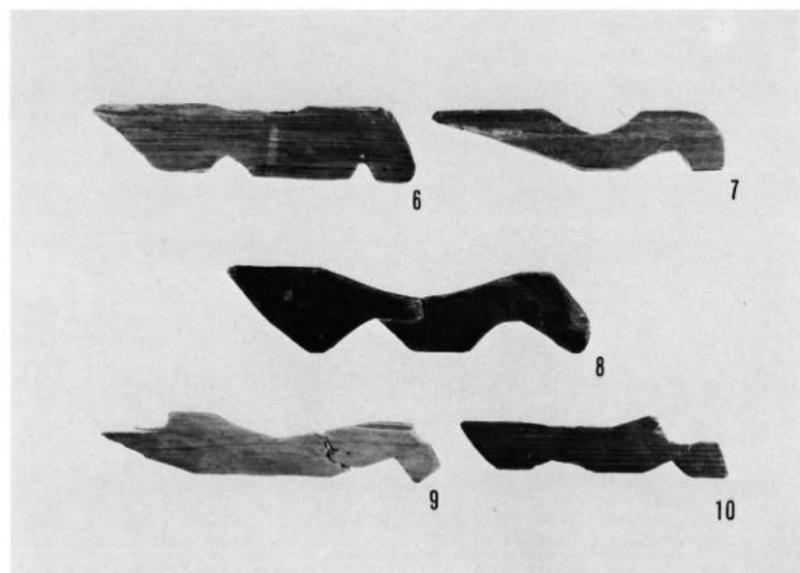
A 人形



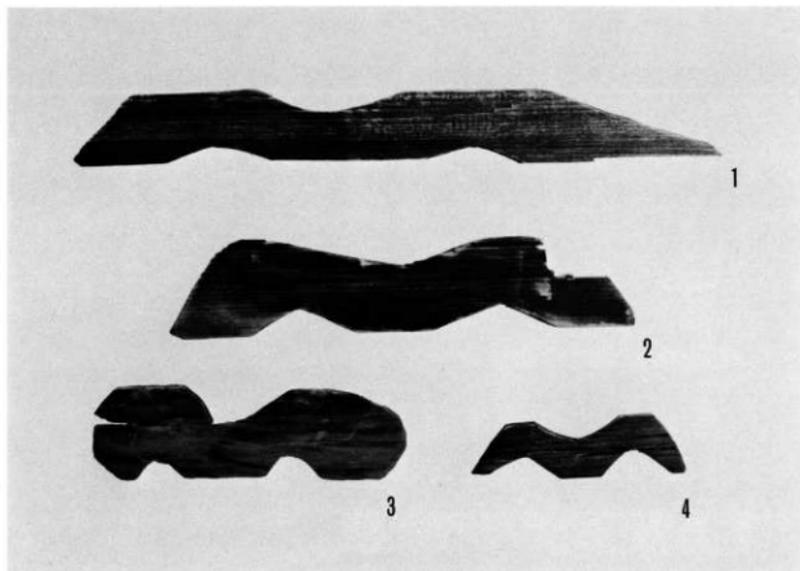
B 鳥形・剣形・物指? 槍頭?



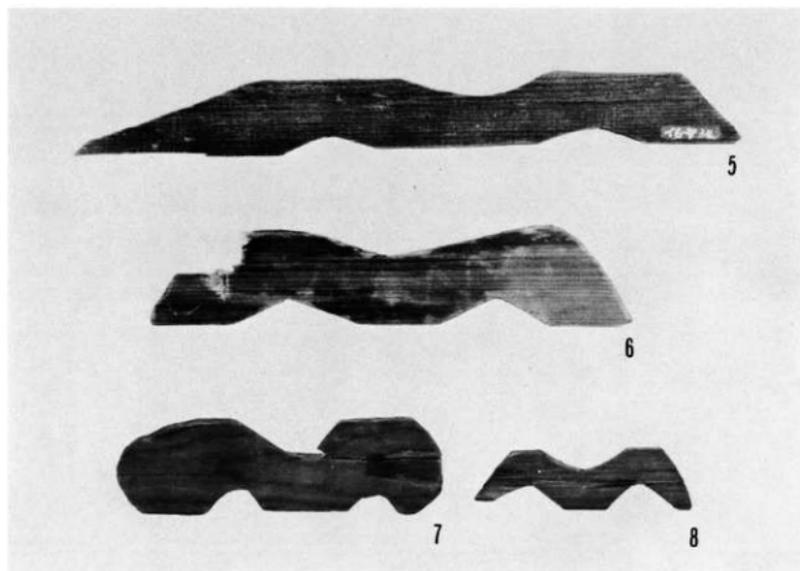
A 馬形 (表)



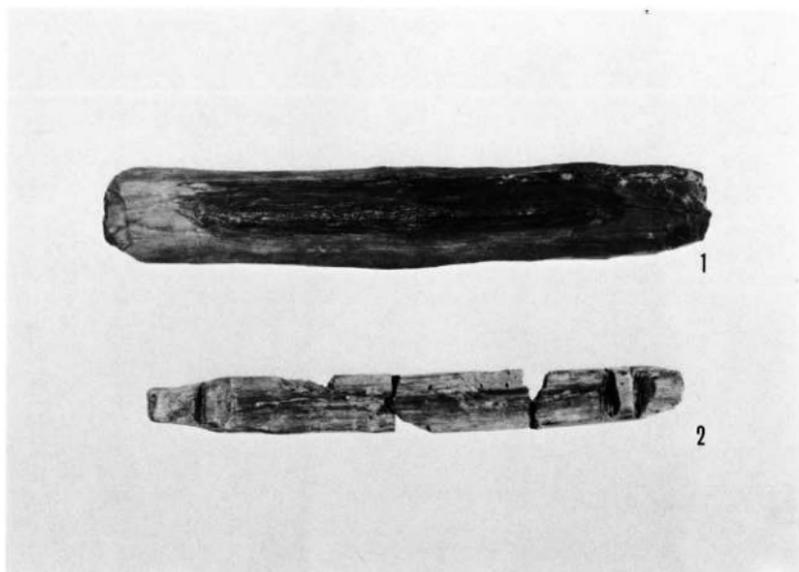
B 馬形 (裏)



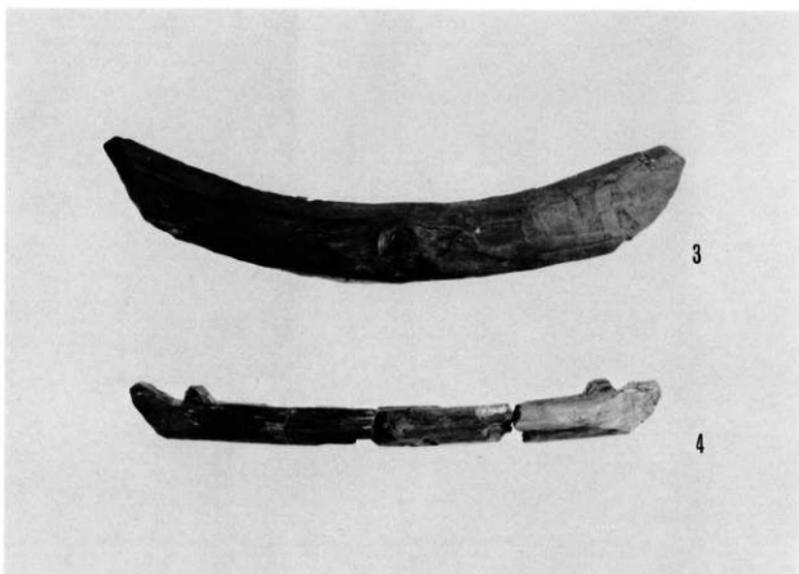
A 馬形 (表)



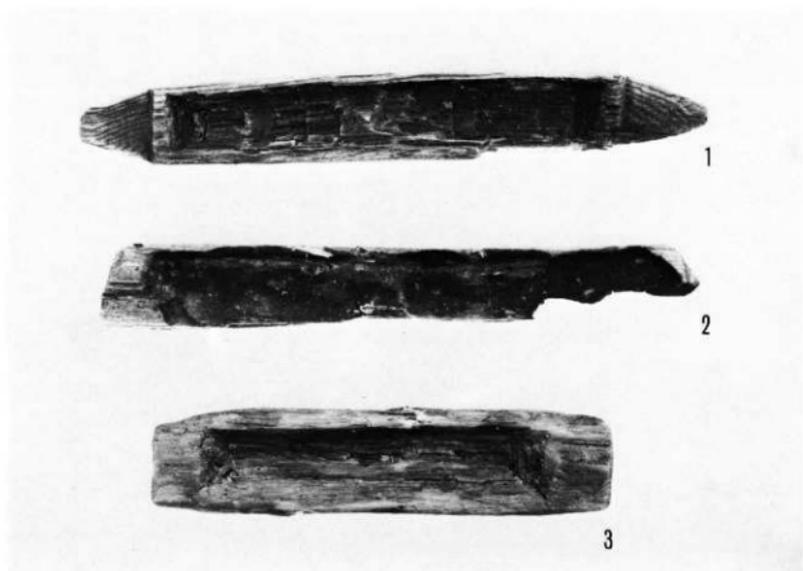
B 馬形 (裏)



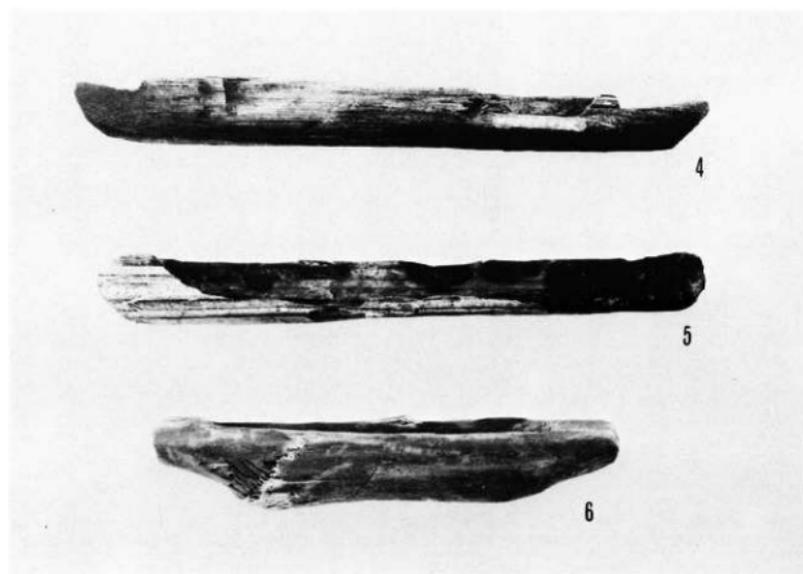
A 舟形



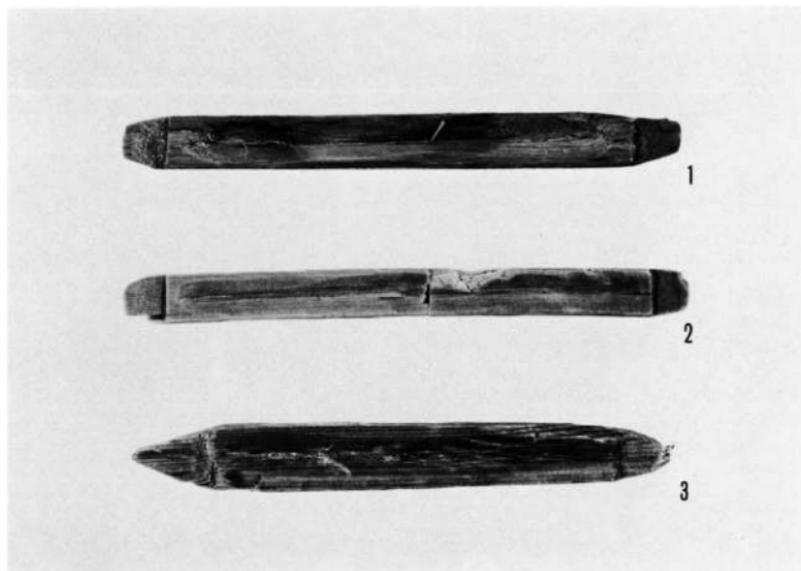
B 舟形 (同上側面)



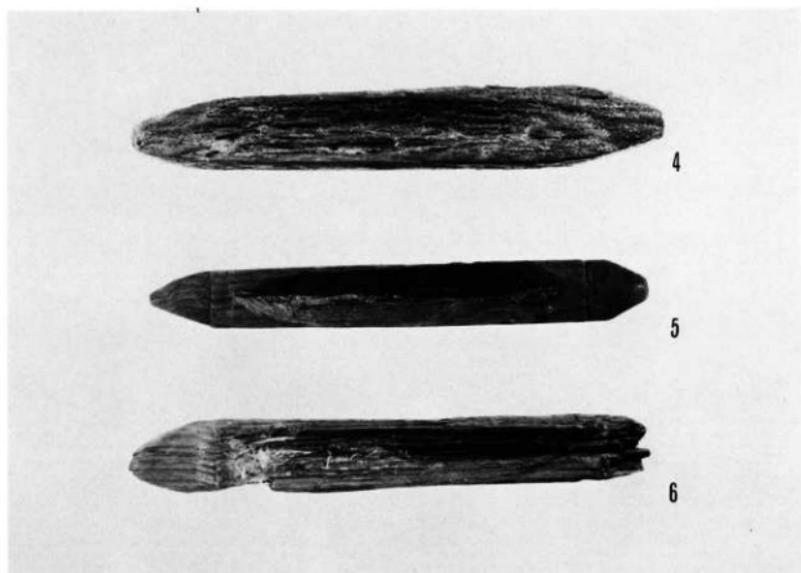
A 舟形



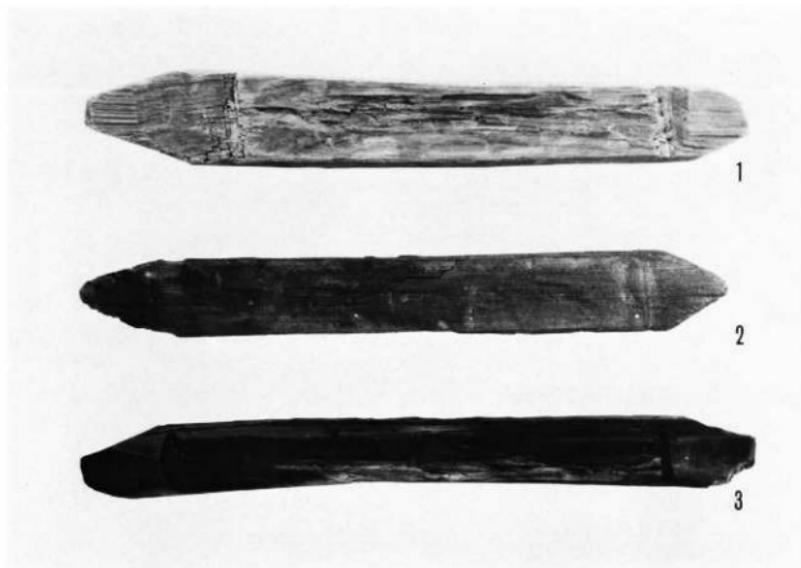
B 舟形 (同上側面)



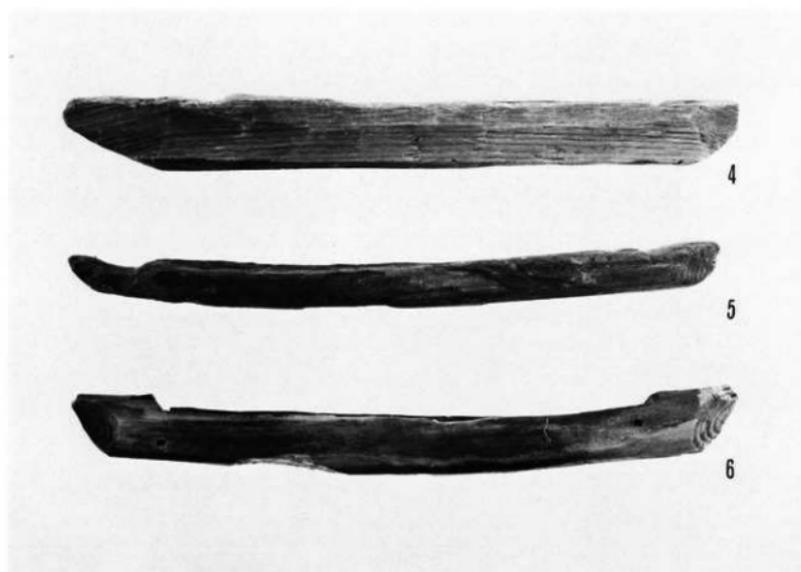
A 舟形



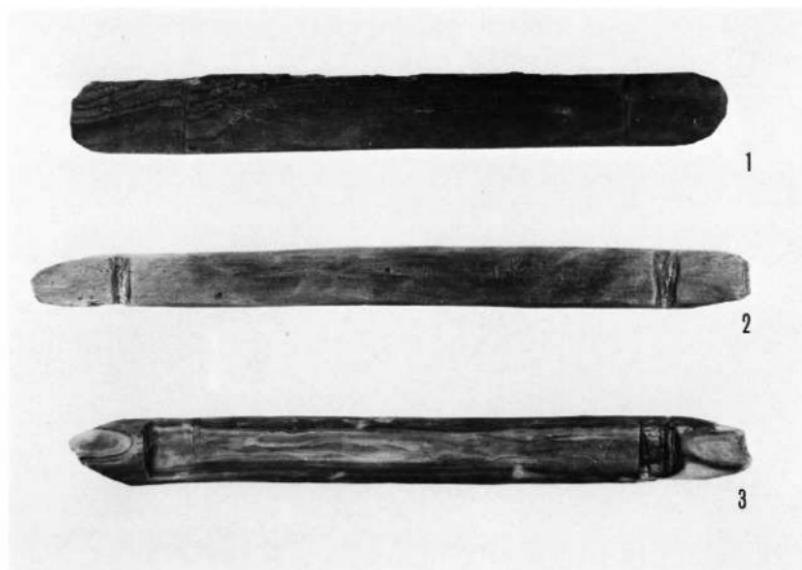
B 舟形



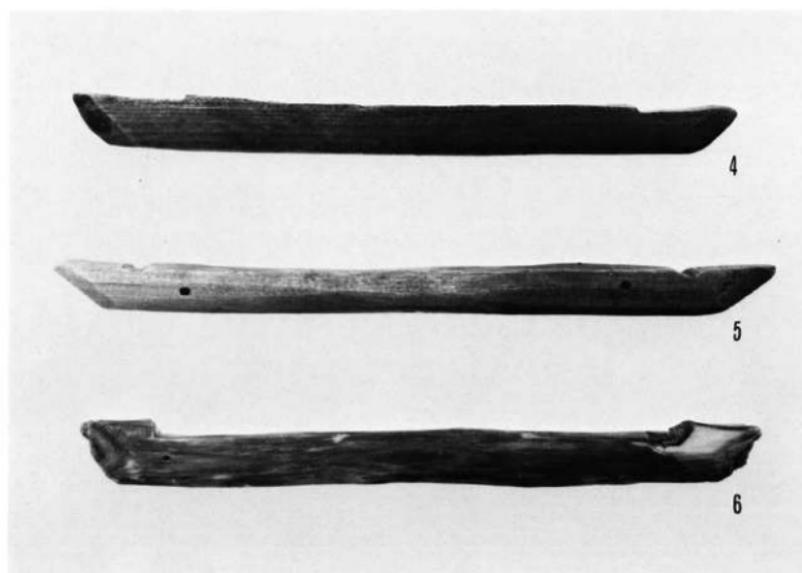
A 舟形



B 舟形 (同上側面)



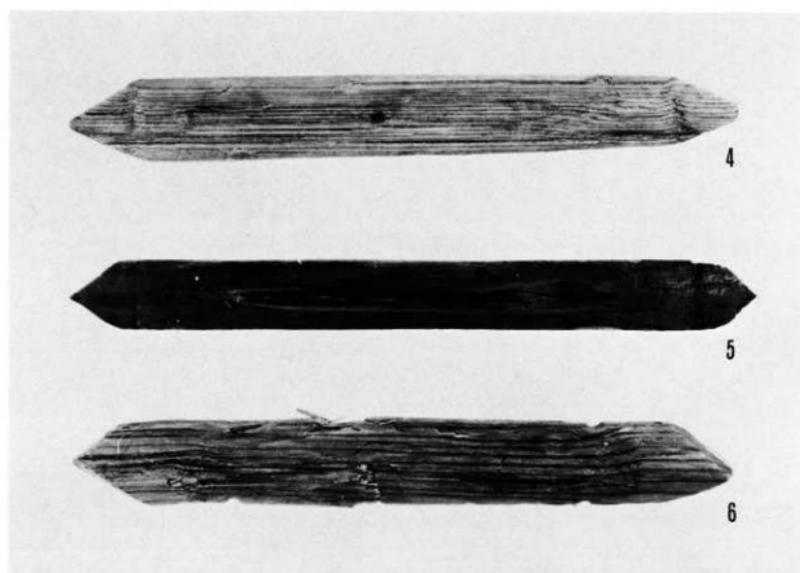
A 舟形



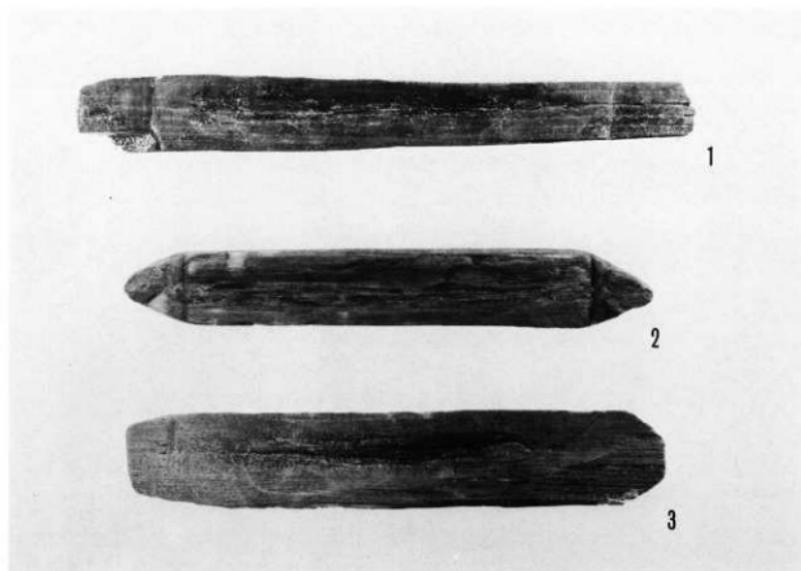
B 舟形 (同上側面)



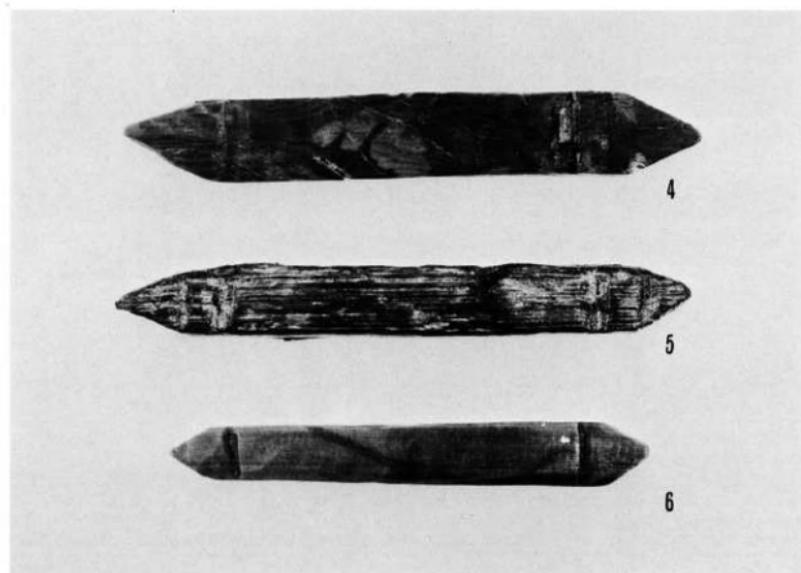
A 舟形 (第68A下面)



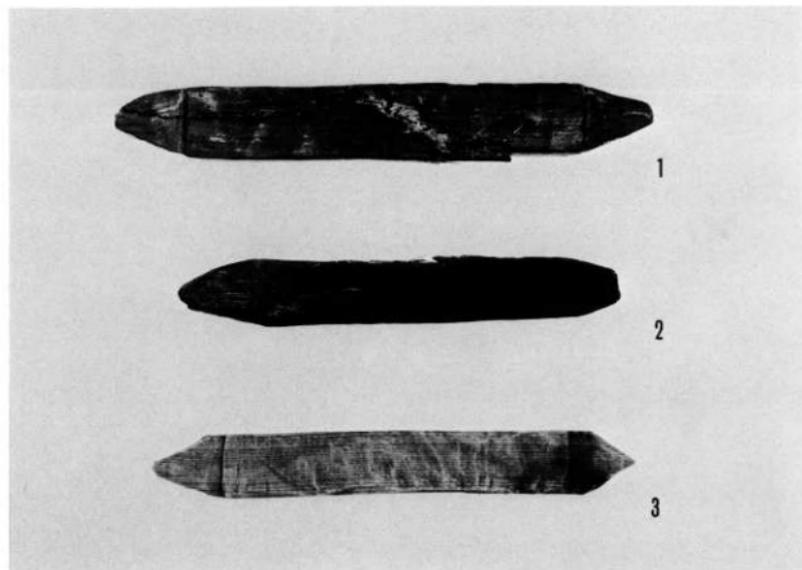
B 舟形



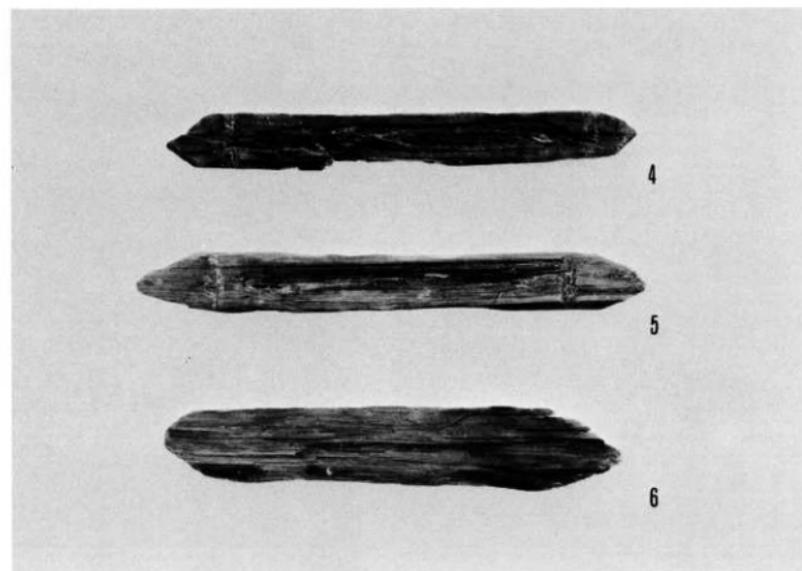
A 舟形



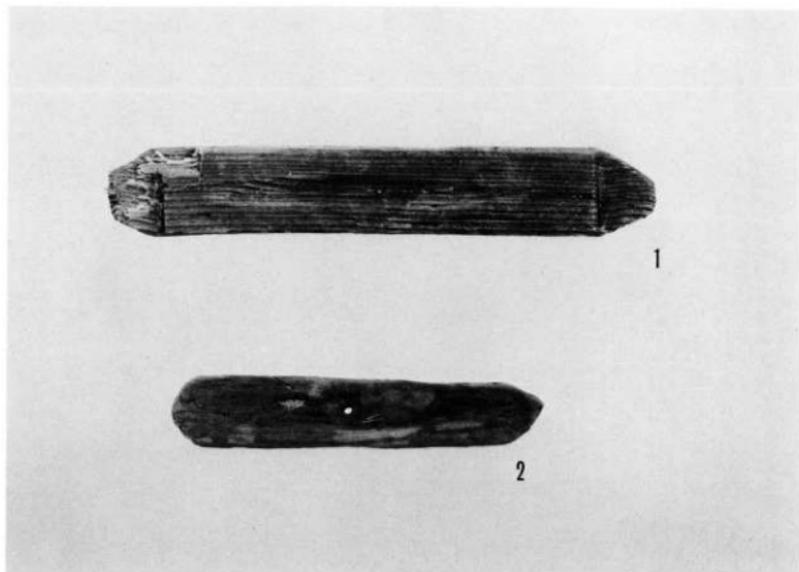
B 舟形



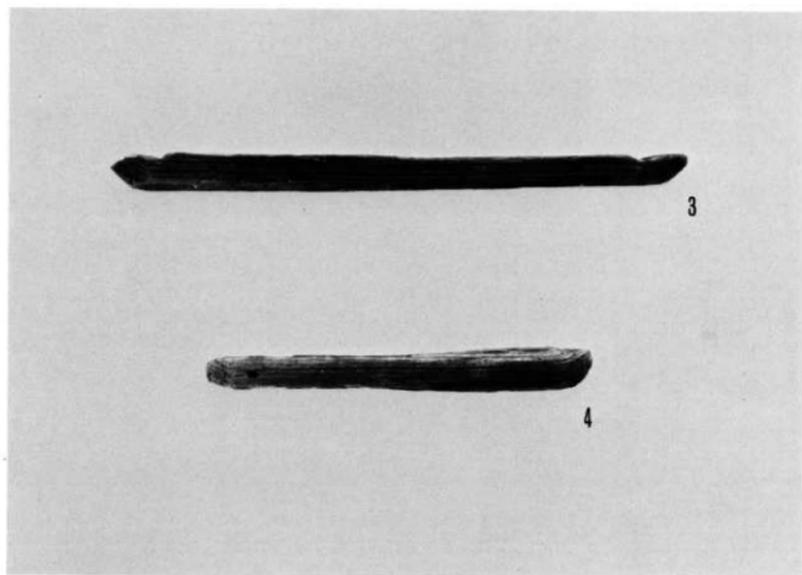
A 舟形



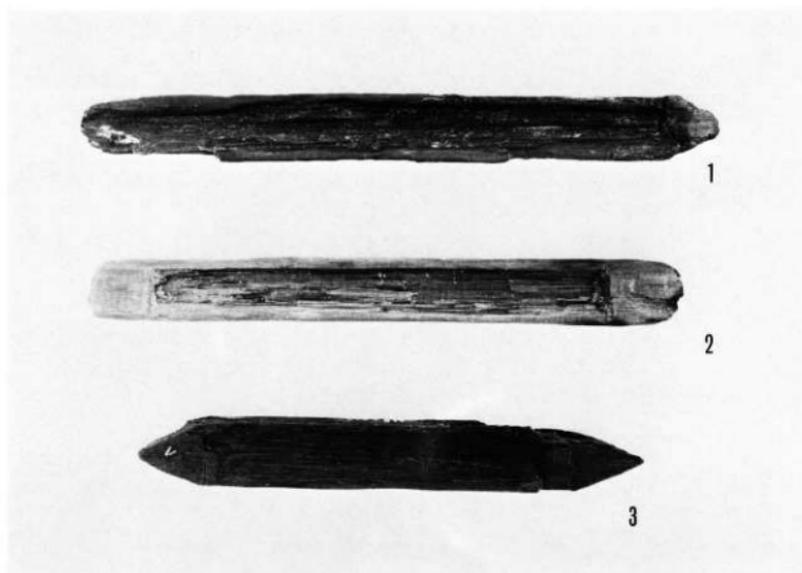
B 舟形



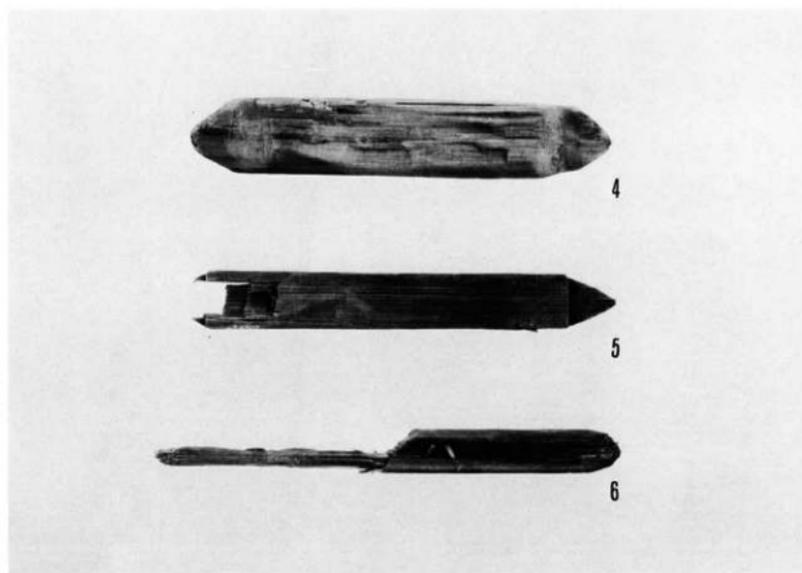
A 舟形



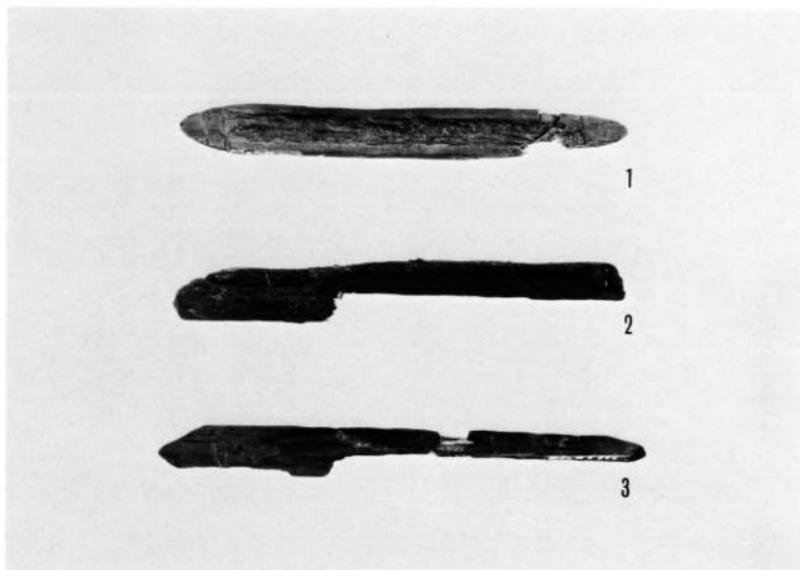
B 舟形 (同上側面)



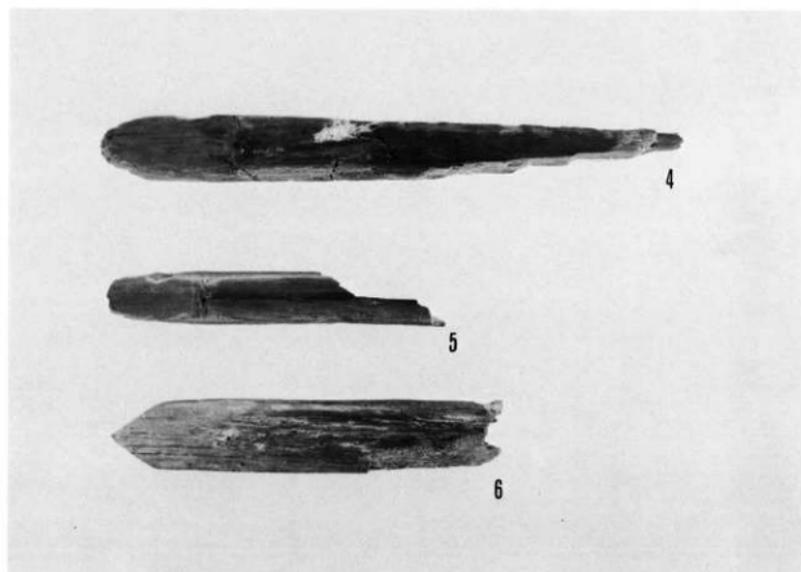
A 舟形



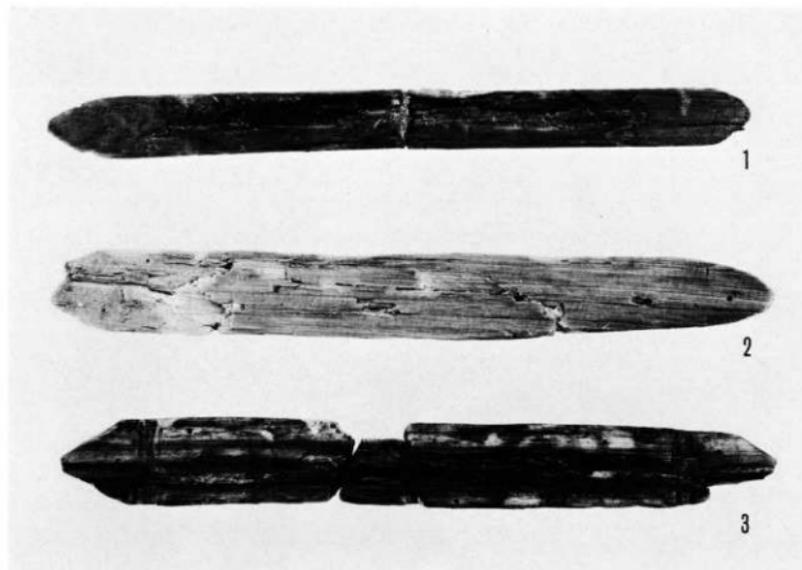
B 舟形



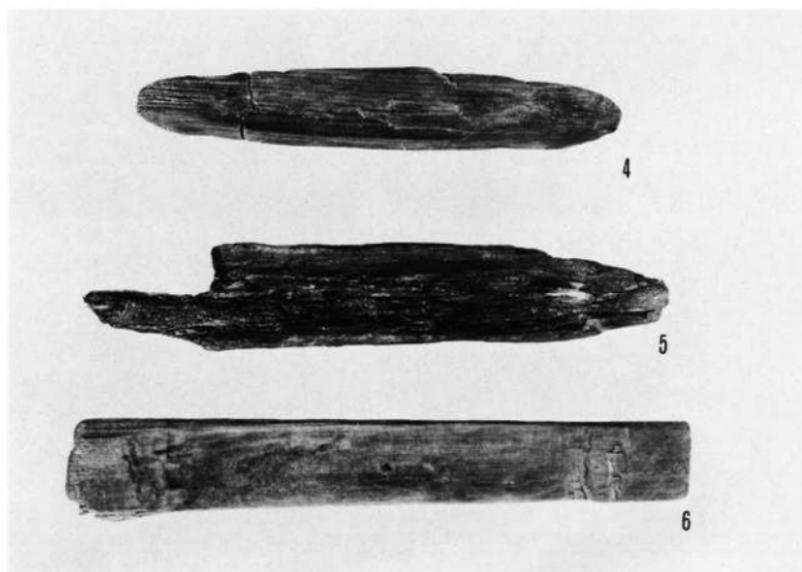
A 舟形



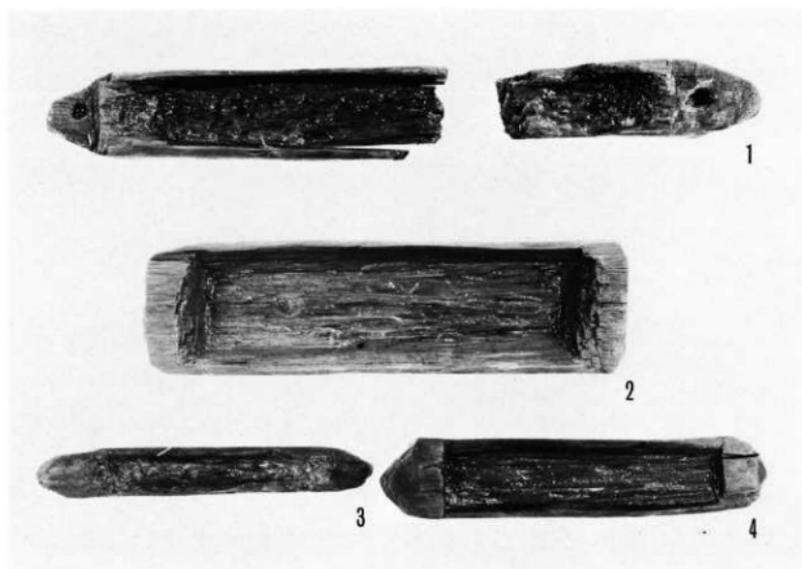
B 舟形



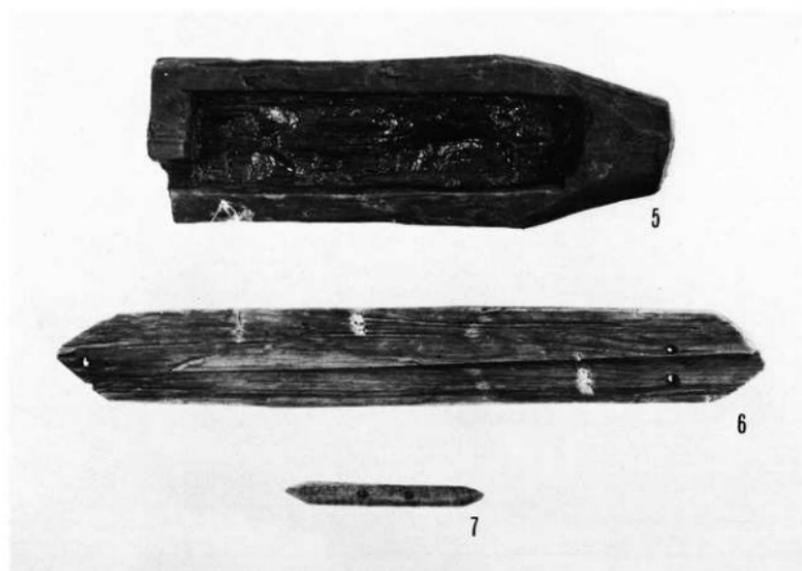
A 舟形



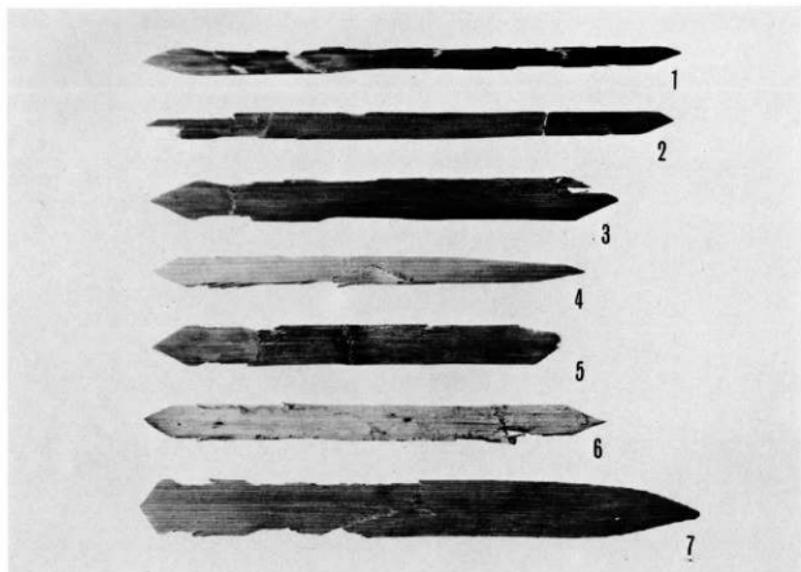
B 舟形



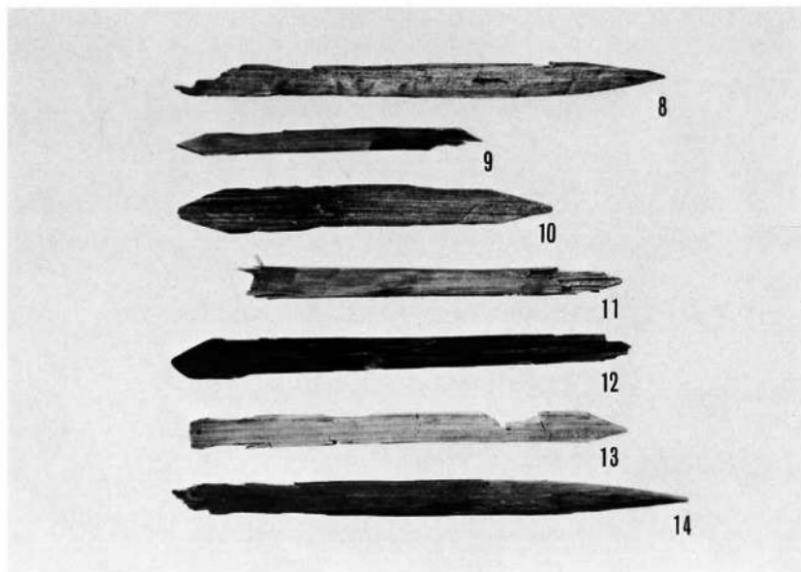
A 舟形



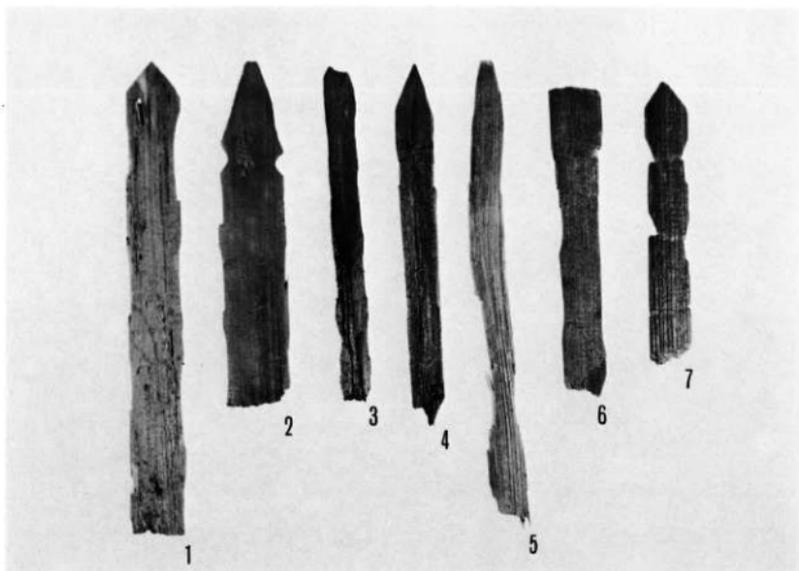
B 舟形



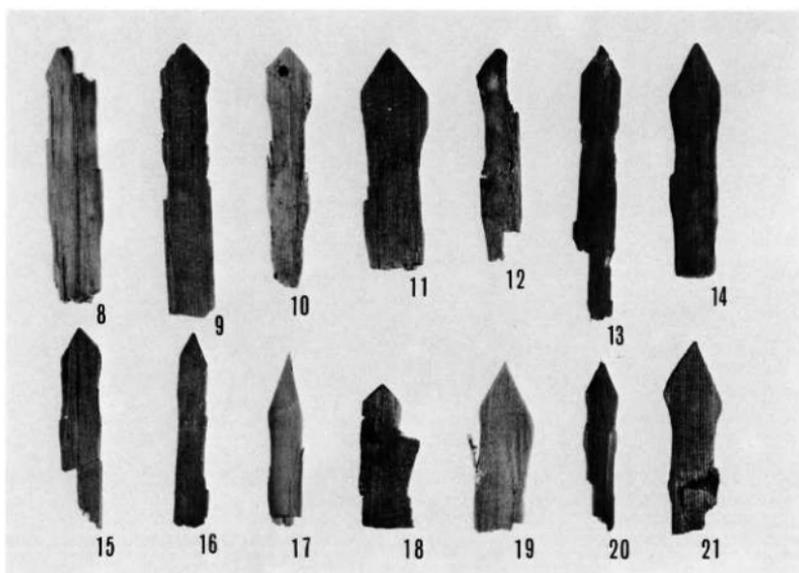
A 斎串



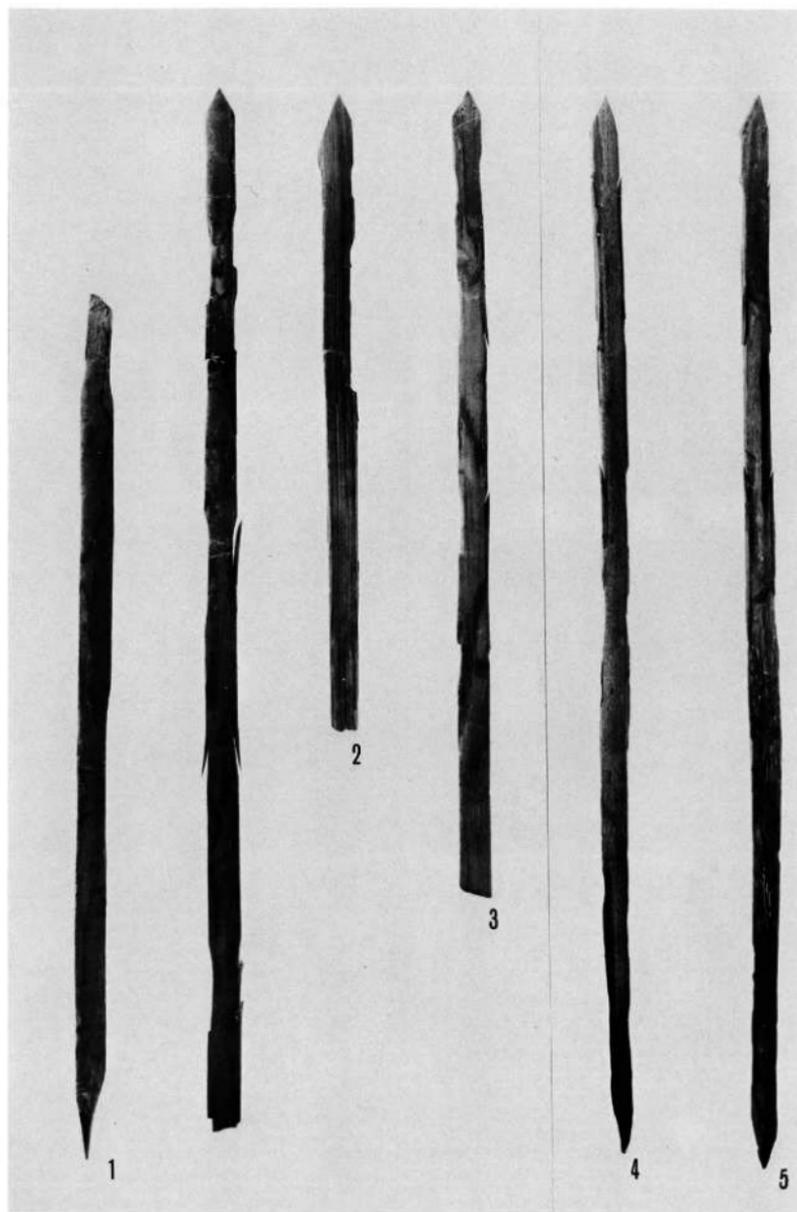
B 斎串

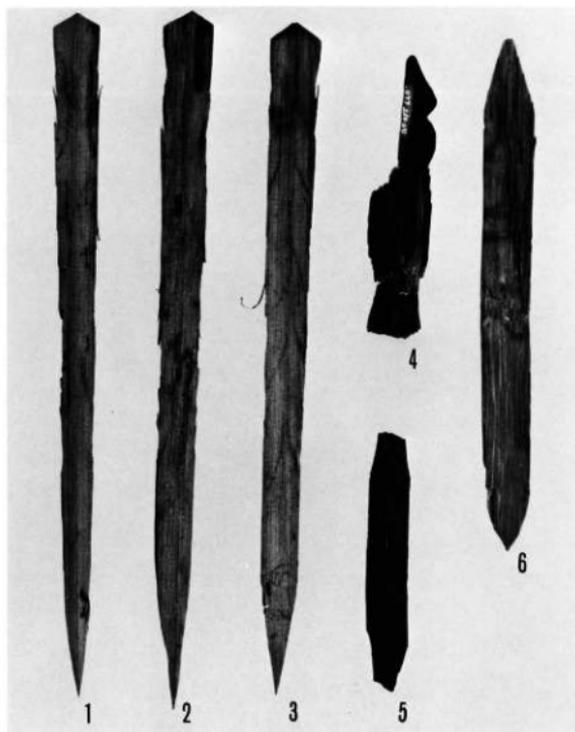


A 斎串

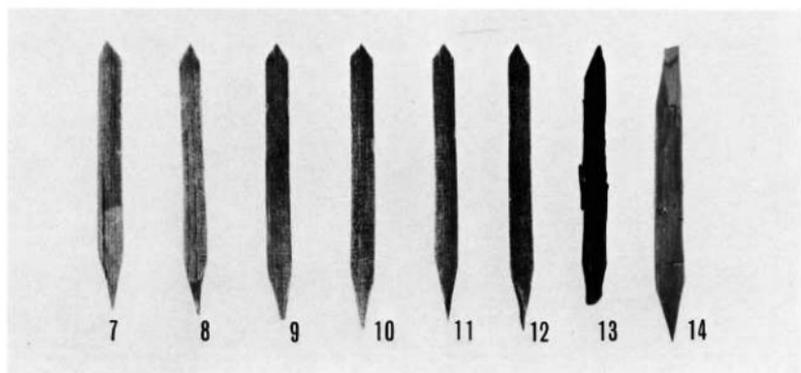


B 斎串

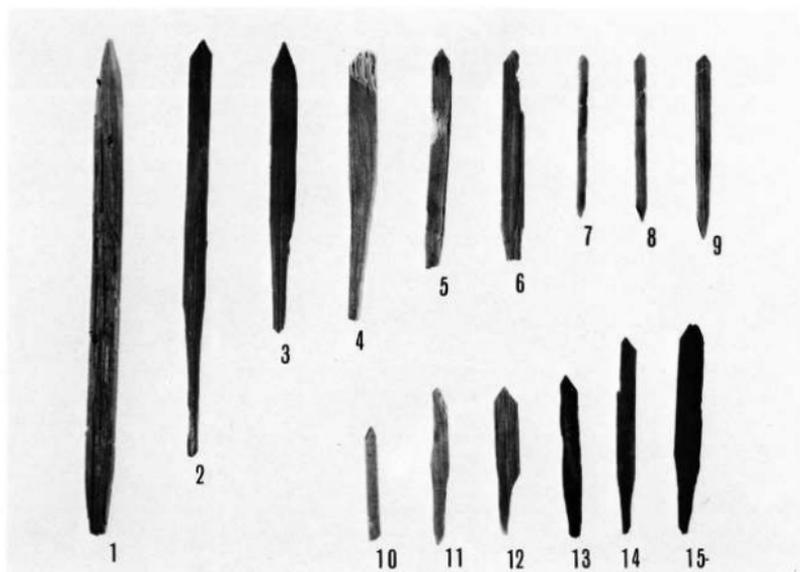




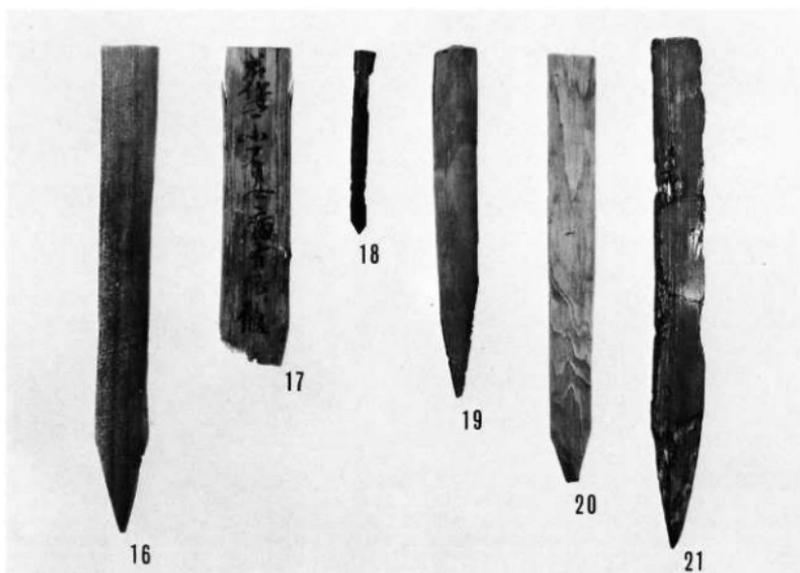
A 齧串



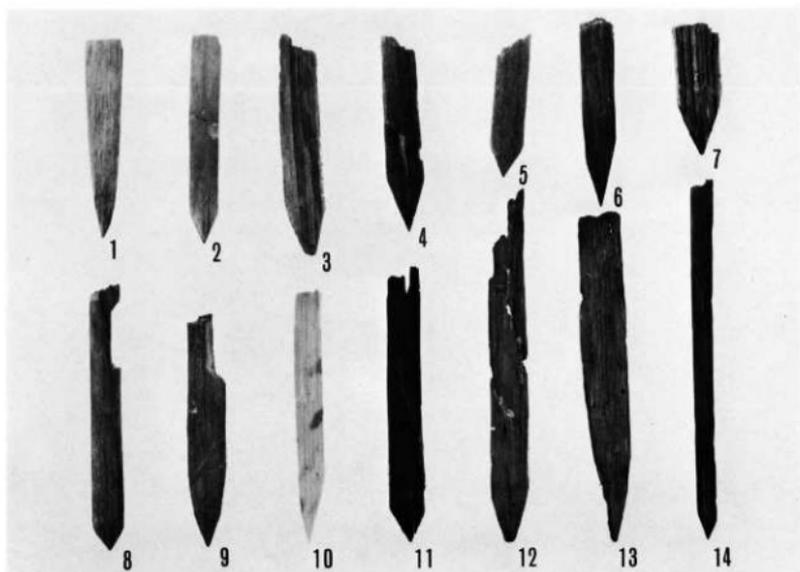
B 齧串



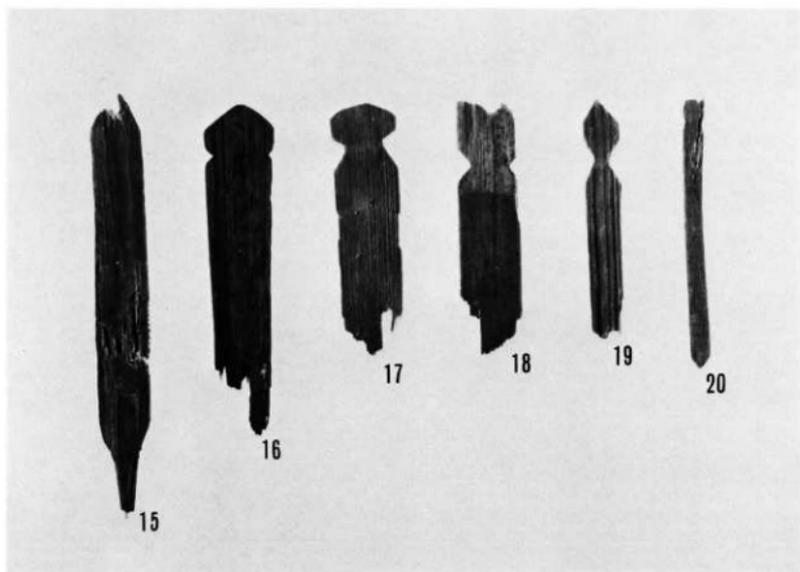
A 齧串



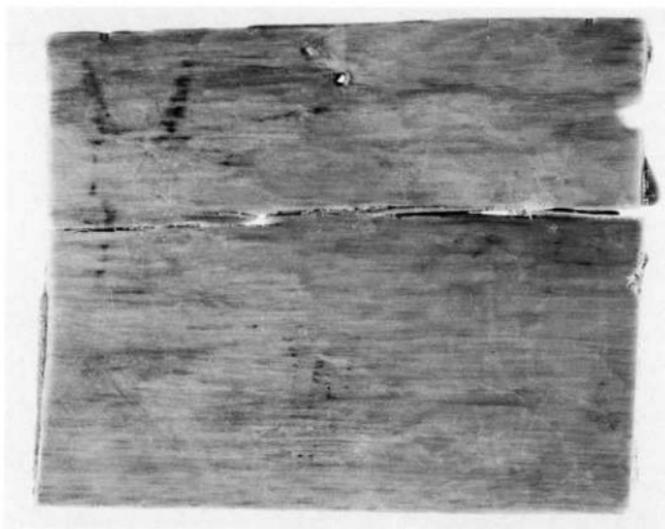
B 齧串



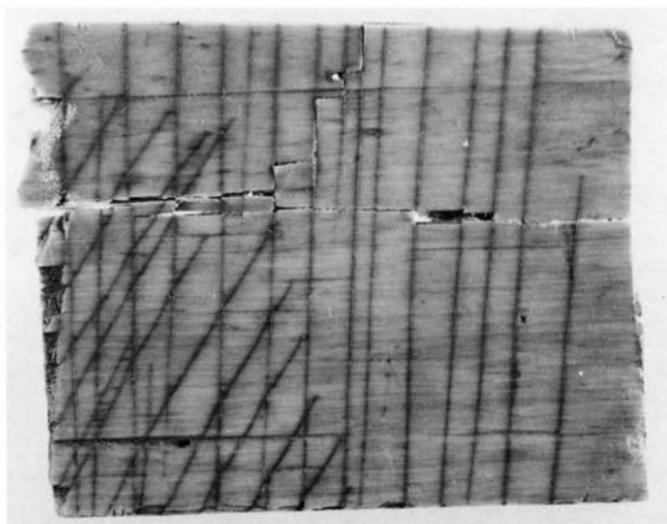
A 齧串片



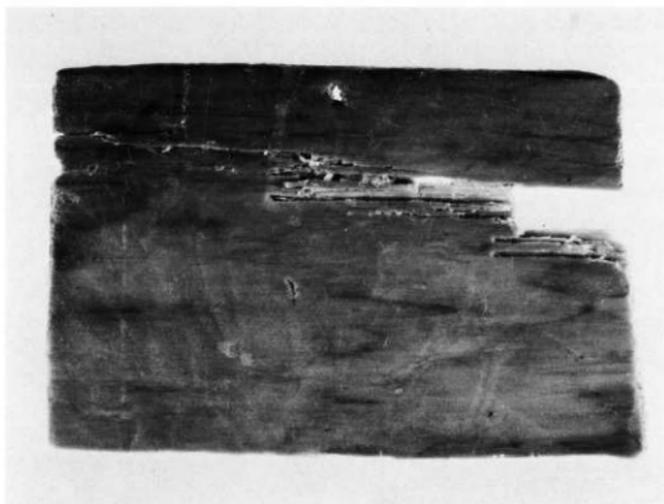
B 齧串?



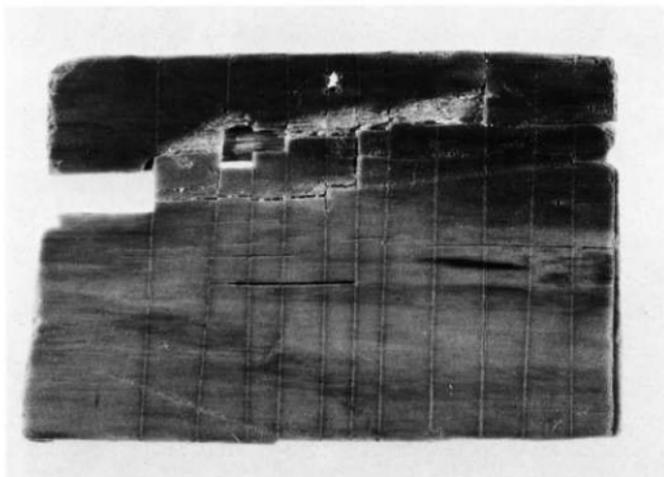
A 絵馬第1号



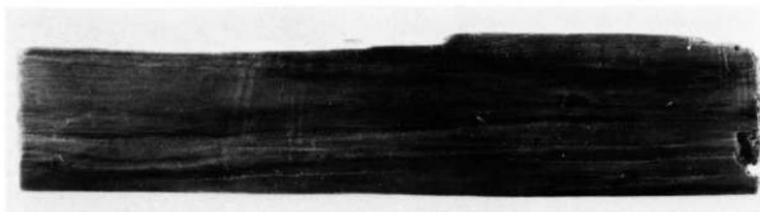
B 絵馬第1号 (同上裏面)



A 絵馬第2号



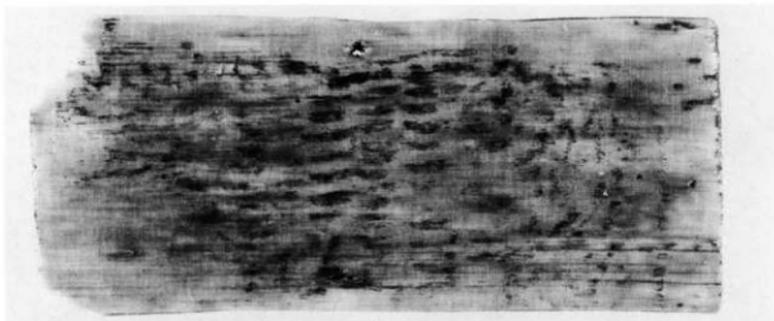
B 絵馬第2号 (同上裏面)



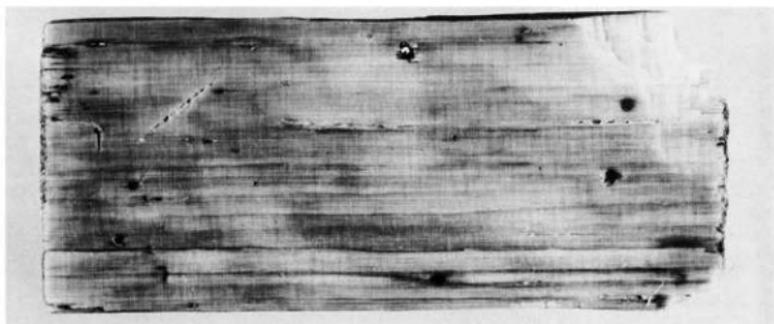
A 絵馬第3号



B 絵馬第3号 (同上裏面)



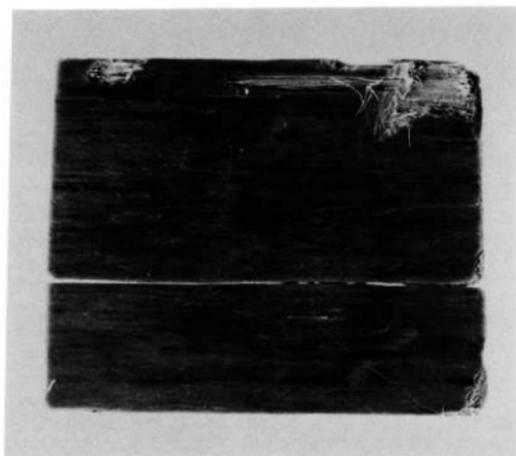
C 絵馬第4号



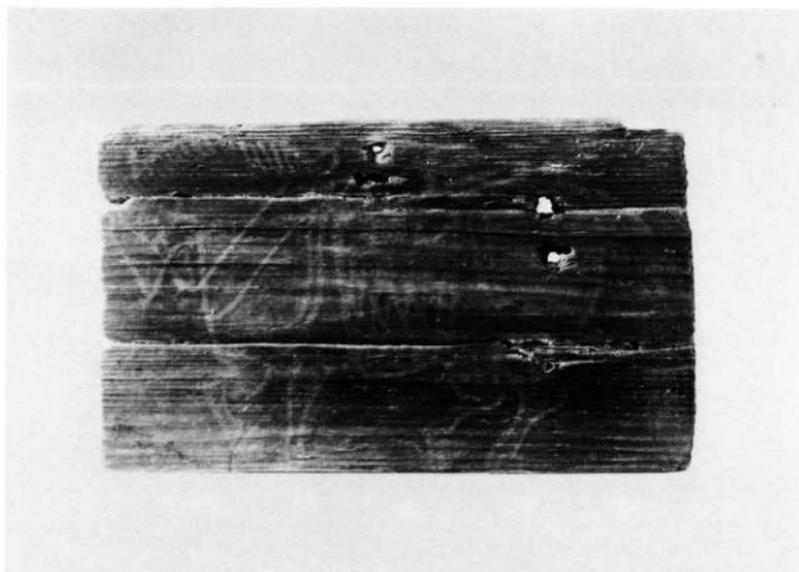
D 絵馬第4号 (同上裏面)



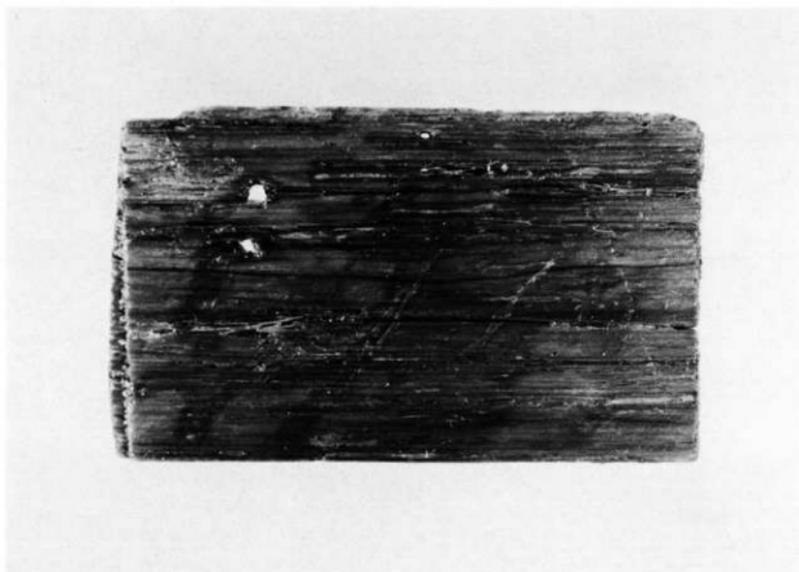
A 絵馬第5号



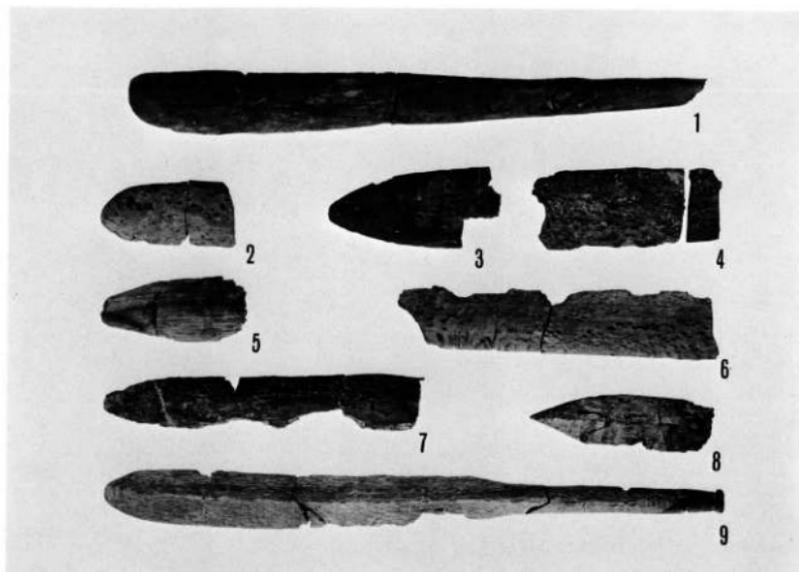
B 絵馬第5号 (同上裏面)



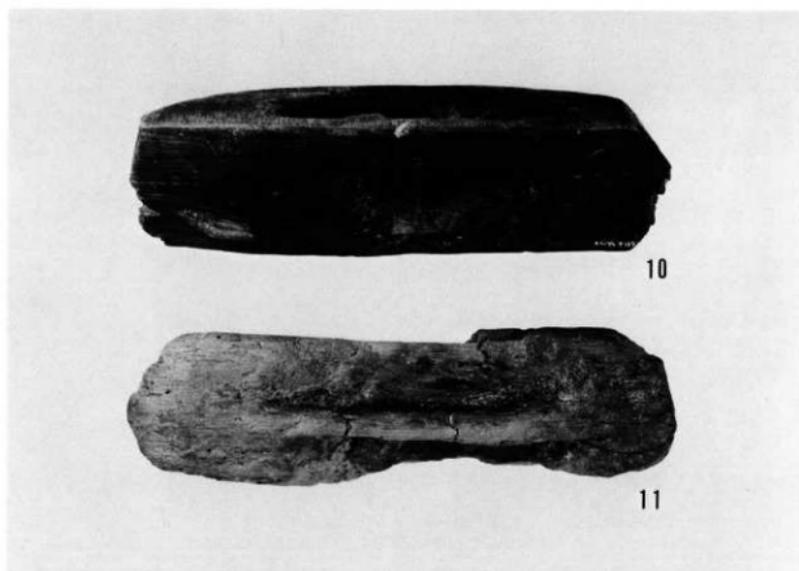
A 絵馬第6号



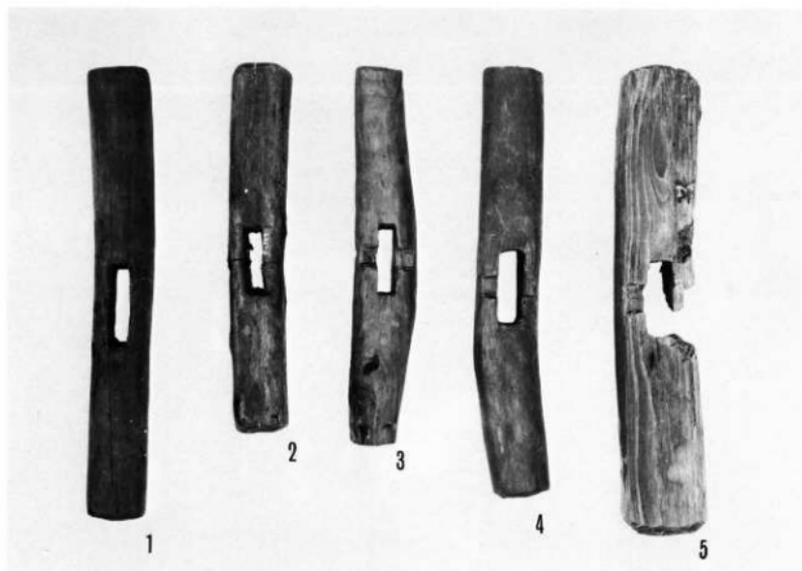
B 絵馬第6号 (同上裏面)



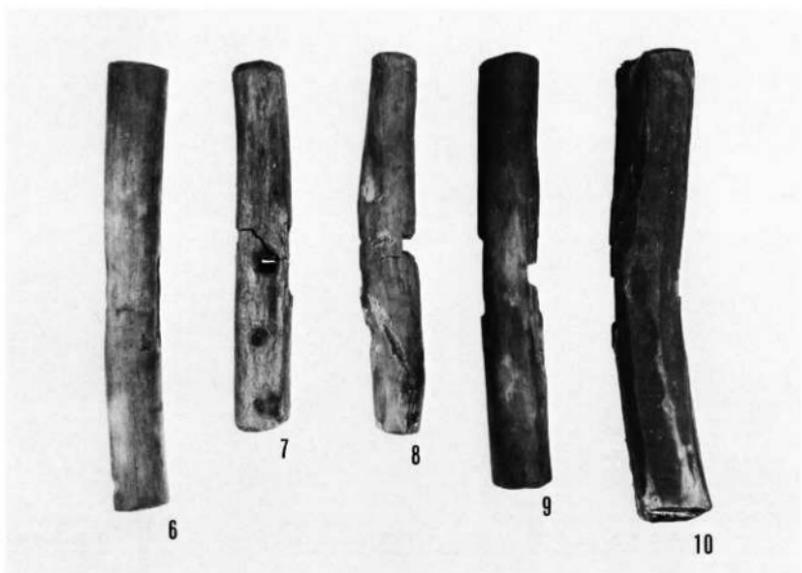
A 櫛状木製品



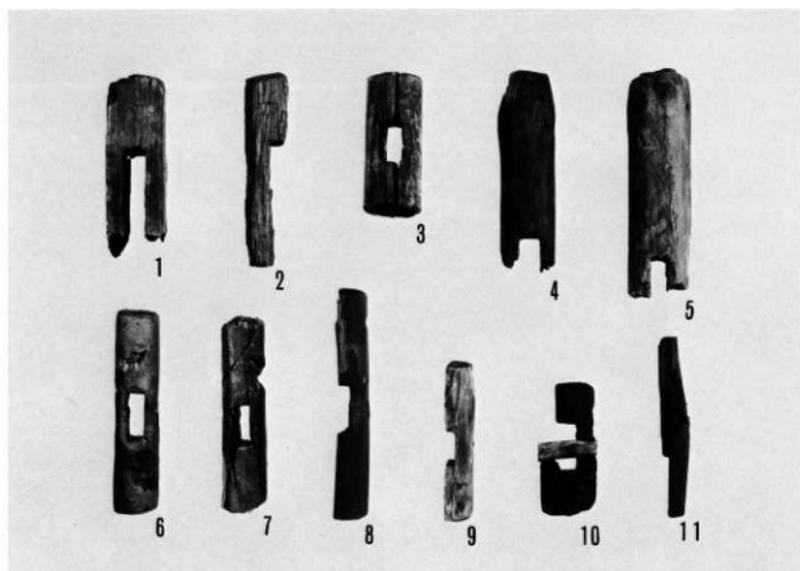
B 塗鏝状木製品



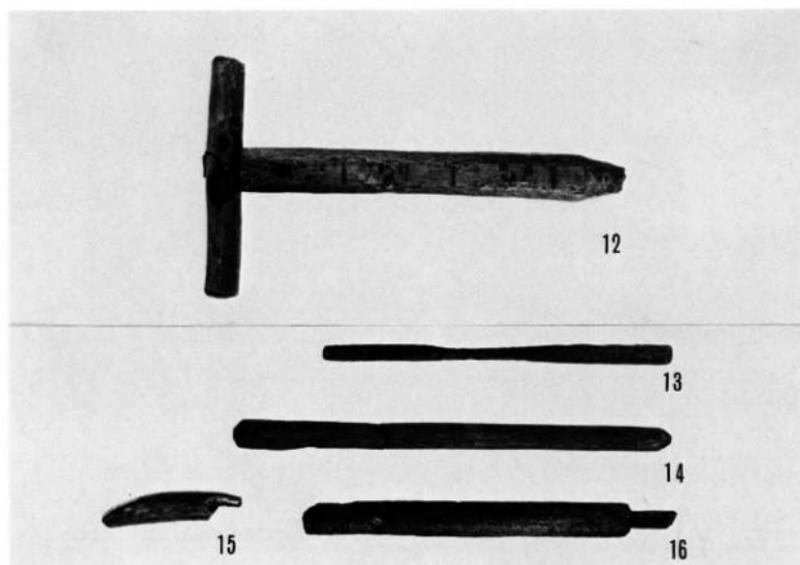
A 木柄把手



B 木柄把手 (同上側面)



A 木柄把手



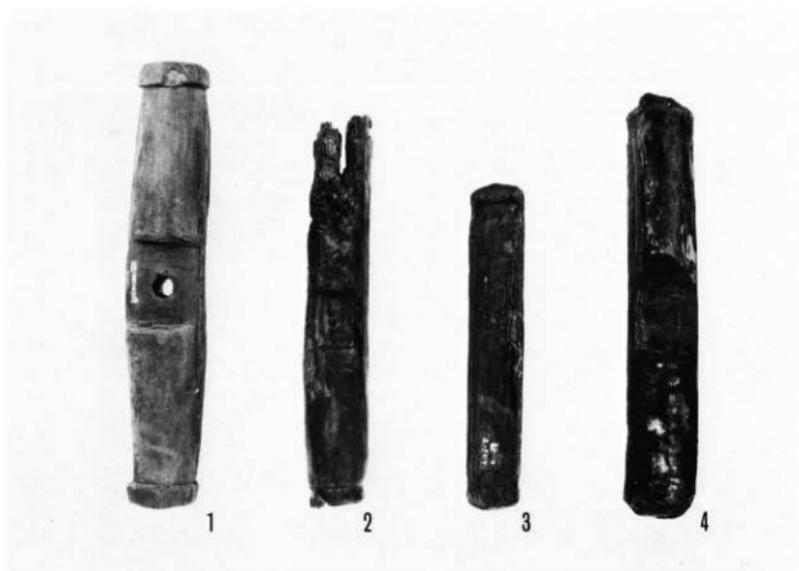
B 木柄



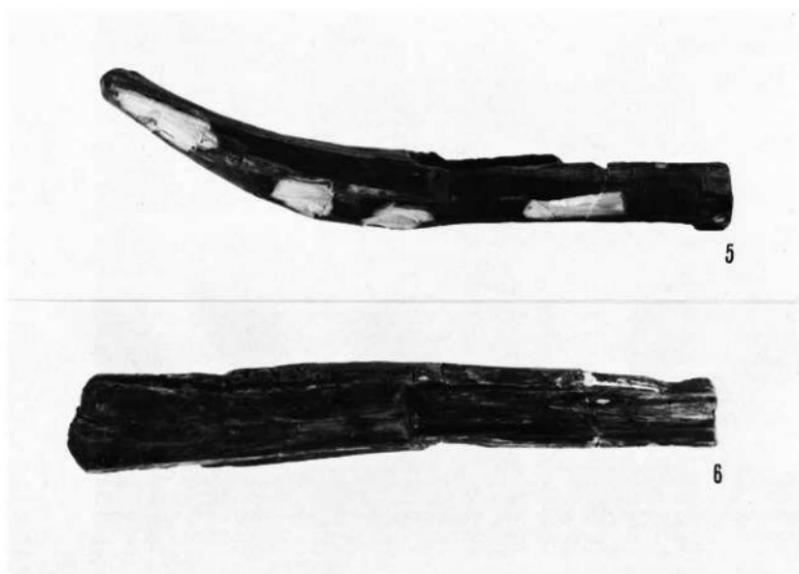
A 有樋十字形木製品



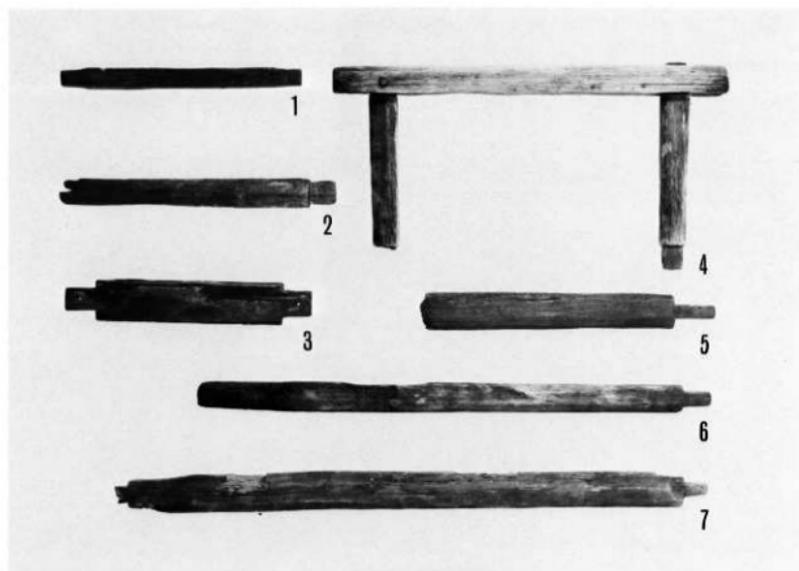
B 有樋十字形木製品 (同上裏面)



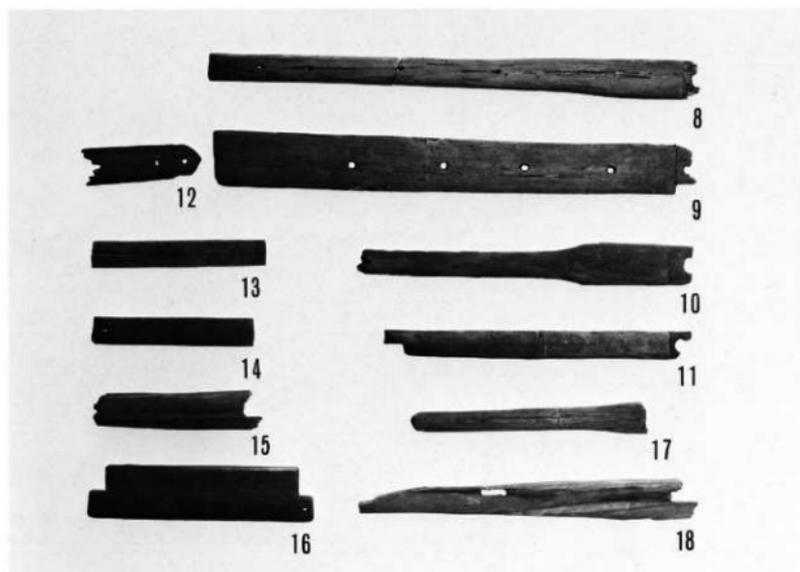
A 有樋十字形木製品



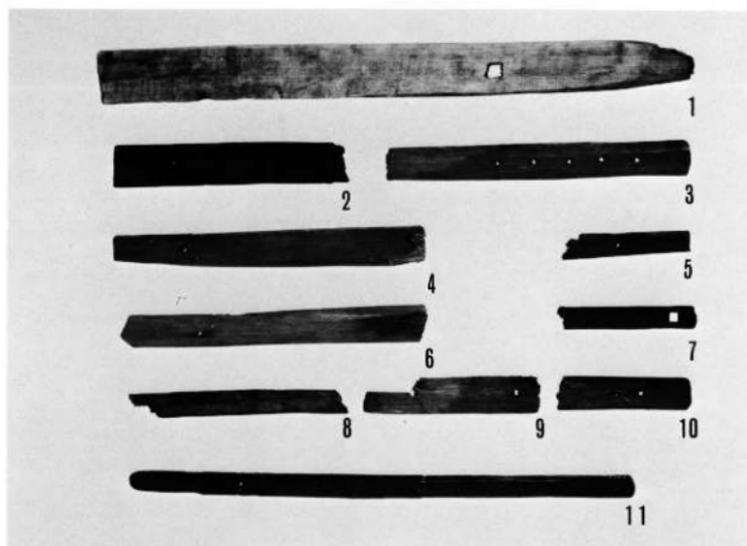
B 有樋角形木製品



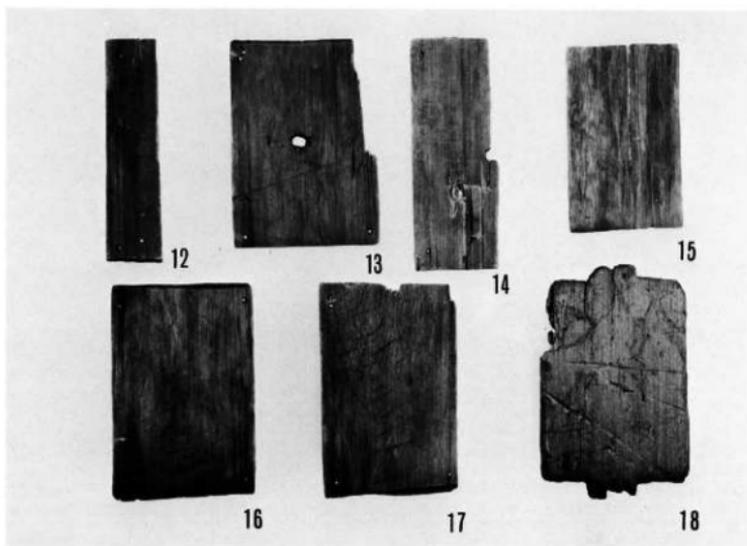
A 枘を作り出した小形部品



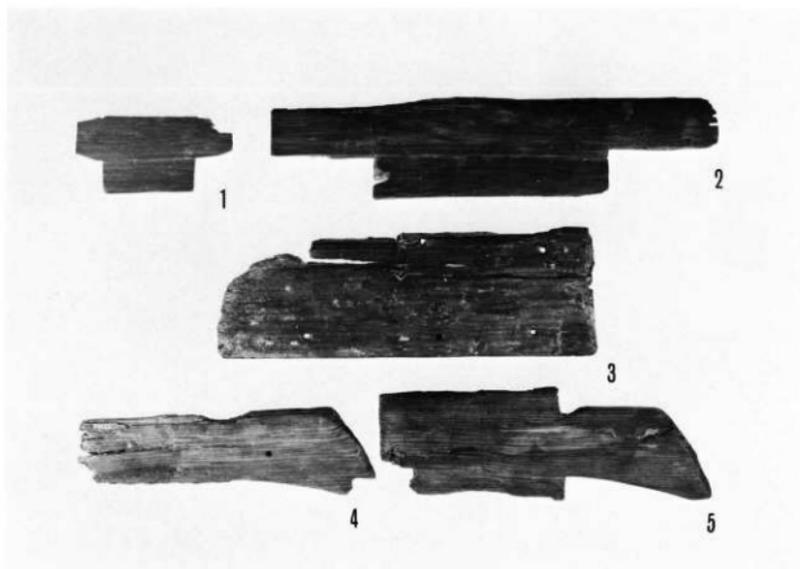
B 枘を作り出した小形部品



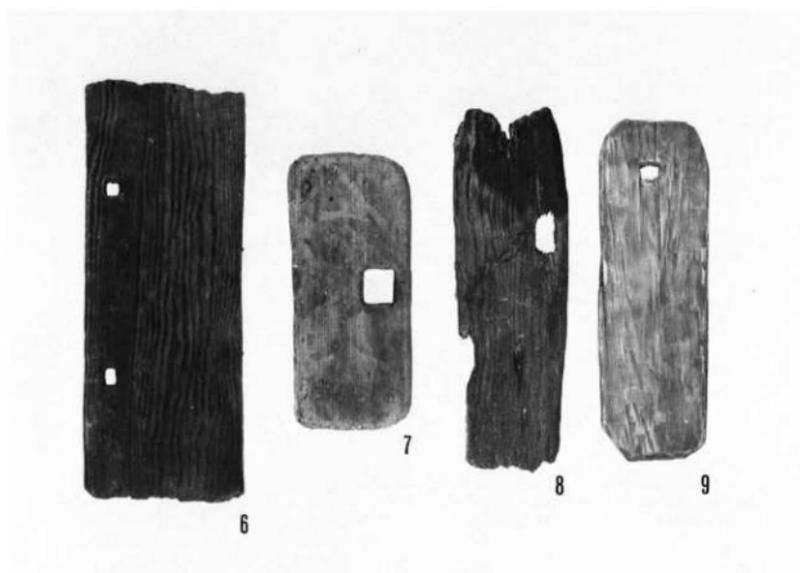
A 有孔板



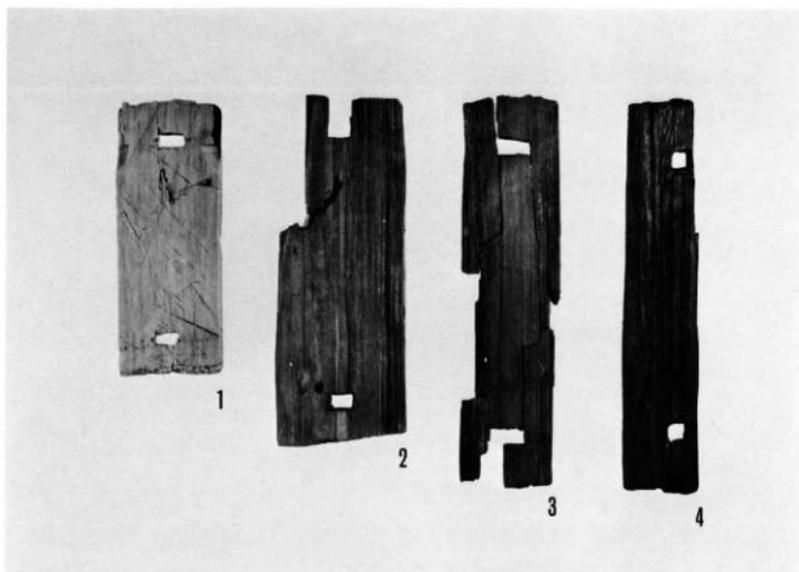
B 長方形板 (箱板?)



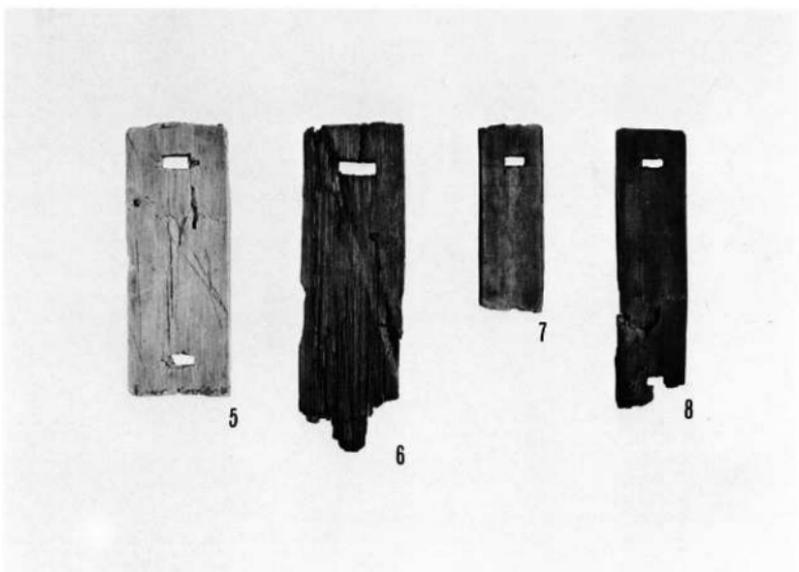
A 長方形板 (箱板?を含む)



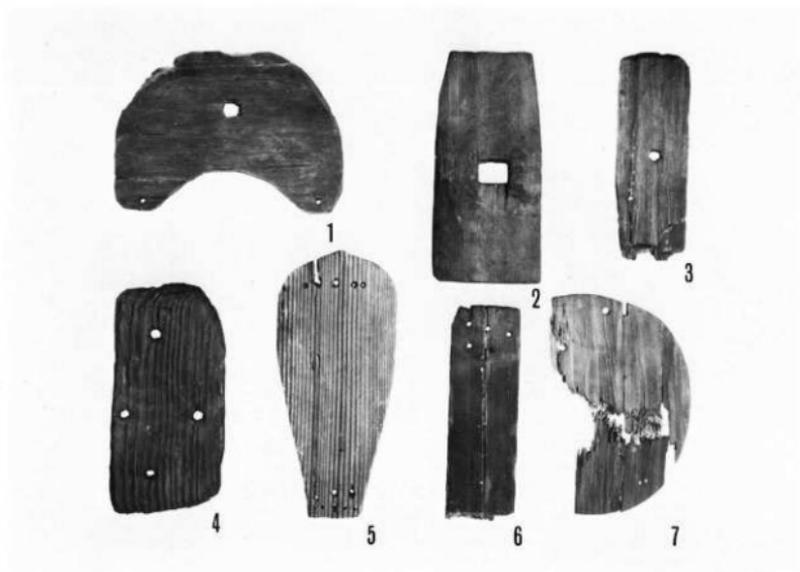
B 有孔長方形板



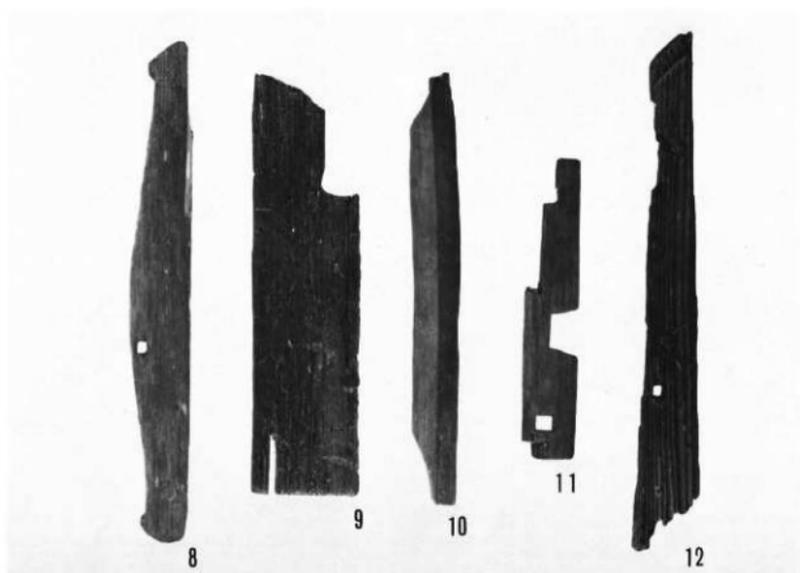
A 有孔長方形板



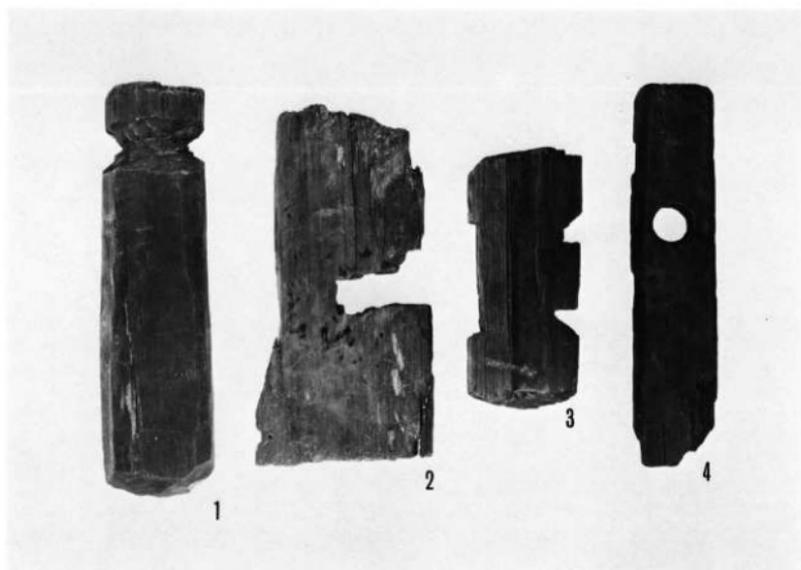
B 有孔長方形板



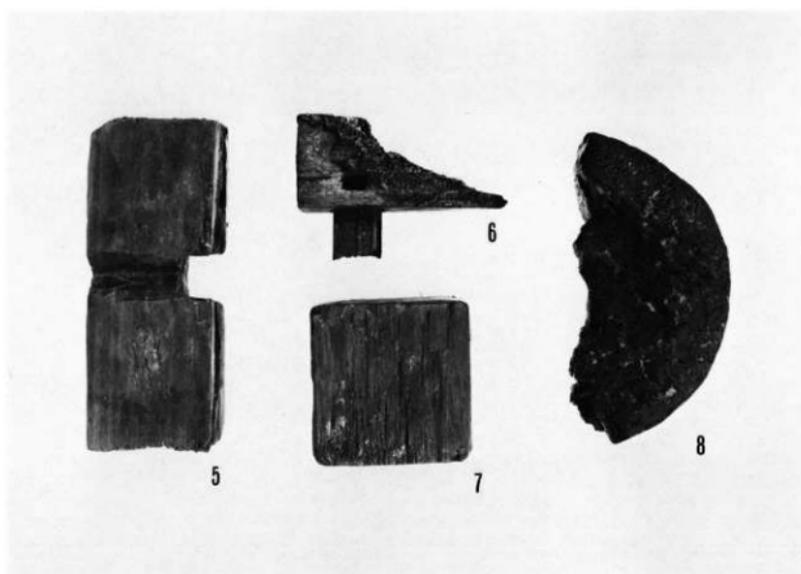
A 有孔板



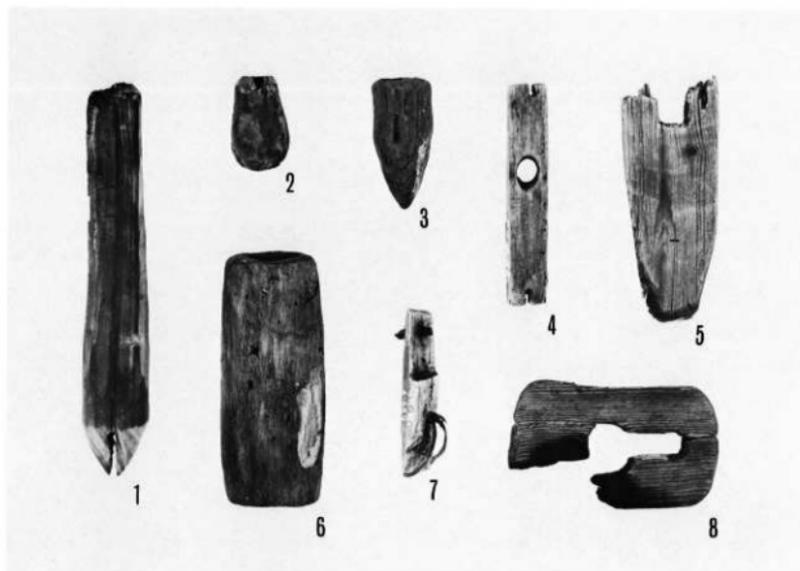
B 有孔板



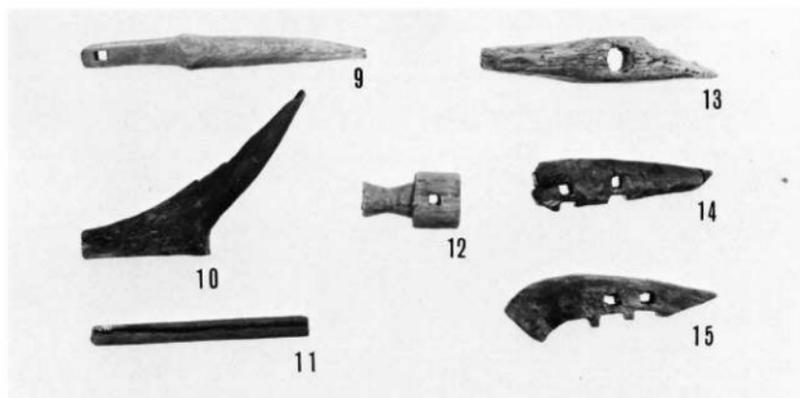
A 厚板



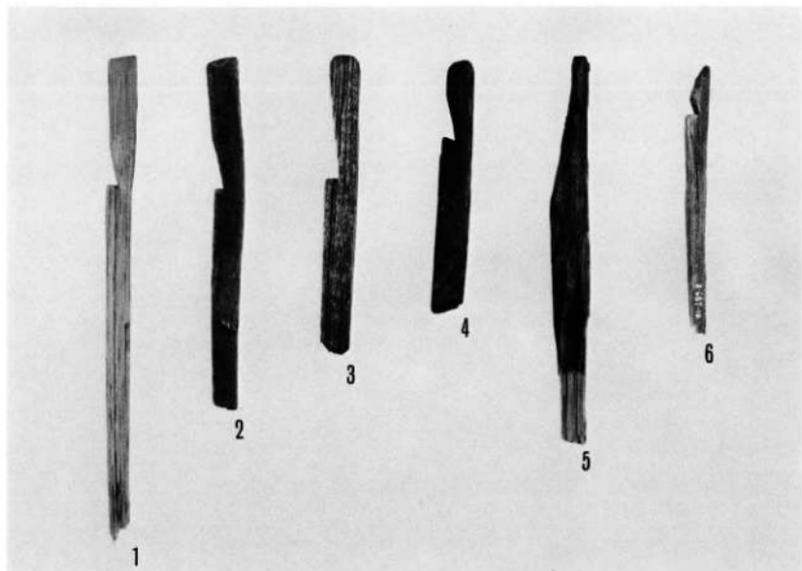
B 角材 (台? を含む)



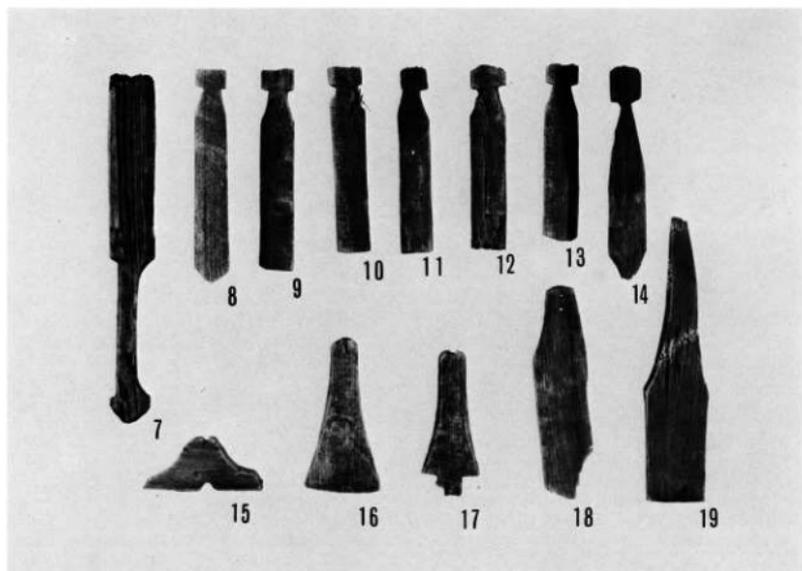
A 孔や切り込みのある小形加工材



B 孔や切り込みのある小形加工材



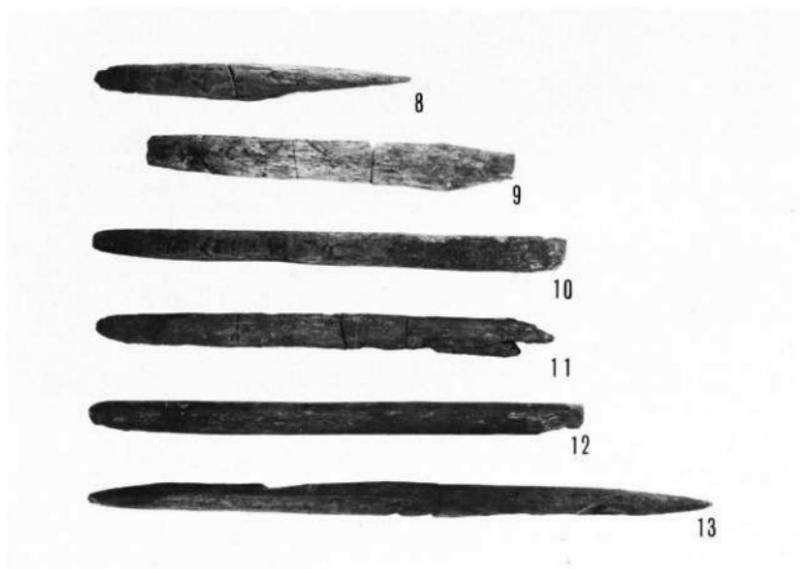
A 刻みを入れた棒（曲物作りの物指？）



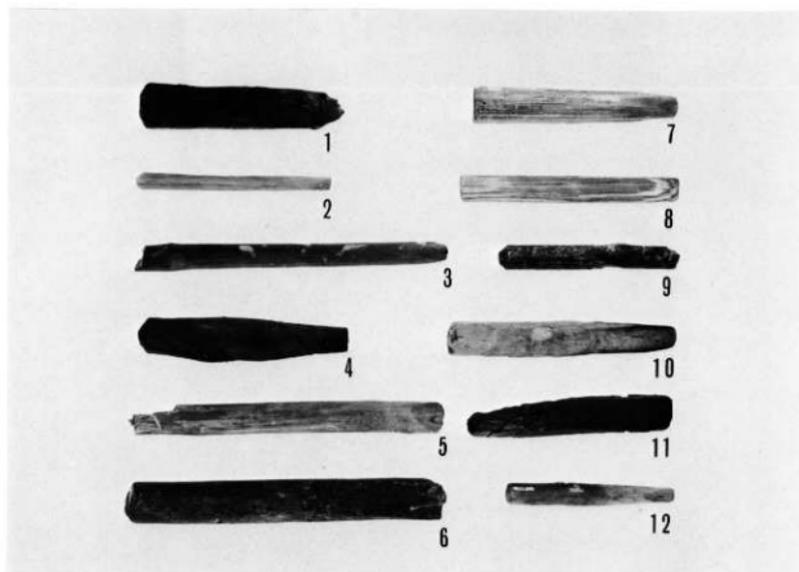
B 剣形・木筒形・琴柱形・楔形等小形木製品



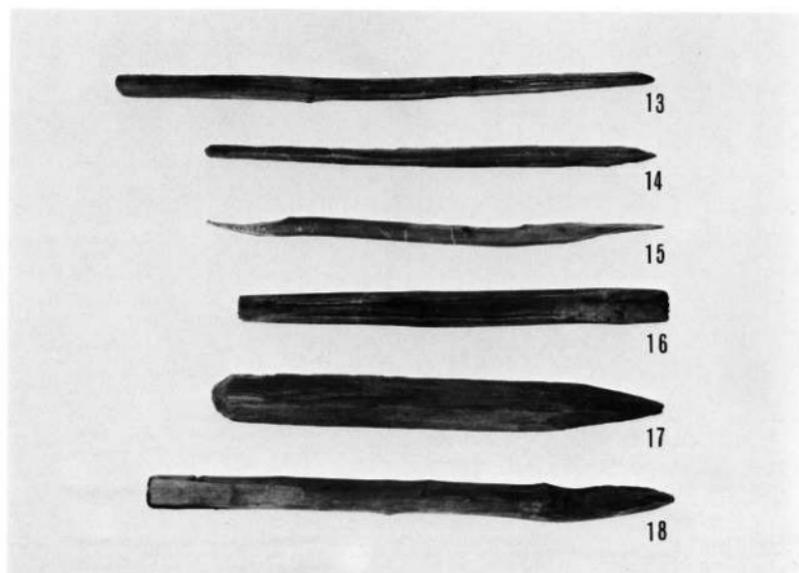
A 先端加工材 (木筒材?を含む)



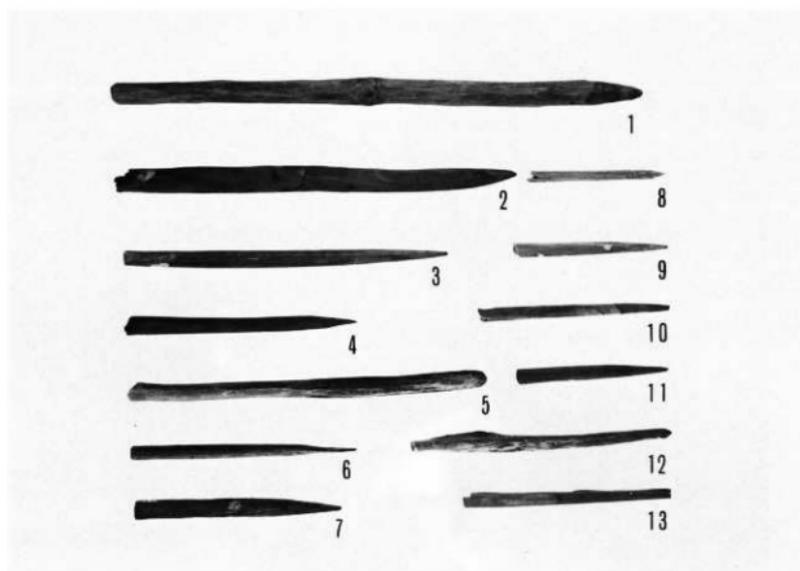
B 先端加工材 (代掻の歯を含む)



A 先端加工材 (楔?)



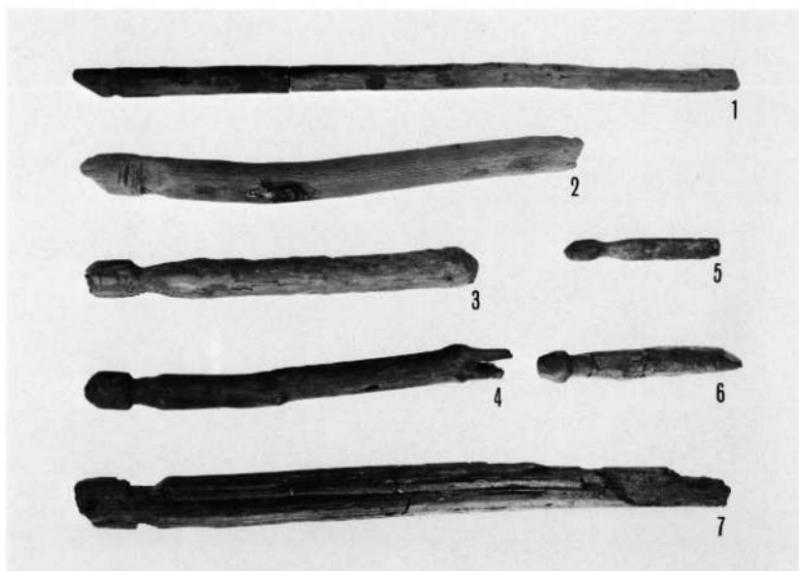
B 尖頭棒



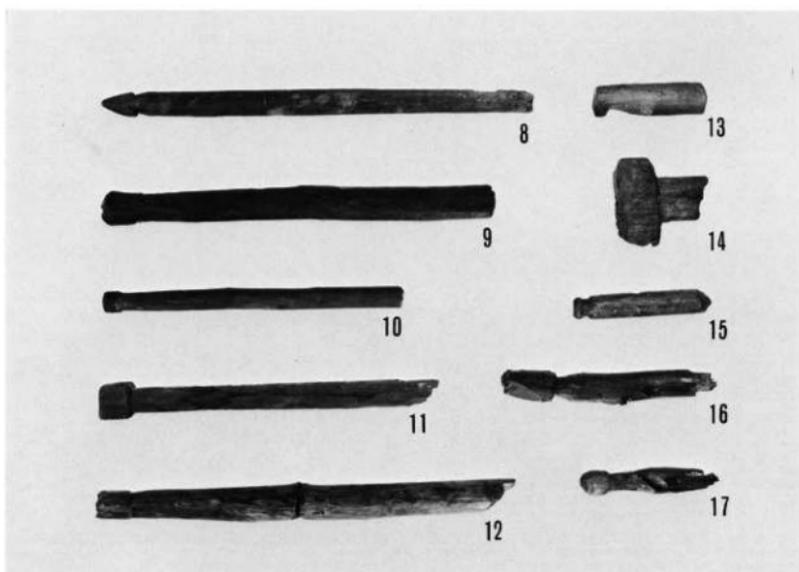
A 尖頭棒



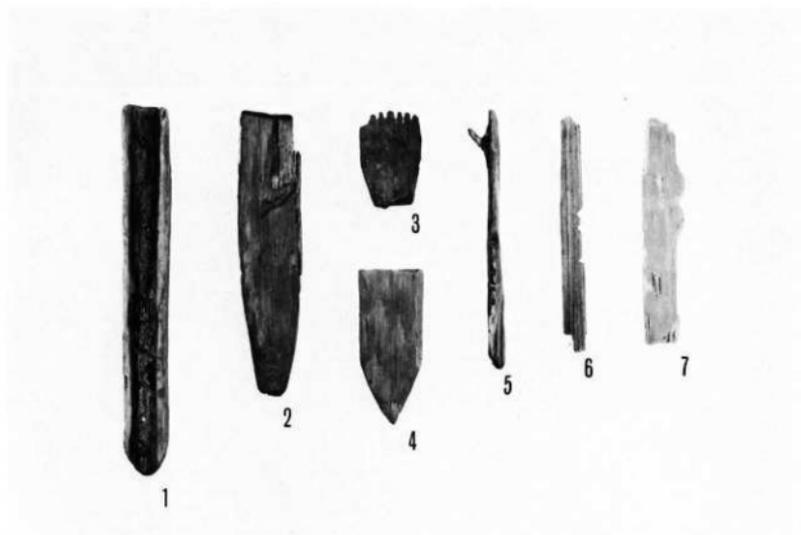
B 尖頭細板 (箸串片か木簡片)



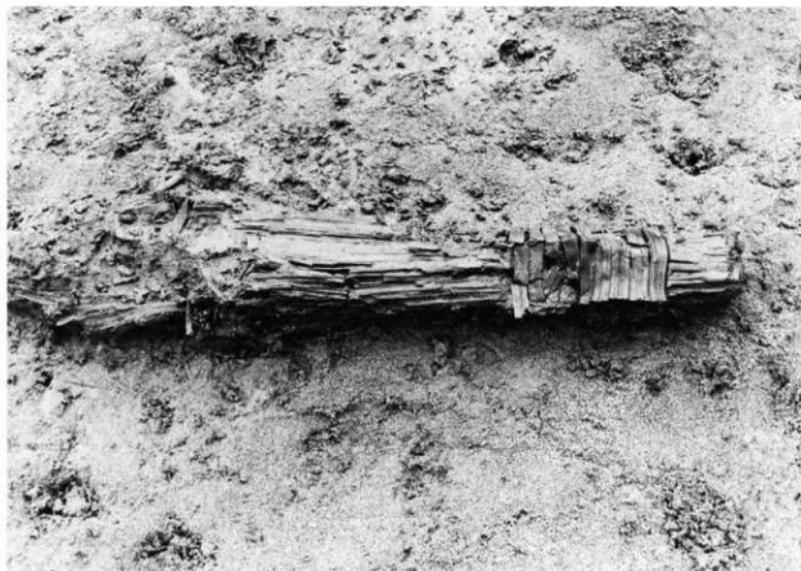
A 有頭棒



B 有頭棒



A 溝や刻みを入れた小形木製品



B 束出土状態

